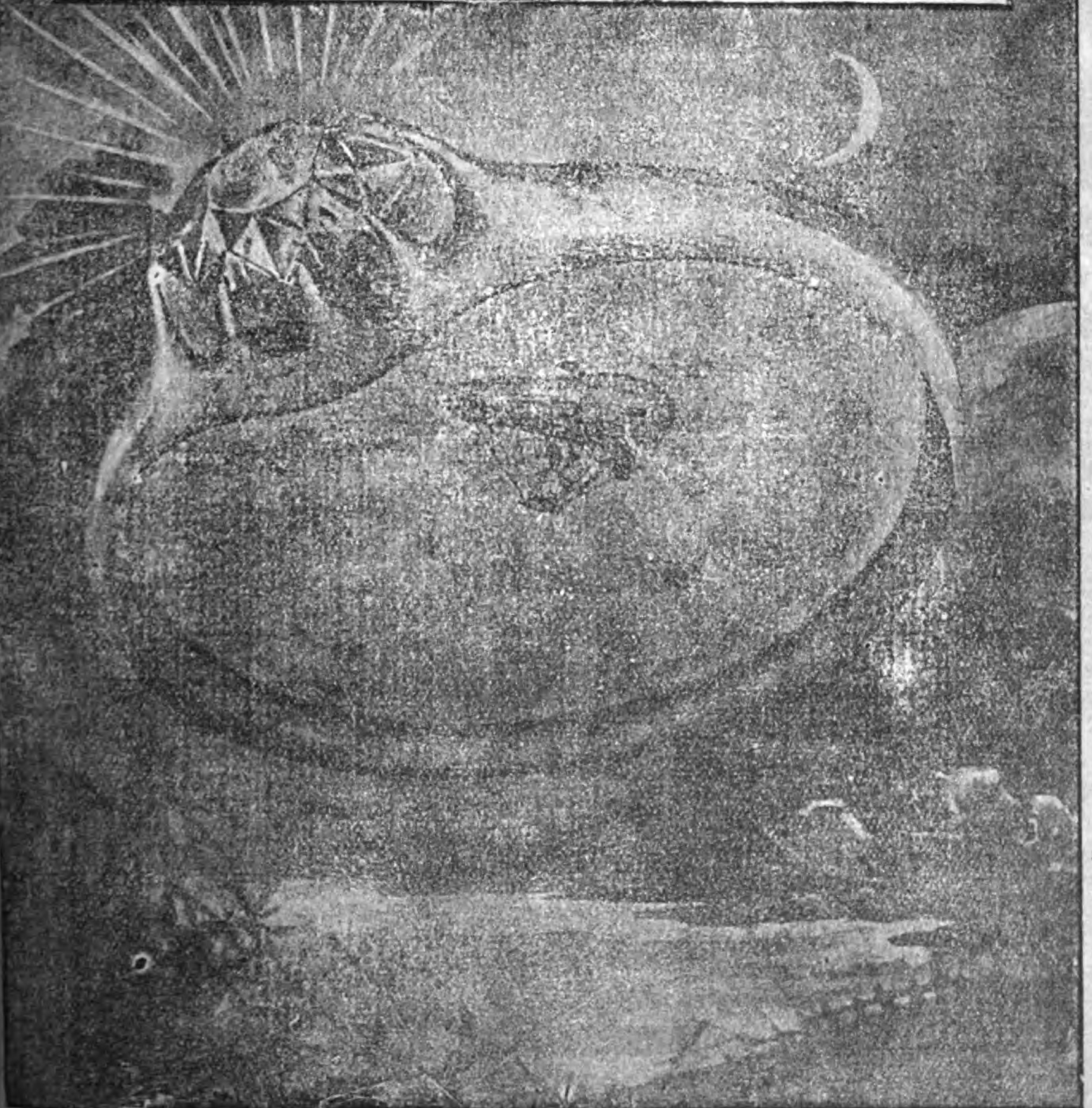
THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿五年　第三號

第二百五十二號



吾が三宅先生の學の識の德普く一世の景仰する所其の人格の崇くして且つ潔き謂はゆる之を仰げば彌高く之を鑽れば彌堅きもの之を碩學と言はむも得ず之を達識と言はむも當らず之を文豪と言はむも未だし惟ふに先生の如きは現代の一偉人と稱すべきものならずや今此の現代の偉人が自ら起ちて過去の偉人を拉し來り縱橫に之を解剖し仔細に之を評隲す眞に文壇の大偉觀たり（丙午出版社編輯局にて）高島米峰識す

文學博士
三宅雪嶺先生著

偉人の跡

菊版三百頁
製本高雅箱入
定價壹圓
郵稅金八錢

本書の特色

古今東西の偉人數十人を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は躍如として玆に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば冀くば此の偉人の偉著に問へ

東京小石川區原町　貯東京一五六八六　**丙午出版社**

東京小石川原町　貯東京一三五三　**雜聲堂**

我邦に於ける空前の

京都帝國大學講師 藤井乙男先生編

諺語大辭典

全壹册

菊版背皮角皮製美本 紙數壹千四百頁

定價金四圓五拾錢
貳萬部限り
特價金參圓

●小包送費 内地金拾六錢 臺灣、樺太金四拾錢 清韓金五拾錢

◉内容見本は往復端書にて申込の事

本書は藤井先生が其著『俗諺論』に於て江湖に告白したる計畫の實現にして、實に十有三年の苦心精勵によりて成就したる我邦未曾有の大諺語辭典也。俚諺は一國民の天才智慮道德の結晶にして語學上文學上教育上極めて重要なる地位を占め萬人の實際生活上偉大なる勢力を有するが故に本書は有ゆる職業有ゆる階級の人々に取て必須の寶典なるのみならず、家庭及學校に於ける修身教材として唯一無二の參考書也。

編者の苦心 編者自ら曰く『余が俚諺の蒐集に着手せしは明治三十年にして、爾來十三年間一日も怠らず云々』

語類の範圍 俗諺を中心として故事、俗語、俳語、異名隱語等を網羅し、且普通字典に漏れたる許多の慣用句熟語を收む。

取材の方面 古今東西に亘り渉獵幾千卷なるを知らず、且載籍以外人口に聞く處を錄し、新聞紙を利用して地方的俗諺を蒐集せり。

意義の說明 難解の語句には一々正確なる說明を與へ、轉訛誤用等に係るものは本義を示して之を正せり。

類語の對照 支那朝鮮及泰西諸國に於ける類似の俚諺は努めて之を收錄して對照せしめたり。

用例の豐富 古今の群籍に渉り俚諺の出典及趣味ある用例を多く擧げたれば、單に讀物としても興味多し。

排列と索引 本文は五十音順に排列し、且意義類別の索引を卷末に附したるを以て訓話演說文章に用ゆべき所要の句を隨意に摘出するを得。

發行所 東京市神田區錦町一丁目 有

二大辭典特賣提供

學習院教授兼東京高等商業學校教授　男爵　神田乃武先生
學習院教授　南日恒太郎先生　共編　全壹册

英和雙解熟語大辭典

四六版總クロース美本　紙數壹千七百五十頁

本書曩に一萬部特賣の提供をなせしも用紙拂底の爲不得已第一回印刷數五千部に止りしに忽ち賣切となり久く品切の處殘數五千部漸く出來躊躇して好機を失ふ可らず

一定價金參圓五拾錢
一壹萬限り
一特價金貳圓五拾錢
一小包送費（内地金拾六錢　臺灣、樺太金廿五錢　清韓金四拾錢）
一内容見本は往復端書にて御申込の事

熟語數之比較

ゴング熟語辭典	五千七百餘
ウェブスター大辭典	壹萬貳千餘
スタンダート大辭典	壹萬八千三百餘
本書の語數	貳萬八千八百餘

世評之一斑

【ジャパンタイムス】（前略）吾人は精密に本書を閲讀し、多年出版されたる英語研究書中最も有益にして最も實際的なる大著なるを確信す、而して熟語成句の正確なる智識を得るに必要缺く可らざるの書として江湖に推薦するを躊躇せず云々

【萬朝報】（前略）本書の既出の熟語字典に比して優越せりと思はるゝ點は一、語數の極めて豐富なること　二、引用の頗る簡便なること　三、英和双解なることの三點にして以上は遙かに他字典に優れる特色と信ず、語數の豐富なる點に於ては Go の熟語三百四十四 Hand の熟語百十二、Come の熟語百廿三なるを見ても以て其の一斑を窺知するを得可し又偶ま吾人が繙閲の際認めたる所にても Empier-Day（ヴイクトリア女皇祭）Shore dinner（磯料理）の如く他字典に認むるを得ざる新熟語あり云々

【英語青年】（前略）要するに本書は吾人の期待に背かざる眞面目な有益な著述で英學生に取つては無二の師友である、吾人が斯る重寶な字典を机上に備ふるを得るは實に我英語界の著しい進歩を意味するものであつて、今日の英學生の多幸を祝すると同時に、編者兩氏の苦心と忍耐とに對して、玆に滿腔の敬意と感謝とを表する云々

朋堂書店

電話本局一一三六
振替東京七一四八

國書刊行會第二期會員募集

本會刊行の圖書は非賣品なり會員外へは斷じて配布せず

本會は第一期三年間に幾多の困難を凌ぎ貴重圖書七百六十部二千八百卅卷之を洋裝にして七十二册五萬頁の豫約刊行を完成し**社會に對する責任**を**完うせり**然に我文學史傳地理法制美術工藝教育宗教風俗等の良著にして未刊行或は絶版に屬するもの又は容易に手に入れ難きもの其數を知らず本會此等の原本の俗書類と混同して玉石共に碎くるの日あらんとを慨し斯道の大家に乞ひて**精細に稽査選擇**し瓦礫を棄て珠玉を拾ひ原本の價一部數百圓に上るもの卷册浩瀚なるもの乃至門外不出の秘本をも蒐集して最も嚴密なる校訂を施し第二期の事業として洋裝四十八卷を出版することゝせり第一期の刊行書は多少專門家向なりしも今回は**多趣味多方面**にして**實用向**なるを主とせり故に國民の座右常に缺くべからざる一大文庫なり裝釘頗る優美客室の裝飾として遜色なし會期滿二年毎月洋裝二册(菊判約千二百頁)を配布すべし

刊行要目

〇明月記(藤原定家著原本六十八卷)〇事實文編(五弓久文編原本百廿二卷)〇令集解(三浦周行校訂原本三十卷)〇黒川眞頼全集(原本凡百卷)〇山鹿語類(山鹿素行述原本四十五卷)〇日本詩記(市河寛齋編原本五十一卷)〇正續甲子夜話(松浦清原本二百卷)〇赤穂義人纂書(鍋田三善編原本廿卷)〇同續編(本會編原本數十卷)〇曲亭遺稿(本會編原本凡五十卷)〇新群書類從(本會編原本凡五百卷)〇行嚢抄(江間氏親著原本百十一卷) 外數種選定中

申込期限三月廿五日 會費**毎月二圓** 六ケ月割引十一圓五十錢 一年廿二圓 二年四十二圓

會則及見本 往復はがきにて申込次第送呈す

東京市京橋區新榮町五の三
國書刊行會

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

BUMMEI-DO & CO.

ENGLISH, JAPANESE BOOK AND STATIONERY.

1750 Sutter Street, S. F., Cali., U. S. A.

浮田博士曰く『英國學術協會々頭フランシス、ダーウキン氏は植物にも一種の靈魂ある事を學術上の事實として講演せり』と

1. "Foundations of the Origin of Species" by F. Darwin. ... ...by mail $2.75
2. "Charles Darwin and the Origin of Species" by Dr. E. B. Poulton. ... ... „ 3.30
3. "Survival of Man" by Sir Oliver Lodge. ... ... „ 2.20
4. "Christian Religion as a Healig Power" by Dr. E. Worcester. ... ... „ 1.10
5. "Mr. Wind and Madame Rain" by L. Chisholm „ 2.20
6. "The Medici" by G. F. Young, C. B. ... 2 vols „ 8.80
7. "Habit—Formation & the Science of Teaching" by Dr. S. H. Rowe. ... ... „ 1.64
8. "The Relation of Medicine to Philosophy" by Dr. R. O. Moon. ... ... „ 1.65
9. "My Life in China and America" by Young Wing. ... ... „ 3.30
10. "Electrotecnics" by Dr. H. Henderson. ... ... „ 1.30
11. "Beasts and Man" by Carl Hagenback. ... ... „ 3.85
12. "Evolution and the Fall" by Dr. F. J. Hall. ... „ 1.60
13. "Old Criticism and New Pragmatism" by Prof. J. M. O'sullivan. ... ... „ 3.30
14. "History of Medieval Philosophy" by Prof. M. De Wulf. ... ... „ 3.30

文明堂 は米國出版の傑作物を廣告します
の廣告書籍は悉く新刊物です
の書籍購讀者は優先の新智識を得ます

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論

四月一日發行

春期大附錄號

本誌は例年の如く四月一日を以て春期大附錄號を發行すべし。

附錄小說執筆の約ある人は

田山花袋　永井荷風

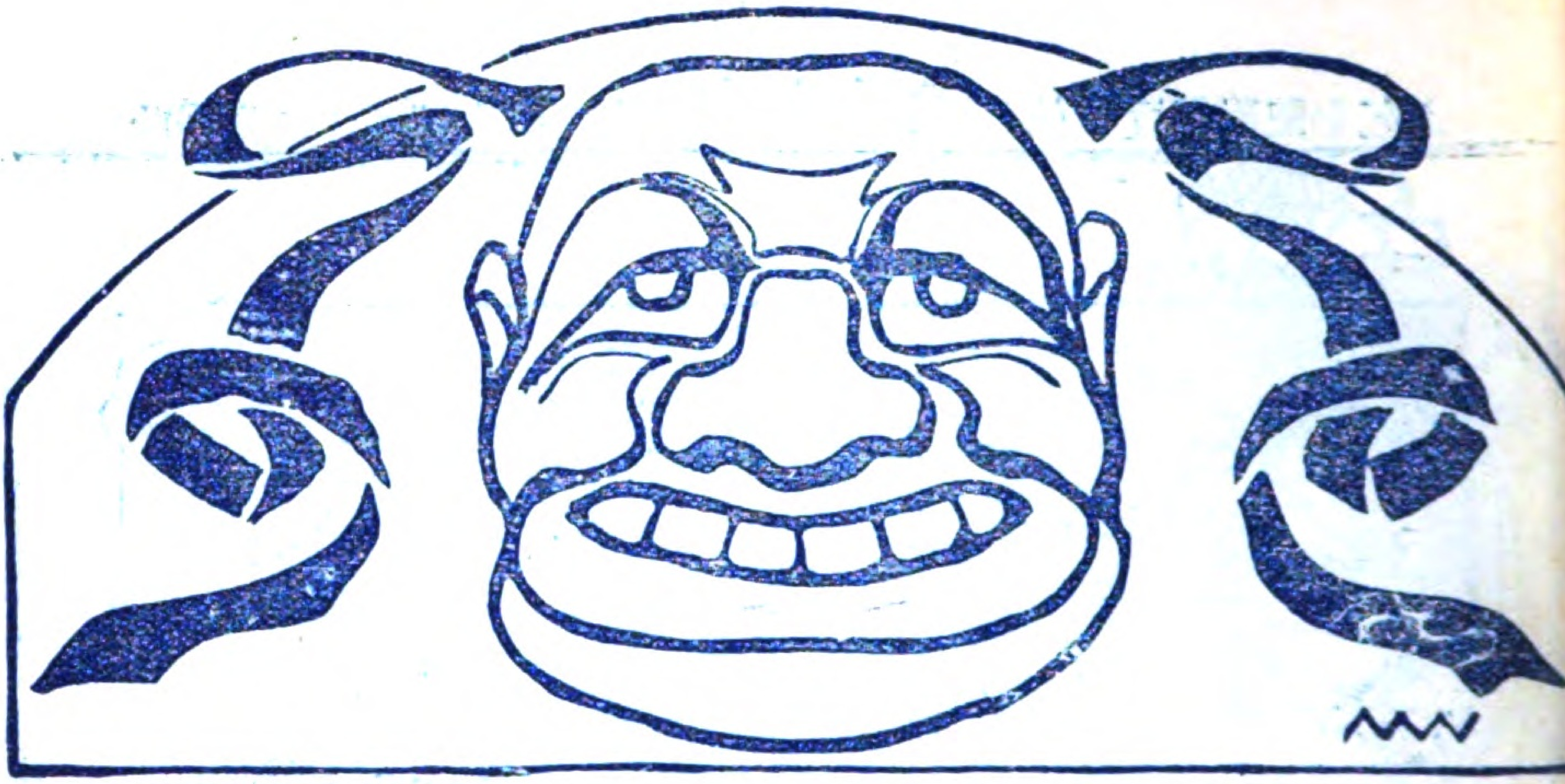
正宗白鳥　上司小劍

森鷗外　水野葉舟

の六氏にして何れも苦心の作を寄せらるゝ筈なれば文壇に貢献する所尠からざるべし。



中央公論第廿五年第三號目次




寒き風！冷き水！
是れ美しき顔と麗なる皮膚の破壞者なり然れども
其害を滿足に防ぐべき玆にクラブ洗粉の一品あり
美を擁護せらる丶紳士淑女諸君！
クラブ洗粉の常用は此際最も肝要なり

泰西名家のスケッチ



三宅克己氏所藏

文藝保護問題大演說會

三月十三日正午より

神田錦輝館に於て

（傍聴無料）

出席辯士

三宅雪嶺
山路愛山
後藤宙外
長谷川天溪
水野葉舟
中村春雨
金子筑水
巖谷小波
田中王堂
和田垣謙三

中央公論主催

文藝保護問題大演說會

中央公論



第二十五年
第参號
第二百五十二號

貴族論

（一）

近時貴族の政治運動に關與するもの少からず、甚だしきは手を政黨に染め、貴族院にも亦衆議院の如く政黨を樹立せざる可らずと做し、所謂二院縱斷論を唱ふるものすらあり、以爲らく、政黨内閣は憲法政治の骨髓を爲すもの也、政黨内閣を作るがためには、貴衆兩院を通じて多數を制する政黨を作らざる可らすと、今や斯の如き思想を以て、陰に陽に政黨員と奔走し斡旋する貴族あり、是れ果して是乎非乎、貴族社會の將來に取ては實に輕からざる問題也

（二）

政黨内閣を以て憲法政治の骨髓と爲すは、現時の黨人を支配する一大謬想也、世界の政治學者にして最も進歩したる識見を有するものは、今や、政黨内閣の弊に堪えず、漸く其の短所を指摘して之を矯正する所以を講究しつゝあり、蓋し最善なる國家は、最良なる組織に成る政治機關を有し、適材を適處に配置して以て其の技能を盡さしむ、若し政黨にして適材を擧げ得べき最良の便宜を有すれば知らず、然らずして單に政黨のみの力に由て政府を組織し、却て適材を閑却するが如きは、國家に取て一の不幸ならずんばあらず、即ち政黨内閣の最善なるものに非ざるや論無く、素より憲法政治の精髓にも非ず

我が國に於て、假りに政黨内閣を組織するの必要ありとするも、所謂兩院縱斷と號して貴族院にも政黨を樹立せざる可らざる所以は那邊にありや、單に衆議院に多數を制する政黨をして内閣に當らしむれば足る、貴族院をも擧げて政黨たらしむる必要あることなし、否貴族院にも政黨を樹立して、衆議院と異なること無からしむるは、寧ろ我が憲法の精神に反す、換言すれば兩院設置の主義に反する也

衆議院が輿論を代表するの府たるや言を俟たずとす、然れども輿論必らずしも實論ならずして、民論却つて愚なることあり、且つ所謂輿論を代表すといふも、往々にして却つて然らざることなきに非ず、普漏亞に對して開戰を迫りたりし佛國代議院の例に看よ、當時佛國の眞正なる輿論が開戰に反對なりしことは、後に至て分明したりしにあらずや、故に衆議院の眞正に輿論を代表せざる場合、若くば輿論を代表するも其の決定の謬まれる場合に、之を矯救するは貴族院の任にして、而して兩院併立の根本義も亦之に外

ならず、若し貴族院にも亦輿論を代表せしむべしといひ、或は政黨を樹立すると猶ほ衆議院の如くならしむべしといはゞ、兩院併置は徒らに重複の機關を設くる也、屋上に屋を架する也、寧ろ貴族院を全廢するに如かざるに非ずや

貴族院議員に、學識經驗に富める學者縉紳を勅任し、且つ皇族、華族及び多額納稅議員のみを列席せしめて、其の成立の分子を全然衆議院と特異ならしむる所以を一考せよ、衆議院の決定に遺漏缺點ありしとき之を補足し修正する外、萬一衆議院が貴族富豪の利益を蹂躪する時、之に反對して適當の調和を得せしむるがためならずや、貴族院の本分は茲に在り、兩院併置の根本義は茲にあり、而して我が憲法の精神の茲に在るや、炳として日星の如し、盲者に非ざる限り誰か之に惑はんや、所謂縱斷論者なるものは、盲人以上に視力を缺ける昧人のみ

隨つて貴族院の本分は公平無私なるに在り、苟くも貴族富豪の利益を代表するの外は、常に公平無私ならざる可らず、政黨に偏するの非なると共に、また政府にも偏す可らず、彼の研究會及び其の一味が比較的政府の味方たると多きも、曾て宗教法案に於て極力政府に反對したりしに視れば、必ずしも偏せりと斷ず可らず、但だ其の議員が學者、老人、貴族、富豪なるより推して、動もすれば保守的傾向を有するを避く可らずとするのみ、而して衆議院の急進的なるに對して、是れ寧ろ當然のみ

（三）

單に貴族のために圖るも、政治運動、殊に政黨運動を爲すとは、十二分に考慮せざる可らず

第一に顧慮すべきは資金也、英米兩國の政黨が如何にして其の生存費を得るかを知るものは、應さに頻蹙を禁ぜざるべし、英國の如き風儀嚴格なる國に在ても、尙ほ政黨に寄附金を爲したるが故に、勳爵を下賜せらるゝものの少からざるとは、多く人の知る所なるべし、是れ一種の勳爵賣買也、支那歷代の弊風として官職を賣買するものと太だしく逕庭なきもの也、唯だ實力ある官職を買ふと、實力なくして單に虛榮なる勳爵を買ふとの差あるのみ、米國の政黨に至ては、トラスト又は大資本主より賄賂を收め、彼等のため都合宜き法律を制定するとを豫約す、彼の關稅を高くして外國品の輸入を杜絕し、トラスト又は大資本主をして其の製出品を無競爭に任せて高價に販賣せしめ、以て法外の巨利を得せしむるは實に此の結果ならずや

我が國に在ては、政黨首領たるもの大抵其のポケットマネーを空にせざるは無し、吾人今二三の實例を擧げん、故西鄕侯が故品川子と謀りて國民協會を組織し、自由黨進步黨に對抗せんとするや、實に元老大臣等と凝議の上訣別して決行したるものにして、當時侯と子とは、互ひに其の生首を賭して以て相渝らざることを誓約したるがため、一名生首黨の稱號をさへ冠せられたりき、然るに同會組織以來其の費額の多きがため、侯爵夫人先づ西鄕家の前途を危み、親族會議の決定に由て强ひて侯の政黨運動を中止せしめんとし、元老大臣等の斡旋に由て辛ふじて其の目的を達したりき、侯が特に勅命を拜受し、入て海軍大臣に任ぜられ、手を國民協會と絕つの餘儀なきに至りしは、實に此の結果にして、正さしく西鄕家の資產を蕩盡するの恐れありしと其の唯一原由ならずや、而して殘れる品川子が、國民協會の衰微

せるに拘らず、尙ほ私財を投ずると涯なく、年末紙幣の束を手にして、高利貸の鋭鋒に浩嘆したりしも、亦知る人の悚然たらざるを得ざりし處ならずや、故伊藤公が政友會を組織するや、またポケットマネーの流失の多きに堪えず、其の用金を命ぜんとしたりし大倉其の他の富豪が、黨費の負擔に耐えざるを豫知して敢て入會せず、公の誘引より遁逃するに及び、公の窮厄は更らに甚だしかりき、公が政友會を去りしは、別に重大なる事由ありしと勿論なるも、黨費の負擔に堪えざりしとも、亦一の理由たるや蔽ふ可らず

試みに民間人の政黨運動に從事したるものと資金との關係を看よ、杉田定一氏の如きは父祖傳來の財產を蕩盡したる一人にして、幸ひに其の誠實と德望とに由て、今尙ほ黨中一方の領袖たるも、未だ氏の如きを得ざる無名の英雄は殆んど其の數を算す可らず、三び總選擧に競爭するか、十年政黨運動に從事して一方の牛耳を執らんとすれば、少くも拾萬の財を蕩盡すとは、彼等の常に相語る所ならずや、甚だしきは稍知名の士にして、既に悉く父祖傳來の家產を一掃せるも、政治上に志を得ず、入ては親戚一門に對する面目なく、出でては鄕黨僚友に向ふ顏色なきに憤懣して、竟に非命に斃れたりしものに一二ならざるを思へ

其の器材に非ずして政黨に入り、然かも碌々として陣笠に伍するを恥ぢて、一方の領袖たらんと欲せば、少くも多くの黃金を散せざる可らず、千金志士に結ぶと稱して、黨費の大部分を負擔するのみならず、其の部下として、寧ろ部下たるを裝ふて來る者のためには、常に其の衣食を支ふるは勿論、時とし

ては遊蕩の費用も亦之を支辨せざる可らず、政界に清廉の名高き某名士が進歩黨を去れるも、大隈伯が其の幾千圓の負擔を引受け遣らざりしと其の眞因なりしといふに考へよ、世故に長けざる我が貴族にして、鷹揚にも政黨の群に投ぜば、摺枯らしの黨人等は、恰かも奇貨措く可しと做し、陽に之を崇敬し尊重して、與ふるに重要なる職名を以てすると同時に、又直ちに黨費の負擔を要望すべし、是れ徒らに自から彼等の飼料と爲るのみ、竟に祖先傳來の家産を奈何せんとするぞ

黨人の財産を蕩盡するや、窮すれば則ち濫せざるを得ず、近くは彼の日糖事件に罪囚となれるものを看よ、其の三四者は實に蕩盡したる財産の一部を回復せんとしたりしものならずや、我が貴族の上品なる、如何に窮するも眞逆に罪囚たるまでには墮落し得ざるべし、然れども窮すれば濫す、吾人は一び之を思へば坐ろに慄然たらざるを得ざる也、思へ、貴族として相當の品位と面目とを保たん事は、實に相當の資財を要するに非ずや、苟くも君國の大事とあらば、祖先傳統の財産を一擲するまた惜む可らず、唯だ之を政黨運動に擲つに至ては、深く顧慮せざるを得ざるにあらずや、吾人は貴族諸卿が先づ玆に三思し九思せんとを促がす

（四）

其の人物才能若し政事家たるに適せば、貴族と雖も亦政事家たるを妨げず、先天的に貴族たる人にして政事家たる人には西園寺侯の如き天成の好首相あり、自からの勳功を以て貴族に伍せられし人にして政事家たるものに至ては、伊藤山縣の兩公を首め、井上松方桂の諸侯あり、其の他伯子男の間にも亦少

だ多し、斯る材能ある人は、政事家として其の駿足を延すと實に國家のために悦ぶべし、吾人は唯だ斯の如き材能なく、一朝にして無造作に自から政事家たらんとするを非とするのみ

貴族院議員にして、今や手に唾して大臣たり得べしと自信するもの少からざるべし、殊に少壯氣鋭の人多くは應さに然るべし、西園寺内閣が貴族院より堀田子、千家男を拔きて大臣とし、桂内閣が現に岡部子を引きて大臣としたるを觀て殊に然るべし、兩内閣は此の三士氏を以て果して大臣の適材と認めたりや否や、堀田子岡部子の如き、或は相應に大臣の器材たるを得べし、然れども西園寺内閣が堀田子と千家男とを拔きたるは、之を適材とせしに非ずして、寧ろ二人氏の代表せる勢力を利用し、若くば此を利用して貴族院の形勢を動かさんとする政略に出でしと言を俟たず、此の例を作れるを見て、之に倣はざるを得ざりしは桂内閣ならずや、吾人は此の事實を以て、貴族をして無要なる野心を起さしめたる一動機として之を非難せざる可らず、貴族をして、貴族院議員をして、政黨熱に罹らしめたる兩内閣の擧措は、恐らくば後世識者の見逃すを得ざる所なるべし

貴族にして自から其の人物材能の大臣たるに足るを自信し、而して衆望また多く違はずんば、進んで政黨運動を爲すも可也、自から純政事家たらんとを期する以上、一生を茲に捧ぐべし、乃ち家産の如き必らずしも顧慮するの要なき也、吾人は唯だ其の器材に非ずして漫りに分外の野心を起し、所謂自惚に由て政黨に飛込み、彼の摺枯らしの黨人輩のために其の家産を蕩盡せしめらるゝを非とするのみ

更らに吾人をして正直に言はしむれば、貴族にして政治的公職に從事せんと欲せば、軍人又は外交官

ては遊蕩の費用も亦之を支辨せざる可らず、政界に淸廉の名高き某名士が進歩黨を去れるも、大隈伯が其の幾千圓の負擔を引受け遣らざりしと其の眞因なりしといふに考へよ、世故に長けざる我が貴族にして、鷹揚にも政黨の群に投ぜば、搾枯らしの黨人等は、恰かも奇貨措く可しと做し、陽に之を崇敬し尊重して、與ふるに重要なる職名を以てすると同時に、又直ちに黨費の負擔を要望すべし、是れ徒らに自から彼等の飼料と爲るのみ、竟に祖先傳來の家產を奈何せんとするぞ

黨人の財產を蕩盡するや、窮すれば則ち濫せざるを得ず、近くは彼の日糖事件に罪囚となれるものを看よ、其の三四者は實に蕩盡したる財產の一部を回復せんとしたりしものならずや、我が貴族の上品なる、如何に窮するも眞逆に罪囚たるまでには墮落し得ざるべし、然れども窮すれば濫す、吾人は一び之を思へば坐ろに慄然たらざるを得ざる也、思へ、貴族として相當の品位と面目とを保たん事は、實に相當の資財を要するに非ずや、苟くも君國の大事とあらば、祖先傳統の財產を一擲するまた惜む可らず、唯だ之をを政黨運動に擲つに至ては、深く顧慮せざるを得ざるにあらずや、吾人は貴族諸卿が先づ玆に三思し九思せんことを促がす

（四）

其の人物才能若し政事家たるに適せば、貴族と雖も亦政事家たるを妨げず、先天的に貴族たる人にして政事家たる人には西園寺侯の如き天成の好首相あり、自からの勳功を以て貴族に伍せられし人にして政事家たるものに至ては、伊藤山縣の兩公を首め、井上松方桂の諸侯あり、其の他伯子男の間にも亦少

だ多し、斯る材能ある人は、政事家として其の驥足を延すと實に國家のために悦ぶべし、吾人は唯だ斯の如き材能なく、一朝にして無造作に自から政事家たらんとするを非とするのみ

貴族院議員にして、今や手に唾して大臣たり得べしと自信するもの少からざるべし、殊に少壯氣鋭の人多くは應さに然るべし、西園寺内閣が貴族院より堀田子、千家男を抜きて大臣とし、桂内閣が現に岡部子を引きて大臣としたるを觀て殊に然るべし、兩内閣は此の三士氏を以て果して大臣の適材と認めたりや否や、堀田子岡部子の如き、或は相應に大臣の器材たるを得べし、然れども西園寺内閣が堀田子と千家男とを抜きたるは、之を適材とせしに非ずして、寧ろ二人氏の代表せる勢力を利用し、若くば此を利用して貴族院の形勢を動かさんとする政略に出でしと言を俟たず、此の例を作れるを見て、之に倣はざるを得ざりしは桂内閣ならずや、吾人は此の事實を以て、貴族をして無要なる野心を起さしめたる一動機として之を非難せざる可らず、貴族をして、貴族院議員をして、政黨熱に罹らしめたる兩内閣の擧措は、恐らくば後世識者の見逃すを得ざる所なるべし

貴族にして自から其の人物材能の大臣たるに足るを自信し、而して衆望また多く違はずんば、進んで政黨運動を爲すも可也、自から純政事家たらんとを期する以上、一生を茲に捧ぐべし、乃ち家産の如き必らずしも顧慮するの要なき也、吾人は唯だ其の器材に非ずして漫りに分外の野心を起し、所謂自惚に由て政黨に飛込み、彼の摺枯らしの黨人輩のために其の家産を蕩盡せしめらるゝを非とするのみ

更らに吾人をして正直に言はしむれば、貴族にして政治的公職に從事せんと欲せば、軍人又は外交官

たるを最も適任とす、今の政治の要は適材を適處に置くに在り、隨つて外交、軍事、財政等多くは專門の智識技能を要し、此の專門の智識技能あるものが其の員に備はると、世界政治上の趨向也、此の趨向に由て、貴族の如き富裕にして而して上品なるものの擇ぶべきは、將校と外交官を最良とす、賢愚雜多の群心に應酬するが如き政黨運動は斷じて貴族の堪えざる所也

若し專門に軍人又は外交官たるを好まず、又純政事家たるに適せずと知らば、而して尙ほ政治に趣味を有すとせば、宜しく單に貴族院議員たるに甘んじて、常に君國のために公平なる心事を持し、以て其の職分に忠ならんことを期すべし、然り、唯だ斯の如くにして足れり、然かも是れ憲法が我が貴族に要求する所ならずや

貴族は皇室の藩屏と稱せらる、而して皇室と皇族とは、常に政黨々派の外に超越し玉ふ、蓋し黨派は必らず偏す、偏すれば公平ならざれば也、所謂王道の蕩々たるは、我が皇室の旨とし玉ふ所ならずや、其の藩屏たる我が貴族も亦皇族に倣ふて政黨々派の外に超越すべし、眞に皇室の藩屏たらんとすれば、素より然らざるを得ざる也

（五）

皇室は帝國を統治し玉ふ主權者たる外、又實に正義と名譽との泉源也、而してまた眞善美の表彰の摸範たり、皇室の藩屏と稱せらるゝ貴族は深く之を思はざる可らず

國家のため常に儼として正義の支柱者たるは貴族の任ならずや、國家か正義のため開戰する場合には、

貴族大に奮勵し努力せざる可らず、平生の政治問題に於ても、往々正義論なきに非ざるも、畢竟するに小正義のみ、政治上の主題は多く利害にあり、唯だ國法の大本を動かし、國家の組織に變故を來たし、國家の安危存亡の岐る丶機會には、大なる正義を支持せざる可らず、貴族の大に活動すべきは斯る時にあり、平生は唯だ正義の支持者として儼立し、國民をして瞻視して以て崇拜し倚信せしむれば足る

既に名譽の泉源たる皇室の藩屛として、皇室に最も近き階級に立ち、公侯伯子男たる名譽を享くる以上、また國民偶仰の焦點として彼等の模範たらざる可らず、其の生活の上品なると共に、家族一門總て素行を高潔ならしめ、一夫一婦の制を嚴守するは勿論、嚴乎として國民の模範たるべき家庭を保維せざる可らず、吾人が貴族には相當の面目を保つべき必要ありといふは此の事也

動もすれば妾を畜へて倫常を紊り、延きて家庭に醜汚なる波瀾を絶たず、或は出でて花柳の巷に車馬を驅り、色を漁し酒を恣にして時に痴態の限りを盡すは、今の貴族が國民の瞻仰する所とならずして、動もすれば侮辱嘲笑の的たる所以ならずや、新時代の教育を受け、新時代の意義を解し、自家の本分を自覺して以て大に爲すあらんとする有望なる貴族は、宜しく深く玆に心すべし、一方に政黨運動に手を着けんとし、前途に分外の大望を抱きながら、屢々紅燈綠酒の豪遊に放縱の名を流すが如き、思はざるも亦甚だしからずや、斯の如きは野人無賴漢の亞流のみ、貴族たる本分に戻るや甚だし

貴族は又學問美術の奬勵に心を致すべし、自から學海に棹して眞理の研究に從事する甚だ良し、或は繪畫に、陶漆器に、其の丹精を凝らして一幅一品を作成する亦太だ妙ならずとせず、自から然らざるも

亦資財と保護とを學者と美術家とに與へて、以て其の大成を得せしむべし

近時富豪等相謀りて、化學研究者を保護するの計畫あり、學者が眞の研究を爲さんには、衣食に顧慮せずして、一意專念其の究めんとする所に從事せざる可らず、然かも彼等は衣食のため往々研究以外の事に勞せざるを得ず、是れ彼等の最大苦痛とする所、爲めに研究を十二分ならしめ能はざる遺憾あり、貴族の如き餘裕あるもの、力を割きて之を保護すると應さに其の本分ならざらんや、獨逸のツェペリン伯は飛航機發明のため百萬の遺産を寄附する決心なりといへるを看よ、我が貴族の獨り徒らに飽食暖衣し、其の費す所却つて無用臭汚なる放縱の遊に過ぎざるは何ぞや

我が美術の最も發達したる時代は足利徳川の兩時期とす、此の期間は往々戰亂あり、假令泰平持續せるも、民力甚だ裕かならざりし時なるに拘らず、名人鉅匠輩出して、千古の逸品を出せしは何ぞや。大名國主なる貴族ありて、美術家を奬勵したれば也、當時の國主大名は、一國一城を得るよりも、一枝の名刀、一幅の名畫、一片の茶器を賜はるを名譽としたるもあり、甲冑刀劍に名器を出せしは論なく、彼の織物の如きも、大名の能樂を好めるに由て、絶代の逸品を得たりしといふ、畫家陶工漆工また皆一定の扶持米を賜はり、毫も衣食の後顧なくして、專念其の技に丹精を抽んづ、名器を得たりし所以ならずや、明治以後は彼等衣食のために勞せざるを得ざるが爲めに、普通需用品は大に發達したりと雖も、眞に千古に傳ふべき美術品は却つて衰へたり、堆朱が竟に絶滅せんとするを看よ、此の時に方りて貴族が其の富の一小部分を割きて美術家を扶持し、其れをして一意絶代の奇什を作出せしめば、明治聖代の光

譯は美術と共に千萬世に不朽なるべきにあらずや、而して是れ貴族の大なる効績ならざらんや

吾人は近時我が貴族の其の本分を自覺せず、却つて放縱なる惡風にのみ流るゝに深慨する所あり、爲めに此の論を立つ、貴族にして眞に志あるものは、應さに吾人の眞意を諒とすべき乎、貴族をして今日の如く權威と信任とを欠かしむるは、決して帝國の利益に非ざる也、正義と名譽との爲めに非ざる也

政府政友會の妥協

(一)

政府と政友會とは曩に妥協したり、其の結果二月十二日の衆議院に於て、四十三年度より地租八厘減を實施し、同時に官吏增俸を二割五分として豫算全部を通過せしめたり

故に換言すれば、政府と政友會とは、地租八厘減と二割五分の官吏增俸とを交換したる也、此の結果として所得税に於て減ずべきもの約四百五十萬圓、市内通行税の廢止に由て減ずべきもの約百萬圓は成立せざりき、所得税の減率せらるべきは主として勤勞所得なるが故に地主は多く與からず、隨て市民の浴すべかりし減租の恩典奪はれて、農民丈け一千萬圓未滿の負擔を輕減せられし也

政友會が妥協の副土産として、阿里山官營其の他若干の政府要求(實は一旦削減したりしもの)を承諾せしは、比較的に多く讓與したりしと稱して可也

斯くして第二十六議會はまた平板無事にして終局せんとす、貴族院が衆議院の此の決定を多く修正せざると素より辯を俟たざれば也

(二)

妥協の結果は別に評論するの要あらず、多く稱揚すべきものにもあらざると共に、又非難すべきものにも非ざれば也、彼等は爲し得る限りを爲せり、彼等に取ては恐らくばベストを盡せしならん、駱駝は駱駝にして驢馬は驢馬也、是れ以上を望むは愚か也

或は妥協を非立憲と謂ふものあり、議院の決定を動かすに暮夜の私議を以てするが如きあらば、應さに稱して非立憲と爲すも可なるべし、然れども彼等は院議に於て盡すべきを盡し、其の間一點半點だも違法の處あらず、又憲法の精神に反する所もあらず、之を非立憲といふは妄言のみ、憲法政治の妙はコムプロマイズに在りては、必らずしも故兒玉大將の私言にあらず、英國の政事家も亦常に之を唱ふ、蓋し兩々對抗して相降らざる時、破裂の外なくして、破裂の結果何物をも得ざるが如きは、實蹟を擧ぐるとを主とすべき政事家の能事にあらず、斯る場合には相讓り相歩みて至當の結果を得るを佳とす、素より兩者の主張を根本より破る可らざると勿論なるも、然らずして單に或る程度まで互讓するとは、智慮あるものの應ちに努むべき所なりとす、政府と議院、其の擧ぐべき所は國務の實蹟に在り、或は藩閥又は官僚と稱し、或は邪黨又は謀叛人と唱へて、互ひに敵國の如く相對し相爭ふが如きは、時代遲れの見識にして、到底憲法政治の骨法を解せざるもの也、政府と政友會と能く妥協し、然かも其の間に元老を

類さず、又例の黄金の臭聞を交へざるは、立憲的作法を失はざるものとして、吾人は聊か其の老實を稱せんと欲す

（三）

政府が地租八厘減のため、所得税法案を撤回し、又市內通行税の廢止を否決せられしを以て財政方針を破壞せられしものと做し、斯くしても尙ほ恬然其の職に在るは無責任なりといひ、甚だしきは獨逸宰相ビユーロー侯を引例するものあり、事體を辨へざるもまた實に甚だしと謂べし

政府の財政方針は事業繰延にあり、而して其の主力を注ぐ所は公債償還の方針にあり、桂侯自からは其の內閣組織の時、此の方針にして若し容れられずんば斷然其の職を去るの決心なりしといへり、故に議會に於て若し此の方針に贊せずして、之に變更を加へん乎、政府大臣は義其の職に止まる可らず、議會を解散して更に國論に問ふ乎、然らずんば冠を掛けて野に下るの外なかるべし、然れども前期議會も今期議會も、此の方針に協贊を與へて寸毫も變更を加ふる所あらず

且つ議會自から政府の計畫せざりし地租八厘減を實行する決議を爲し、政府をして其の計畫せる所得税と通行税の改正を空に歸せしめたるも、然かも其の金額は僅々五六百萬圓のみ、議會は却つて一千二百萬圓の官吏增俸を是認し、阿里山官營業を協贊し、其の他多くの新事業費を承認したりしにあらずや斯くしても尙ほ財政計畫を破壞せられたりといふべき乎、若し論者の說をして是ならしめば、政府は殆んど一錢一厘の删除をも許さざることとならざる可らず、是れ議會の存在を無視する也、自から議會の權

斯くして第二十六議會はまた平板無事にして終局せんとす、貴族院が衆議院の此の決定を多く修正せざると素より辯を俟たざれば也

（二）

妥協の結果は別に評論するの要あらず、多く稱揚すべきものにもあらざると共に、又非難すべきものにも非ざれば也、彼等は爲し得る限りを爲せり、彼等に取ては恐らくばベストを盡せしならん、駱駝は駱駝にして驢馬は驢馬也、是れ以上を望むは愚か也

或は妥協を非立憲と謂ふものあり、議院の決定を動かすに暮夜の私議を以てするが如きあらば、應さに稱して非立憲と爲すも可なるべし、然れども彼等は院議に於て盡すべきを盡し、其の間一點半點だも違法の處あらず、又憲法の精神に反する所もあらず、之を非立憲といふは妄言のみ、憲法政治の妙はコムプロマイズに在りては、必らずしも故兒玉大將の私言にあらず、英國の政事家も亦常に之を唱ふ、蓋し兩々對抗して相降らざる時、破裂の外なくして、破裂の結果何物をも得ざるが如きは、實蹟を擧ぐるとを主とすべき政事家の能事にあらず、斯る場合には相讓り相歩みて至當の結果を得るを佳とす、素より兩者の主張を根本より破る可らざると勿論なるも、然らずして單に或る程度まで互讓するとは、智慮あるものの應ちに努むべき所なりとす、政府と議院、其の擧ぐべき所は國務の實蹟に在り、或は藩閥又は官僚と稱し、或は邪黨又は謀叛人と唱へて、互ひに敵國の如く相對し相爭ふが如きは、時代遲れの兒戯にして、到底憲法政治の骨法を解せざるもの也、政府と政友會と能く妥協し、然かも其の間に元老を

傾さず、又例の黄金の臭聞を交へざるは、立意的作法を失はざるものとして、吾人は聊か其の老實を稱せんと欲す

（三）

政府が地租八厘減のため、所得税法案を徹回し、又市内通行税の廢止を否決せられしを以て財政方針を破壊せられしものと做し、斯くしても尚ほ恬然其の職に在るは無責任なりといひ、甚だしきは獨逸宰相ビユーロー侯を引例するものあり、事體を辨へざるもまた實に甚だしと謂べし

政府の財政方針は事業繰延にあり、而して其の主力を注ぐ所は公債償還の方針にあり、桂侯自からは其の内閣組織の時、此の方針にして若し容れられずんば斷然其の職を去るの決心なりしといへり、故に議會に於て若し此の方針に贊せずして、之に變更を加へん乎、政府大臣は義其の職に止まる可らず、議會を解散して更に國論に問ふ乎、然らずんば冠を掛けて野に下るの外なかるべし、然れども前期議會も今期議會も、此の方針に協贊を與へて寸毫も變更を加ふる所あらず

且つ議會自から政府の計畫せざりし地租八厘減を實行する決議を爲し、政府をして其の計畫せる所得税と通行税の改正を空に歸せしめたるも、然かも其の金額は僅々五六百萬圓のみ、議會は却つて一千二百萬圓の官吏増俸を是認し、阿里山官營業を協贊し、其の他多くの新事業費を承認したりしにあらずや斯くしても尚ほ財政計畫を破壊せられたりといふべき乎、若し論者の説をして是ならしめば、政府は殆んど一錢一厘の刪除をも許さざることとならざる可らず、是れ議會の存在を無視する也、自から議會の權

力を無視する也、愚論に非ずして何ぞ、事の輕重本末を辨へざるものに非ずして何ぞ

近時議員及び新聞紙にして、事體を辨へざる俗論を悦ぶもの多し、吾人故に論じて玆に及べり、國務大臣の責任豈輕々しくす可んや

公論

經濟上の理想社會を論じて新職業觀新道德觀に及ぶ

河上肇

一

丘理學博士は一月號の本誌に於て人類の將來は其の絕滅に在ることを豫言せられたるが、吾輩亦た玆に經濟社會の理想は其の滅亡に在ることを論斷せんと欲す。乍併、博士の所說が極端なる悲觀なりしと正に相反し、吾輩の意見は又た極端なる樂觀なり。此の事、說くに從ふて明かならん。請ふ、試に說かん。

二

夫れ萬物は皆な其の自滅を理想とせざるものなし。例へば病院の目的は如何と云ふに、曰く疾病の治療に在り。故にあらゆる患者の疾病を治療し盡して、世に病人と云ふもの丶全く無くならん日あらば、玆に始めて病院設立の終局の理想は實現せられたりと謂ふべし。然るに若し世の中に疾病と云ふもの丶跡を絕つの日あらば、是れ即ち病院の無用に歸せる時にて、言ひ換ふれば病院そのもの丶滅亡する時なり。故に能く考へ見れば、病院は病院自身の滅亡を理想とすと云ふ事言奇なるに似て實は奇ならず。學校も同じ事にて、無教育者を全く無くするが其の終局の理想なれど、若し其の終局の理想にして實現せられ、世の中に教育を受

くる必要ある人の全く無くならんには、學校は乃ち廢止されざるを得ざる也。裁判所と云ひ監獄と云ひ、法律と云ふの類、推して考ふれば、皆な亦た其の自滅を理想とするに非ざるなし。民の爭訟益々多からん事は裁判所を設けたるの趣意に非ず、囚徒の愈々多からん事は監獄を設けたるの本旨に非ず、人を殺し物を盜む者の日に增加せん事は亦た決して立法の目的とする所に非ざる也。進んでは更に人類に就て考へ見るに、其の窮極の理想は、凡ての人の理想的人物と成るに在らんが、扨て人類にして若し凡て理想的人物と成り了らんか、是れ即ち神類にして人類に非ず。故に畢竟人類の理想は、人類を進化せしめて神類てふ新種の動物たらしむるに在りて、言ひ換ふれば人類そのもの丶滅亡に在りと謂ふべきなり。吾輩は是の意味に於て、人類の將來は其の滅亡に在りてふ丘博士の悲觀的豫言を、必ずしも是認せず又た必ずしも否認すること無らして、之と離れて別に、人類の將來は其の滅亡に在りてふ樂觀的理想を立つる者なり。

三

萬物皆な其の自滅を理想とすること上述の如し。而して吾が經濟社會の如きも亦た固より其の例に漏る丶能はず。即ち其の理想はと云へば、同じく其の自滅に在りと答ふるの外なし。

然らば經濟社會の自滅とは何ぞやと云ふに、經濟社會を化して一個遊戲の世界と爲すこと是れ也。思ふに凡そ經濟の目的は吾人が物的欲望の滿足に外ならず。即ち吾人が勞働に從事して經濟行爲を營みつ丶あるは、之に依りて欲望充足の物資を得んが爲めにして、言ひ換ふれば勞働は手段たり、享樂は目的たり。只だ其の享樂の爲には勞働を爲さざるを得ざるが故に、吾人は已むことを得ずして勞働に從事すと雖も、若し叶ふべくんば、只だ享樂の快のみありて勞働の苦を必要とせざるに如くは無し。嘗てロッシエルが其の經濟原論の卷首に於て『斯學の始點及び終點は人に在り』と喝破し、又たフックスが其の國民經濟學に於て「經濟の始點及び終點は消費に在り」と道破せしも、亦た此の

實に外ならず。

中江藤樹の改正翁問答に曰く「人間世第一にねがひもとむべきものは何事ぞや、答云、心の安樂に極まれり。人間世第一にいとひ捨つべきものは何事ぞや、答いはく、心の苦痛より外はなし」と。誠に然り。然るに今ま、經濟行爲とは勞働の一種にして即ち苦痛なり、消費行爲とは充欲の一種にして即ち安樂なり。夫れ誰か苦痛を厭ふて安樂を願はざらん。知るべし、經濟社會の理想は、人をして經濟行爲てふ勞働の苦を忍ばしむることと無うして、只だ偏に消費行爲てふ充欲の快を享けしむるに在ることを。而かも一旦人世にして經濟行爲の要なきに至らんか、經濟社會てふ苦痛勞働の世は變じて享樂遊戲の極樂世界と爲る。世に地獄の沙汰も金次第と云へど、扨て極樂の世界は經濟の沙汰の無用なる世界なり。是に於て乎、知るべし、經濟社會終局の理想は終に又た其の自滅に在ることを。

四

經濟社會の理想は經濟社會の滅亡に在り。然らば如何にして其の理想は實現さるべきか、曰く他なし、只だ勞働を遊戲化するに在るのみ。而して凡て人間の行爲は、他の目的を達する爲めの手段と爲すに於て、實に苦痛と爲り勞働と爲る。行爲そのものを目的とする時は、勞働變じて則ち遊戲と爲り、娯樂と爲つて苦痛と爲らず。

例へば、等しく讀書と雖も、之を手段とし又は目的とするに依りて、或は勞働と爲り或は娯樂と爲る。かの小說を讀む者を見よ。父兄の止むるをも肯かで、夜を徹して耽讀す。是れ何が故ぞ、只だ讀書それ自身を以て目的と爲し、之を以て目的を達する爲めの手段と爲さざるが故のみ。之に反し、夫の應試の考場に於て月桂の冠を得んことを目的とするの輩に於ては、讀書は既に娯樂たらずして實に苦痛たり。等しく是れ梅花を見、梅香を聞くの人なり。而かも探梅の客は、花を觀、香を聞くを以て目的と爲すが故に、樹下に逍遙して憂を忘ると雖も、茶店の主は、求むる所他に在るが故に、清香空に滿つるの裡に在つて、客の少きを憂へ

得るの多からざるを苦とす。又たかの狩獵を娯樂とする者に見よ。山に登り谷に下り、身心艱難、經營し苦辛して尙ほ且つ樂しとするは、之を以て生業の手段と爲さざるが爲めのみ。若し夫れ之を以て糊口の手段と爲す者に在つては、夏日は則ち流汗し冬日は則ち龜手し、辛苦勤勞、依りて以て纔に父母妻子を養ふ、何の樂しき事あらんや。

五

要するに、如何なる種類の事たるを問はず、行爲そのものを目的とすれば皆な娯樂と爲り、之を以て他の目的を達する爲めの手段と爲さば皆な苦痛となる。遊戲と勞働との別は、客觀の世界が固有する所に非ずして、凡て行爲の刹那に於ける主觀の一念に存するものなり。故にしかじかの事は遊戲なり、しかじかの事は勞働なりと、客觀の事相を指して定め得べきに非ず。只だ主觀の一念に依りて、如何なる行爲も遊戲となり又た同時に勞働とも爲る。

蓋し或る行爲を以て他の目的を達する爲めの手段と爲して之を營まんか、其の行爲者は、その行爲の刹那に於て、未だ實現されざる目的、言ひ換ふれば未だ滿足されざる欲望を意識する者なり。然るに、欲望を滿足する時は則ち快感を覺え、滿足されざる欲望を意識する時は則ち苦痛を感ずる、是れ人の天性なり。故に或る行爲を以て他の目的を達する爲めの手段と爲す時は、其の目的の實現されざる限り、即ち其の欲望の滿足されざる限り、吾人は一定の苦痛を感ずるを免れざる也。之に反し、行爲そのものを目的とする時は、そが行爲の刹那々々に於て、行爲それ自身に依り、時々刻々目的の實現あり、欲望の滿足あり、故に快感あり從て行爲の全部は始終を通じて遊戲と爲り娯樂と爲る也。

古人、色食は人の性なりと云ひ、俗諺に又た兎角浮世は色と酒と云へり。エンゲルス亦た嘗て生命の生產及び復生產を以て人世の二大要件と爲したることあり。敢て問ふ、色食何の魔力ありて爾く人生を左右する。答へ云ふ、他なし色食は人の好愛する所なれば也

然らば又た問ふ、色食何か爲めに爾か樂しきか。答へ云ふ、他なし是れ行爲自身を目的とするの行爲なれば也。蓋し夫の滋養多く消化し易きの食物を撰擇するが如きは、固より健康の增進壽命の長久を目的とするに外ならずと雖も、而かもそは凡て事前の事にて、美酒佳肴一旦眼前に陳ばゞ、吾等は只だ飲まんが爲めに飲み食はんが爲めに食ひ、曾て其の刹那々々に於て長生久視の目的を意識すること無し。而して飲食の樂しきは實に是が爲めのみ。然らずんば、腭を動かし舌を働かせ、苦辛艱難、何の樂きことかあらん。人の生殖行爲に於けるも亦た然り。その事前に於ては或は子孫の繁殖を以て目的と爲すこともあらんか、而かも行爲そのもの丶瞬間に於ては、一切無想、縱ひ未だ實現されざるの目的あり、未だ満足されざるの欲望ありとするも、行爲の刹那に於ては曾て之に想到すること無きが故に、從て刹那々々只だ欲望滿足の快味を感覺するのみにて、毫も欲望不滿の苦痛を意識せざる也。異性情交の樂しき畢竟是が爲めのみ。然らずんば、濃濁の痴態、禽獸の醜態、何の樂しき事かあらん、厭ふべく惜ふべきのみ。

六

之を要するに、勞働は苦痛を伴ふの行爲にして、遊戯は快樂を伴ふの行爲なるが故に、二者の性質は正に全く相反すと雖も、而かも二者の區別は、決して行爲の客觀的外相に固有するの性質に依りて定まるに非ず。如何なる行爲と雖も、その行爲自身を目的として之を營まば必ず遊戯と爲り、如何なる行爲と雖も、之を他の目的を達する爲の手段として營まば直ちに勞働と爲る。餘りに繰り返へす樣なれど、實に如何なる行爲と雖も、主觀の一念如何に依りて凡て皆な之を遊戯化し得るもの也。

論じて玆に來らば、吾等は復び元の問題に立ち還りて經濟行爲の論を爲さざるべからず。扨て前にも云へる樣、勞働の苦勞なくして人生の繁榮を保たんこと是れ吾等の理想なるが、此の理想の實現は甚だ容易なることにて、即ち吾等の主觀を一變せば其にて事足る

也。

如何なる職業に從事するも世に面白き職業の稀なるものかなとは、様々に其の業を替へ試みたる人の能く云ふことなれど、實を云はゞ、誠に其の言の如く如何なる職業と雖も世に面白きは絶へて無く、之と同時に、又た如何なる職業と雖も世に面白からざるは曾て非ざる也。

報酬を得んことを目的とし、其の目的を達するの手段として從事せんには、如何なる事業と雖も皆な勞働と爲る。目的の成就、欲望の滿足は、事業の結果として報酬を得たる其の刹那に於て始めてあり、事業の面白からざるべき道理なり。之に反し、其の事業を以て報酬を得る爲めの手段と爲さず、只だ專心一意、事業そのもの丶成効成就を目的として働かんには、勞働即ち遊戯と爲る、如何なる事業と雖も面白からざるの道理なし。

如何なる事業か面白からざらん。希くば世の人、速に其の主觀を一變し、事業を以て手段とせず、直ちに其れ自身を以て目的とせよ。事業即ち遊戯となり、勞働即ち娯樂となる。此の如くにして、遊戯の報酬に衣食し、娯樂の謝禮に生活す。人生亦た樂からずとせんや。

七

斯く短兵急に論じ詰むれば、理想の黃金世界は今にも出現すべきやに思はるれど、扨て一轉語を下して論じ戻さば、事業そのものを目的とすと云ふこと、實は甚だ容易の事に非ず。事業そのものを目的として之に專心一意なるが爲めには、吾等の其の事業に對するの趣味實に極めて强からざるべからず。賢を賢として色に易へよと云ふ古語あれど、扨て此の一語、言ふは易くして行ふは極めて難し。故に吾人は一方に於て、事業そのものを目的とし、之に趣味を感ずるの工夫を爲すこと固より必要なりと雖も、又た他方に於ては、趣味を感ずるの事業を求め、事業それ自身を目的として之に從事することを容易ならしむるの心掛又た肝要なり。而して吾人は此の點に於て、かの如何なる事業にも遂に趣味を感じ得ざる人の境遇を憫むの情に耐へ

ず。

進莫、經濟社會進化の大勢は、此の如き憐むべき境遇の人をば、次第に無くせんとするの傾向を明示しつゝあり。

而して其の第一の傾向を職業の增加と爲す。職業は次第に增加しつゝあり、言ひ換ふれば分業は次第に進歩しつゝあり。是れ既往數千年の經濟史が、吾人に敎ふる所の社會進化の一大法則たり。而して吾輩は、之を以て、經濟社會が歩一歩、吾輩の所謂終局の理想に向つて漸進しつゝあるの徴證と爲す。

試に一例を科學に取らんか、分科の夥しき現時の如きは曾て有らざる所なり。今や社會科學は自然科學と相分れ、而して社會科學の中に於いても、法律、政治經濟、歷史等の諸學各々又た相分れ、更に經濟の一科に就いて見るも、經濟原論あり、經濟史あり、經濟學史あり、經濟政策學あり。而して經濟政策學の一科は更に又た分れて、財政學、農業經濟學、工業經濟學、商業經濟學等諸多の分科と爲り、進んでは等しく商業經濟學と云ふも、或は之を國民經濟の見地より論ずる商政學あり、或は之を私人經濟の見地より論ずる商業經營學あり。學者各々好む所に從ふて其の一二を專攻す。夫れ學者は皆な好學の士なり、所謂學を以て色に更ふるの輩なり。乍併、彼等の能く此の如くなるを得るは、一に學問分科の賜なるを忘るべからず。若し學者として世に立つ、普く諸學に通ずるの趣味を要すべしとせば、之を一人に求むる頗る難かるべしと雖も、幸にして科學の進歩は益々其の分科を促し、其の恩澤に賴つて、方今の學者は始めて各々其の性の適する所に專なるを得つゝある也。

更に之を工藝上の分業に徴せんか、嘗てアダム、スミスの例示せし所に據れば、留針の製造は實に十八段の分業に分れ居たりと云へり。是れ既に驚くべきことなれども、而かもこは一世紀前の舊話にして、今や留針の製造は實に七十二段乃至九十二段の分業に分れつゝあるなり。故に留針製造の全部に就ては假りに趣味を感じ得ずとするも、其の製造の手續は七十二段乃至

九十二段に分たれ居るが故に、其の七十二分の一乃至九十二分の一に當る仕事に就てのみ機に趣味を有し得るならば、其の者は、仕事自身を目的とし之を娯樂とし遊戯として其の業に從ふを得べきなり。

此の如く、事業は益々分割され、職業の種類は年を追ふて愈々增加す。而して吾輩を以て之を見れば、是れ即ち經濟社會が勞働の遊戯化てふ終局の理想に向つて、着々其の歩を進めつゝある所以に外ならず。吾輩は斯く觀ることに依りて、文化史上に於ける分業の意義の實に重大なるものあるを思ふ。

八

職業の自由の益々擴張せらるゝこと、又た看過すべからざる經濟史上の一大法則なり。思ふに、如何に分業は發達し如何に職業は增加すとするも、若し各人其の好む所の職業を選擇するの自由なからんには、畢竟何の甲斐無きに終るべしと雖も、事實に於ては幸にも職業の自由は年を追ふて益々擴張せらるゝの一方に在り。職業世襲の特權次第に廢せられて、法制上職業の自由の廣く認めらるゝに至りしは言はずもがな、かの交通移轉の法制上はた經濟上益々自由となりつゝあるも、畢竟は又た職業の自由を增す所以なり。

交通機關の進歩の著しきは、吾等眼前の事實にして殆ど說くことを要せざるが、これも議論の順序なれば、玆に二十年前の昔話を載せんに、千八百八十七年米國鐵道に依る貨物の運送量は、人口一人に就き千噸哩の平均にして、即ち一噸の貨物を千哩宛か又は千噸の貨物を一哩宛運送したる割合なるが、其の運賃は平均僅に二十圓に過ぎず、然るに若し之を馬背にて運送せんか、少くとも平均四百圓を要すべきが故に、其の運賃總額は、同年度に於ける米國の各種生產物の總價額にも超過するの計算と爲り、言ひ換ふれば、米國民が同年間に儲け得たる金額の凡てを提供するも猶ほ其の運賃を支辨し得ざることゝ爲るなり。こは歷史本に見へたる二十年前の舊話にして、且つ貨物の運送に關することのみなれど、此の一例を以てするも、如何に鐵道

の發明が交通の自由を增進したるかを知るに足るべし。

交通機關の進歩實に此の如くなるが故に、法制上既に職業の自由を得たる吾等は、更に此の交通機關の利用に依り、世界到る所に於て其の趣味ありとするの事業に就くを得るに至りしなり。而して見よ、彼の法制上の自由は、現に猶ほ益々擴張せられ、事實上の自由、又た愈々增進して實に底止する處なきを。即ち、吾黨の所謂經濟社會の理想は、又た此の方面に於て、着々として其の實現を急ぎつゝある也。

九

之を要するに、勞働を遊戲化すべしと云ふ吾黨の理想は、一方に於て職業の種類の增加あり、他方に於ては又た職業選擇の自由の增進あり、兩々相待つて、益々其の實現を容易ならしめつゝある也。經濟社會の一切の方面に於ける所有る進歩は、此の理想の實現を容易ならしむる點に於て、凡て皆な意義あること也。此の理想の實現を焼點として、凡て皆な之に集中されつゝある也。故に、經濟社會に於ける萬般の進化は、只だ此の理想を立つることに依つて凡て皆な釋然として了解するに足ると雖も、之に反し、人若し此の理想を立つるなからんか、事々物々益々非と爲り、世は愈々澆季に近づきつゝあるの感を抱かずんば非ざるべし。

蓋し前にも云へるが如く、分業の發達は經濟界の天則とも云ふべきものにて、事業の分割は殆ど底止する所なく、現に留針の製造の如きも七十二段乃至九十二段の分業に分れ居る次第なるが故に、假りに留針の製造に就いて云へば、一人の職工は一個の留針の七十二分の一乃至九十二分の一の仕事を分擔し居るに過ぎず。故に若し其の職工にして一生を留針の製造に從事したりとせんか、彼は日々一個の留針の七十二分の一乃至九十二分の一宛を製造しつゝ一生を終りたることとなる也。通常細きものゝ喩に針ほどのものと云へるが、其の針の七十二分の一乃至九十二分の一の仕事なれば、其の事業の微細なる蓋し驚くべきものならん。然るに其の極微の事業に一生を委ねて世を終ふること、

其の人の考へ様如何に依りては、實に耐へ難く忍び難きことならん。げに針程の事も爲し得ずして一年三百六十五日を暮し、一生五六十年の尊き生命を終ること、誠に心細くもあらん。主觀の一念如何に依りては、人生は益々詰らなく愈々無意味のものと爲り來ること、之に依りて思ひ知るべし。

加ふるに、分業の進歩は、其の當然の結果として、自足經濟の崩壞を促し市場の生産の發達を招く。自足經濟とは自ら耕し自ら織りて其の衣食を支ふるの經濟なり。市場生産とは自己勞作の結果を先づ他人に賣り之を貨幣に換ふるの生産法なり。一旦自己勞作の結果を他人に賣りて之を貨幣に換へ、然る後其の貨幣を以て自己の衣食を支ふ、之を交通經濟と云ふ。然るに社會の進歩するに伴ふて、自足經濟は益々崩壞し交通經濟は次第に之に進歩するに伴ふて、自足經濟は益々崩壞し交通經濟は次第に之に代はるに至れる也。即ち孤立的生産は益々社會的生産に變じつゝある也。

從て今の世は、此の如くにして次第に社會的生産の世と爲りつつあるが、今ま此の社會的生産の世に立つて、依然事業を手段として考へ、吾輩の云ふ如く事業自身を目的とすること無からんには、社會は益々働き甲斐の無き世と考へらるゝに至るべし。故何となれば、自足經濟の時代に在つては、自己勞作の結果が即ち自己消費の物資たり。身を入れて善き大根を作らば、其の善き大根は己が食膳に上り、骨を折りて丈夫なる木綿を織らば、其の丈夫なる木綿が家族の衣服と爲る。是れ即ち働き甲斐のある仕組と云ふべし。然るに今日の如き、交通經濟の世となりては、自己勞作の結果は凡て他人の欲望充足に使用せらるゝなり。例へば會社銀行員として如何に事業に身を入れ骨を折るも、畢竟は皆な他人の爲めなり。或は是が爲めに月給の増すこともあらんが、寧ろ然らざるの多かるべく、乃ち働き損の不平餅をするが常ならん。職業に對する不平、社會に對する怨恨は、遂に此の間に醸成せらる。然るに若し吾輩の理想とするが如く、一旦職業そのものを遊戯として營まんか、遊び過ぎたりとて偶々増給の恩惠

を受くるなど、面白くも亦た可笑しき世とは見へん。前に述べたる留針の例に就いて云ふも同じ事にて、其の職工は日々年々一生を通じて無數の留針を製造する次第なるが、而かも其の留針は皆な他人の使用する所と爲りて、自らの需要に充つるには非ず。既に仕事自身が極微の事なる上に、其の仕事が自分の爲めの用と爲るにも非ずとせば、之を遊戯として營まざる限り、詰らなく思はれ無意義に感ぜらるゝも亦た道理なりと云ふべし。

一〇

之を要するに、吾人は職業自身を目的と爲し、之を以て報酬を得る爲めの手段と爲すべからざる也。これ勞働を遊戯化し、人生を極樂世界とするの唯一方法なり。併乍、人各々特性あり、如何なる職業にも趣味を感じ之を以て娛樂遊戯と爲すは難し。故に吾人は自己が最も趣味ありと感ずるの職業を選んて之に從事すべき也。而して經濟社會の進歩は、此の勞働を遊戯化すてふ理想の實現をして益々容易ならめつゝあるなり。此の理想を實行せんとする者に取りては、社會進化の大勢は皆な樂觀に値す。之に反し、若し此の理想を立てざらんか、社會進化の傾向は皆な其の悲觀の種子たらざるは無し。是れ吾輩が、以上數項を費して論じ來りたる所にして、吾輩の言はんとする所は略ぼ其の要旨を盡したりと雖も、猶は進んで餘論二三項を加へ置かんとす。

職業を娛樂化し遊戯化せざる者は不平不滿を以て世を終へざるべからず、其の事の本人に取りて一大不幸たるは、吾輩の既に前項に述べたる所なるが、今ま進みて言はば、是れ啻に本人に取りて不幸たるのみならず、社會に對する罪惡とも云ふを得べし。

蓋し人間世第一に願ひ求むるは快樂にして、第一に厭ひ棄つるは苦痛なり。今ま遊戯は快樂たり、勞働は苦痛たり。然らば、職業を以て遊戯とする者が其の職業を樂むの結果之に全力を發揮し、職業を以て勞働とする者が其の職業を苦とするの結果之に全力を致すを得ざる、是れ自然の道理なり。前者は職業を遊戯とす

其の人の考へ様如何に依りては、實に耐へ難く忍び難きこととならん。げに針程の事も爲し得ずして一年三百六十五日を暮し、一生五六十年の尊き生命を終ること、誠に心細くもあらん。主觀の一念如何に依りては、人生は益々詰らなく愈々無意味のものと爲り來ること、之に依りて思ひ知るべし。

加ふるに、分業の進歩は、其の當然の結果として、自足經濟の崩壞を促し市場の生産の發達を招く。自足經濟とは自ら耕し自ら織りて其の衣食を支ふるの經濟なり。市場生産とは自己勞作の結果を先づ他人に賣り之を貨幣に換ふるの生産法なり。一旦自己勞作の結果を他人に賣りて之を貨幣に換へ、然る後其の貨幣を以て自己の衣食を支ふ、之を交通經濟と云ふ。然るに社會の進歩するに伴ふて、自足經濟は益々崩壞し交通經濟は次第に之に進歩するに伴ふて、自足經濟は益々崩壞し交通經濟は次第に之に代はるに至れる也。即ち孤立的生産は益々社會的生産に變じつゝある也。

扨て今の世は、此の如くにして次第に社會的生産の世と爲りつつあるが、今ま此の社會的生産の世に立つて、依然事業を手段として考へ、吾輩の云ふ如く事業自身を目的とすること無からんには、社會は益々働き甲斐の無き世と考へらるゝに至るべし。故何となれば、自足經濟の時代に在つては、自己勞作の結果が即ち自己消費の物資たり。身を入れて善き大根を作らば、其の善き大根は己が食膳に上り、骨を折りて丈夫なる木綿を織らば、其の丈夫なる木綿が家族の衣服と爲る。是れ即ち働き甲斐のある仕組と云ふべし。然るに今日の如き、交通經濟の世となりては、自己勞作の結果は凡て他人の欲望充足に使用せらるゝなり。例へば會社銀行員として如何に事業に身を入れ骨を折るも、畢竟は皆な他人の爲めなり。或は是が爲めに月給の増すこともあらんが、寧ろ然らざるの多かるべく、乃ち働き損の不平儲をするが常ならん。職業に對する不平、社會に對する怨恨は、遂に此の間に釀成せらる。然るに若し吾輩の理想とするが如く、一旦職業そのものを遊戲として營まんか、遊び過ぎたりとて偶々增給の恩惠

を受くるなど、面白くも亦た可笑しき世とは見へん。前に述べたる留針の例に就いて云ふも同じ事にて、其の職工は日々年々一生を通じて無數の留針を製造する次第なるが、而かも其の留針は皆な他人の使用する所と爲りて、自らの需要に充つるには非ず。既に仕事自身が極微の事なる上に、其の仕事が自分の爲めの用と爲るにも非ずとせば、之を遊戯として營まざる限り、詰らなく思はれ無意義に感ぜらるゝも亦た道理なりと云ふべし。

一〇

之を要するに、吾人は職業自身を目的と爲し、之を以て報酬を得る爲めの手段と爲すべからざる也。これ勞働を遊戯化し、人生を極樂世界とするの唯一方法なり。併乍、人各々特性あり、如何なる職業にも趣味を感じ之を以て娛樂遊戯と爲すは難し。故に吾人は自己が最も趣味ありと感ずるの職業を選んて之に從事すべき也。而して經濟社會の進歩は、此の勞働を遊戯化すてふ理想の實現をして益々容易ならめつゝあるなり。此の理想を實行せんとする者に取りては、社會進化の大勢は皆な樂觀に値す。之に反し、若し此の理想を立てざらんか、社會進化の傾向は皆な其の悲觀の種子たらざるは無し。是れ吾輩が、以上數項を費して論じ來りたる所にして、吾輩の言はんとする所は略ぼ其の要旨を盡したりと雖も、猶は進んて餘論二三項を加へ置かんとす。

職業を娛樂化し遊戯化せざる者は不平不滿を以て世を終へざるべからず、其の事の本人に取りて一大不幸たるは、吾輩の既に前項に述べたる所なるが、今ま進みて言はば、是れ啻に本人に取りて不幸たるのみならず、社會に對する罪惡とも云ふを得べし。

蓋し人間世第一に願ひ求むるは快樂にして、第一に厭ひ棄つるは苦痛なり。今ま遊戯は快樂たり、勞働は苦痛たり。然らば、職業を以て遊戯とする者が其の職業を樂むの結果之に全力を發揮し、職業を以て勞働とする者が其の職業を苦とするの結果之に全力を致すを得ざる、是れ自然の道理なり。前者は職業を遊戯とす

るが故に眞面目なり。此の言矛盾するが如くにして、理は毫も違はず。疑ふ者あらば、自己が遊戲の際に、如何に專心一意、所謂一生懸命と爲るかを反省し見よ之に反し職業を勞働とする者は、此の如く眞面目なる能はず、專心一意なる能はず、一生懸命と爲ることを得ず。然るに、其の職業に專心一意なることは、是れ道德の命ずる所なり。故に職業を遊戲化せざる者は、此の點に於て罪惡を犯しつゝある者と謂はざる可らず。吾輩は堅く此の如くに信ず。

孤立的生產の時代には經濟上職業なるものなし、社會的生產の世となつて始めて職業あり。而して此の職業なるものは、吾人が社會的生產の恩惠に報ゆる所以の唯一方便たり。

試に吾人が依りて以て其の生命を維持しつゝある食料に就いて考ふるに、穀物も他人の生產し與れたる物なり、肉類も他人の生產し與れたる物なり、醬油味噌の類に至る迄亦た多くは自己の生產したる物に非ず。更に衣服のことを思へ。更に住家什器のことを思へ。而して留針の事をも考へ見よ。要するに、口に食ふ物、身に纏ふ物、身邊に裝置する物、消費する物、使用する物、一として他人の勞作に成らざるはなく、更に進んで考ふれば、先きも云ふ如く、留針一本にさへ九十餘人の手數掛り居る譯なれば、吾身一つを養ひ吾身一つを保つに、幾千萬人の勞力を煩しつゝあるか、其の際限殆ど知るべからざるものあり。更に交通機關に就いて考ふるに、例へば東京九段阪の電車軌道の如き、一寸に就き七圓餘の工事費を要したりと云へるが、更に臺灣にて出來たる縱貫鐵道の難工事の場處の如きは、軌道一寸に就いて四十圓の工事費を要したる所もあり。これは僅に其の一例なれど、今日の鐵道と云ふものは、此の如き巨額の費用を要するものなり。然るに其の一寸何十圓と云ふ鐵道の上を、吾等が僅かの賃錢にて數里數十里を旅行し得るは、抑々何が故ぞと考へ見よ。これは全く社會の人々が、皆な一様に賃錢を出して鐵道會社の收入とするが爲めのみ。

之を要するに、今日吾人が文明の恩澤に浴して安樂

なる生活を送り得る所以のものは、全く人類協力の結果に外ならず。吾等偶々人に招かれて饗應を享けんには、有り難き事に思ひて御辭儀するが常なれど、人に招かれずとも、家庭に於て自己の食膳に上りつゝあるものは、其の實皆な他人の御馳走に成るもの也。此の如く、吾等の生活は全世界の人の恩惠に依つて維持されつゝあるものなれば、吾等も亦た其の全世界の人に向つて何等か報恩する所なかるべからず。今ま其の報恩の手段を職業と爲す。職業とは畢竟吾人が全世界の人に向つて報恩の意を致す爲めの方便に外ならず。吾等は全世界の人の恩惠を受けつゝあるが故に、其の恩に報ゐんが爲め、職業と云へる小さなる管に自己の勞力を注入して之を全世界の人に致すなり。例へば、先きに述べたる留針製造の職工の如き、其の仕事は如何にも微細の業なれども、而かも其の製造せる留針は、國内は勿論廣く諸外國にまで輸出されて、普く全世界の人の需要を充しつゝある也。アダム、スミスの記載せし所に依れば、此の留針の製造に於て分業を利用せず銘々に之が製造に從事せんには、一人一日の勞作僅に二十本を得るに過ぎざるが、若し之を十八段の分業に分ちて負擔せば、一人一日の勞作實に五千本を得るの平均と爲ると云へり。然るに今日は、前に述べたる如く、七十二段乃至九十二段の分業に分れ居ること故其の分業の效果として、一日一人の出來高平均實に百二十萬本を算す。されば、彼の職工の仕事たる、其の分擔する所のものは、留針製造の手續中僅に七十二分の一乃至九十二分の一に過ぎずと雖も、而かも平均一日百二十萬本の割合を以て、廣く全世界の人の爲めに留針の供給を爲しつゝある也。此の點に於て、其の仕事や微細なりと雖も、其の效果は廣く全人類の福利に及ぶものと知るべし。而して職業の眞義は實に茲に存する也。彼の職工の生活と雖も、全世界の人の協力の結果なり。故に彼は其の恩に報ゐんが爲めに、針の七十二分の一乃至九十二分の一の仕事に從事しつゝある也。是れ彼が全世界の人の恩を報ゐんが爲めに、自ら選びたるの事業なり。事微細なりと雖も、實は全世界

に係るの事業なり。此の如くにして、分業の發達に伴ひ、個人の事業は益々微細と爲ると同時に、又た益々宏大と爲る。そは兎もあれ、職業なるもの丶眞意義は上述の點に在り。故に吾人は、既に一定の事業を已が職業と定めたる上は、專心一意、其の全力を茲に注がざるべからず。若し然らざる輩あらば、是れ社會の恩を知らざる痴漢と謂ふべきのみ。而かも、吾輩の主張する所に反し、職業を手段と考へ、事業を勞働と感ずるの徒は、到底其の全力を茲に發揮する能はざるが故に、皆な此の種忘恩の痴漢たるを免れざる也。啻に自ら樂む能はざるの不幸に甘んずるのみならず、併せて社會の公德に反く者なり。

二

人各々特性あり、其の好む所に從ふて可なり。人の能力に大小あり、只だ其の全力を發揮すれば足れり。是れ以上を求めず。而かも其の業を樂み其の全力を發揮するは、是れ吾人の絕對の義務なり。

論、經濟論よりして既に道德論に入れり。請ふ吾輩をして更に思ふ所を述べしめよ。

夫れ今日は分業の時代なり。吾人の國家社會に盡すは必ず職業に於てせざる可らず、吾人の奉公は職業を離れて想像し得べからざるの時代なり。故に職業の倫理的解決は即ち人生の倫理的解決たるの時代なり。今日は職業の倫理的解決の上に立つ新倫理新道德を要するの時代なり。今日は封建の時代に非ず、個人的報恩の道德時代に非ず。今日は社會的生產の時代なり、故に社會的報恩の新道德を樹立すべきの時代なり。

今ま其の新道德の命ずる所を明記せば、曰く、吾人は職業を遊戲化して茲に自己天分の全力を發揮すべき也。言を奇にして言はば、游ぶは善也、働くは惡也。言太だ奇なれども、續々說き來つて今に於て此の言を下す、讀者の誤解を招くこと恐らくは是れ無からん。請ふ、更に言はんとする所を言はしめよ。吾輩の見る所に據れば、自己の欲する所を爲すは善也、自己の好まざる所に從ふは惡也。自己の好まざる所に從ふは、自己の全力を發揮せざるが爲めに第一の惡因と爲り、他人の

好む所の業を塞ぐが爲めに第二の惡因と爲る。

夫れ人は境遇の產物也。人は遺傳に依つて其の祖先の嘗て受けたる境遇の影響を相續し、更に生れ出でてより四圍の境遇の感化を蒙り、以て現在の特性を保有す。個人の特性は皆な境遇の附與する所なり。此の理、疑ふ人ありと雖も、新刑法既に之を認めて刑罰の裁量の基本と爲す。請ふ余が爲めに姑く此の理を是認せられよ。若し是認せらるゝならば、吾輩は更に進みて言はん。既に個々人の特性は境遇の產物なり。故に、我の學を好み、彼の書を好み、某々の商業を好み、某々の醫術を好む、皆な社會的乃至自然的境遇の結果に外ならざるが故に、其の境遇の結果に本き、各々其の特性を發揮して好む所に勇往猛進する、誰か之を非難するの權能あらん。個々人は只だ其の好む所に專從して可なり、否な其の好む所に專心せざるは惡なり。

固より人の特性には、之を客觀的に批評せば、高きあり低きあり大なるあり小なるあり。故に社會には、敎育の必要あり、宗敎の必要あり、法政の必要あり。高級敎化の制度を完備して人の特性を向上せしむる所なかるべからず。重ねて云ふ、人の特性は境遇の產物なり。故に經世敎化の任に當る者は、各種の方面より其の境遇を改善して人の特性を向上せしむるに努力す。吾輩は斷じて此の經世敎化の業を否認する者に非ず。否な、人は境遇の產物たるを信ずるが故を以て、何人にも優りて特に經世敎化の業を重視す。然れども、そは則ち社會の事なり。今ま姑く個々人を中心として言はんか、個々人は其の社會の賦與せし天性の命に從ふて、各々其の特性の全力を發揮し、凡て職業を遊戲と爲し、專心一意、以て社會人類の鴻恩に報ゆる所なかるべからず。

一二

論じて茲に來り、吾輩の魂計らずも二千四百年前に飛んで乃ち夫のプラトーンを想ふ。

プラトーンの住みたりし雅典の國家は、所謂都市國家なるものにて、今日の所謂民族國家と全く其の撰を異にする所のものなり。而かも是が爲めに、二千四百

年前に於て既に文化の燦然たるものありき。之を諸種の事情より推すに、プラトーンの時代に於ける希臘都市國家の事情は、其の發展の階段に於て、正に今の時代に於ける文明諸國の事情に似通ふ所頗る多きを覺ゆ。そは兎もあれ、吾輩が茲に主張する所の道德觀は即ちプラトーンの國家論の精神たる其の正義觀と根本の精神を同じうするもの也。言往々ソフイスト學派の暴論に似たるありと雖も、若し全篇を通讀するの忍耐を有せられし讀者ならば、恐らく此の點に於て誤解なからん。

想ひ見るに、プラトーンの出てたる時代は希臘諸都市の事情一變の時代なりき。而して今ま吾等の生を享くる明治の時代は亦た正に日本國家の國情一變の時代なり。其の昔希臘に於て自然科學の大に勃興せしは、明治維新以來、西洋物質の俄に輸入されしと相似、ペルシャ戰爭の大役は日清日露の戰役にも似通ひ、而して舊信仰舊道德舊習慣の大に權威を失墜して個人の自覺の勃興し來れる樣など、又た互に相似たる所あり。吾輩プラトーンの説を聽きて、時に案を拍つて快哉を叫ぶ所以のもの、夫れ恐らくは茲に在らん歟。

そは兎もあれ、今の時は個々人の意識自覺の發達し來れるの時代なり。然るに其の意識あり自覺ある所の個々人を捉へて、人格なく目的なき奴隷の如くに看做し、之を國家の道具と爲し社會の器具と爲さんとするが如き極端なるコレクチヴヰズム(團體主義)は、今日の主義に非ざる也。さればとて、個人以外に社會國家を認めず、各人本能の滿足を以て是れ足れりとする極端なるインヂヴヰヂユアリズム(個人主義)は、亦た等しく今日の主義に非ざる也。今日の主義は、團體主義と個人主義と、此の一見相容れざるの二主義を打つて一丸と爲し、極端なる矛盾の中に極端なる調和を得せしむるの新主義ならざるべからず。而して吾人は、飽くまでも個人の目的を認め、而かも其の目的を職業そのものに見出さしめ、職業それ自身を自己の目的と爲さしむることに依りて、個人の目的を認むると同時に社會の目的を認め、此の如くにして絕對の矛盾を遣

憾なく調和する所の新主義を實現するに足ると信ずる者なり。此の如くにして、個人は益々特化し、社會は益々統合せられ、而して茲に吾人は樂觀す。

三

勞働と遊戯との區別を誤解するの甚しき、斯く論じ來るも猶ほ疑を吾輩の言説に挾む者あらん。仍つて更に論ずべきことあり。

吾輩が勞働を遊戯化せよと云ふは、決して怠惰を奬勵するに非ず。否な却て其の滿身の全力を發揮せしめん爲めなり。此の事、前既に一言せしことありと雖も、重ねて茲に辨じ置かんとす。

今ま一例を科學の研究に取りて述べんに、吾輩は、吾國に於ける科學上の發明の古來曾て大に見るべきもののなきを以て、學者その研究を遊戯化せざるの罪に歸す。譬へば茲にニユートンあり、林檎の樹上より落下せしを見て、其の何が故なるに疑を抱き、之が研究に志せしとせんに、彼れ若し吾國に生を享けたらば、果して能く其の引力説を發明するに至りしや否や、吾輩大に疑なき能はず。何となれば、吾が國人は凡て科學の研究を手段視し、曾て其れ自身を目的とするの精神なければなり。故に假りにニユートンにして吾國に生れ、林檎の落下せし原因の研究に耽らんとせしとするも、世人はさる如き事を研究したればとて國家社會の爲めに何の用にかなるべき、と嘲笑して、所詮彼が志を遂げしむるの寛容に乏からん。邦人の思想に依れば、學問とは祿を得る爲めの手段か、然らざれば國家社會の隆盛を計るが爲めの手段なり。夫れ既に學と云ひ、眞理と云ふ。必ず人生社會の福利を增進すべき筈のもの也。故に學者は只だ眞理の爲めに眞理を追求して、安んずべきに、而かも多くは此の安んずべき所に安んぜず、必ず之を以て治國平天下の手段として意識せずんば止まざらんとす。此の如くにして、眞理の研究は凡て第二義に墮ち、勞働と爲つて娯樂と爲らず。既に學を樂むに至らず、如何で宇宙自然の玄微を闡くに至らん。大發見なく大發明なき、蓋し怪むを要せざる也。

吾輩學界に籍を置くの身、常に之を以て遺憾と爲し、

機會あらば則ち其の論を爲す。持論今ま復た玆に發せる也。而して吾輩は此の論を爲す毎に、必ず常に故綱島梁川氏の文を想ふ。其の文、題して學者の實利的應用的精神を排すと云ふ。請ふ吾輩をして其の美文の一節を玆に引用して、吾輩の論を補充する所あらしめよ。「眞理を知るといふ、未だ至らず、眞理は味ふべきもの也。美術家が其の作品を撫摩百態して、之を愛惜の塊と育つる如く、學者は眞理に渇仰し、沈潜し、涵泳し、優游し、反覆して、直ちに眞理其のものを、入る息、出る息とするほどの概なかるべからず。この一段親切の工夫ありて、學者は始めてよく天地人生の幽玄の一境に分け入るを得べく、名教の樂地未だ尚ふる者なかるべきなり」。又曰く「それ如何なる超絶哲學も、ついに人生と渉らざるはなし。……若し遑々として利用に急ぐの徒、この事に從はんか、眞理は淺薄となり、應用亦盡くさざるべく、兩つながら併せて之れを失ふに至るべし。プラートン、ヘーゲルの思想は應用功利の畑に根をおろさざるなり」と。善い哉言。而して吾輩は、又た同じ論を道德に應用す。

一四

昔は孔子いふ、「之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を樂む者に如かず」と。又いふ、「疏食を食ひ水を飲み肱を曲げて之を枕とするも樂亦た其の中に在り」と。又いふ、「賢を賢として色に易へよ」と。果然、孔夫子も亦た道を色に更へたるの人なり、道德を娛樂としたる人なり。

道德を手段とする者、之を功利的道德と云ふ。功利的道德は勞働なり。勞働は苦痛なり。苦痛は人間世第一に厭ひ棄つべきもの也。厭ひ棄つるの心を以て强いて之を行ふ、故に之を僞善と云ふ。而して僞善は則ち至善に非ざる也。

永平禪師嘗て修道者の用心を說いていふ、「夫れ佛法修行の者は尙ほ自身の爲めにせず、况や名聞利養の爲めに之を修せん乎、但だ佛法の爲めに之を修す可き也。諸佛慈悲、衆生を哀愍して自身の爲めにせず、他人の爲めにせず、唯だ佛法の常也。見ずや、小虫畜類、其

の子を養育することを。身心艱難、經營し苦辛して畢竟は長養すれども、父母に於て終に益なし。然も子を念ふの慈悲、小物すら尙ほ然り。自ら諸佛の衆生を念ふに似たり。……行者は自身の爲めに佛法を修すと念ふ可らず　名利の爲めに佛法を修す可らず、果報を得んが爲めに佛法を修す可らず、靈驗を得んが爲めに佛法を修す可らず、但だ佛法の爲めに佛法を修す、乃ち是れ道なり」と。故に吾輩はいふ、職業の爲めに職業に從ふ、是れ即ち道なりと。

一五

上來項を重ぬる十四、將に筆を擱かんとするに臨みて更に一事の論ずべきことあり。蓋し吾輩先きに人は只だ其の好む所に從ふて可なりと云へり。而して此の一語、既に道德違反の行爲に從ふを否定すと雖も、猶ほ誤解を避くるが爲めに、一言其の理由を辯明し置かざる可らず。

言ふ迄も無く、吾人の行爲は勞働と遊戲との二者に截然相分るゝには非ず。例へば夫の竊盜の如き、吾輩を以て見れば、半ば是れ遊戲なり。彼等豈に錢を得るの手段としてのみ盜賊の業に從はんや。夫れ盜賊の業たる、甚しきは一命を賭し、然らざるも辛苦經營、之を爲す決して容易の業に非ず。若し錢を得るのみが其の唯一の目的ならば、彼等何すれぞ必ずしも此の業を選ばんや。只だ人目を忍び法網を避け以て人の財物を掠む、其の趣味譬へば紳士の狩獵に於ける如きものあるならん。畢竟盜賊も亦た趣味の人たるなり。然らば、若し盜賊にして愈々其の趣味を養成し遂に全く之を以て遊戲と爲すに至らば如何、是れ亦た其の好む所に從ふのみ、敢て不可なしと謂ふて可なるやと云ふに、吾人は之に答へて、曰く然りと云ひ、次いで又た然らずと云ふ。何が故に然りと答ふる乎。曰く吾輩の見る所に據れば、純乎たる遊戲は皆な善なれば也。然らば、何が故に次いで然らずと云はんとする乎。曰く、吾輩の見る所に據れば、竊盜の如きは決して純乎たる遊戲と爲るを得ざるものなればなり。古語にいふ、『天命之を性と云ひ、性に率ふ之を道と云ふ』と。又いふ、『道は

須臾も離る可らず、離る可くんば道に非ず」と。今ま盜賊は客觀道德の見て以て人生の惡業とする所なり。故に縱ひ夫の盜賊にして、其の趣味を養ふて遂に之か極に達し、全く竊盜自身を以て其の目的と爲し、從ふて其の行爲の刹那に於ては何等慾望不滿の苦痛なきに近きことを得たりとするも、而かも道心不滿の苦痛は之を意識せざらんと欲するも能はず。此の意味に於て、かの竊盜は遂に純乎たる遊戲と爲るの可能性なきもの也。是の故に、吾輩の遊戲化を主眼とする職業道德論は、始めてよりして、此の如き客觀道德の認めて以て惡業と爲す一切の職業を否認するもの也。

孔子いふ『吾れ七十にして心の欲する所に從ふて矩を踰へず』と。道德の極致は矩を踰ゆるなうして心の欲する所を恣まにするに在り。既に心の欲する所を恣まにす、之を天下無上至樂の境と爲す。而して人生の理想は畢竟諸苦を脱して是の至樂を得るに在り。一切の勞働より蟬脱して只だ此の遊戲三昧に優游するに在らんのみ矣。（二月五日稿）

昨今の政局

福本日南

我政治社會の打壞は今日に初まらぬ。今更ら之を見て驚くこともない。さりながら昨今に至ては餘りに甚しい。之に對して殆ど言ふ事を知らぬのてある。第一には政友會を御覽なさい。彼二百の議員を議院内に擁して一黨を以て優に過半數を占め、申さば諸黨の間に龍蟠虎嘯してゐるのてある。今日の場合に於て彼若し政府に反對するとせば政府の計畫は衆議院に於て皆打壞されるのてある。從て彼派にして今少し氣慨があ

り、今少し抱負があつたなら、自ら首を屈して政府の奴隷にならなくても、政府をして手を揉み頭を下げて同意を求めしむることが出來るのである。然るに昨今の體たらくはどうであるか。戰時增徵稅を合した地租に對して僅かに其一分減を求めながら、それすら、自家の意志を遂せず、さればとて達し得ないで退いて來たときには天下に對して面目がない、其結果として八厘減とは何事ぞ。八厘減を以て僅にお茶を濁して來た此等の方式は得て市中の小さい商店にある。一反の反物が十圓といへばちよいと高過るやうに聞えるので、九圓五十錢、甚しきに至ると九圓九十五錢などいふ札を附けて居る。之と一般である。我々にいはせると斯うする位ならもう一厘減じて七厘として七厘の中に此案をほうり込んで燒いて了ひたい位のものである。堂々たる二百の代議士を率ゐて政府に肉薄して贏ち得たりといふ其代物は八厘とは眞に情けないぢやないか。同派の諸首領が代る〳〵議會の演壇に立て辯疏せらるゝ處を承れば政府は之てもなか〳〵同意せなかつたのである。それをやつとの事に八厘まで負けて貰つたのであるといつて、之を以て、鬼の首でも取つたやうに誇られた。左樣にお情けに預らなくても諸公にして今少し姿勢を正して頭を上げて國民の代表者たる意氣を政府に吹かけて御覽なさい。相手は商人の桂侯でないか、こいつは所詮いけないと見ればお客を呼び止めて、アヽ負けました〳〵。一分にても、場合によつたら一分何厘かまでは負けるのである。そいつを負けさせ切らんといふのは口實は澤山あらう。辯疏は澤山あらう。けれども御自分で御自分に問うて見られたなら、餘り强がつてゐたら桂でもひよいとしたら解散を喰はせるんでなからうかといふ臆病風が身體の皮膚をゾク〳〵さしたからの事でなからうか。さうでないといはれるなら、それでもよい。自ら己れに問うて御覽なさい、腹のどん底の蟲が、ウンさうだよといふに違ひない。こんな意氣地のない大政黨が何れの國にあるであらうか。呆れて物が言ひないのである。

それから他の一方の純民黨と稱する連中である。我

々も其一小分子であるから、我々がいつたといふたら、仲間に差支るかも知れないが眞實であるから言はないては居られない。民黨の諸君は一體何をする考てあらう。官局主義（ビユーロクラシズム）と戰つて純粹の責任内閣を打立てたいといふのが主眼ぢやないか。諸君に聞いて見れば皆さういふ。それならそれの手段がありさうなものぢやないか。議院政治は頭數政治の謂て御座んせう。然らば成丈け多く同志の士が相提携して其集團の力を以て政府者に當るより外に道はないのてないか。然るに諸君と手を携へて敵に肉薄しようぢやないかと相談すると、其刻下に顧みて他を言ひ出す。いや何とか彼とか様々な理屈を言ひ出す。時機が尙早いとか、まだ充分に意志が疏通しないとか、種々雜多ないひまへを拵へて合しようとしないのが昨今の現狀てある。何が時機が早いのか、如何なる意思が疏通しないのか。官僚政治を打破しようといふのに諸君は誰も異議は御坐るまい。眞正の責任内閣を打建てようといふのに誰も異議は御坐るまい。已に之に異議がない以上は何處に時期の早晩がある、何處に意志の不疏通がある。分り切つた話てある。但し斯の如き分り切つた事理に對して斯の如く逡巡顧望する所を見れば、失禮ながら理論ぢやない諸君の程度が時機尙早しといはしむるのかも知れない。之を戰史に譬ふれば諸君は尙中世の散戰時代の人物らしくあるまいか。十騎か廿騎かを引連れて、遠からんものは音にも聞け近くば寄て眼にも見よ、我こそは士の黨の旗頭熊谷次郎直實なるぞと長銘打つて戰つた豪傑原に似たらずや。如何にも其人の臂勢は三人張りに十五束、三伏せの矢も引くてあらう。力は十人力を兼ねて金天棒を振るてあらう。が我々は無學にして未だ熊谷次郎直實が天下を取つた事も聞かなければ、惡七兵衞景清が海内を統一したといふ話も聞かない。要するに今の民黨の豪傑連は熊谷次郎直實、惡七兵衞景淸の手合ぢやないか。そんな事て何て政府に當れる者か、此點から見れば優柔不斷ながらも尙政友會を智なりとする。時代は確か廿世紀といふぢやないか、散戰時代を後に送り、封建時代を過去にして戰爭は國民皆

兵の時代でないか。戰爭に於て熊谷次郎、平山武者所の名乘を許さゞるが如く國政も國民を以て動さうといふ時代ぢやないか。それなら今少し政治上に於けるインヂヴイズアリズムを退けて自己の哀れな貧しい小さな名譽を退けて、我黨を以て天下を取り我主義を以て國政の上に加へるといふ方面に今少し力を用ゐて見たいものである。若し此方面から先きのインヂヴイズアリズムを顧みたならば少し可笑しくはあるまいか。

笑しいと氣が附いたら小異を捨てゝ大同に合しやうぢやないか。但し大同俱樂部に合するのではないぞ。主義の大同に合しやうぢやないか。まア政府と戰ふといふなら淵に臨んで魚を羨まんよりも、退いて網を結ぶに若かずだ。我々は左樣考へる。それで昨今議會に於ける小役者の小アクトなどは可笑しくて堪らない。まア當分默つて見物しませうよ。

唯一の對韓政策

京城セウルプレス主筆　山縣五十雄

一

日本は韓國に對し如何なる政策を執るべきかは、目下世人が最も注目して居る問題の一つである。一進會の合邦提義は其意義頗る漠然たるもので殆ど耳を傾くる價値が無い、輿論が冷笑を以て之を迎へたのは當然である、これに續いて一派の論客の間に起つた合併論は如何にも壯快で俗耳に入り易く、從て世人は多大の興味を以て其如何に發展するかに注意して居るやう

である、余とても徹頭徹尾此意見に反對する者ではない、若しも此政策の實行が日韓兩國民の幸福を增進し、東洋平和の基礎を强固にする所以なる事を明かに且つ具體的に示されるならば、余は直に之を贊成せんとする者あるて

然し余は之に贊成する前に合併論の主張者に質したいと思ふ二三の問題がある、第一は、若しも我國が今日に於て合併を斷行するならば世界の列國は如何に我國の行動を見るべきやといふ問題である、日露戰爭以來世界の列國が事毎に我國の行動を猜忌と嫉妬とを以て視て、よき機會あらば此『東洋の成上り者』の得意の鼻柱を打拉ぎくれんと待ちかまへて居ることは否むべからざる事實である、實際今や我國は最も愼重なる態度を以て事に當るべき秋である、此時に當りて世界の視聽を驚かすべき韓國合併を斷行することは果して我國の利益であるであらうか、我國は既に事實に於て韓國を合併して居るではないか、名の如きは尙ぶに足らず、尙ぶに足らざる名を得んが爲めに敢て危險なる位置に立たんとすることは賢者の爲すべき業ではあるまい。

假りに世界の列國が何等の非難を我國の韓國合併に對して加へず、何等外交上の困難が起らずとするも、我國は合併を斷行して果して何等の利益を得んとするか、これが爲めに我國が韓國に於て費しつゝある莫大の金額を更に二倍し三倍せざるべからざる事にはならずや、韓人が我國に對する不安と不滿の念を一層昂進せしめて、暴徒の勢力を增し、我移住民の生命財產を危くし、我駐在軍隊憲兵警官等の增員を餘儀なくせしむることはなきか、日韓兩國の貿易上に不利なる結果を來すことは無きか、或は又兩國の對外貿易に面白からざる影響を受くること無きか、此等の疑問は我國が韓國合併を斷行する前に深く博く研究せざるべからざる問題である、

合併は口の上紙の上では壯快に響く主張である、然し精密なる利害の打算に據らざる議論は如何に豪快でも畢竟書生の空論に過ぎずして、二十世紀の今日に於

ては一利なき無益の言論である、思ふに合併論者は前述の疑問につき精密なる具體的の答案を有し居らるゝあらん、幸に之を聞くの愉快を與へられんことを。

二

余は敢て言ふ、我國の執るべき對韓政策は唯一あるのみ、その政策は如何、一言にして之を掩はゞ韓人をして我國に同化せしむることこれ、

此政策こそは伊藤公の劃せるものにして統監府の據りて立つ所の根本的主義であると余は信じて居る。然らば此政策は成功しつゝあるか、余は敢て答ふ、然りと、獨り悲むは此政策の成功に近つく進捗が余の希望する程に速かならざる事である、經國の事業は百年の大業、統監府設置されて僅に四年に過ぎざる今日に於て多大の成功をこれに期待するは無理であるかも知れぬ、且つ實際に於て統監府の事業はあらゆる方面に向ひ着々進歩の實を擧げて居る、産業の興進に於ても、教育の普及に於ても、交通便利の增加に於ても、在留外人の我國に對する思想と態度の變化に於ても悉く好き効果を收めつゝあるのである、然も猶ほ最も大切最も必要の事項に於て一つ統監府の成功いまだ甚だ微々なりと思はるゝ事がある、そは何ぞ、答へて曰く韓人の我國に對する思想と態度とが改善せざる事、即ちこれである。

見よ、暴徒は鎭壓せられたるも韓國人一般の心の中に我國と我國人とに對して存在する不安不滿の念は除かれたるや、謂ふ所の排日思想は彼等之を口に發せず行に現はさずと雖も、只に減退せざるのみか寧ろ增長しつゝある患なきか、然も此排日思想が守舊頑冥の徒よりも寧ろ新教育を受け比較的文明の光に浴したる韓國青年の間により多く存在するは何故ぞ。

余は統監府が孜々として此思想の除去を努むるにも係はらず、事態斯の如くなるは其責主として韓國在留の日本人に在りと斷言する、かく言はゞ在留の日本人は一齊に立ちて余を以て統監府を擁護し彼等を侮辱する者なりとして憤らん、然し余は根據なき非難を彼等に加ふるに非らず、鐵拳を余の頭上に下さんとする

前に請ふ暫く忍んで余の說く所を聞け。

伊藤公がハルビンに於て韓國兇徒の手に斃れたる時に當り、米國ハーヴアード大學のラッド博士は此大悲劇に關する一文を『セウル、プレス』に寄せられた、ラッド博士は何人も知る如く我國及び我國人の最良友人の一人て、其我國に對する意見は寧ろ極端なりと思はるゝ程我國に對し好意あるものである、此日本最負の人にして猶ほハルビン慘劇の最大責任を韓國在留の日本人に歸したのてある、博士は韓人は元より在留の外國人、其他總て韓國近世の事態に關係したる者悉く其責任を頒つべき所以を論じたる後、特に力を其銳利なる筆に入れて述べて曰く

『余は茲に韓國近世の事態に何等かの途を以て關係し多少の影響をこれに及ぼしたる日本人に其職業の何たるを問はず其階級の上下に論なく、告げて曰はんと欲す、願はくは深く慰ろに自ら省みてハルビン事件につき責任無きや否やを調べ見られよと、韓國在留の日本人にして韓人を欺きて自ら利し或は正しからざる途を以て韓人を遇し、若くは彼等を虐待せし者はいづれか此責任を免るべき、伊藤公は日韓兩國民の間に平和にして親密なる關係を生ぜしむるを以て理想とし、之が爲めに努力し勵精し遂に之が爲めに其生命を獻げたのである、韓國在留の日本人にして、各自得る所の機會に從ひ其力最相當に伊藤公と協力して公の志望の遂行に盡さゞりし者は悉く責任を頒たねばならぬ』

何人かラッド博士の此苦言に對し『否』と答ふるを得るや、安重根が伊藤公を斃したるは個人たる伊藤公一人に對して怨を報ひたるに非ず、韓人を苦めたる日本人全體の代表者と認めて行ひたるのてある、余は之を聞く、韓半島に於て所謂成功を得たる日本人中には無智の韓人を欺きて其土地を奪ひ其財產を取りて富を爲した者もある、或は又法外なる高利を以て韓人に金を貸しつけ莫大の利益を得た者もある、其他或は韓人の弱く賴無きにつけこみ戰勝國民の勢を以て、虎の威を借る狐の如く、彼等を虐待した者もある、韓人の妻女を凌辱した者もある、彼等の家より彼等を追ひ、彼等の墳墓の地を占領した者もある、事斯の如く重大ならざるも我國人にして韓人を輕蔑し、暴行若くは侮辱を彼等に加ふる者は余が日常京城の街上に於て見る所てある、韓人如何に意氣地なしとするも、此等すべての非行に對し我國人を怨まざるべき、假りに主客地を變

へて韓人が我日本内地に入り込み、從來日本人が此國に於て爲し來りし如き非行を日本人に向ひて行ひたりと想像せよ、日本人たる者一日たりともよく之を忍び得るや、身を抓りて人の痛さを知れ、必ずや千百の安重根が我國人の間に現はるゝならん。

伊藤公の死は春秋の筆法を以て言はゞ日本人の兇手に因ると言はねばならぬ、去年十月二十六日ハルピン停車場に於ける銃聲は韓人の我國人に對する重なる怨恨の爆發したもので、煙の裡に敢なく絶息したる伊藤公は韓人を苦めたる總ての日本人に代りて死んだのである、昔はナザレスの基督十字架上に上りて人類の罪を贖ひたりとかや、願はくは伊藤公の死をして惡しき在留日本人の罪を贖はしめよ。

三

我國人の一大通弊は今更に新説らしく言ふにはあらねど餘りに官憲に依頼し過ぎる事である、政府萬能を信ずる事である、韓國に於ける我國人の發展思はしからざれば世の論者は一に其責を統監府に歸し、其施設宜しからざるに因ると説く、日韓兩國民の關係融和せざればこれ亦悉く責を統監府に歸して其政策の誤れるに基くと言ふ、何ぞ知らん、日本人の發展盛ならざるは自己の無力を自白し、韓人との交情冷かなるは自己の彼等に對する態度宜しからざるを自認するに等しき事を、統監府の役人は全智全能の神に非ず、やはり我等と同じ人間である、其爲し得る所に限界あるは言ふ迄もない、在留の日本人たる者自ら努力せず自ら奮勵せずして發展の成難きを言ふは無理ならずや、假盲人の如く手引きなしには歩く能はずといへばそれ迄なれど、一々統監府の指導を待ちて發展を遂げんと思ふは誤つてゐる、眞に力ある人ならば獨力自營して、よし統監府が反對の政策を執るとも、成功するであらう、彼の英人を見ずや、彼等は政策を待たずして盛に新殖民地に於て發展した、印度に於ても濠洲に於ても、はた南阿に於ても彼等が世界に前例なき大殖民地を起こしたのは彼等自身の力に依る、彼等開拓して後政府が殖民政策を行ふたので、政府が殖民政策を行ひて後彼

等が發展したのではない、我日本人は果して英人に如かざるか。

四

特に余が在留日本人諸君に希望するは韓人との關係を改善するが爲めに伊藤公の遺志を繼ぎて彼等を同化するに努められたき事である、如何にして彼等を同化し得べきか之を爲すに他に途はない、彼等を遇するに同情と深切とを以てし、誠實に彼等を敎導し、日本人が此國に來たのは畢竟日本人自身の爲めのみにあらずして、遂に韓人の利益となるべきことを悟らしむるに在る、恰も親が其子を愛する如く兄が其弟を導く如く、友人が友人に對する如く、同情と愛とを以て彼等に臨まば、彼等如何に頑冥なりとも遂に我が德に化せられざるべき、若し我々日本人が今日迄に韓人に對して執りたる態度を續け、彼等を虐待し、輕蔑し、出來得る限り彼等を欺き、出來得る限り彼等の財産を絞り取ることを改めざるに於ては、よしや統監府が如何なる善政を施こさんとするも遂に何等の効果を奏することなく、日韓兩國民は犬猿啻ならざる今日の悲むべき關係を繼續するであらう。

我國人若し韓國統治の事業を以て一に統監府の任務なりと思はゞそは大なる誤りである、韓國の統治は他人の事ではない、我等の事であゝ、統監府の任務なると共に在留日本人一般の任務である、庶幾くば共に力を協せて我國の光明正大なる對韓政策を成就せしめん哉。

或は言はん、爾が說く所は畢竟腐儒の議論である、今日に於て行はるべきものではない、殊に奸智に長け詐りに富みたる韓人に對して行はるべきものではないと。

余が去年三月の末京城に來るや最も初めに余の耳に入りしは韓人に對する惡罵の聲であつた、曰く詐りは彼等の常習である、怠惰は彼等の第二の天性である、不正直で恩を知らず、愛すればつけ上り、叱れば怨む、度し難きは此ヨボ國民であると、余は茲に一年を暮した、其間此種の韓人觀を聞くこと再三、余は果して同樣

に韓人を見るや否や。

余は二三の友人を韓人紳士の間に有つてゐる、中にも業務局長尹致具及び漢城府尹張憲植の二君は二君が東京に遊學せられた頃よりの舊友で、交を續くること既に十年の久しきに及んで居る、此久しき交際に於て余は友人として二君に何等不滿を感じたことが無いのみか、其情誼の厚さに常に感じて居るのである、余は友人を英米人の間にも有し、清國人印度人非律賓人希臘人にも有して居る、尹張二君の余に對する情誼は之を他の何國人に比ぶるも少しも劣る所はない、嘗て欺かれたることなく、嘗て利用せられたこともない、況んや忘恩をや、余が東京に於て少しく兩君に對して示したる同情を兩君は毫も忘るゝことなく、余が此地に來るや先づ兩手を開きて歡迎しくれられたるは兩君であつた、余は尊敬すべき紳士として兩君を視る他はない、兩君の如きは蓋し韓國紳士の尤なる者であらう、然し兩君の如き好紳士を有する事は韓國の上流が必ずしも世人の考ふる如く極端に腐敗して居らぬことを證するものであると思ふ。

余はセウル、プレス社に於て五六の韓人を使用して居る、彼等は常に從順で誠實で且つ勤勉である、余はいまだ一度も彼等に失望を感じたことはない、韓人が怠惰で不正直であるとの判斷は彼等に於て證據を立てることが出來ない。

余が家に常に出入する一人の賤しき韓人の物賣りがある、余は彼が蓬頭垢面にして殆ど乞食に等しき風態なるにも係はらず、立派なる人間として心窃に尊敬して居る、彼は物を賣るに決して懸値をいはぬ、よき物はよしといひ惡しきものは惡しといふ、嘗て鷄卵を買ひ入る資金として大枚一圓を貸し給はれと乞はれたことがあつた、余は彼の姓名も知らず住所も知らざること故捨つる心にて之を與へた、豈に圖らんや彼れは約束の期日に之を返濟した、斯の如きこと再三、彼れは一度たりとも約に背きたることは無い、下賤なる者にして彼の如く正直なる者は日本人中にも余が多く見ざる所である、彼れは余に感恩の情を示す爲めか、時々

一束の草花、二三の果實其他子供の喜びさうな瑣細なる物を持つて來てくれる、余は其心の優しきを愛てゝ常に多大の感謝を以て之を受けて居るのである。

遠からぬ前のこと、余は此姓名も住所も知らざる韓國の賤夫に貴き敎訓を示された、余は一の朝鮮簞笥を買はんことを欲して、彼れに古物店に於て之を探がし來るべきことを命じた、彼れは喜びて出て行きしがやがて歸り來りて告げて曰く『好箇のもの見當りぬ、價三圓五十錢なりといふ、値切らば多少減價すべし』と、余は三圓五十錢を彼に托した、暫くして彼はいと重き簞笥を背負ひて汗水垂らして歸り來り、告げて曰く『二圓九十錢に負けさしました』と、余は彼れの買ひ來れる品物に滿足し、其勞を犒ひて、餘れる六十錢を彼れに與へんと言つた、喜んで之を受くべしと思ひきや、彼れは固辭して受けない、曰く『六十錢は多過ぎる、ウッこれは三時間かゝりたれば二十錢にてチョッソよろしいよ』と、余は意外に驚きてよしや三圓五十錢にて買ひ來るとも相當の勞銀を與へやうと思つてゐた、六十錢を減價せしめしは彼れが働きなれば彼れが之を受くるは當然であると言ひ聞かしたけれど、彼れ頑として之を聞かず、胸を叩きて『ウリ心が許さぬ』と言ひ張り二十錢を懷にして欣然として立ち去つた、余は彼れの後影を見送りて心の中に頭を下げたのである。

嗚呼、利の爲めには親兄弟をも陷る者ある今日の世に、犬猫の如く輕蔑せらるゝ韓國の賤夫の間に斯の如き正直なる君子がゐる、誰かいふ韓人は不正直なりと我れ愛を以て彼れを遇すれば彼れ亦愛を以て我に應ふ、日韓國土は異なれど、人情は一つである、韓人をさして譎詐多しといふ者は請ふ三省して彼等に對する爾が心的狀態を思へ。

五

『國書解題』の著者として有名なる佐村八郎氏、去年の夏韓國に遊びて其觀察されたる所を筆に現はし、近く『渡韓のすゝめ』なる一書を公にされた、其うちに說かれたる意見は一々余の贊成する所であるが、中にも『不心得の移住者』及び『眞の成功者』なる題の下

に述べられた數節は在韓の日本人が深く味ふべき名文である、余は茲に之を轉載せざるを得ぬ。

『…是れ迄の移住者には隨分如何しいものが多い、一般韓人を目して或は比律賓土人のやうに、或は臺灣生蕃のやうに或は北海道アイヌのやうに思つたり、或は又戰敗國民のやうに思つたりして、動もすると彼の良民を威壓して自ら暴利を占有せんとする者、彼の傲慢無禮徒に侮辱を加へて得々たる者に至つては方にこれ吾が聖天子の逆臣、吾人の斷じて蹌すべきものでない

余が目擊したことにも韓人車夫が客を得て將に乘せんとしてる處へ、急に横合から日本人車夫が出て來て彼れを押除け、有無を言はせず其客を奪つたのがあつた

又汽車の中て先に入つて席に安座してる韓人の處へ後から入つて來た日本の丁稚體の男が叱咤して其席を去らせ自ら知らぬ顏て坐つたのもあつた

その他市中疾走の日本車夫が意氣揚々途上の韓人を怒號して常に自ら其中央を走る樣つたら丸て話にならない、晏子の御者も裸足て駈けるほどである、不心得の甚しいものと言はなければならない、官民の心ある人々は此徒の一大横暴を惡んで彼の醜業婦の跋扈と共に憤慨して止まないのである

一つ新現象として余が見たのは余が京城大和町三丁目を通る時、日本人同士の喧嘩を見た、喧嘩てはない、一人の仕事師らしい男が頻りに車夫體の男を擲り付けて居るのである「いくらヨボが賣つてるんだつて只て食ふなんて太い奴だ、貴樣のやうな奴は擲り殺してもよい」つて擲つて居る、其中に仲裁する者もあつて擲るのは止めたが能く聞いて見ると其邊て韓人が賣つてる燒栗を其處に居た車夫が買つて食べた、食べるは食べたが錢がないので拂はないて逃げやうとした、それを一人の男が憤慨して懲しめたのである、擲ると云ふことは勿論よいことてはないが、併し其男の俠氣は愛すべしと思ふた』

由來日本人は義俠の國民として知られて居る、弱を助け強きを挫ぐは日本男子の特色として自らも誇り、他も許してゐる所てある、然るに在韓日本人の一部の者は弱き韓人を虐めて得意て居る、眞に日本人の面汚してある、かゝる非日本人に對しては相當の社會的制裁を加ふべきである。

余は更に佐川氏の文を左に轉載する

『事業の上に成産の上に偉大の成功をして巨萬の富を得たものも少くないが、茲には寧しろそんな成功者には出來ない美しい美しいやうな成功者、即ち余が謂はゆる眞の成功者を紹介して見やう

福井縣鯖江の人て韓國某地方に住し、自ら創めて養蠶業に從事してる者てあるが、其始めは矢張り傲慢の態度て以て韓人に接したが、幾何もなく其不可なる事を悟つて溫和親切一に彼等と親交するを主義として交際ふことにした、すると村民の信賴も非常に厚くなつて今は村中第一の長者として尊敬せられてゐる、去る明治四十年其地方に暴徒の起つた時主人は軍隊通譯に雇はれて釜山に居たが、不幸にして其留守を襲はれた、唐突のことて妻は慘殺の不幸に遇つたが一子だけは韓人の保護の下に簞笥の中に隱されて危き一命を助かつた近來他

へ移轉を誘はれることもあるが同地は妻の紀念の地でもありまた現に得意の地であるから去る心もないと本人直接に俵學部次官に語つたと聞いた

忠清北道清州に小坂田茂平といふ人がある、夫婦と子との一家であるが其附近幾里の間には一人の本邦人も居ない、獨り受酒屋を業とし兼ねて人の小作料取立をして居る、もと無一物で來て數年を出ない今日既に五千圓の貯蓄さへした、同人は韓語にも通じて自家の業務に勤勉で而かも至つて村民に厚く隣保の情親切至らぬこともない、村に病人があると家人同樣に行つて看護してやる、だから自分が病む時などは村中の韓人代る代る來て皆自分の同胞のやうに介抱して與れる、嘗て馬賊の爲めに襲はれた時には村民擧つて來て保護した、昨春皇帝巡遊の途次其地駐蹕飲馬の場となつた、村民は驚き喜んでこれは全く昔人小坂田氏が茲に居る爲めてある願はくは「永世不忘碑」を立てゝ小坂田氏の德を傳へようと言て出した、小坂田氏はいやとよ決してそんなことではない、陛下巡遊の紀念碑をこそ建てめと勸告して今は其の碑の建築最中だといふ、余が島田醫視から聞いた談である」

若しも在韓の日本人の多くが此小坂田氏の如き人てあつたならば日韓兩國民は今や兄弟の如き關係となり、暴徒も起らず排日派も生ぜずして、統監政治は頗る圓滑に行はれ充分なる效果を奏するてあらう。

（京城、セウル、プレス社に於て）

政治上の三位一體

林毅陸

（一）

立憲政治は三位一體の政治である。一般人民と議院と政府（又は内閣）と、三位三座を有しつゝ、然も合して一體の實を備ゆるは、即ち立憲政治の理想である。

北米合衆國の如きは、立法行政及司法の三權の分立を憲法上に明定し、立法府と行政府即ち議院と内閣と合體するとが出來ぬ樣になつて居るけれども、是は寧ろ特種の例である。米國は議院を有するも所謂議院政治

の制度を採用せず、内閣は議院の投票に依つて左右せらるゝ事になつて居らぬけれども、是は立憲政治の普通の方式では無い。其の代り米國では大統領が人民に依つて選擧せられ、此方で人民と政府との聯絡を結ぶ事になつて居る。

兎に角立憲政治の普通の方式に於ては、議院政治の方法を用ゐ、中間の聯絡者たる議院は下人民と結ぶと同時に上政府と合し、以て三位一體の實を擧げ、以て上下の和協又は治者と被治者との調和を圖るとが肝要である。而して我國は米國流政治組織を採用せざる以上英佛に於ける如き議院政治を取るの外なきは、勢の自ら然らしむる所、亦議論を要する迄もない。或は議院政治の採用は我國體を毀損するが如くに言ふ者もあれど、此輩の國體論は約五十年前攘夷論者の唱へたる國體論と同一であつて、歯牙にだに掛くるに足らぬ。

併し一口に議院政治と言ふけれども、其内容は未だ十分に我國一般の人に依つて了解せられて居らぬ。唯内閣が議院の投票に依つて進退するばかりと思ふ人も多い。政治上の三位一體の本義は猶不明瞭なるを免れぬ。一概に英佛とは云へど、其間に大なる區別の存するとも、往々忘れられて居る。議院政治を説く人の中にすら、小黨分立を可とする者がある位の世の中である。學究的との謗は覺悟の前として予は茲に少しく憲政主義の闡明を試みたいと思ふ。

（二）

予は第一に總選擧なる者に就て讀者の注意を求めたい。民選議院の議員は何故に悉皆同時に改選せらるゝのである乎。議院が立法事務に習熟し、立法的職分を完うするの意味より言へば、全議員を同時に改選するは甚だ不都合である。元老院の制度に於て往々見るが如く、毎三年位に一部づゝ改選し、新分子を加ふると同時に經驗ある舊分子を保存するのが善い筈だと思はれる。然も之を爲さずして、議員全體を同時に改選するのは、畢竟民選議員は單純なる立法事務の外に猶一層重大なる任務を有するからである。或一定の時に於

ける國論の發表は即ち是れてある。今年今月今日、此眼前の問題に對し、全國民は如何の意向を有する乎。之を發表せしめて施政方針を決するの資となすは、即ち總選擧のある所以てある。若し單に議院構成の手段たるに過ぎずとせば、部分的に行ふて差支は無い。幾多の不便不利の存するにも拘らず、全議員同時の改選を行ふは、要するに民選議院は普通の立法事務よりも國論發表を以て重しとするからてある。上下兩院の構成法に於て相違あるは、下院は國論發表を主とし上院は然らざるに因ると思はれる。予は之を以て下院の本質に關する重要の點と爲し、切に世人の玩味を請ひたいのてある。我國の現在に於ては、總選擧は十分に此意味を達して居ない。衆議院も國論發表の機關たる資格を完うして居らぬ。政府も亦國論發表所として議院を待遇せず、單に立法事務の場所として認めて居る樣てある。是は憲政の主義に不忠實なる朝野政治家の罪てあるけれども、第一には訓練ある國論其者が未だ勃興し來らぬのに原因する。換言すれば國民其者が未だ政治的勢力として活動するに至らぬからてある。其の憲政の本式てない事は固より言を俟たぬ。

上記の總選擧論は直ちに大政黨論に適用する事が出來る。大政黨の必要なるは、敢て單に立法上の便宜を得るが爲ては無い。議院をして統一ある意思を有し、一定の國論を代表するを得せしめんが爲てある。小黨分立は議院を單純なる立法事務所と見做す場合に於て甚だ善い。何れの黨派も單獨にて他を壓倒するの力なきは、討議の公平を得るに於て甚だ善い。されど議院をして統一ある意思を有するの團體として活動せしむるが爲には、小黨分立は不適當てある。勿論小黨分立を以て國論の眞の反映と見做すべき場合もある。併し立憲政治は多數政治てある。多數政治は多數黨の存在を必要とする。事實に於て多少の不公平あらんも、政治の運用上已むを得ない。

我國の政黨狀態は近頃多少の進歩を爲し、衆議院は政友會の下に少なくも表面上統一なる意思を有するの團體となつて居る。然も此意思は國民の意思と合致し

て居るのでは無い。政黨と國民との聯絡は未だ此程度に達して居ない。况して此政黨と政府との聯絡に至つては猶更てある。政友會と桂内閣との所謂妥協は政黨の私通に過ぎぬ。且其私通も僅に穴隙を鑽つたのてあつて、同棲と謂ふ譯てはない。其の三位一體の理想に遠きは勿論てある。

（三）

政治的三位一體の理想の説明としては、佛國議院政治の缺點を擧ぐるのが捷徑てある。予の見る所を以てすれば、佛國の議院政治は不具的てある。人民と議院と政府との調和ある結合が成立つて居ない。先づ議院と内閣との關係を見ると、如何にも議院は其投票に依つて内閣の進退を左右する事にはなつて居る。けれども議院政治の半面は内閣政治てなくてはならぬ。議院は信任ある政治家をして内閣を組織せしむると同時に、此内閣は議院を引率して自由に其政見を行ひ得るを要する。而して之が爲には時として國民の判斷を求むるがため解散なる大武器を振はねばならぬ。内閣萬能の不可なるが如く議院萬能も議院政治の理想ては無い。然るに佛國の議院は餘りに强力てある。内閣は概てし議院を引率するだけの實力を持たぬ。是は政黨組織の不完全なるため、内閣は統一ある一大政黨を以て其基礎と爲さぬからてある。内閣は殆ど常に各派のコンビネーゾンより成り、結合力が弱い。從つて非凡なる大政治家の現はるるか、又はブロックの結合を堅くすべき特種の事情存せざる以上は、内閣は到底大膽に議院を引率して自己の抱負を實行することが出來ぬ大統領は解散權を有するけれども、之を行ふには元老院の同意を要する。且事實に於て千八百七十七年にマクマボンが一度之を實行したのみて、爾來全く有名無實てある。英國に於ては内閣は統一ある大政黨を基礎とするを以て常態とするが故に議院の信任存する限りは、能く議院を率ひて内閣政治の實を示して居る。又變調を來した時は、總辭職の外に解散に依つて調和を回復するの道もある。然るに佛國に於ては平素は概して議院に指揮せらるゝのみに止まり、衝突の場合には

唯屈服辭職するばかりてある。議院と内閣とは、平時に於ては互に主となり從となり、且つ指揮し指揮せられ、以て同心一體の觀を呈するのが議院政治の極致てある。英國は大體に於て此域に達せるも、佛國は決して左樣てない。完全なる内閣政治を伴はざる議院政治は斷じて不具的てある。

佛蘭西の議院は此の如く内閣との關係に於て不完全てあるが、人民との關係に至つては更に甚しい。解散權の有名無實なるは上に述べしが、此事は内閣の無力を意味すると同時に、中央の政戰が人民の支配以外に立つことをも意味する。内閣と議院と衝突したる時、人民は英國に於けるが如く其の裁判者となり得ないのである。議員の任期四年間は、如何なる新問題起るも、國民は投票に依つて其意向を發表することが出來ないのてある。そして議院は四年間國民との關係を絶ちて勝手氣儘に振舞ひ得る。漠然たる輿論は常に動いて居やうけれども、兎に角的確なる國論は四年間發現の機會が無い。且四年毎に行はるゝ總選擧に於ても、佛國政黨の運動は餘程英米と趣を異にし、寧ろ地方的にして國民的ては無い。全國民に向ひ一定の綱領を掲げて選擧を爭ふは、社會黨位ひの者てある。選擧人は英國に於けるが如く其投票に依つて甲の政黨に政權を與ふべきや否やを決するのてはない。要するに佛國選擧人と政黨又は佛國民と議院との關係は、決して完全とは言はれない。

(四)

佛國議院政治の缺點を以て我國に對照し來れば、興味頗る多い樣てある。我國の内閣萬能は佛國の議院萬能と其性質正反對なるも、而も勢力偏重の弊に至つては、其趣正に同一てある。佛國内閣は解散權を有名無實とする程に弱いが、我國の内閣は解散權を濫用して憚らぬ。愈々の決戰の場合に於て、我衆議院は到底政府に勝つの望なきは、佛國内閣が唯議院に屈するの外なきと類似して居る。元來議院と内閣との間には均勢が無くてはならぬ。而して此均勢は不信任決議權及解散權の對抗に因て維持せらるゝ者てある。然るに佛國

ては解散權有名無實となり、我國ては不信任の決議何等の効力を有せず、遂に何れも均勢破れて一方に偏倚することになつて居る。其結果の共に有害てあるは勿論てある。內閣の無責任と議院の專制とは、共に立憲政治の本旨に反すること甚しき者てある。佛國は固より學ぶべきては無いが、日本の現狀も亦速に打破せねばならぬ。

議院又は政黨と國民との關係の不完全なるに至つては、日本は遙に佛國よりも甚しい。佛國は英國に比しては大に劣つて居るけれども、平素輿論の勢力を有するは、到底我國の比てはない。我國ては議院又は政黨一般國民と沒交涉なるは、猶內閣が議院と沒交涉なるが如くてある。內閣が議院に對して責任を負はざるが如く、議院又は之を支配する多數黨は國民の意向如何んに多く頓着しない。而して政局に困難を生じ已むを得ざる時は、內閣は外間を厭はずして政黨と陋劣なる妥協を結ぶが如く、政黨運動者は議員選擧の際に限り人民に近づいて各種の惡辣手段を盡し、投票を騙取又は買收する。即ち內閣政黨及人民の三者は、平生は個々分立して聯絡なく統一なく調和なく偶ま特種の場合に於て接近するとすれば、其接近は野合私通又は票賣投買と云ふが如き不健全の者てある。三者の關係の支離滅裂なるは既に甚だ悲むべきてあるのは、此事實は更に他面に於て彼等をして不健全なる關係を作らしむるの原因となつて居るのてある。立憲政治を行ふ以上は、議院政治を採用して三位一體の理想に達することを期せねばならぬ。然らざれば折角の良制度も十分に其の妙用を發揮するを得ずして却て弊害をのみ生ずるの虞がある。予は朝野の政治家並に一般國民の奮勵を促さゞるを得ない。

名古屋女論

青柳有美

其一　偉なる哉名古屋女

偉なる哉名古屋女。

上は大日本帝國内閣總理大臣陸軍大將從二位大勳位功三級侯爵桂太郎の奥方カナ子夫人より下は東京淺草の奥山で源氏節手踊にヤンヤと拍手喝采を博して居る岡本美正に至るまで皆な是れ名古屋の產だ。東京の花柳社會は吉原でも新橋でも擧げて是れ名古屋女の天地である。その實數の五分の三までは、名古屋女である。五郎、淸香と並んで兎に角新橋名妓の一に算えらるる玉中村の實子も名古屋女なれば、昨年の春、本誌に杉村楚人冠が『時子』を書いて以來、當代稀に見る面白い氣立の女だといふので、通人仲間は素より申すまでも無く、學生にまでの評判藝者となり、男嫌ひを看板にメキ〳〵賣り出してる金寺島の千代子も又名古屋女である。

一體、大日本の女は頗る非常に豪毅なものだ。世界を跨にかけて至る處を跋踊する。名古屋女は此く海外にこそ發展しないが内地での發展は實に驚くべきで、南は平家が落ち延びた壇の浦より北は蕗の雫を浴びてコロボックルの住んでたといふ蝦夷松前の端にまで至りて居る。試みに奥羽地方の花柳界に足を入れて、其處での評判ものを調べて見ると、悉く名古屋種なんだから、誠に以て驚くべきでは無いか。馬關然り、廣島然り、靜岡然り、東京又更に然りてある。

偉なる哉名古屋女。

金の鯱鉾は名古屋の名物である。然し、名古屋女は今や更に大なる名古屋の新名物となつて輸出される。盛んに日本全國に輸出される。

名古屋は元來輸出地である。名古屋を市場(マーケット)とする濃尾平原は全國でも最とも豐饒な冲積層で、一方里に付一年平均七千石以上の米穀を產出するが、その產出したものは概ね之を輸出する。名古屋女の輸出されるやうになつたのも、つまりは、此の名古屋の民族精神たる輸出主義が、生產物より更に人間の上にまで及んで來たものと觀るべきだらう。

一體地主といふものは小作米を取ると、飯米以外は皆な賣つてしまふのであるが、家內では成るべく惡い米で辛抱して、上米を市場に出すやうにするが例だ。他所のものは、名古屋が女の產地だといふのを聞いて、定めし美人が全市に滿々たる事と思ふて來ると、豈に計らんや、美人はソウ多く眼につかぬ。これは、土地の人々が例の名古屋民族精神の輸出主義から割り出して、自分等は惡い女で辛抱し上玉は之を輸出するといふ事になるからである。

經濟學の貨幣論のうちに、グレシャムの法則といふものがある。それは、一國內に善貨と惡貨との兩種が通用せられて居ると、惡貨は善貨を驅逐するといふにある。名古屋の女人界には、此のグレシャムの法則が行はれて居る。土地の人は惡い面(めん)の女でも辛抱して之を對手に滿足する氣があるから、自然、善貨が惡貨に驅逐せられて國外に出るやうに、上玉は並の玉に驅逐せられてその上玉を高く買ふといふ方面に販路を發見し、遂に名古屋から輸出せられる事になる。これが、

中央都府の尤物に名古屋女の多く、全國到る處に名古屋の美形が跋扈横行する所以の一だ。

然し、名古屋人に若し克己の精神が無く、是非々々理が非でも天下の尤物を我が物にして置かねば氣が濟まぬといふ意氣込があれば、茲に東京あたりと自由競爭を始めて、値段の騰上となるから、名古屋女も今日のやうに盛に輸出せられぬことになる。されば、名古屋女の全國に足跡を印して居るのは、一面からいふと、名古屋人の克己の精神に富んでるのを事實にしたものだ。

其二　名古屋女の筋肉

ツマトーゼは肥える藥である。

然し又、瘠せる藥といふものもある。近所其邊のお爨どん達は、切りに瘠せる藥は無いものかと、人を捕捉へては聞く。そうかと思ふと「妾は骨と皮ばかりなんて鷺のやうだと笑れますからネツマトーゼを飲ふかと思つてるのよ」なぞと仰しやつて瘠せてるのを酷く氣にする藝者なんかもある。瘠せるとか肥るとかいふ事は實に女に取つての大問題である。否な、プレトーヤセノフオンなぞいふ古代希臘の大學者までが之を大問題にして、青年の體美を維持する第一の法は、盛に競技運動をやらするに限るが、これといふのも畢竟は餘り肥らせずに、肉附に過不及の無いやうにさする爲めだといふて居る。

女の身體が之を觀るもの丶眼に、美しいとか醜いとか映ずるに就ては、色色の要素も原因もあるが、其の第一は筋肉である。之を平く言へば、女も肉附の工合如何で美しくも見へれば醜くも見へる西洋畫家や彫像師が、何よりもモデルを手本に筋肉の寫生に骨折るのも、全く之が爲めだ。

筋肉は紡錘狀の片々である。これ丈けを寄せ集めて骨骼の上に附着けたんては、フワリと穩に膨んだ外容が出來上らぬ。是に於てか、綿のやうな皮下脂肪といふものがありて、更に筋肉の上を包み巧に凹凸を隱すので、初て人間がフツクリした體貌のものとなるのだ。此皮下脂肪は熱の不良導體である。

寒國の人間は、體温の放散を防ぐ必要上から、何しても此の皮下脂肪が多くなる。随て、秋田や越後あた

りが如何に美人系に當つてるの何んのと評判が高くつても、此の邊の女には皮下脂肪が多過ぎてイヤにデブ〱した處があり、若しや海綿を女の皮て包んだのではあるまいかと疑はしむるほどのものだ。全身に亘りて緊縮した處が無い。

九州あたりのやうな暖國に產する女になると、氣候の暖い結果として、皮下脂肪に乏しく、それに汗を絕えず多量に分泌するところから、筋肉が枯燥してカラ〱固まッてる。而も、そのカラ〱固つてる筋肉が皮下脂肪の少量な爲に、不格好な凹凸を作つて直ぐ觀る者の眼に這入る。これてはお世辭にも美しいとは申上げかねる次第と相成る。加之、暖國の人間は祖先以來屋外生活を營み、好んて山野を跋踄する處から、自と遺傳的に骨骼が發達し、九州から廣島あたりにかけての女は、總て骨が太い。

日本の地圖を披いて見ると、名古屋地方は北海道を頭とし九州を尾にして居る本土の中央にある。東京になると早や北に片寄り過ぎる。京都になつても、モウ南に寄り過ぎだ。名古屋地方は、實に日本々土の中央て全く中京てある。隨て、名古屋女の筋肉は南方人の如くカラ〱して固つても居らねば、又北方人の如く多量の皮下脂肪に覆はれて、ダブ〱しても居らず、肥らず瘠せずといふ中庸を得て居ることになる。

米國コロムビア大學教授、エム、ウヰリアム氏の說に據ると、皮下脂肪の多量なる蓄積を防ぎ而も健全なる筋肉の發達を計るのには、新鮮の空氣を充分に呼吸するのが第一との事であるが、名古屋は全國でも珍らしい健康地て、他所で平癒の六ケしい呼吸器病患者さへ、名古屋に來れば癒るとしたものだ。斯る健康地の空氣を始終呼吸してるんだから、名古屋女の筋肉の發達が、巧に中庸を得て過不及無く、肥つてるやうても緊縮つたところがあり、觀る眼に美しく感ぜらるゝのは無理も無い。名古屋女の特色は其肉にある。名古屋女は此の中庸を得た肉て、南方にも北方にも賣り出したのだ。

其三　復古式の顏貌

御維新以來、世の中は王政復古の御時世と相成つた。其後、何事も復古々々といふのが時代の要求にな

つて、織物圖案の意匠は、之を法隆寺所藏の古錦(こにしき)の斷片から採るかと思へば、裁判官や辯護士は、奈良朝時代の服裝で法廷に出るといふ仕末に及び、恰も歐州中世紀の文藝復興期(ルネーッサンス)に、何事も希臘々々と、復古の好尚が盛になつたのと全く同一である。

是に於てか、女の顏貌に對する好尚までが又復古して、頗る非常に古いところの天平時代に逆戻りし、頰の肉のフックリ膨れた所謂豐頰の女が、大持(おほもて)に持てる事になつて來た。

豐頰は天平式である。

此頃、東京の藝者で頰の少してもフックリして居る者になると、イヤに皆な天平がッて、古書にある光明皇后樣か何かのやうに、髮の結び方までを天平式にし、輕く束ねて前髮のところを眞ん中から分け、之を鬢の毛と一緒にして、フワリと耳の上の邊まで低く垂すといふやうな事をやる。藝者だからとて商賣である、お客の御意に召さずは、強いて嗜(す)き好んで此んな眞似をするものでは無い。自然天平がりてお座敷に現れると、お手拍子御喝采を博する事になるからの事だ。

名古屋女の特色は豐頰にある。而も、充分に膨れながらも引き縮ッた筋肉の豐頰にある。

名古屋女が、今日の勢力を天下に揮ふ事の出來るやうになつたのは、其の顏貌が如何にも此の當代の復古主義好尚に投合するところがあるからだ。名古屋女の豐頰は誠に時代の要求である。

一體、名古屋女の頰は、何故それほどまでに、若殿原達の眼中に大問題となりて映ずるか。

俗に『眼で物を言ふ』との語があるが、眼ばかりでは決して物は言へぬので、眼の働きに頰の筋肉運動が伴ふから、玆に初めて眼が物を言ふやうになるのだ。又『口許に愛嬌がある』といふ語もある。然し、唇を働かした丈けで愛嬌などは兎ても出るもので無い。唇と共に頰の筋肉が動いて、玆に初めて愛嬌の波が、顏一面に漂ひ出て來るのである。人の顏面を一とすれば其の三分の二までは頰で、而も殘る三分の一も此の頰との共力事業で初めて其の表情作用を完全に遂行する事が出來るのだ。

頰の勢力や又大なりといふべしては無いか。

藝用解剖學者は、人間の顔面を上中下の三大部に區別する。そのうちて、「注意」とか「苦痛」とか「悲哀」とか「沈思」とかいふやうな意志及び哀情に屬した表情に要する筋肉は、主として上部即ち鼻柱の上のとこまでにあり、「不滿」とか「侮蔑」とか「憤怒」とかいふやうな激越の表情を指示するに用ふる筋肉は、主として下部即ち鼻から下にあるが「微笑」とか「可憐」とかいふやうな女て言へば最も男を嬉れしがらする表情の時に必要な筋肉は、皆な頬のところに集つて居る。藝用解剖學者は此の微笑作用を營む時に收縮する顴骨から唇の邊に通して居る筋肉を「大頬骨筋」といひ、女が如何にも男子の愛情を需めたそうな顔をする時に用ふる筋肉を「小頬骨筋」と名けるが、之も顴骨に其の一端を發し、頬のところを通つて、他の一端は上唇の筋肉に通して居る。

豐頬とは斯く男を恍惚かすに必要なる頬の筋肉即ち顔面中部の筋肉の發達して居る事なのだ。

名古屋女は、即ち此の頬の筋肉が發達して、豐頬といふものになりてるのだから溜ら無い。之を眼にした男子は一見恍惚けざらんとするも豈に得んやといふ事になる。名古屋女の頬は男殺しに出來てるものである。

其四　名古屋女の顴骨

野蠻人の顴骨即ち頬のところの骨は、之を文明人のに比べると、餘程高く突出して居るものである。

顴骨の突き出て高くなつてるのは、頬に激しい凹凸を生じて、觀る者の眼に少なからぬ不愉快を與ふるものだ。奥越地方の女は、幾ら美人と銘を打たれたものでも、此の顴骨か高く出て居る傾がある。

名古屋女は一般に顴骨が並外れて低い。これは名古屋女の特色たる豐頬と至大の關係があるもので、若し顴骨が高く突き出て居ると、勢ひ頬の筋肉を引つ釣りあげる事になるから、大事の大事の頬の處は窪んてしまつて、場所がらをも辨えず尾濃大地震の光景を演じ、地盤ならぬ頬邊の陥落と相成る。同じく頬の窪んだのでも、笑靨かなんかなら、男も切懇それに魂を打ち込む事も出來やうが、頬の處の骨が出ッ張ッて、それて、げッそり肉の陥落してるんては、忽然、隨分

幽靈のやうなものになる。

然し、名古屋女のやうに、並外れて顴骨が低くければ、頬の筋肉が引ッ釣りあげらるゝ恐れ無きは、素より言ふまでも無く、その骨の低い丈けを筋肉が埋め合せすることになり、一面にフックリと頬が膨れるわけのものだ。

されば、名古屋女の豊頬は全く、顴骨の低いところから來る自然の結果で、其の賜とも云ふべきである。顴骨の高い人種には、決して豊頬といふものが無い。顴骨には、直ぐ上顎骨が組み合ッて、この上顎骨に下顎骨が引ッ懸ッてるのであるが、多數ある顔面骨のうちても動くことの出來る可動性の骨といふのは、唯僅に此の下顎骨一枚である。

文明人は充分に調理した食物を攝取するから、咀嚼の爲に上下の顎骨を多く働かす必用は無いが、野蠻人になると、餘り調理を加へぬ食物を其の儘口に入れるので、何うしても之を咀嚼して嚥下するまでには、顎骨を上下とも無茶働きに働かせねばならぬ。生の大根とガリ〱齧るとか、熊の肉を生食するとか、それは〱下顎骨の運動が猛烈なので、その結果、自然、絶えず動いて居る下顎骨は頗る發達して大きいものになる。下顎骨が大きくなれば、それのブラ下ッてる上顎骨も下顎骨につれられて矢張大きくなる。こう上顎骨に大きくなられると、之と組み合ッてる顴骨も又自ら發達して大きくなり、イヤに顔に角を立てゝ出ッ張る事になる。野蠻人の顴骨が高いのは、全く調理の加はッて居らぬ食物を攝取するに原因するのだ。

名古屋は調理の術の發達して居る土地である。東京の築地に香雪軒と云ふ名古屋料理專門がある。先刻御承知の事だらうが、値段の高いことゝ來たら恐く日本一、驚いて目の玉が飛出そうになるほど暴利る。然し、それでも千客萬來で、少し高尚がり而してハイがりたがる連中は、皆な此の香雪軒に出かける。全く以て調理の佳い爲めてある。處て、此の名古屋料理の特徴ともいふべきは、同じく皿に肴を盛るにしても、成るべく之を小さな斷片に切ッて盛り、細かなものを、クシヤ〱と寄せ、皿を換え椀を換えて出すにある。

東京流の料理ならば、口に入れてから下顎骨を働か

ものを、名古屋料理では、チャンと庖丁で斷ッて之を膳に載せて出す。それ丈け顎の働が儉約になる譯のものだ。随て顎も餘り大きく無くて間に合ひ、その結果上下顎骨の發達せざるに伴れて、顴骨も發達せず、並外れて低いものになる。

是に至ると、名古屋女の顴骨が低いのは、名古屋に料理の發達して居る結果といふべきものであらう。

其五　豊頰の功德

酒に醉ふと、一番先きに紅くなる處は頰である。肺病に罹つて、モウ快復の見込が無いとなると、第一に誰の眼にも解る徵候は、これも頰の邊の赤色を呈するに至ることだ。

人間の皮膚の內で、最も觸覺の鋭敏なのは唇の部分で、これには他の部分のやうに角質層といふものが無く、粘膜が其儘露出して居るのみならず、毛細血管の入り込んでる數も、皮膚に直接して居る他の部分の筋肉よりは遙に多いのであるが、之に次ぐものは頰で、其の處に當つてる皮膚は他に比較して餘程薄い。又血管の入り込んでる數も感覺の鋭敏なる點も、全く唇の次位にありて、仲々エライものだ。是に於てか、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、今度は頰に接するに頰を以てする。これだけは、戀人同志のみならず、母子の間などにも往々行はるゝ現象である。これといふのも、要するに、頰は其神經が鋭敏で、感情を傳へるに最も適したる部分であるからだ。

人間が、一種の羞恥を催した時に俗に赤面するといふが、ボウーッと顔を紅くする。ダルウヰンの說に依ると、これは殆んど人類獨占の表情法で、猿猴類に多少それに類似したものがあるばかりとの事だが、その赤面したといふ時に紅くなる部分はと云へば、矢張頰で、互に人知れず想ひ合つてる青春の男女などが、偶然邂逅でもすると、直ぐボウーッとなりて赤くするのも即ち此の頰である。愛嬌の權化なる笑靨も、又矢張、この頰に顯はれる。

頰は、此の如くにして、人間の心は素より云ふまで

も無く、身體に、少しの變化があつても、直に之を傳へるものだ。名古屋女は、此くまで微妙な作用を營む器關の充分に發達した豐頰といふものを持つてるのだから、感情を遺憾無く身邊に接近して來る若殿原に傳へることの出來るのは、當然である。傳へられたものは、鮒が電氣に罹つたやうに、皆なピリ〳〵となる。先づ一つ那の男をと狙を附けると、その氣で心を働かせる。名古屋女には、直ぐ、豐頰といふ器關がありて、之を傳達するのだから、忽ち命中する。其處に至ると、頰の筋肉の發達して居らぬ地方の女は、誠に以て可憐そうなもので、いくら腹の中でばかりヤキモキしても、中途に之を傳へる器關が不完全なのだから、事毎に意の如く運ばぬ事になる。

今や、日本全國の男共は、皆な此の名古屋女の豐頰に征服せられつゝあるのだ。名古屋女の豐頰は、機關砲よりも更に〳〵有力なる武器である。嗚呼、豐頰の功德や、夫れ大なる哉だ。

其六　名古屋女の顋

の學者なるラヴエターは、人類の顋を分類して三種に別けて居る。

第一が唇から鉛直に垂れた線よりも外に突出した顋、第二が此の鉛直線と同一内に顋端のある顋、第三が此の鉛直線よりも内に這入つて引つ込んで居る顋—この三種類である。野蠻人の顋は調理を施さぬ食物を生食する爲に、甚だ發達して頗る前の方に突き出て居る。

名古屋女は九州や奥州あたりに行くと、老人でとも無いと此んな物は食はぬと思れる程に、充分に庖丁を入れ細く切つた食物ばかりを召上り遊ばすのだから、顋が發達して大きくなるべき筈が無い。是に於てか、名古屋女の顋は、その頰の振つてる丈けそれ丈け振はぬのである。即ちラヴエターの分類法に據るに第三類に屬する顋で、唇から垂れた鉛直線よりも内に引ツ込んで居る。第一に唇の下に當る部分の寸法が短い。鼻の下の長い男と唇の下の長い女とは、あまり觀た目に結構なもので無いから、顋の頭がイヤに出シヤ張つて、キャプトルの代用になりそうな大きな顋の女よりは、

く顔の理想的標準とも云ふべき卵形に狂が來て、下縮のして居る處無きにしも非ずだが、世間には瓜實顔といふて隨分持て囃す例もあるから、名古屋女は顎の頭か少し短か過ぎて下縮の氣味があるなと思ふたら、これが即ち評判の瓜實顔と申す難有き御顔なりと觀念するが可い。名古屋は瓜の名所てある。女までが其れに肖りての瓜實顔とは、仲々お茶の湯の盛んな處だけにシャレたもので、茶氣滿々と云ふべしだ。

名古屋女は、卵に目鼻て無うて、瓜に目鼻てある。然し、夕顔に目鼻ては無いんだから、左まで御心配になるにも當るまい。

名古屋女の顎は引ッ込み顎て、その骨骼が餘所の女共よりも割合に小さく甚だ輕快に花車に出來上りて、而もフックリした豊頬に圍れてるんだから、頬の肉が勢に乘じて侵入し下顎の邊までも押かけて來て、頰から溢て來た肉に襲はれて、二重顎といふものになる。名古屋には二重顎の女が多い。

紐育サンの記者フキンクの說に據れば、此の二重顎同時に神經の鋭氣に富んでるのを示すものだとは、伊太利人トム、マセオの說てある。

一體藝者商賣や何かといふ水稼業は、多少浮氣なところが無いと、到底勤まるものては無い。名古屋女に藝者になるものゝ多いのも、つまりは二重顎の浮氣な女が多い爲めなんだらう。然し此の世智辛い世の中に浮氣な女でも居てくれぬと、男共は全く以て遣る瀬が無く、生存競爭の奮闘に骨疲れがして、厭世にでもなるより仕やうが無く、華嚴が繁昌するばかりてある。名古屋女は實に天下の男助けて、其の功德たるや遙に觀世音大薩陀の功德に優るものがある。それに又、下顎骨が小さく輕快て其の端が唇から垂れた鉛直線より引つ込んでるのも、フロレンス國立人類博物館長マンテガッツァの說に據れば、同じく浮氣て氣移りの多い徵なそうだ。古代希臘の神話にある神樣たちは、至りて浮氣と淫猥なものだが、その像を觀ると皆な顎が引つ込んで、顔面角が九十度以上になってる程てある。愈よ以て名古屋女が浮氣だといふ事だけは、否む

べからざることらしい。然し、希臘の神様に似てるんだから歸命頂禮、難有いとてある。東北のやうな寒國の女でも滅多にこんな眞似をする者の無いのに名古屋女には冬にもならぬうちから、手を内懐にして居る者が多い。之は名古屋女の墮氣に富んでるのを示すものては無からうか。

◎其七　鼠齒の名古屋女

「妾くやしいッ…」なんかと、糸切齒をキリ〱ッとさして、疳の虫がムラ〱ッと差し込んで來るのを、ウンと口許て嚙みしめ、ピーンと眥を釣り上げたところは、之が色の白い美人てさへあッたら、隨分、見たところのオッなものてあるが、女の齒は男よりも更に細かく又小さいものてある。殊に名古屋女と來たら、全然、鼠の齒のやうに齒並びが佳くつて、而も、それが細かく小さい。

今更ら人類の齒が何本あるなどゝ改めて言ふまても無いことだが、上下左右、智齒までを合しての總計が三十二枚、この三十二枚の數は、男ても女ても、又、[illegible]人ても總て皆な同一て、增減が無いのてある。然し、狹い場面のところに、廣い場面のところと同一數のものが這入り込んて來れば、その這入り込んて來るものゝ形が小さくならないと、旨くその中に納まらぬのは知れ切つた事てある。名古屋女の顎は、之を九州や奧州あたりの女の顎に比べると餘程小さいのてあるが、然し、それても矢張定數の三十二枚の齒は、その小さい上下顎骨のうちに納つて居らねばならぬのだ。是に於てか、その狹い面積のうちに御規則の三十二枚だけがキチンと嵌り込む事の出來るやうに、細く小いものになるのは、誠に以て自然の理法てある。顎の骨の小さい名古屋女に鼠齒のあるのは當然の事なのだ。

コールマン博士の說に據ると、女の齒が男よりも小さいのは、女は男のやうに食事によりて快樂を取らうといふ氣が乏しく、ゆッくり樂みながら飯を食ふ事をせず、之を日本に譬へて見ると、臺所の隅ッこてサラ〱と茶漬を搔ッ込むといふ風だから、自然、齒を働かす事が少い爲めに、男のものよりも小さくなるのだとの事だ。名古屋女は、それに別して庖丁の目の餘計

[illegible]鼠の歯のやうに細かく小さいものになりてる譯だ。

これは現在の事てあるが、今日のやうに、女が皆な我儘になり動ともすると、ヒステリーといふやつを起し、切りに歯をキリ／＼さしてハンケチを噛み切ッたり、亭主の腕に噛みつきたがる御時世と相成ッては、名古屋女の特色たる此の鼠歯も追々末世て、大きな鉈や象の牙のやうなものになつてしまふかも知れぬ。それを思はゞヒステリーなぞいふものは御無用／＼。

歯の大小は、顔のつくりに影響を及さぬやうだが、一たび口を開くと歯の大きいのは如何にも獸らしく、一種獰猛の氣味があつて、之を視る者に惡感を與える。犬が歯を剝き出して吠えてるのを目にしたら、誰ても心地は餘り結構てあるまい。名古屋女がニタリと唇の兩角を締めて微笑むと、內から見へるのは、細かい小さいクヮラリと並んだ少し鼠色を帶びた鼠歯てある。男たるもの、其の如何にも獸氣を離れた文明人らしい處に恍惚と見取れざらんとするも豈に得んやだ。狹い面積のところに、如何に細く小さいとはいふもの、定數の三十二枚の歯が行列をするのだから、何うしても勢ひ押し合ひへシ合ふ事になる。其の結果は、何れも歯といふ歯が皆な周圍から押しあげられて、出ッ歯の氣味になる。されば、名古屋女の歯は細かく並びが佳くつて美しいには相違無いが、多少出ッ歯たるの傾があるのだ。然し、出歯龜とは何の因縁も無いから、御心配には當らぬが、これが唇の形に影響を及ぼして來るのみならず、ラヴエターの『觀相經』に據ると、出歯は浮氣て而も淫慾の强い徵證てあるとの事だ。夫れ或は然らん。殷鑑遠からず矢張大久保強姦殺人事件の出歯龜にありかネ。

其八　名古屋女の唇

頰は顯著な感情の變化や、顯著な體質上の變化を最も顯著に現はす事が出來るが、細かい微眇な感情の變化や體質の變化を顯す事になると、餘程六ケしいのである。

總て粗大な用を達するには、粗大の器關て間に合ふが、細かい仕事の用に供するには、矢張、細かい込み入つた器關が無ければならぬものだ。二十貫目とか三

十貫目といふやうな大きな目方の物を衡るのならば、構造の粗雑なカン／＼でも素より其用を辨ずるだらうが、造幣局の如く一トロイ、グレインの何分の何といつたやうな微な分量を計る處では、其構造の頗る複雑にして精巧を極めた天秤を要するでは無いか。

微妙な感情や體質の變化を現すにも、矢張眞ッその如く、頗る精巧鋭敏で微妙な變化にも忽ち感應する事の出來る器關を要するのである。それは唇だ。

唇は到底頬が如何にしても顯す事の出來ぬ細かい感情や變化を現すことの出來る官能を持つて居る。頬のやうに角質層があるんで無く、透明な粘膜が露き出しになつて、その下を流れて居る血管が誰の目にも能く見へる。それに又觸覺が全身の皮膚面中に於て最も鋭敏な場所である。これも全く此の處に最も能く我が感情を集める事が出來、また此の集めた感情を最も能く先方が感受するからの事である。

醫者が病人を診察する時には、直ぐ其の唇を視る。健康に變動があると、唇の色は忽に變るものだ。唇はそれ程までに大切なもの故、女は紅白粉といふ位で、白粉を塗らぬものまでも、口紅だけは一寸注し、之を佳い色に見せやうとする。何か怖い事があつて恐怖心にても驅られると、直ぐ色が變りて紫色を帶びて來るやうになり、一番先にブル／＼振ひ出すのも唇である。能く世人は口許に愛嬌があるといふが、それは口と云つても唇の事で、唇の兩角が頬に侵入して居る部分に愛嬌があるといふ意味だ。

此んな風で、唇は顔のうちでも最も表情に大切な機關で細かい微妙な感情は皆な之れから傳へらるゝのである。

名古屋女の歯は、何方かと云へば、出歯式であるんだから、其の結果として自然、唇も又前の方に突出して、多少は豬式なところがあり、キチンと閉鎖らずに上下の方向に剝くれて、常住も半開になつて居る。それに、又、唇の筋肉が他所の女たちのよりは分が厚くツて、如何にも重たさうである。米國の有名な詩人で又醫者であつたウエンデルホルムスの説に據ると、唇の肉の厚いのは、文雅の思想に乏しく想像力に富んで居る位愛情だとの事だが、或は然うかも知れぬ。

名古屋女は何處までも現實主義の女だ。前、獨逸といふ處は美人に乏しい地だが、唇丈けは大變優雅で見たところが心地のよいほど薄く花車に出來てるそうだ。これは音樂が普及して獨逸の女に想像力が發達して居るためとの事だ。總じて天才の唇は引き締りて薄いものてある。名古屋女の唇が厚くつて突き出て居るのは、名古屋女に少しも天才らしい空想に耽る面白い分子が無い爲めだらう。

　マンテガッツァの説ては、唇の筋肉が厚くつて前に突き出て居るのと又口が絶えず半開の狀態を維持して居るのは、出齒と等しく淫慾が盛んで怠惰の氣が横溢して居る徴候だとの事だが、そうなると愈よ以て名古屋女は風向きが惡くなり、何うやら淫逸遊惰の傾向ある者に結着するらしい。

　日本の地圖を見たものて、日本の地形が清韓の文明を受けるやうな形をして居るといふてる人があるが、名古屋女の唇の分が厚く之を絶えず半開にして前に突出してるところは、如何にも男の愛と熱のある接吻と、水手にお財もタンと受けたそうな形てある。

其九　顔界の帝王

鼻は顔界の帝王である。

まづ第一に顔面の中央に陣取つて、上には兩眼、下には口、左右には耳といふやうに堂々たる大臣參議の如き器關に取り圍まれ、充分に贊護せられて居る。而も、その態度たるや、常に泰然たるものて、眼や口は何か少しの事變があると、忽ち狼狽して動搖(どよ)めき出し、直ぐ喜怒哀樂を彰すが、鼻に至りては、假令天軸砕くるの變あるとも貧乏淘ぎさへせぬ。嚴格な軍人のやうに、年が年中不動の姿勢を取つてるのが、鼻の特色てある。

　眼や口は、皆な人間の意志一つて何んとでも動かす事の出來るものてある。随て、惡る計劃(たくみ)のある人間になると、此の眼や口を色々に細工して、所謂巧言令色て世間を誤魔化そうとすれば、満更出來無いことも無い。然し、鼻は全く人間の勢力以外で如何ともすることが出來ず、絶對のものてある。此の絶對なところが、鼻に顔界の帝王たる資格を與えるので、眼と口とによりては其人間の智慧や感情を窺ふ事が出來るが、

鼻は人間の品格人品を示すものなのだ。鼻が悠然自若と顏の眞ん中に搆えて居るので、初めて人の顏に位といふものが附いて來る。

一眼を失つた眇な人がある。隨分醜いが、然し、鼻ッ缺けほどに醜くは無いのだ。これといふのも、鼻は顏界の帝王で、之が損ぜられると、丁度一國の君主が虜にされたやうなもので、顏面の威嚴を損する事頗る大なるが爲めてある。

鼻は是れ程までの威嚴を備えて居るんだから、一たび鼻の逆鱗に觸れると、大抵の人間ならば皆な縮み上つてしまふ。古くから『鼻てあしらふ』といふ俗語があるが、侮蔑の念を以て人に對する時には、此の鼻が用ひらるゝのだ。即ち『フ……フーン』と一ト息鼻の端てやられると、千萬言を費した痛罵の言よりも身に感應て、忽ちギャフンと來る。鼻の力も又大なる哉では無いか。

是に於てか、哲學者パスカルは其著『隨想錄』中に曰くだ『若しクレオパトラの鼻が最う一寸大きかッたら、全世界の政治地理が餘程今とは變ッてたらう』と絕世の大豪雄シーザーの虜になりかけたのもクレオパトラの鼻にて、アントニーは遂に此のクレオパトラの鼻の虜となりてしまつたのてある。名古屋女に今の鼻が無ければ、恐らく今の『日本名古屋女分布地圖』は、餘程變ッてたらう。

日本ても昔から古傳が無いても無いが、鼻は又生殖器と頗る密接な關係のあるものなのだ。獨逸の醫師シッフが一千九百年に其著『ウヰエネル、クリニッシエ、ウオヘンシユリフト』によりて公にせる處に據れば、月經に苦む婦人に對しては、其の鼻腔內の『性慾點』と稱せらるゝ處にコカインを塗布してやりさへすれば、忽ち苦痛が止まるとの事だ。又、千九百三年九月一日に米國市俄古の醫師タルボット博士が五十六歲の男子に對し鼻腔內の外科手術を行つたが、苦痛を感ぜしめ無いやうに、豫じめコカイン局部注射をして置いたにも拘らず、手術後精液を漏らし初めて、三週間の長きに亘つたそうてある。その他にも鼻と生殖器との密接なる關係を證明するに足るべき材料は山ほど有る。

鼻が此く生殖機能に關係する事甚大なるものありと

すれば、男が女を好くとか好かぬとか云ふ問題に、女の鼻が大なる關係を持つに至るべきは、素より當然の事だ。是に至ると、名古屋女の鼻は頗る物騷なものになつて來る。

其十　名古屋女の鼻

鼻の形狀を分類すると色々になる。獨逸の有名な骨相學者カルル、カルスは之を(一)薄手(二)長いの(三)曲つたの(四)幅廣(五)厚ぼッたいの丶五種に區別し、フロレンス派の有名な畫家、レオナルド、ダ、ヴヰンチは更に之を細かく十種くらいに分類して居るが、近頃て鼻の事を最も深く研究した人は、佛人トピナルてある。然し、例のラヴエターの『觀相經』には、最も明瞭に美しい鼻の資格が列擧せられてある。

同氏の說に據ると、總て美しい鼻といふものは、其の長さが額の長さと同一て、鼻柱の頭の處が一寸凹んて居り、鼻底の幅が鼻の長さの三分の一て、鼻端は尖らず鈍らず其の中庸を得て居らねばならぬとの事だ。

名古屋女の鼻は、此のラヴエーターが擧げた標準に照して觀ると美しい鼻の部に屬するものだといふ事が明になる。

元來鼻の用は、臭ひを嗅ぐばかりては無く、呼吸して肺に吸ひ込んてやる空氣を溫める役をもするにあるのだ。總じて寒國ては空氣が冷めたいので之を溫めるには、仲々手間がかゝるから、自然陶汰の妙作用て寒國人の鼻は自づと長くなる。詳しく言へば、鼻の長さが額の長さよりも大きくなるのだ。是に於てか奥越地方の女の鼻は、何うしても長過ぎるといふ次第になる。之に反して九州地方のやうな暖國の女は、空氣が溫い爲に之を肺に送るまでに餘り手間がかゝらぬのて、鼻が自然陶汰の結果短くなりて、其の長さは額の長さよりも短い事になり、南洋土人によりて代表せらるゝマレー、ポリネシヤ式の肉ぼつたい鼻の孔の馬鹿に大きな蟇が胡座をかいてるやうな格恰になりて、新粉細工て取り付けられてもしたやうに、顏の眞ん中に附いて居る。共に兩極端て其の中を得たものては無いが、名古屋は殆ど日本の中央て、暖くも無く寒くも無い空氣を吸ふことになるんだから、名古屋女の鼻も自然又長くも短くも無い中庸を得たものになり、その長

さが額の長さに等しくなるわけだが、何れかと言へば、少し短い方てある。

また名古屋女の鼻の特色とも言ふべきは、その輪廓が頗る明瞭て、奥越女や九州女の鼻のやうに、茫漠曖昧なところが無く、如何にも打出器械（プレッス）で打ち出しでもしたやうに、カチリと筋肉が引き締りて、視るから心地の佳い格恰をして居る處にある。それに、又鼻筋が、丸て鏝ても當てたやうに能く通つて居る。之を要するに、名古屋女の鼻は實に要領を得た鼻て、輕快無比、假令ひ鼻の下の長く無い男ても、一たび之を目にする時は、愉快の情を禁じ得ないのだ。

然し、名古屋女の鼻は、一體に至極花車な薄手の構造て、カルル、カルスの分類法に據ると、第一類の部に屬するのてあるから、頗る輕快なところがあると共に、又輕薄な分子が其の持主たる女の性質のうちに有るんては無いかとの疑を觀る者の心に起さするのだ。言ひ換えれば、名古屋女の鼻は人間の性質に譬へると才子肌とでも言ふべきものだが、惜いことに貫目が足り無い。之が缺點てある。

名古屋女は、此の輕快無比なカチリと締つた薄手の鼻——生殖器と離るべからざる關係ありと今の生理學者に目せられて居る此の鼻を押し出して、堂々滿天下に向ふのてあるから、到る處敵無く、若殿原が一も二も無く其の軍門に降を請ひ、天下の花柳界を擧げて、名古屋女の横行蹂躙するに任せることになるのも、敢て怪むに足らずてある。

名古屋女の鼻の此の格恰は、又著しく其音聲にも影響して來る。

其十一　名古屋女の聲

幾ら贔負目て見ても、名古屋女の音聲丈けは、賞る譯に行くまい。頰の肉の豐なところ、鼻の格好の佳いところを見せられた丈けだと、隨分難有味を覺え、歸命頂禮尊て敬し度なる程だが、一度『ナモ』『オギャーモ』を連發する音聲を耳に入れられると、流石の信仰心も多少冷却せざるを得ずだらう。然し、『ナモ』や『オギャーモ』が惡いといふては無い。これは御國訛また如何ともすべからずてあるが、名古屋女の音聲は其の音色が澄んて居らぬのてある。

名古屋女が口を利き言語を發すると何うもその音聲かスルリと咽喉から出て來たものゝ樣に聽え無い。何處かに引つ懸つて出て來たんては無いかと疑はれる。それに、何うも音色が濁つて純な透き通るやうな澄んだところが無く、咽喉から出る聲のうちに、石塊か何かが混じて居るやうな感を聽く人に與へる。名古屋女の聲は、實にザラザラしたものてある。

名古屋女は、有らゆる點に於て男子を迷はすに足る魔力即ちチャームと云つたやうなものを備えて居る。然し、音聲丈けは此のチャームが無い。名古屋女が其の自然生の聲を出したんては、到底、男を魅する力が無いのてある。

世間に「猫撫聲」といふ熟語があるが女は此の猫撫聲て行きさへすれば、聲の方丈けても男を手玉に取る位は自由自在て猫の聲といふものは有らゆる種類の聲のうちても實に濁りの無い澄み渡つた音色の透き通つてる聲てあるが女の音聲の理想的標準とも云ふべきものは、實に此の猫の聲の音色てある。その重もなる商賣道具の三味線に猫の皮を張り、その謠ふ時の音聲を猫の如くにせん事を理想として居る藝者が「猫」と仇名せらるゝのも、成る程、これては無理も御座らぬ。

二上り新内のやうなものは、女に此の猫のやうな澄んだ透き通る聲が無いと到底出來ぬ藝當なんだから、名古屋女のやうに濁つた銅鑼式乃至は破鍋式の音色の聲ては新内なんかを兎ても旨く謠へるものては無い。名古屋女に澄んだピッチュ（張り）の高い聲の無い原因は抑々何乎。第一が鼻の格好だ。

先づ理想的最上の聲を出す猫の格好を視るが好い。

一體、鼻の腔には色々の役目のあるものだが、其のうちの一つは、口腔と共同して咽喉から出て來た音を反響させ、之を強いものに仕上ぐる共鳴盤の作用を營む事てある。隨て鼻の腔が大きく無いと此の共鳴作用が充分に營めず、音聲が力の無いものになる。東京の三遊派寄席藝人に、三遊亭千代香といふ四十ばかりの盲目の女があり、鶴賀浄瑠璃や浮世節を賣物にし、其の音色の澄み渡つて毫末も濁つた分子が無く、全然盤上に玉を轉がすやうな處は、實に天下の一品てあるが、その女の鼻の格好は猫の鼻その儘て、小鼻が膨れて大

きく、カルル、カルスの分類法に據れば第四類の幅廣の部類に屬する鼻である。猫は矢張此の幅廣の鼻を持つてるので、彼んな美しい猫撫聲が出るのである。然るに、名古屋女の鼻はカルル、カルス分類法の第一類なる薄手の鼻で總てが輕快に出來上つてるものだから咽から來る音を鼻の腔の中で充分共鳴さする事が出來ず、隨て其音聲が美しくなら無いのである。是に於てか名古屋女は、其の鼻の格好の美しい間は永遠に其の聲は美しく無い筈のものである。

又、名古屋女の咽は他所の女よりも少し太い。隨て聲帶の長さも少し長くこれが名古屋女の音聲のピッチユ（張り）を低くゝつて男のゝに近いものたらしむる原因である。此のピッチユ（張り）が低いのは義太夫曲には可いが其の他には向かぬ。然り、豊竹呂昇は名古屋女である。

其十二　名古屋女の言葉

言葉といふものは、最も能く民族氣質を代表するものである。佛蘭西には短い綴りの音で複雜な意味を含ませた言葉が多い。これは如何に佛蘭西人が氣の短い何事も手ッ取り早く氣早やに出かける人種であるかを示すものだ。それに反し、獨逸語には澤山の單語を寄せ集めて之を更に一つの語に作り上げた言葉が非常に多い。讀本の卷一を披けてさへ此んな種類の言葉の見當る程で、總て、言葉の音の綴りが長い、これから押して行くと、獨逸人の思想若くは學術といふものも、矢張り、獨逸語に連接語の多いやうに、他國人の考へ出した事を寄せ集めて之を我が思想とし他國人の發見した原理を更に祖述したり接ぎ合はしたりして、之を我が學術としたもので、獨逸人の學問は一ショウペンハウエルを除く外は悉く獨創的分子を欠き、多くは受賣的のものだといふ事が知れる。獨逸學問は丁度坊主の袈裟が寄せ布で出來てるやうに、全く他國人の發明發見の接ぎ綴ぎもので今の本邦學者達に迷信されて居るやうに、決して難有いものでは無いのである。

名古屋女の言葉＝＝否な言葉といふよりは寧ろ言葉遣ひは、實に亂暴なものである、實にゾンザイで荒々しい事、この上無しである少しも、女らしい優しいところが無いといふても不可無しだ。名古屋は、東西兩

京の間に介在して、中京とまで曰はれもし、又自らそう任じても居るところである。それに、其名物の女の使ふ言葉が、此う亂暴で且つゾンザイでは、折角の評判を惡くする恐なきにしも非ずだ。

名古屋女の言葉遣ひには、此く亂暴にゾンザイなところがあるのみならず又頗る横柄に聞こえて、何と無く其の言葉のうちに傲慢不遜に思はるゝ節々がある。これには、色々の原因もあるが名古屋女は話をする時に言葉の配置方が下手で、前の節と後の節とを結びつくる連結語を使はず何んでも切り出し器械から切り出したやうに、ブツリ／＼と一節一節を獨立さして投げ出す。而も、その投げ出し方が間投詞の形式を帶びて居て對手の顏の前に放り出すやうにするもんだから、自然、言葉が亂暴で横柄て、又ゾンザイなやうに聞こえる事になるのだ。希臘全盛時代のスパルタ人の言葉といふものが、要點だけを飛び／＼に話すやり方で、ゝ之をラコニツク式言語と稱したものであるが、名古屋女の言葉はラコニツク式とでも言ふべきものだらう。

名古屋女は、元來、その音聲が濁ッて居る。それに此くの通りな愛嬌に乏しい亂暴にして且つ不遜、且つゾンザイな言葉を遣ふのだから、其の言語によりては到底男を惑はす力が無いのである。然しそれが東京上りをして修業を積み、言語にも魔力のあるやうになれば、その特得の魔力ある肉と相並んで、所謂鬼に金棒といふ事になる。是に於てか、東京の花柳界に名古屋女の跋扈する又所因無しとせずだ。

其十三　名物名古屋舞踊

名古屋には流石に才人が多い。誠に能く考え出したものである。

肉を賣るのを其の職業にして居る女郎でさへ、まさか裸體になつては居らぬ。巴里あたりには靴下一枚の外何物をも身に着けぬ文字通り赤裸々て店を張つてる女郎もあるそうだが、少なくとも我が大日本帝國に丈けは憚り乍ら其んな醜業婦は一人も居らぬ。皆な夫れ相當に身を飾つて居る。殊に昔の吉原の大籬の花魁だとか京の島原の太夫さんだとかいふものになると、それは大變な裝飾て、頭髮は赤熊か何かて素的に結ひたて、それに金銀鼈甲瑇瑁の櫛、笄、金糸銀糸の刺繡を

し瑠璃を鏤めた補襠なんかをゾロリ羽織つて、鈴入りの塗下駄を穿いた足を八文字に履むといふ騒ぎ、實にエライものであるが、その實は唯一介の肉を賣る醜業婦に過ぎぬのだ。總て馬子にも衣裳賣物には花の譬の如く、賣肉婦と雖ども花を飾らねと、世の中の受が宜しく無い文明の社會といふものは萬事に露骨を忌む。修飾に修飾を加へるのが、是れ即ち文明の大勢と申すのである。

名古屋女は、その肉の勝れて居る點から言へば、天下に敵無しであるが、ソウ正面から眞額に天下一品の肉を看板に押し立てゝ、世間に賣り出す譯にも行かぬ。頬邊が佳いの鼻の格好が美しいのと切り出したんでは、僞善を生命とする今の文明社會の紳士だちが、内々腹の底では「是ある哉〳〵」と思ふて拍手歡迎、手が咽喉のところまで出て居るにしても、一應は世間の體裁上御辭退致さねば相成らぬ事になる。それでは折角の良い椋鳥を皆な逃してしまう恐無きにしも非ずだ。何か此の肉を飾るに美術的技能を以てし、之を呼物なりダシなりにして、多くの男共を引きつける工夫をせねばならぬ。

舞踊は、詩歌、彫刻、音樂、建築、繪畫などと共に美術の一科である。

詩歌、彫刻、建築、繪畫といふたやうなものになると、一寸お手輕に景物とする譯にも行かんのだから、一般の女は何處でも音樂の景物にして、之で男共を引きつけやうとする。その又音樂のうちでは器樂では無く主として聲樂で、端唄の一つも謡へるやうになるのを、何れの女も心懸けるものであるのだが、不幸にして名古屋女は音聲が惡い。破鍋式の聲では到底如何に修業するも、之を呼び物にして人氣を寄せ集めるわけには行かぬのだ。

是に至りて考えついたものが、名物名古屋舞踊である。これならば、元來が骨骼から筋肉まで總て申分無く出來上つてる名古屋女の事であるから、立派なものを修業次第で御覽に入れる事が無論出來るのだ。之を立看板にして置きさへすれば實に堂々たるものて、少しも露骨な處が無い。文明の紳士諸君御連中に「舞踊もネー君、美術だからネー」とか何んとか仰つしやつ

て、少々蔭暗い事無く、名古屋女を贔負にし名古屋女に喝采することが出來るのである。

舞踊を名古屋名物にするとは、あゝあゝ、さても能く考へたものだ。名古屋には實に才人が多い。

此くの如き次第て、名古屋に舞踊の發達したのは全く名古屋女の聲の惡い結果てある。即ち聲の美の足らざる處を手足の運動の美て補ふとしたのが、今日、名物名古屋舞踊ある所以なのだ。處て、舞踊の修練には腰に力を入れるといふ事が仲々大切な物なんだから、舞踊の發達する結果は、又自然名古屋女の腰を發達させることになる。推論は屢々下がゝつた方に這入つて御氣の毒てあるが、腰の發達は又生殖器に甚大なる影響を及ぼすものたる事は、決して等閑に附すべからずてある。

其十四　皮膚の美

是に於てか、野蠻人の皮膚は最も觸覺に快感を與ふるやうに出來てる。素人が考へると、黑奴なぞは肌の觸りが甚だ惡るさうて、寧ろ薄氣味惡く感ぜらるゝが、實際は然らずて、世の中て肌觸りの佳い事、亞弗利加の黑人ほどのものは無いのてある。

こんな風に野蠻人の皮膚が觸覺に快感を與えるやうに出來てるのは、觸覺といふものは、人類の五感のうちても其の基礎になる感覺て、野蠻人には此の感覺の外に充分發達した感覺が無く視覺や聽覺のやうなものは、唯鋭敏だといふ丈けて、發達して居らぬからの事てある、その結果、野蠻人の男女は互に視て美しい異性よりも、觸れて膚觸の佳い異性を選む事になり、雌雄淘汰(シュアルセレクション)の法則て、黑人なぞの膚觸が非常に佳ひものに發達して來たのてある。

然し、文明人になると、高等の感官てある處の視覺が發達して來るので、觸つて心地の佳い者よりは、視て美しいものを好むやうになる。即ち觸覺美よりも形と色との美しいのを選むやうになる、その結果は、文明人の皮膚の色は段々美しく白いものになるが、其の反比例て膚觸は追々と惡るくなつて來るものてある。白皙人種の皮膚なぞいふものは、我々黄色人種に比べると、餘程ザラ／＼して肌目が粗く、肌に觸れて見て

も一寸も心地の佳い事は無いものである。加之皮膚の色が白いと兎角雀班や何かゞ出來て直に荒れ易いものである。

然し、今ては人類が文明にお成り遊ばして、男は女を見てさへ居れば夫れて濟み、女は同じく男を視てさへ居れば夫れて濟むやうになり「色の白いのは七難隱す」といふ諺の出來た程にて皮膚の肌觸の事なぞは、惡るからうが佳からうが、我不關焉といふやうな御顏付をして居られ遊ばすが、さて、雀子躍百までとやらて今日の文明人にも矢張り野蠻人時代の本性が遺つて居て、男が女を視ると、その肌觸りが佳さそうなのを好く氣が起るものなのだ。

日本人なぞは、歐米諸國て色の白い女が持てるものと思ふてるか知らんが大に然らずて、歐羅巴て評判になる美人といふのは、大抵東洋人の血の混つてる皮膚の色の、何方かと言へば、黄色人種がゝつたブルーネットといふ體質の女てある。西班牙の女が世界中第一等の美人だと言ひ囃さるゝのも、その血のうちに亞剌比亞人とか蒙古人とかカルデヤ人とかいふやうな色の黑い人種の血が混つて、その皮膚の色がブルーネット系美人の特質を遺憾無く發輝し、肌觸りが盲滅法に佳いからてある。然し、その血の太部分は白皙人種てあるから、肌觸りの佳いと共に、又視たところも頗る愉快てあるのだ。實を云ふと、餘り皮膚の色の白いのも、ぞつとしたものては無いので、病人は皮膚の色が白くなる。老人になると、皮膚どころか髮の毛や髯までが白くなる。それに又、色の白い女は、容色が早く衰へる傾向のあるもので、丁度、銅像にある線は可なりに深く刻つてあつても容易に人の目につかんが、白い大理石の像だと少し鑿を加へても、それが直ぐ目につくやうに、年波の皺が寄つて來ると、それが直ぐ又人の目につく。野心の高い妖婦なぞは暮々も色の白からざるを可とする。

是に至ると、名古屋女の皮膚の色は實に男子征伐の一大武器だといふ事になる。

其十五　名古屋女の肌

皮膚は密接の關係を生殖機能との間に有するものて、觸覺は人間に深い智識や美術上の高尚なる感想を

起すに至らしむる事は出來無いが、色慾を刺戟する事の多いもので、或る種の體質の女になると兎に角、：：：：皮膚の面積は廣い。此廣い面積の印象が人間の頭に這入ると、それが直ぐに觸覺を聯想さして、觸ッて心地よさそうな肌は視ても又同じく心地が佳いといふ事になる。之を平たく言へば、……………

　寒國の女は、之は日本でも西洋でも同じであるが、總じて色が白い。それに就ては色々の說がある然し、最近といふても最う五十年近くにもなるが千八百五十四年に、英人クレープンの唱道した議論が仲々面白いので、同氏の說に據ると、白色は熱線を反射して容易に吸收せぬ代りに、一旦吸收した熱は容易に又之を放散せぬ。隨て寒國の女は體溫の放散を防ぐ必要上から、自然淘汰の結果其の皮膚が白色にならねばならぬといふにある。之と反對に暖國の女は成るべく體溫を早く放散してしまう必要上から熱線の吸收力に富むと共に又放射力に富んだ黒色を以て皮膚の色とするのみならず、又激烈に照りつけて來る太陽の熱線を、丁度、太陽を直視する時に油煙で曇らした硝子から覗いて眼に來る激烈な刺戟を防ぐやうに、一旦黒色い皮膚で防いて、その激烈な熱線が激烈に皮膚の神經を刺激するのを防ぐやうにする必要上、その肌の色が自然黒くなるのだとは、英國の軍醫監アルコックの說である。

　元來、皮膚の色が黒いとか黄色だとかいふのは、上皮のうちの角質層と粘膜層との間にある色素の多少に因り、して又、白皙の皮膚は此の色素の皆無な結果故、暖い處ほど、大體から言へば、皮膚の色素が多い事になる。

　名古屋女の皮膚の色は、奧越女のやうに白く無い、總て帶黄淡褐色なるを以て特色とする。これは、名古屋の地が暖からず寒むからずの中庸を得て居る爲に、自然、皮膚にある色素の分量が中庸を得て、九州女のやうにマレー、ポリネシヤ式に濃褐色にならず、又奧越女のやうに白くもならぬ原因だらう。

　處が、此の帶黄淡褐色の肌は、非常に男の助倍心を挑發する色で、歐羅巴の血の湧てる青年などが、盛に其の虜になッて命までもと迷ひ込むカルデア方面から移住して占者や踊子になッてるヂプシー、ガールとい

ふものは、此の帶黃淡褐色の肌色のものである。ヂプシー、ガールは未だ見た事は無いが、名古屋女は頗る此のヂプシー、ガールに酷似して居るものと思はれる。

帶黃淡褐色の肌は、之を覩る男の眼に黑奴のやうな黑い色や、亞米利加土人乃至は馬來人種の濃褐色の肌のやうに不愉快な感じを與えぬと共に、その皮膚に接觸すると定めしスベ／＼するであろうとの聯想を起さしむるものなのだ。是れが即ち、女の肌が帶黃淡褐色だと、男を迷す力を多く持ッてる所以である。名古屋女の肌は既に帶黃褐色なんだから又實際に於ても肌目が細く、頗るスベ／＼して肌觸が佳い。

名古屋女は既に其筋肉に於て丈けても、男を魅する力のあるところに、更に肌觸の佳い皮膚を以て之を包んでるんだから、誠に天下に敵無しだ。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

其拾六　名古屋女の指

此の頃、内務省からの訓令で、日本の警察の監獄でも、指紋法といふものを應用する事になッたが、夫れも其筈で人間の指は、不思議にも能く其の人の性情や智慮分別の深淺等を示すものである。是に於てか、獨逸の美術批評家ウヰンケルマンなどは人の指は第二の(セコンド)顏(フエース)とまで云ふて居る。されば、名古屋女が何んな指を持ッてるかといふ事を知るのは、或る意味から言へば、名古屋女の性質は何んなものかを知る事になる。

聾や啞は言語を發する事は出來無いが、巧に左右十本の指を働かして、能く胸中の感情や意志を表して居る。指は實にそれ程までに微妙な作用を營む事の出來るもので、指頭の觸覺は唇に次いで鋭敏で、皮膚も同じく全身中唇に次いで最も薄い部分である。

刀劍鑑識家は、刀にも相貌といふものがありて或る刀は高尚な品格の相貌を備え、或る刀は頗る下品な相貌を備えて居るといふが、刀にして既に然り况んや人間の指に於てをや。指にも卑い相貌のものや高尚な相貌のものがある、名古屋女の指の相貌は、頗る非常に才走ッた相貌ともいふべきもので、指の基から端に細くなッて行く工合は割合に急で、他所の女よりも指の基の周圍の太サと指の端のところの周圍の太サと

の差が大きいのだ。然かし、これは基の方が餘所の女のものよりも太いためでなく、端の方が割合に細い爲めである。例を擧げて其の形を示すと、名古屋女の指の格好は、頗る名古屋名物の傘を閉め疊んだ時の格好に似て居るのだ。餘所の女たちのうちには、能く指の基も端も同じ太サのゝを見つけるが、名古屋にはそんな不細工な指を持ッてる女は一人も居らぬ。皆なスルリと細くなッてる。それに、又、指頭の爪だこれにも二種類あッて、或る爪の端は橢圓形の端のやうに圓く尖ッてるが、或る爪の端は一直線を成して、ブッンと切ッたやうになッてる。ブッ切れの爪の人は總じて冷靜で意志堅固だが、爪の端の圓く尖ッてる人は、尖り方の激しい程感情の熱烈なるものがあると共に、又氣變りの早い性質を持ッてるものである。名古屋女の爪は圓く尖ッてる方のものが多いから、先づ意志は餘り強くなく、氣の變り易い方と見て大過は無い。

名古屋女の男を迷はすの法は、實に至れり盡せりで、頰の筋肉を豐にし之に笑靨を作る位で滿足せず、指にまても笑靨を作るんだから、實に其の用意周到なるに驚かざるを得ずである。名古屋女の指の關節に當るところは、餘所の女のゝのやうに、醜い皺が寄てるんでは無い。それが、笑靨になッて凹んでるのだ。これといふのも畢竟筋肉が緊直に硬張らずして、シナ〳〵ふッくりと膨れて居る爲めなんだらう。

多年名古屋の教育に從事して居る者の言に據れば、名古屋人は總て指端の技に屬した手工のやうなものには、非凡の天才があるとのことだが、名古屋女にあの才走ッた相貌の如何にも器用に見へる指のあるところを見ると、それは實際だらうと思はれる。名古屋女は、この器用な指で男子を團子のやうに丸めるのである。

其拾七　名古屋女の額

人類の智慮分別の力は、大抵、大腦の大さに比例するものである。然し、智力の中樞ともいふべきものは、大腦中にある灰白質であるんだから、大きいばかりでも、灰白質に乏しくッて白質のみ多いのは駄目であるが、大きいければ先づ〳〵灰白質の多いものと見做して、大過は無い。大腦が大きければ自然に額が高く出張ッて來る。

名古屋には、馬鹿な頓馬な女は、苟にも一人たりとも居らぬ。皆な賢明敏達に渡らせらるゝ女さん達ばかりだ、その結果は、名古屋女にオデコが多いといふ事になッて居る。名古屋女には全く以て額の出ッ張ッた福助人形のやうなのが多いのだ。

然し、福助人形の額は、出ッ張ッてると共に、又甚だ天空快濶頗る廣びろとした悠長なところがあるも、名古屋女の額は、唯、出ッ張ッてオデコになッてるといふ丈けて、廣い面積が無い、之れが福助人形と其の趣を異にして居るところてある。随て、名古屋女の顔を一見すると、如何にも其の悧巧そうなのに動かさるゝが、又、ゆッくりとしたところが無く、何處かに迫ッてる點のあるのが直ぐ眼に着く。之れから押して行くと名古屋女は、燒餅根性が強からうと思ふ。然し、嫉妬は有らゆる女の通有性てある。獨り名古屋にのみある弱點でも無いんだから、それが少し位強いやうに見へると申しても、決して名古屋女を誹謗する譯ては無いのだ。

額の長サは、普通に鼻の尖端から下顎骨の下端までの距離と同一なのを法とするが、名古屋女の額の長サは割合に長く伸びて居るやうに感ぜられて、オデコて出ッ張ッてると共に、又、寸伸びてある。ラヴエーターの作ッた「觀相經」に依ると、此く額の寸伸びになッてるのは、活力が不足て執着心の乏しい徴候なそうてある。名古屋女は、兎角惰氣に富んて浮氣ッぽいといふ世評が世間に無いても無いんだから、額の長サが寸伸びになッてるのも無理は無からう。

カムパーといふ人の考え出した顔面角（フエースアングル）と名くるものがある。それは、耳の外聽道の邊から門齒にかけて引いた水平線と鼻骨の正中線を通して額にかけ縦に引いた線とが交りて、作る角度を稱するものてあるが、此の顔面角（フエースアングル）は人種によりて異るものて、阿弗利加の土人などは六十度を普通とし、歐洲人は七十五度乃至八十度、黄色人種は七十度乃至七十五度といふ事になッて居る、額の出ッ張るほど此の角度は増して來る。古代希臘人は、この角度が非常に大きくつて九十度に近かつたものてある。

名古屋の女の額は、仲々出ッ張ッてるから、その顔面

船は、黄色人種なるに拘らず、或は九十度に近く希臘人に彷彿たるものがあるかも知れぬ、否な全く似て居る。名古屋女の顔は何と無く希臘の古彫刻にあるヴェナスやミナルヴァの顔に似て居るところがあるのだ。名古屋女も又名譽なりといふべしだ。

其拾八　名古屋女の衣物

女が着る衣物の縞だとか色合だとか乃至は柄だとかいふものは、その土地土地て違ふものであるが、是れは主として其の土地の空氣の具合や又山水の模樣等て異ッて來るものである。

京都の地盤は火山岩て花崗石が其の主たるものなんだから、埃塵が東京あたりのやうに多く立たぬのてある。是に於てか、空氣が非常に澄み渡ッて透明だ。その上に、京都の草木は琵琶湖の水蒸氣によりて潤さるゝので、山々の樹々が皆な翠綠滴らんばかりになりて、その色が實に何んとも言ひ難い程に美しいのてある。殊に琵琶湖を背にして居る東山に於て然りだ。こんな風て、京都は實に明るい土地てある。何となく空氣までが綠色を帶びて居る土地てある。此んな明るい空氣の透明な土地ては、自然、女の着る衣物なども色や縞柄の華美なのが釣り合ふ事になる。京都の若い女に能く眞紅燃ゆるが如き色合の衣物を着て居るのがあるが、是れは他の土地ては不似合ても、京都のやうな山綠なる地ては色彩の調和が取れて、綠と赤とが補色になるから、觀る者の眼に美しく映ずるやうになる。又、縞柄の華美なものなぞも、清澄な空氣には頗る能く適應したものて、京都の女が一般に衣物の柄合に就て華美な好みを有するのは、當然の事といふべしだ。

之に反し、東京の地盤は隅田川の沖積層な爲に、塵埃が非常に多く、空氣が絶えず濁つて透明を欠き、所謂黄塵萬丈てある。此の不透明な空氣の中ては、ケバケバしい華美な色合の衣物は甚た不調和て引き立たぬものがある。丁度葬式の時に婚禮の粧ひをさして行くのも同様なのだ。東京の女の衣物の好みは、總て澁くッて、鼠系の色を擇むのは、全く空氣の濁ッてる結果なので、所謂澁い色合のもので無いと、東京の空氣に調和せぬのてある。澁いといふのは、全く空氣の澄んて居らぬところから來た結果だ。

尾濃平原に位置して居る名古屋地方の地盤も沖積層だ。それに名古屋といふ所は、緑滴るやうな樹木の少ない處て、青山の眼に入るものが、極言すれば殆んど無いといふも敢て不可無してある。その結果は、矢張り影響を女の衣服の上に及ぼして、名古屋女は京都人の樣に華美な明るい色の衣物を着せずして、暗い色の勝ッたものを主として着るやうになッて居る。然し、東京の女のやうに、鼠系の澁い色を選まずに、紺系や茶系のものを好んて着るやうてあるが、名古屋女の衣物の好みに就て東西兩京の女にも無い特徴といふべきは、可成、人目に立つ縞柄を選まふとする事て、名古屋女の衣物の色が頗る陰鬱て田舍臭ところのあるに拘らず、何處かに人の注意を惹いて一寸振り顧みさするやうなところがある。

此のやうな衣服を染め立つるには、そんなら何うするかといふに、それは縞柄を粗くするにある。是に於てか、名古屋女は、紺系や茶系の燻ぶッた色合の粗い縞にしたものを着る事になッて、其極、帶までに縞の粗いのを〆て居る。此の結果として、藝者などのうちにも無地ものゝ据模様よりは、縞ものに据模様を染め出して着る事が流行して居るらしい。縞の据模様三枚重ねなぞいふものは、一寸、東京の藝者には目下の處餘り見當ら無い圖てある。

其拾九　名古屋女の眼

人の性情を觀察するには、先づ第一に其の眼を觀るのが昔からの御法てある。男が大抵の女に出遇ッた時にも、矢張、第一に其女の眼に心を惹かるゝのを通則とするが、不思議にも、名古屋女の眼は、名古屋女を觀る者の注意を惹く事が、甚だ薄い。總て人種は、その天賦の特徴を發達さするのを以て、雌雄淘汰の上より來る進化則の原理とするもの故名古屋女は其の地方民族の特徴たる豐頬と滑かなる膚合とを發達さして、これが男の注意を惹く事になり、其の結果眼は、自然、等閑に附せらるゝに至つたものだらう。

然し、名古屋女の眼にも色々の特徴がある。その一つは、圓くして大きい事てある。能く世間て那の人の眼は大きいとか小さいとかいふが、之は眼球の大小よりも、寧ろ目蓋のヒラキの大小に關係するもので、そ

のヒラキの大きいのが、即ち眼の大きい人といふ事になるとは、獨逸の醫師フーゴー、マグヌス博士の說てある名古屋女は、確に此の目蓋のヒラキが大きい。それが爲に、如何にも眼が大きいやうに見へるが、眼球は寧ろ小さい方だ、然しその穹窿の度が强いので、少し目蓋のヒラキが大き過ぎはすまいかとの感を見る者に與へる。

回々敎の經典たる哈勤全經（コーラン）に天堂極樂の模樣を書いた一章がある、何んでも此の處にはホールスと名くる天女が常住して、幾千萬人の亡者と交つても永久に童貞を維持して常に未處女てあり、其眼は圓くして大きいと記されてある。名古屋女の眼を觀ると直ぐ起る感想は、回々敎の極樂に常住するホールスと名くる天女の眼は、名古屋女の眼に似たものて無からうかといふにある。然り、名古屋女は誠に此ホールスの如く、幾千萬人の男子と交りても、永久に童貞を維持し、常に新らしく常に未通女てある。

此く目蓋のヒラキが大き過ぎて、眼球穹窿の度が高い爲に上下目蓋の緣の彎曲の度の又隨て甚しくなッてる者は、稍々神秘的の性情を帶びて、世間を白眼視する傾向のあるものだとは、米人フキンクの意見てある。然らば、斯る種類の目蓋を有する名古屋女は、一般の男子を宇宙間の最大愚物と腹の底てセヽラ笑ひして、天下の事以て與みし易しと做しつヽあるは、必ずしも察するに難からずだ。然し、古くはラヴエーターの「觀相經」近くはハヴロック、エリスの說などに據るも、大きい眼の人は概ね皆な聰明穎悟のものなりとの事故、名古屋女が頗る御發明に渡らせ給ふ事も、又察するに難からずてある。東京ても又他の地方ても藝者て成効して居る所謂名妓なるものに細目の女は一人たりとも無い皆なヒラキの大きいものばかりてある。名古屋女たるもの、以て其の意を强ふするに足るては無いか。

其貳拾　常碧色の白膜

名古屋女の眼に就て、更に一の特徴とも云ふべきは、俗に白眼と稱せらるヽ部分、即ち眼球中の白膜に相當するところが、碧瑠璃の色を帶びて居ることてある、名古屋女といふても、下は紡績工女より上は總理大臣の奧方まてある事故、素より皆な一概に然りとは言へぬ

が、名古屋の地に足を入れて女の眼を注視すると、直ぐ眼に附くのは、此の白膜の帶碧色なことてある。

總じて、人類眼球の白膜には、その色が人により人種により四種ばかりの別がある。第一は純白のもので、第二が帶黄色のもの、第三が毛細血管の入り込んで、紅色の脉絡を生じて居るもの、第四が帶碧色のものてある。日本人は一般に男女とも其の眼球白膜の色が帶黄色て、それに毛細血管が多少入り込み、脉絡を成して居るのを常とするが、名古屋女は、不思議にも其眼球白膜に此の毛細管の脉絡が出來て居らぬのみならず、純白の上を通り越して、青味がゝッて居るのてある。

米人フキンクの說に據ると、白膜に毛細血管脉絡の出來て居る眼球を持ッてる人は、萬事に氣が早く、感情の熱し易い資質て、俗に逆せ性のものてあるといふが、兎角、日本民族は感情に走り易く喧嘩好き故、逆せ性の眼を持ッてるのも、無理からぬ次第といふべきだらう。然るに、名古屋女の眼球白膜に、毛細血管の脉絡が出來て居らぬのを見ると、その逆せ性に非ずして如何にも頭腦の冷靜て感情に走る事などの無い性てある事が知れる。又、白膜の帶黄色なのは、その人の性情が膽汁質て、剛情なのを示すものてあるが名古屋女の白膜が黄色を帶びて居らぬのによりて推せば、名古屋女は剛情な分子が無く、闇の中から突き出された手にも、餘り反抗せずに、そのまゝ引かれて行く性情の傾向を有して居るものなる事をも又察するに難からずだ。而も、白膜も帶碧色なるは、往々にして結核症或は腺病の徵候てある、之から言へば、名古屋女の體質は、餘り强健なりとは受取れぬ。

之を要するに碧色の白膜ある眼球を、二つ眼窠(めくぼ)のうちに備えさせ給ふ名古屋女は、……頭腦は頗る冷靜て、手を懷の中に入れ財布のうちに銀貨が何枚あるかを勘定し得る性質のものといふべきだらう。然しこれは決して惡るい事ては無い。これて無ければ名古屋は富まず、名古屋女は天下に覇を稱することが出來ぬのだ。

其貳拾一　光る眼ざし

エッキス光線とか、ラヂウムとかいふ人の氣の附かなかッたものが、光線のうちに含まれてありて、それ

が又、人の氣の附かぬやうな作用をして居たことは、漸く此の頃に至りて發見せられたところである。して見ると、女の眼からピカリ〳〵と出て、男の魂を有頂天にしてしまふまでに魅(チャーム)する力のある光のうちにも、何か一種不可思議なるエッキス光線のやうなものが含まれて居てそれが男の身體を刺戟するのではあるまいかと、近世の學者のうちで研究を初めたものがある。米國の例のケーラスや、お馴染の『觀相經』の著者ラヷェーターなどは、男を魅する眼ざしのある女の眼光のうちには、一般の女よりも強い一種の磁力が含まれて居て。神經力が神經系統の中を流れて歩くやうに、それが體外にまでも放射されて、觀るものを刺戟し其の心を魅(チャーム)するのだといふて居る。此說また一理無きに非ずて、露國皇帝及び皇后の御歸依並々ならなかッた祭司(ファーザー)ジョンは、昨年物故したが、この坊さんに祈禱を授けられる爲めに、頭の上に手を置かれると、如何な不信者でも萬人が萬人まで、全身にエレキをかけられたやうなるところから、歸依者の殖えたものだといふ話だに。或る研究家の說に據ると、これは全く祭司ジョン

が非常に動物電氣の强かッた男なるが爲めだッたと言はれて居る位である。然し女の眼ざしの光り輝いて、それが男を魅(チャーム)するのは、必ずしも之を神經磁力の作用に歸せずとも、頗る見易い原因がある。

それは、精神の興奮した時には、目蓋が自然緊縮されて釣り上り、眼の開きが廣くなりて白膜を多く現すのと、涙腺から涙の分泌が多いのとに原因する。名古屋女は常に興奮して居る。それに、まさかの時の用心に常々準備をして居る爲めといふでもあるまいが、涙腺からの涙の分泌量が平生に多いのである。白膜が多く現れて涙が常に多く眼球を潤して居るのであるから、勢ひ名古屋女の眼は潤味勝に光ッて居る。支那の詩人の句には雨を帶る梨花一枝といふ語があり、西洋の詩人の句にも朝露に潤ゑる薔薇の一輪などいふ語があるが、名古屋女の眼は、白膜が多く現れて、それに涙が絕えず多く分泌せらるゝを以て特色とする。兎角、潤味勝である。

江戸女は、白膜が純白で、それに少し血走ッたところがありて毛細血管の脉絡も出來、少しも潤味を帶び

ずカサ〳〵して、唯パッチリとしたところの眼もとのあるを誇(プライド)とし、之をキャンだとか傳法(でんぽう)だとかと得意になッてるのだ。此處が、名古屋女と江戸女との眼の相違てある。

其貳拾貳　エキスプレッシヨン

何れかと言へば、名古屋女は眼のエキスプレッションシヨン即ち表情に乏しい。一體、眼は何んなにすれば、表情に富んだものになるかといふに、主として眼球を靜に落ちつけて置かずに之を動かし、尚ほ眼球の運動と共に目蓋や眉を動かすにある。その上、瞳孔の伸縮、涙腺より出る分泌液の増減なども、眼の表情に影響するものてある。

名古屋女は、常に興奮して、目蓋を廣く開け、涙腺より涙の分泌が多量て潤味勝の眼になッては居るが、眼に變化をさする術を知ら無い。詳しく言へば、眼の訓練が充分に行き届いて居らぬので、臨機應變に眼球や目蓋眉などを運動さして、之を表情に富んだものとする事が下手なのてある。

其處に至ると江戸女は、余程名古屋女よりも進んだところがある。眼に充分の訓練を加へて、一寸した話をするにも、眼球を縦横十文字に動かし、眉を釣り上げるやら目蓋を縮ますやら伸ばすやらし、眼窠(めくぼ)の内にある七本の動眼筋を休み無く働かすのてある。

名古屋女の眼に、變化が無くて、此く表情に乏しいのは、色々の原因もあらうが、一つは今名古屋の天下を風靡して居る西川流の舞踊の影響てあるだらうと思ふ。眼球及び其附屬器關の運動訓練は、歐米ては多く舞踏學校に於て之を教授するが、日本でも、矢張、踊の稽古のうちに多く修得して、その習が遂に性となるのてある。

西川流の名古屋舞踊とて、決して眼の訓練を等閑に附してるのてもあるまいが、振が總て眼を多く運動させずに濟むやうに出來て居るから仕方が無い東京式の踊殊に藤間流の踊になると、振の筋立が一本調子にならずに變化に富んて、眼を充分運動させねばならぬやうに出來て居る。これて、眼を始終訓練されて居るのだから、江戸女殊に藝者の眼が、エキスプレッションに富む事になるのも無理は無い。

ダンテの語に「眼は戀の初にして唇は戀の終なり」とある。名古屋女が、益すその勢力を天下に扶殖し、江戸女を壓倒しやうといふのには、豊頰や腐合だけては、到底足り無い。此の上に眼の表情が豊になりさへすれば、鬼に金棒てある。精々眼の體操を勉強するのが、今の名古屋女の急務てある。

其貳拾參　名古屋女の髮

髮は、人の相貌を變化する有力の分子て、女が髮の結ひ方を變へると、全然、別人のやうになりて見へるほど、人體美に影響するところの多いものてある。之を譬へて言へば、女の頭の上に髮の毛のあるのは山の上に森や林の茂ッてるやうなもので顏の色の白いところに、反對の黑い髮がフサ〳〵して、茲に美はしい、對照が出來るのてある。禿山の美しく無いやうに、髮の毛の少い相貌は、觀る者に不快の感を與へるものて、平均、人の頭には、約十二萬本の髮の毛の生えて居るのを法則とするものてある。

掏摸が女の髮に差し込んてある金銀の簪なんかを拔き取る時の手段といふものが、仲々面白い。若し、その目差す髮の簪が左に差してあると、輕く右の方に指を觸れる。すると、その女は直ぐ不思議にも自分の手を髮の右の方にあげて、何か變化が起ッたのては無いかと、その方を氣にするので、茲に簪の差してある左の方に隙が出來るから、この隙に附け込んて左にある目差す簪を拔き取るものなそうだ。女は總じてこれ程までに、一寸しても髮の事を心配するものてある。西洋の女が、帽子を何よりも氣にして、新流行を追はんとするに汲々たゞ是れ及ばざるを恐れ、我が邦の女が唯この髮の形を毀さん事を恐るゝばッかりて、苦しい思をしながら、窮屈な箱枕をして寢るといふのも、皆な髮といふものが、女の美貌を作る大なる分子てあると自覺して居る結果てある。

處が、不幸なる哉、名古屋女は此の髮の毛が、不足てある。みづ〳〵した緑の黑髮は、之を到底名古屋女の間に發見することが、困難てある。米國ミローキ大學の教授ライ氏の說に據ると、人が餘り智力を働かし過ぎて、腦力を使用することが過度になると、段々髮の毛が薄くなりて、遂に禿頭になるとのことてあるが

名古屋女の髮の毛の薄いのは、如何にせば男子を操縱するを得べきかとの一事に餘り苦心して、その結果、腦力を過度に使用し、此く髮が不足になッたのかも知れぬ。然し、又一方から考へると、梅毒性の遺傳ある體質のものは、髮の毛の不足なのを例とするもの故、名古屋女の髮の薄いのは、この病毒の遺傳がある爲めては無からうかと、心配せられざるにも非ずである。

人形に電流を通ずると、その頭に植ゑてある髮の毛が皆な針のやうに立ちあがッて來る。これは電氣といふものは、總て尖端に集つて來るのが法則であるからだが、人間の情熱といふ一種の電氣も、矢張、一般電氣と等しく、尖端を有する髮の毛に集まッて來るものらしく、昔から、人が感情を激して憤怒の情態に陷ッた時の相貌を評して『怒髮冠を突く』などといふ語のある位だ、男女間の戀情も又旺盛その極度に達すると、それが髮の毛に集ッて來るので、……茲に一種言ひ難き愉快と滿足とを感受するのである。これは、全く髮集につて居る異性電氣を受けて、融和を得る結果てあるのだ。

それやこれやを考へると、名古屋女の髮の薄いのは、色々の不便が多く、女の髮一筋さへあれば大象をも繋げるといふが、名古屋女は、十二萬本の髮の毛を悉く捻り合はしても、それでは兎ても、男一疋さへ繋げぬ。況んやその十二萬本に不足がありて、光澤さへ甚だ振はぬものあるに於てをやだ。

其貳拾四　名古屋女の尻

女は、非常に尻を氣にするものである。何うも、妾のお尻は大きくッて困りますとか何んとか、直ぐ口癖のやうに氣にして言ひ出すのが常だ。然し、ハヴロック、エリスの說に據ると、尻の小さいのが美人の資格てあると觀するのは、廣い世界にも唯一の日本人種あるのみて、其他の人種殊に歐米人は、尻の大きいのを、女の人體美に必要欠くべからざる一大條件として居る位てある。これは、無理も無い事て、女の主要なる天職の產をするといふ事に尻の大小は大なる關係が有りて、尻の大きい女は、體質の發達した健全な子を產む事が出來るからなのだ。されば、男に取りて頭の大いのが誇てある如く、女には尻の大きいのが誇てある。

然るに、日本人種のみが、特に尻の小さい女を美とするに至ッたのは、全く、日本人種の特色たる制慾主義から來たもので、尻の大きいのを美と觀するのを如何にも肉慾的なりとして賤み、尻の小さいのを美とするといふ事になッたものである。然し、これは、決して自然では無い。論より證據、男は總て肩幅が尻の幅より廣いが、女は之に反して尻の幅の方が肩幅より廣く、醫學博士サーゼント氏の調査に據れば、二十歲の成年に達した米國婦人の尻の周圍は同じ身長の男子よりも六吋長いとのことである。

されば、名古屋女の尻が大きいからとて、決して心配するにも當らず、又毫もそれが、名古屋女の恥辱にもなら無いのである。男が其の頭の大きいのを誇りて其思考力に富んで居るのを鼻に掛ける如く、……名古屋女は、確に尻が大きいが、東北地方の女程に大きくは無い。一體、大きいとか小さいとかいふ語は、比較的の言葉であるんだから、名古屋女の尻は大きいといふても、其意味は頗る曖昧であるが、玆に爭ふべからざる一特徵がある。それは、出ッ尻なことである。如何に小さい尻でも必ず出張ッる事だけは確である。然し、此の出ッ尻とて又決して氣にするには及ばぬので、フキヂヤスを初め希臘美術の全盛期に於ける名人の彫刻物や、印度及びベルガル地方にある美神の彫像やは皆な是れ出ッ尻なものなそうで、之に反し、タイラー氏の『人類學』に據れば、南阿のカッフキル人種の如き蠻人の尻は殆んど背と同一平面内にあるほどだとのこと故、名古屋女の出ッ尻は、是れ即ち古來よりの大美術家が理想とした美術尻ともいふべきものだらう。之には矢張又、西川流の踊ねも餘程關係のあるものと思はれる。

其貳拾五　女の胸の槪論

女の身體のうちで、尻を初じめ腰部一面は最も緊要の部分であるが、之に次ぐものは胸である。其の故、如何となれば、胸には是れも女の主要なる天職の一つの哺乳の責任を全ふするに、必要欠くべからざる器關の乳があるからである。

是に於てか、西洋の女は、この乳のある胸の部分が頗る能く發達して居るやうに見せかける爲め、コルセ

名古屋女の髮の毛の薄いのは、如何にせば男子を操縦するを得べきかとの一事に餘り苦心して、その結果、腦力を過度に使用し、此く髮が不足になッたのかも知れぬ。然し、又一方から考へると、梅毒性の遺傳ある體質のものは、髮の毛の不足なのを例とするもの故、名古屋女の髮の薄いのは、この病毒の遺傳がある爲めでは無からうかと、心配せられざるにも非ずである。

人形に電流を通ずると、その頭に植えてある髮の毛が皆な針のやうに立ちあがッて來る。これは電氣といふものは、總て尖端に集つて來るのが法則であるからだが、人間の情熱といふ一種の電氣も、矢張、一般電氣と等しく、尖端を有する髮の毛に集まッて來るものらしく、昔から、人が感情を激して憤怒の情態に陷ッた時の相貌を評して『怒髮冕を突く』なぞといふ語のある位だ、男女間の戀情も又旺盛その極度に達すると、それが髮の毛に集ッて來るので、……玆に一種言ひ難愉き快と滿足とを感受するのである。これは、全く髮集につて居る異性電氣を受けて、融和を得る結果であるのだ。

それやこれやを考へると、名古屋女の髮の薄いのは、色々の不便が多く、女の髮一筋さへあれば大象をも繋げるといふが、名古屋女は、十二萬本の髮の毛を悉く捻り合はしても、それでは兎ても、男一疋さへ繋げぬ。況んやその十二萬本に不足がありて、光澤さへ甚だ振はぬものあるに於てをやだ。

其貳拾四　名古屋女の尻

女は、非常に尻を氣にするものである。何うも、妾のお尻は大きくッて困りますとか何んとか、直ぐ口癖のやうに氣にして言ひ出すのが常だ。然し、ハヴロック、エリスの説に據ると、尻の小さいのが美人の資格であると觀するのは、廣い世界にも唯一の日本人種あるのみで、其他の人種殊に歐米人は、尻の大きいのを、女の人體美に必要欠くべからざる一大條件として居る位である。これは、無理も無い事で、女の主要なる天職の產をするといふ事に尻の大小は大なる關係が有りて、尻の大きい女は、體質の發達した健全な子を産む事が出來るからなのだ。されば、男に取りて頭の大いのが誇てある如く、女には尻の大きいのが誇てある。

然るに、日本人種のみが、特に尻の小さい女を美とするに至ッたのは、全く、日本人種の特色たる制慾主義から來たもので、尻の大きいのを美と觀するのを如何にも肉慾的なりとして賤み、尻の小さいのを美とするといふ事になッたものである。然し、これは、決して自然では無い。論より證據、男は總て肩幅が尻の幅より廣いが、女は之に反して尻の幅の方が肩幅より廣く、醫學博士サーゼント氏の調査に據れば、二十歳の成年に達した米國婦人の尻の周圍は同じ身長の男子よりも六吋長いとのことである。

されば、名古屋女の尻が大きいからとて、決して心配するにも當らず、又毫もそれが、名古屋女の恥辱にもなら無いのである。男が其の頭の大きいのを誇りて其思考力に富んで居るのを鼻に掛ける如く、……名古屋女は、確に尻が大きいが、東北地方の女程に大きくは無い。一體、大きいとか小さいとかいふ語は、比較的の言葉であるんだから、名古屋女の尻は大きいといふても、其意味は頗る曖昧であるが、茲に爭ふべからざる一特徴がある。それは、出ッ尻なことである。如何に小さい尻でも必ず出張ッてる事だけは確である。然し、此の出ッ尻とて又決して氣にするには及ばぬので、フキヂヤスを初め希臘美術の全盛期に於ける名人の彫刻物や、印度及びベルガル地方にある美神の彫像やは皆な是れ出ッ尻なものなさうで、之に反し、タイラー氏の『人類學』に據れば、南阿のカッフキル人種の如き蠻人の尻は殆んど背と同一平面内にあるほどだとのこと故、名古屋女の出ッ尻は、是れ即ち古來よりの大美術家が理想とした美術尻ともいふべきものだらう。之には矢張又、西川流の踊も餘程關係のあるものと思はれる。

其貳拾五　女の胸の概論

女の身體のうちで、尻を初じめ腰部一面は最も緊要の部分であるが、之に次ぐものは胸である。其の故、如何となれば、胸には是れも女の主要なる天職の一つの哺乳の責任を全ふするに、必要欠くべからざる器關の乳があるからである。

是に於てか、西洋の女は、この乳のある胸の部分が頗る能く發達して居るやうに見せかける爲め、コルセ

ツトと申すものを使ッて、胸を突き出すやうにする。このコルセットを使ひさへすれば、胸が突き出るやうになるのみならず、尻も突ん出されて出ッ尻に見え一擧兩得、尻も胸も共に發達し、生殖にも哺乳にも最も適した女なるかの如く見へるのだ。然し、これは唯男の眼を誤魔化して、そう見せる丈けて、實際は却て生殖にも哺乳にも害がある。

それにしても、如何に胸の發達して居ることが、女に取りて大切な要素てあるかゞ知れる。日本の女は、例の制慾主義道德の感化て、之を餘り氣にして、化粧したり細工したりはし無いが日本の男も女の胸の膨くらんてヤワヤワして居るところには矢張夢中になりて迷（チャーム）されるのてある。演劇に『扇屋熊谷』といふ狂言のあるのは、先刻御承知の次第てあるが、あれに出て來る上使の姉輪が扇屋の折子どもを若しや敦盛ては無いかと、胸に手を當てゝ乳のあたりを探るくだりがあるが、この時上使の姉輪が頗る悅に入りて、體も溶けんばかりになる筋に出來て居る。隱すより顯れざるは無く、この演劇の筋によりても、女の胸の發達して居る事は、如何に男を惹く力のあるものかゞ知れる。さればボルクの如きは、彼の『サブライム、エンド、ビウテキー』の一章に、美しき女の最も美しき部分は、頸と胸とてあるといふてる位てある。

こんな次第てあるから、女が男を溶かさうとするには、襟のところを餘りキチンとしめずに、襟もとを少し開けて、その中から胸のチロリと見へる位にし乳の邊のところは、衣物に餘裕をつけて膨らませるなども又一法てある。こうすると、別に西洋の女の如くに不養生この上無きコルセットなぞと申すものを用ひずとも、胸が膨れ上りて見へると共に、それが又男の注意を惹く事の出來るやうになる。

これ等の點から考えて行くと、名古屋女の胸には、一種傑出した特長がある。

其貳拾六　名古屋女の胸

平均を得るといふことは如何なるものゝ構造にも、必要欠くべからざる要件て、平均を得ざる部體は、危險て又破壞し易い。是に於てか、生物が進化するにしても、或る一部が進化すれば、必ずこれと共に他の部

分にも變化がありて、それも又伴れて進化するか退化するもので、決して一部分だけの變化に止まらぬのである。これといふのも、つまりは平均を得んとするからの事で、この原理は、矢張、粧飾の上にも行はれ、西洋の女はコルセットで出ッ尻なやうに見せかけると共に、同一の道具で、胸の突き出て居るやうにも見せかけるのだ。

名古屋女が、既に出ッ尻でありとすれば、尻を反對の方面に於て、同じく出張ッたところが無いと、體の構造の上にも又美觀の上にも、平均が取れぬといふ事になる。是に於てか、後の出ッ尻なのに對して、名古屋女の胸は膨れ出すといふ事になつて來て居るこれは、生物體進化の法則の上から、當に然るべきことで、名古屋女の尻と胸との位置關係は、苟も床の間に見る違ひ棚のやうになッてるのだ。違ひ棚の、美しく、觀る者の眼に映ずる如くこの出ッ尻と膨れた胸とは、良好の平均を維持して、同く觀る者の眼に美しく映ずる。

然し、胸が膨れて出ッ張ッてるといふても、決して肋骨の彎曲の度が、世間普通の女よりも激しくなりて、前に突出して居るのでは無い。乳が充分に發達して、膨れ上ッて居るといふ意味に外ならぬ。獨逸の醫師マクス、バルテス氏の研究に據ると、女の胸の形狀には四種ありて、(第一)を椀形(第二)を半圓形(第三)を圓錐形(第四)を山羊乳房形と稱するとの事であるが、名古屋女には、この分類法の第二類に屬する半圓形の胸のものが多いやうに見受けられる。唯に乳房の形狀のみならず、佛人シャーピー氏の研究に據れば、胸廓の形狀にも又三種類ありて、(一)を扁平形と云ひ、(二)を圓形といひ、(三)を長形といふとの事だが、名古屋女の胸廓は第二類の圓形に屬するものである。圓形の胸廓に配するに半圓形の胸を以てするのだから、名古屋女の胸のあたりは、如何に其の上に衣類を纏ふて居ても、一たび之に觸るれば、男たるもの必ず『扇屋熊谷』にある姉輪と同一の感を起するに至るべしとの聯想が、之を目にした瞬間に心の中に浮んで來る。女としての此の聯想を男に起さしむ事の出來るといふのは、大なる勢力で、名古屋女はこれ丈けでも容易に男を

魅(チャーム)する事が出來るのだ。男は總て助平なものである。名古屋女は實に良い武器を天から與えられたものだ。

其貳拾七　名古屋女の足

漢語のうちに、美人の歩行する摸樣を形容するに用る文字として、『玉歩』とか『蓮歩』とかいふ熟字のある位で、女の歩行の摸樣が其の女の美を成すに必要なる條件の一つになッてるのは頗る明瞭である沙翁の『ハムレット』の曲のうちに、人間の高貴なる所以を讃揚した彼の有名な一節があるが、その中にも歩行のことに言及して居る。幾ら、體に非難の打ち場所が無いやうに、何から何まで備ッて居ても、歩行の爲樣が拙いと、總てが壞れて見へることになり甚だ引き立た無い。是に於て考え出されたものは、昔の吉原に行はれた花魁の八文字を履む事である。畢竟、あんな大仕掛の襠を着れば、何うしても、尋常一樣の歩るき方では引き立た無いからである。總じて、歩行の如何は是れほどまでに、女の美を成す大切の條件になッて居る。されば、阿弗利加のパプア土人の如きは、女が七八歳になると、其母たるものは、毎日數時間づつ之に歩行の稽古をさして、美しくするやうに訓練するとの事だ。文明社會の女になると、必ずしも歩行に依らずとも、尙ほ其他に男を惹くに足る化粧の方法や手段もあるが、熱帶の阿弗利加では、碌々衣類も着て居らぬ故、歩行を美しくして、それで男の眼を惹くやうにでもせねば困る事だらう。仲々考えたものである。

さて、名古屋女の足であるが、足は腰から下にあるものなるは、先刻御承知の通りの次第で、手や顏ならば藝者でも摑へると、觸つても見れるが、足だけは如何な藝者になりとも、流石に之を裸にして、見るわけに行かぬ。たゞ、浴場に於てのみ之を目にする事が出來るのだが、お相憎樣にも、男女の混浴は內務省の御布令で御法度とある止むを得んから、容易に目に見ゆる歩行に就てのみ言ふが、名古屋女の歩行に於て特徵とするのは、兩足を東京あたりの女のやうに、『八』の字形を成して極端な內輪にせずに、假令ひ男子の如く頭頭八字形までに外に開かぬまでも、兎に角、外に開く氣味になッて居り、極言すれば、外輪な事である。

これは尻が出ッ尻て、胸が笑出して居る爲に、餘り八文字式の内輪にしては、歩行の際、體の重心を平均狀態に維持する事が困難なためである。又同じ理由て、速歩をせずに、ハツリノツリと歩くのだ。餘り速歩をすると、矢張、重心を逸して頗ぶ恐れがある。これ丈けのことは、少し女の歩行者を注意して見さへすれば、忽ち知れる。

其二十八　名古屋女の立小便

お茶が名古屋て流行する、生花も仲々流行るといふ。それに相違無からう。一寸とした宿屋の若女將さんても、床に花を挿すくらいの事は知ッて居り、廿圓下の月給取の所謂奥さんても『何も御馳走が無いんてすからお茶ても立てませうか』といふ。然し、名古屋の女は、何の爲に茶を心得、花生の道を修むるか、甚だ以て解し難い。生花は唯花を筒に挿す術、お茶は唯茶を立てる術を敎はりもし、又、心得もして居るのだらう。茶道や花道の感化は、少しも、名古屋女日常の擧止進退に及んて居らぬ。

極言すれば、名古屋女に禮儀ありやとの質問を發したくなるほどに、名古屋女には禮儀が無い。それが、唯に劣等社會の女のみてなく、堂々たる良家の娘てさへ無作法この上も無き擧動を爲て、恬然毫も恥る處が無いんだから、實に以て恐縮せざるを得ずだ。日本のうちには、蝦夷の子孫もあり熊襲の子孫もあるが、如何に東北の極に行き九州の端に旅しても、名古屋ほどに女の無作法なところは餘り見出さぬ、良家の細君て、懷手をしながら柱に背を倚せかけて物を言ふなぞといふ圖は全國中名古屋を措いて又と他に見出し難き現象てある若し夫れ劣等社會に於ける女に至りては、實に言語道斷の沙汰て、その無禮無作法、誠に以て不愉快この上無してある。一例は、前向き後走の立小便てある。隨分と都離れた田舍に行ッても、名古屋ほどに立小便をやる女は、そう〱多く見當らぬものだ。然るに、名古屋ては立派に丸髷を結ふた着裝の美々たる花も恥らふ如き美しい三十前の細君が、劇場のやうな人込の多い場所て、平然と此の前向き後走り式立小便といふやつを、遠慮會釋も無くヂャー〱やらかす。街頭の共同便所などに這入る女は、何うせ碌ても

無い劣等社會のものだらうが、これが多くは皆な立小便てある。それて茶道が流行し生花が流行る土地柄だといふんだから、愈よ以て驚かざるを得ずだが、一事が萬事の諺の如く、女の立小便旺盛の一事だけても、名古屋女の禮儀に乏しいのが、知れるては無いか。

一體、禮儀の根本義は、人性の自然に琢磨を加え、之を修飾して美しいものに仕上げ、その人に接する者共に愉快なる感情を起さしめ續いて是等を惹きつけるにあるんだが、名古屋女の肉は、自然そのまゝて既に餘り多く勢力に富んて居る。これに琢磨を加え修飾を施すには餘りに勿體な過ぎる。、、。名古屋女の肉は、實に肉そのものが大勢力て、態々人工の禮儀なぞといふ小面倒なものを借り込むには及ばぬのだ。

隨て、天賦自然の肉の勢力に信頼する事篤く、其極遂に無禮講に流れ、立小便をやらかすを以て國粹とするやうになッたものだらう。

其二十九　名古屋の細君美

名古屋は女の名所だと、日本全國にも其噂が鳴り響いてるので、旅の者などは直ぐ茶屋に車を向けて、名古屋女の標本を一見せばやと、藝者を招ぶが、さて、その來る藝者に碌な顔の者が無い。是に於てか、旅の者歎じて曰く、聞くと視るとは大違ひ！と。名古屋に居る地の藝者に、美しいのが無いのは、金で賣られるやうな女は、總て貨幣論にある、グレシャムの法則に支配せられて、美しいのが驅逐せられて名古屋以外の地に高い直段て出て敢て醜いからとて多大の不滿足を懐かぬ名古屋の地には、糟ばかりが殘されてる事になるためな事は、『名古屋女』の第一章に詳く申した通りてある。

此くして、名古屋には藝者に眼につくやうな女の少ない代りに、細君の美しいのが頗る多い。美しい人妻の多い事、蓋し名古屋の如く多さは、夫れ稀だらう。廣小路の通を一度素通りした丈けても、店頭に旦突と火鉢を圍んてる綺麗な細君が却々少なからずてある。これは、人妻に成りて身を錢にする必要のない樣な家

に生まれた女は、如何に美しくとも態々生國を出づる必要無くそのまゝ名古屋の地に落ち付いて居ることが出來るので、名古屋名物の美人が獨り細君の階級のみに殘ッて居ることになる爲めなのだ。旅の者、若し名古屋に來り、茶屋に這入り、名古屋女を見やうとすれば必ず失望するが、店頭を軒並に覗き込んで歩るかば、必ず三嘆に値する尤物を發見する。苟も店さきに且突と共に顏を曝らして居る位の女は、多少皆な其の顏に就て自信のあるものである。

細君とて初めから細君の位にあるては無い。娘が出世して細君になるのだ細君に美しいのがある以上は、又細君の前身たる娘にも美しいのが多かるべき筈の推論となるが、娘には美しいのが細君ほどに多く無い。これは、一種奇怪の現象の如くに受取られるが、これには原因がある。元來、處女美と細君美とは、餘程その趣を異にしたもので、處女美は動美であるが、細君美は靜美である。

名古屋の處女は餘りに獸性に富んで居る、詳く言へば生理體に籠ッて居る自然力が餘りに猛烈である。これは、處女の人體美を僻に近かいものにして、人間の香ひを薄くするの恐れがあるので、却て觀るものを反撥せしむるが、既に人妻となりて男の洗禮を受け、その猛烈な獸性が緩和されるやうになると、玆に其の體に人間の貴い香ひがついて來るので、美しいものになッて見へる。名古屋處女の動美は、假令へば噴火最中の活火山たるヴエスヴヰアスの如く、名古屋細君の靜美は、既に噴火を終りて靜に眠る死火山富士の如きものである。

これから押すと、名古屋女の最も美しいものは、三十前後の寡婦のうちにあるだらう。

其三十　混血の美

世界中の女のうちで、何處の國のものが、一番に美しいか。佛蘭西の女が一番だとか、加奈太の女が一番だとか、色々と喧しい議論もあるが、西班牙女が恐らく世界中で第一等の美人だらう。これには多くの旅行家も異存は無いのだ。

何故、西班牙女が世界第一の美人たる稱を得るに至ッたかといふに、これは、西班牙人種が、世界中に於

て最も血液が複雜で、各種類の人種の血が相混じて西班牙人の血管を流れて居るからの事である。

ダルウキンの說に據れば、植物でも同じ一本の草木の中で雌雄媒合を行ッたものよりは、成るべく遠ッた包圍に生育した同種の雌雄間に行はれた媒合によりて生ずる植物は、丈けも高く重量もあり、其構造其の組織ともに頗る强健で又繁茂の力も旺盛であるとのことだ。

此くの如くにして、西班牙に美人の多いのは、西班牙人種が混血人種たるに所因する。何故、又混血人種が美しいものかといふに、色々な人種が入り亂れて雜婚を行ふと、その雜婚によりて各人種の特徵を遺傳する際に、種々ある各特徵の間に、生存競爭が行はれ優勝劣敗の淘汰作用がありて、各人種の種々な特徵のうちでも優等な部分だけが殘りて劣惡なものは退化してしまふからだ。是に於てか、混血種族には之を組織する原(エレメンタリー)人種の良い特徵だけが寄り集まることになる。されば、西班牙の如く、ケルッ族、希臘拉典族、ゴス族、カルデヤ族、フヰニシヤ族、猶太族、亞拉比亞族等の各種の雜然として混亂交婚の歷史を有する土地の人種には、是等各人種の優良なる特徵が遺傳されて、そのうちより世界第一の美人が生れ出づるに至るは、當に然るべきことである。

佛人、ド、マ氏の說に據れば、同じ支那人のうちでも、漢人と蒙古人との雜種に美人が多く、又同く佛人モンデリエーレ及びモーリス二氏の說によれば、漢人と安南人との間に生れたる子孫には、是れも又仲々美人が多いとの事である。

名古屋女の肉が、何故に今日の如く發達して、他に粧飾禮儀などの力を借らざるも、肉そのものが、天下の男子を惱殺する力あるまでに至ッたか。これ他なし。名古屋女は複雜なる混血人種の子孫であるからだ。抑々景行天皇の御宇、智仁勇を兼備せる絕世の丈夫日本武尊に想はれた尾張の連の娘宮簀媛がまづ第一に混血兒である。

其三十一　宮簀媛は混血兒

日本武尊は、日本全史を通じて、一異彩を放つほどの最も詩趣に富んだ御人物である。熊襲征伐に御出か

けになられた時には、倉長川上梟帥、尊を女と誤り信じたらしい。以て、尊の智略武勇が一世に冠たるものありしと共に、御風貌も又頗る端麗の美丈夫たりしを知るべしだ。それほどの美丈夫たる上に、父の天皇に對せられては忠孝の御志篤く、妃殿下の弟橘姫は、尊の軍旅に随ひ、偶々海上風波に遇ひて乗船の將に覆らんとするや、尊の一命を助けたいばかりに、船荷を輕くしやうと、自ら怒濤の中に飛び込んだといふほどに、女にも至極馴つかれて、人情の糸の如く細かなところのあらせられた御人物である。

これほど、女達にヤンヤと持て囃されるべき有らゆる美點を備へられたる尊のこと故、弟橘姫の御投海後、大和朝廷にある高天原種族のうちから、妃を迎へられんとするに意あらば幾らでも候補者はある。然るに尾張即ち今の名古屋地方に入らせられてから、尾張の連の娘たる宮簀媛が御目にとまりて之を娶られ、御滯留も長びき、愈よ膽吹山に暴神征伐に御出かけあらせられるに際しても、神劍を媛の許に預けられたほどなところを見ると、宮簀媛は大和朝廷の高天原種族の間にも稀に見るほどに、男子を惹きつける力のある女で却々肉の發達したところのあつた美人たるに相違無い。而して、此く宮簀媛が日本武尊を動かし得たのは、全く媛が高天原人種と土人との混血兒であつたが爲めその風貌のうちに、純高天原人種の持たざる魅力を有して居たに基因するものと思はれる。

景行天皇の御宇には、日本武尊が駿河に於て逆賊共に苦められ給ふた程故まだ〳〵尾張附近にも、日本島の原住人種たる土蛛蜘や蝦夷やの子孫が住民の大部分を占めて居つたものと思はれる。尾張の連は申すまでも無く大和の中央朝廷より派遣せられたる鎭撫使のこと故、純然たる高天原人種であるが恰も平城天皇の御宇出羽守小野良實が出羽國小野村の住人町田長右衛門の娘を娶りて、絶世の美人小野小町を擧げさしたやうに、高天原人種たる尾張の連も又、土蜘蛛人種や蝦夷人種やの混血によりて生れたる其の頃の土人の娘を娶りて擧げしめたものが此の宮簀媛で、その肉のうちには、高天原人種の特徴に、土蜘蛛人種、蝦夷人種などの有らゆる美點をも併せ發揮して居た爲めに頗る日本

武尊の御心を動かしたものだらう。

其三十二　混血の名古屋女

東京の新聞も盛んに名古屋に賣り込まれる。大阪の新聞は素より名古屋に來る。名古屋によりて代表せらるゝ濃尾平原は日本第一の沃土で、而も日本島の中心である。戰國時代に於ても、又、明治の今日に於ても北東と南西との兩勢力が、此處を占領せんとして、雙方から押し寄せ來り、一たび之を占領すれば容易に手離すまいとするのも、無理は無いことだ。さて、頭の方からと尻の方から兩挿みにされて見ると、中間にあるものは、自然、揉みに揉まれて遂には英雄などといふものを生み出すやうになる。多くの武將と政治家が、一時名古屋地方から蹴出したのも之が爲めてある。

尾州德川六代の宗春卿が、諸國より美人を狩り集めたので、その血が今日まで遺りて、名古屋に美人か出るといふものもあるが、その以前より既に古くは宮簀媛を初めとし、淀君とか北政所とか男子をす魅する風貌のある女が名古屋地方から續出して居る隨て、名古屋女の肉が今日の如く發達したものになつてるのは、その來るや決して一朝一夕のものに非ずして、日本全土に渡り人種の大移動が行はれた際に、其源を發したものと推定するのが至當である。

總て人種は何れも赤道を境界として、兩極に向つて移動するのを法則とする。北半球の人種が赤道を越えて阿弗利加、太洋洲、南米などに移住するやうになつたのは、北半球を喰ひ詰めてしまツてから後に起ッた最近の出來事て、人口が未だ北半球に稀薄な頃は、皆な北へ〳〵と移住したが常故、その果して印度洋方面より來りしものなるや、將た烏拉爾阿爾泰山脈の方面より來りしものなるやは之を知るに難しとするも、兎に角日本の有らゆる人種は南方より來りしものに相違無く、景行天皇の御宇の頃には、土蜘蛛人種が尚ほ九州方面にありしほど故、此の人種が尾張方面にも蝦夷に征服されながら殘存して居ッたに相違無い。又、その頃、蝦夷は駿河方面を殿として、尚ほ其の勢力を、依然、名古屋地方に少くも今の東京新聞の勢力ぐらいだけは及ぼしてたものだらう。その處に南方の大和朝廷系統の高天原人種が押し寄せて來る。つまり三人種

の落合となッたらうが、濃尾平原は全國第一の沃土な丈けに何れの人種も容易に此の平原を棄つる氣になれず、三人種は全國何れの地點に於けるよりも最も長き年代の間、名古屋地方に於て鼎立の狀態を維持し、其の結果、雜婚行はれ、茲に混血美を發揮して、今日の名古屋女あるに至ッたものでは無からうか。

各種の勢力の衝突する處には、英雄の生れる如く、各人種の衝突するところには、雜婚によりて美人の生れるもので、美人系とは換言すれば、混血系である。

其三十三　名古屋女の朝湯

名古屋には、割合に錢湯屋が少い。これは、名古屋人が餘り鹽物を多く食せず、それに又、煑物でも何んでも醬油不足の水澤山で、鹽分を多量に攝取することなく尾張名物の大根腹な爲に、脫鹽作用を促進する必要も無く、隨て態々湯に這入るにも及ばぬ結果でゝもあらうか、兎に角、錢湯が割合に少い。その少い錢湯のうちでも、朝湯の起つのは更に又少い。その少い朝湯に、更に更に少い二三の女が這入りに來るからとて、敢て氣に留めるにも當らぬことのやうに思はれるも、實は、一種異な現象である。

東京は盛に朝湯の行はれるところであるが、これは主として男湯で、女湯の方は十時頃にならぬと起たぬのだ。ところが、名古屋で朝湯のある錢湯屋になると、女湯も男湯と同一時刻の七時頃から早や沸いて居る。これといふのも、入浴に來る女がある故の事で、何れの朝湯に行ッても、七時半頃には、必ず二人位の客が女湯にある。その又朝湯に來る女が淫賣婦とか藝者とかいふ性質のものならば、敢て怪むにも足らんが、それが皆な良家の主婦若くは老孃體のものであるんだから、實に驚かざるを得ずだ。東京には如何に朝湯が普及して居ても、八時前に錢湯に這入る女なぞはまづ〳〵無い。若し、有りとせばそれは偶々田舍出の赤毛布連の女のみである。

朝湯に行く女の數は、名古屋でも素より少數である。然し、天地正大の氣が秀でて芙蓉の峯となッたやうに、名古屋女特有の或る性情が凝ッて朝湯となッたもので、二三名古屋女の朝湯は全般名古屋女の代表的現象といふも不可無しである。是に於てか、名古屋女の朝

湯は、名古屋女の懐手、名古屋女の立小便と共に、名古屋の一名物たるを失は無い。

人體中に含まれてある鹽分は、排尿によりても排泄せらるゝが、主として發汗作用によりて脱離せらるゝものである。是に於てか、脱鹽作用を營む爲には、人間が勤勞して發汗を促進せねばならぬことになる。若し、此の脱鹽作用が完全に行はれず、鹽分が多く體中に蓄積せらるゝやうては、頗る不愉快を感ずるもの故、人は自然活潑に勞役して、發汗を促し脱鹽を計ることになる。入浴は此の自然法に依らざる人工の脱鹽法である。

朝湯に行くと、最う其の時に充分體中の鹽分を脱離してしまふので、其後脱鹽作用を營む爲め無理に勞役をする必要が無くなり、自然の生理作用により、氣が何と無くユックリするやうになる。名古屋女には、この一日を安樂に暮したいといふ氣の一般に普及してるのが、茲に權化して少數ながらも、女の朝湯となッてるものと思はれる。名古屋女の朝湯は是に於てか、名古屋女に偸安の氣が横溢して居るのを示す代表的現象といふべしだ。

其三十四　名古屋女の性情

一寸交際をして面白い事、名古屋女ほどのものは、全國其類稀なりてあるが、長く交際ふと又、名古屋女ほど厭なものは無い。その原因はと言へば、畢竟ずるに、名古屋女に忍耐力の乏しいところから來る。

何うせ、世の中は僞善て持つたものである。人間もつゞまるところは動物てある。母の胎内から動物慾の淡泊な利己心の皆無な人間などといふものは無いのである。一色の馬鹿提燈ほどの大提燈を眞ッ晝間に點けて、ダイオゼニース氣取りて探して廻ッても、そんな人間は到底一人たりとも見附からぬものてある。たゞ人間に僞善ありて、天賦の動物性を節制し貪瞋痴等もろ／＼の惡念邪心を追ひ拂ふので、茲に初めて人らしい動物らしからぬものが出來上るまでの事だ。然し、此の僞善に最も必要なるは、忍耐力てある。

名古屋女には、肉に魔力のあるのと人證エレキの强いのとて、まづ、男を惱殺するが、その上初めて男には、殊勝らしく我が持ッて生れた弱點を包んて見せ、

[illegible]事が上手なので男は皆な有頂天になり、名古屋女に醉ふてしまふのだ。此の僞善が永續さへすれば、名古屋女も立派なものであるが、悲哉それが出來ぬ。少し永く交際ふと、遠慮會釋も無く、有らゆる女の弱點をブチまけてしまふ。一寸したことにも腹を立てる、自分は至ッて浮氣の癖に男には黑ッこげに嫉きつく男子に敬意を表する事を忘れて一にも二にも尻に敷ふとする。仕末に終へぬは名古屋女である。つまり、名古屋女は男に狎れ易い性情を持ッて居る。

これといふのも、素はと云へば、忍耐力の乏しいところから來るのであるが、何も、名古屋女には羞恥心なるものが又甚だ乏しい。此んな不體裁な事をすれば女子の體面に關するからといふやうな觀念は殆ど絕對に無いと云ふても不可無してある。名古屋女は、今少しく武士道の修業を要する。デリケシーの德を養ふ必要がある。

此く遠慮會釋も無く、有らゆる弱點をブチまけられると、生醉本性違はずて、いくら初めのうちは醉はされて居た男でも遂にはイヤになッてしまふ。

然し、又、名古屋女が忍耐力に乏しく羞恥心に乏しいのは、その肉が餘りに發達せる自然の結果、動物性も隨て大に發達し、その勢ひ猛烈にして、並大抵の力では之を制御する事が出來ず、又羞かしがッて右顧左顧する遑などの到底之れ無に原因するのだ。

其參拾五　傍若無人

同く人間が其弱點を暴露するにしても、之を婉曲に暴露してくれゝば、接する者に左までの不快な感を與えずとも濟むが名古屋女は、毫も修飾を施さずして、弱點を其儘暴露する。全くムキ出してある。元來が禮義の觀念に乏しい人種のことてあるんだから、我が弱點を暴露するに當り、素より之に美術的修飾などを加ふる餘地のあるべき筈が無い全く以て傍若無人てある。

大抵の處の女ならば、嫉妬をやくにしても、その形式が歎願的て、綿々たる情緒の細やかなるものがあり、男子の心を動かすに足るが、名古屋女の嫉妬に至りては、全然、夜叉か羅刹の狂ひ出した時には斯るものにやあらんと想はるゝまて亂暴至極なもので、其間に少

しも優しいところが無い。これといふのも、餘りに其肉が發達し過ぎて、爲に動物性の猛烈なるものあるが爲めだらう。

名古屋は、女の持てるところだ、詳く言へば、女の方が男よりもツブシが利いて金になるのが早い。隨て女の子を非常に珍重する。これが一般の思潮になッた爲めといふでもあるまいが、名古屋女ほど傲慢不遜な女は又とあるまい。これは、下は工女や女中より上は最上等の女子教育を受けた女に至るまで、滔々として皆な然りである。些少たりとも、男が弱味を見せたり鼻の下の長いところを御覽に入れたりすると、忽ち其の間隙に切り込んで來て、傍若無人に擧動ひ、「鼻の端で男を下知しやうとする。その傲慢不遜なるところ、二タ目と見られたものでは無い。毫も恭虔なしほらしいところが無い。

女子の德操に最も大切なるものは、犧牲の精神てある。犧牲の精神無くして女ある事無しといふも、決して過言では無い然るに、傲慢不遜を以て誇とする名古屋女には、此の犧牲の精神が甚だ以て乏しい。その癖、男を我が犧牲に供しやうとするには、仲々熱心である。俚言に、蝦で鯛釣るといふ語があるが名古屋女に若し少しても犧牲獻身の精神ありとせば、それは、鯛を釣る爲に蝦を犧牲にする丈けの事て、愈よ幾ら糸を下しても鯛が釣れぬと極まれば、一疋の小さな蝦さへ、容易の事では犧牲に供さぬ。何處までも打算的で自我を離れぬ。これも矢張、肉が餘りに發達した動物性の猛烈なる爲めである。

其参拾六　人妻に適せざる女

親切とは、犧牲の精神が、具體になりて現はれたものをいふのである。犧牲の精神に乏しい名古屋女に、素より眞の親切の有りやう筈が無い。名古屋女は、女の中でも、最も親切氣の無い女である。自分を護る事には、一から百まで行屆いたものだが、他人を世話する事になると、頗る非常に不行屆なものである。手前勝手の我儘主義、これが名古屋女の理想である。然し、これとて又、肉が餘り發達し過ぎて、動物性の猛烈なる結果と思へば、是非も無いと申すもの。

名古屋女は名譽を重んずる觀念に乏しい。同く愛知

膝下の三河國は、德川時代に於ける武士の本場である。武士の生命は其の名譽にある。かゝる名譽(オーア)を生命とする地方を手近に控えながら、如何なれば名古屋女は此く名譽を重ぜ無いか、殆んで不思議な程に思はれるが、我が利益のためとあれば、その利益の有形無形たるを問はず、女子の面目とか自分の名譽とかいふものが如何に傷けらるゝも、そんな事には、一切お懸念無く、鯱鉾立ても何んでもする。名古屋名物金の鯱鉾は、金銀の爲めなら、名古屋女は鯱鉾立ても何んでも致しますといふ謎かも知れぬ。さてさて情無い事だ。これも矢張、肉か餘りに發達し過ぎて、動物性の猛烈なる結果であらう。

長く名古屋に在住せる人々の噂では名古屋には間男が流行するといふが、それ或は然らんだ。肉が餘りに發達して來ると色慾が旺盛になるのは素よりいふまでも無く、その上、克己心に乏しく、自我的で名譽を重んぜず、親切心が無いとなると、當然、間男をすべき筈のものである。一體皆な女といふものは有婦の男子が女買ひをしたがる性情のあるやうに、間男をしたがる天賦の傾向のあるものだ。たゞ、それを爲すに貞操を守るのは、名譽(オーア)を重んずるからのことだが、それが無いとなれば、間男をするのは、寧ろ當然だ。

總じて又女は、我が弱點を最も多く其の夫に對して曝露するもので良人以外の男子に對しては、充分念入りに僞善を演るが、夫には總て有の儘をブチまけるが法である。ところが、如何に偕老同穴の契を結んだ夫婦の間だからとて、名古屋女のやうに、遠慮會釋も無く、傍若無人の態度を以て、女性の有らゆる弱點を頗る猛烈にブチまけられては、亭主たるもの誠に以て閉口せざるを得ざる次第となる。況んや、その女房が甚だ我儘氣儘て、傲慢不遜、且つ親切心無く、時に間男をする恐れあるに於てをやだ。是に於てか、名古屋女は、人妻たるに適せざる性情を有すとの結論に達する事になる。

名古屋男は、祖先以來多年の經驗によりて、能く此の消息を會得して居るので、名古屋女は人妻として甚だ賣行が良好で無いらしい。是れ、名古屋女の盛に藝娼妓として國外に輸出せらるる所以だらう。男達よ、

如何に色に渇けばとて、決して名古屋女を女房に貰ひ受くる勿れ。

其参拾七　名古屋女の智力

文字を讀む丈けの速力ならば小供の方が大人よりは早いものである。これは、小供は餘り考えることをせずに、無意味にスラ〳〵と讀んで行くからで、何方かと言へば、小供に近かいところのある女子といふものも、又、文字を讀む速力にかけると、男子よりは矢張、早い。同く考えることが少ないからの事だ。此くの如くにして、萬事に呑み込みが早く、考える事の少ないのが、女性智力の特色である。

文明史の著者として有名なるバックルは、「智識の進歩に於ける女史の勢力」と題する一論文のうちに、却々旨い事を云ふて居る。氏の説によれば、女は總て其の智力の傾向が演繹的で、自分の頭の中にチャンと豫め定めて置いた意見で萬事を決裁しやうとするが、男の智力は歸納的に働いて、種々の事實を考究批判した上で、自分の意見を定むるやうになるものとの事である。

又、總じて女は之を男に比較すると智力が早熟のものである。これは、日常誰しも氣の付いて居るところなるのみならず、スコット、トーマスなる米國人が千九百三年六月發行の「通俗理科學月報」に公にした結果に據ると、同國で大學を卒業する者に就て言へば、女が何うしても男よりも齢が若い平均になるとの事である。女の早熟は唯に文明人のみならず、エスキモーの如き野蠻人でも同じである。

名古屋女は、女性としての特徴が善惡ともに最も能く發達して居る事は、既に是までも數々述べたる如くである隨て又、その智力の點に於ても女性としての特徴を最も能く發達さして居る即ち、觀察が萬事に淺薄で、早や呑み込みに過ぎ、而も早熟であるのだ。

賢そうに見えて、其實馬鹿なものは名古屋女である。悧發そうに見えて、其實何事も腹の中に呑み込めて居ら無いのが、名古屋女である。名古屋女の智慧は總て皮層すべりをする丈けで、少しも深いところに届かぬ。御當人は餘程活眼か何かの積で、種々采配を揮り廻はして居ても、それで却て他人に利用せられて居るやう

なことがある。又、餘程見込のある積て惚れた男が、存外見込の無い男て、これが爲に食ひ物にされるなぞいふ憂き目に遇ふのが、殆んど名古屋女の押しなべて陥る運命だ。

然し、一寸目先が利いて、呑み込みが頗る早いから、兎角、男は女の智慧に感動せられ易い傾向のあることゝて初めのうちは之にチャームされ、頗る非常に感服するが、その器用な智惠は、如何にも淺薄てチつとも深いところの無いのに忽ちイヤ氣が差し、直に飽いて來る。心細さは、名古屋女の智力だ。それに、慾が少なからず此の智力に手傳ふので、その働いた後の形跡が頗る醜いものになる。

其三拾八　名古屋の女中

共進會も近づいて來たので、何れの旅人宿も旅客が輻輳するだらうと、準備それぞれ怠り無き時に當り、最も苦痛とするのは、女中の適當なるものを得られぬといふ一點にある。素より名古屋にも女中志望の女が澤山ある。然し、和蘭には水多けれども飲むべき水の少いやうに、女中志望者多けれども、女中たり得る資格のある女が名古屋には頗る少ない。旅店主人の言に依れば、名古屋女の女中に適せざるは、行儀の惡るいといふにあるらしい。是に於てか、名古屋の紹介業者は、女中を多く三重縣方面より仕入れて、之を名古屋に供給するに苦心中とのこと。

誠に以て其の如く、名古屋には旅店にも料理屋にも碌な女中が無い。女中といふものは、一の小細君てある、人妻として必要なる有らゆる性情を具備して居らねばならぬ、隨て、人妻に適せざる名古屋女は女中にも適せぬことになる。

名古屋の旅店に入りて何よりも不快に感するのは、旅店の主人等か明に其弊を認めて居る如く、女中の不作法なるにある。少し客が甘い顔をして見せると忽ちこれに狎れて、例の名古屋女特得の傍若無人を擧動ひ出す。人間に敬意を表する氣などは、毛頭も無い。碌々客の身邊さへ世話せぬ。その癖、御祝儀はタンと貰ひたい方てあるが、鐚錢一文遣るのも何んだか惜しい氣になるほど、不行屆てある。長逗留の客があると垢のついたものがあらば、夫々洗濯屋に出すとか、自分

て洗ふくらいの事をするのが、當然であるが、名古屋の女中は夫をせぬ。惡くすると、客の脱ぎ捨てた衣類を其儘丸るめて押入の中に押し込んで置く位のこともせまじきほどの無精者である。これといふのも、畢竟するに名古屋女の性情中に、眞の親切心無く怠惰偸安の氣が横溢して居るところから來るのだ。

東京の料理屋の女中には却々傑物が多い。餘程の藝者でも一目を置くほどのものであるが、名古屋の料理屋には到底そんな傑物は居らぬのだ。何れを見ても山家育ち。然し、それも其の筈である。女中などになるものは、女のうちの劣敗者で、藝者になるほどの器量も遊藝も無く、されぱとて、工女は骨が折れ女郎は何んだかイヤといふので、止むなく女中に成りさがり而も、皆な押し均して向上心の乏しい連中のみなんだから。

普通の家庭に雇傭せらるゝ女中は何んなものか餘り多くを知らぬが、矢張り怠惰で不注意で親心切がないことは宿屋 料理屋の 女中と其 軌を一にして ゐ るだらう。

其參十九　名古屋の藝者

江戸の藝者は唯に、服裝に意を凝らすのみならず、體を錬へるにも却々骨を折りて之に技巧を加へる。是に於てか、江戸の藝者の姿と來ては實に天下の一品で何とも云ふに言はれぬ美しいところがある。江戸藝者の體と姿とは、一種の美術作品に成ッて居る。

此くして作り上げらるゝ江戸藝者の體と姿とは、成るべく脂の臭さ味を脱して、超人間の美を發揮しやうとするにある。少なくとも、それが理想である。當今は江戸にも大分脂臭い風が吹いて來て、昔と違ッたとはいふものゝ、矢張、藝者の理想は、此超人間の美に達せんことにあるのだ。

美學者の用ふる言葉のうちに、共に同く美しい狀態を形容したものではあるが ピクチユアスク (Picturesque) とビウチフル (Beautiful) との二つの語がある。江戸藝者が其體と姿とによりて發揮せんとする美は、正にピクチユアスク美で、ビウチフル美では無い。ピクチユアスク美には自然のまゝを發達さしたといふよりも人の技巧を加へた分子が多く、之を稱して「妖

趣、とでも言はゞ言へるべく、兎に角、人間離れのしたところがありて、稍や荘美即ちサブライム美に近く之に接したものに愉快の念と共に、多少恐怖の感をも感ぜしめ、随て崇高の氣が、幾分か其間に宿ッて居る。平たく言へば、少しは氣高いところがあるが江戸藝者て、此のピクチユアスク美の發揮に少し意を用ひて居るものになると、時々全身の垢者といふものをやる。これは「垢拔」といふても、別に垢を拔くのでは無い、寧ろ、脂拔きて、全身に加里性の强い陶土のやうなものの這入ッてるパッチリ白粉か何かを塗り、一晩そのまゝにして寢ね、翌朝になッてから、入浴して之を洗ひ落すと化學作用で皮膚に停滯して居た脂が拔けるのだ。これは、勿論不衛生たるに相違無いが、江戸藝者が其身を以て美術作品たらしめんとするに鋭意して居るところは此の一事によりても容易に察せらるゝ。

ところが、名古屋（在住）藝者の體貌美に關する理想は、全然、江戸藝者と其系統を異にし、成るべく人間臭く、成るべく脂臭からんとするにある。體そのものを美術作品にしやうといふ氣が毛頭も無い。隨て、少も地を離れたところが無く、崇高なところも無い。これが即ち野暮といふものである。

其四十　積極的不見轉

成るべく人間臭く、可成脂濃くしやうといふのが、名古屋の藝者の理想て、つまりビウチフル美即ち豐艶の美を、其の體によりて發揮しやうとする。これは、元來の身體の造構が此の種類の美を發揮するやうに出來上りて、筋肉が發達して居る爲めなんだらうが、藝者の姿や顔を頗る動物的のものにしてしまふ。其結果少しも氣高い崇高なところが無い。それに又、西川流の踊といふものが、往々之に身を入れる者の身體を、越後國の角兵衛獅子のやうにしてしまふ、弊無きにしも非ずて、名古屋の藝者の姿や形は、頗るメタ〱したものになつてピンとしたところが無い。

藝者は、今や日本國中何れの地に行つても、皆な淫賣をする。不見轉をやる。江戸の眞ン中の柳橋にさへ、空氣枕を帶に挿んで歩く藝者があるといふ噂の立つ位な時世だ。然し、名古屋ほどに藝者が淫賣を職業の大部分てあると明白に自覺して居る處はあるまい。その

證據には、東京でも其他京阪地方でも、藝者の不見轉報酬が頗る高い。然し、名古屋は頗る安い。これは、名古屋の藝者社會には、不見轉を特別例外の場合とせずに、普通一般の事と心得て居る思潮が横溢して居る結果である。名古屋の藝者は止むを得ず淫賣するに非ず進んで淫賣し、之を職業の主要なる部分と心得る空氣の間に生活して居る。或る藝者聲明して曰く「旭廓に行くのは、つまりませんよ。名古屋では藝者が安くッて、旭廓に行くと同じ位なものなんですから」と。これといふのも矢張、肉の餘り發達して居る結果で、小六ケしい藝術の力に依るよりも、肉に依りて立つのを便利とするからのことである。

それに、又、名古屋の藝者は頗る會話に拙で、衆人間に交りて得意の話題を發見し、縱横に嬌辯を振り廻す事が出來ぬ。これも、名古屋女に生れついて持つて來た素質であると言へば、それまでの事であるが、名古屋の藝者は、其の發達した肉以外に誇るべき何物をも持たぬ。

此くの如くにして、名古屋女は、正當な意味に於ての藝者たるに適せぬものである。然し、唯一の名古屋女に最も適した商賣がある。

其四十一　名古屋の女郎

名古屋の女郎は日本一である肉の最も發達した名古屋女が、女郎として大成功を收むるを得るに至れるは素より當然の事だらうが、藝者として如何にも氣高いところの無い名古屋女も、女郎としては、稍や氣高いところがある。

東京の女郎は、如何に吉原の大籬にお職を張つてるものでも、甚だ動物臭いところがありて、如何にも肉を賣るのを看板にして居るやうに見えて、甚だ品の下等なものだ。

これは、吉原なるものが、殆んど社會の大勢と沒交渉で、餘りに城廓を堅固に固め過ぎ、世間の推移と共に進化して行かぬ爲めだらう。一體、東京の女郎は、其の服裝からが、餘りに一般社會と懸け離れて居る。是に於てか當世の男共に滿足を與へる事が出來ぬ藝者が密賣淫を盛に演るやうになつた原因の一つは、政府が女郎を餘りに逆待する結果である。若し今日の如く

女郎に禁足を申し付けず、随分と娑婆に出て宴席に侍するの自由を與へるやうにしたら、藝者の密淫賣は自然、消滅するやうになるだらう。

名古屋の女郎は、唯に其の肉の發達して居る爲に、成功を收める事が出來たのみならず、女郎屋の制度組織が、女郎を甚しく逆待せぬ樣に成て居るのも亦原因である。服裝なども可成藝者に近づかしむることになつてるので一寸見ると、名古屋の女郎と藝者は、その區別が容易に付き難い。東京の女郎の締てる帶は頗る簡單なもので、之を見た丈けでも肉を賣る看板だなと思へるが、名古屋の女郎は兎に角本帶を締て居る。假令、それが前帶たるにもせよ、それは倹約の方から來たもので之を解くに便利にする爲めといふのでは無い。こんな風で、女郎買に出かける男は、名古屋女郎を買ふ事によりて唯に、その肉慾を滿足させ得るのみならず、又形而上の趣味をも滿足さする事が出來るのだ。

又、東京の女郎は、その職業に不熱心である……。是に於てか、名古屋女郎は日本一だといふ事になる。

其四十二　磨かれたる名古屋女

芝で生れて神田で育ち、今はめ組の纏ひ持ちといふ流行唄がある。名古屋に生れて江戸で育ち、玉に磨きをかけると、それが今度は天下の美人となり又名妓になるのだ。名古屋は唯女を產出する丈けの名所で、加工地では無い。

玉磨かざれば其光を放たずといふが名古屋女は唯その肉に於て發達したるものあるのみで、形而上の方面に於ては、缺點ばかりである。否な、それ程六ヶしく行かずとも、音聲、言語、擧動、禮儀などいふものが、既に甚だ振るは無い。是等に磨きをかけぬと、折角持つて生れた上等の肉が一向に光彩を發揮せぬことになる。名古屋女が今や、東京で非常な勢力となるに至ッたのも、畢竟するに、此の上等の肉に江戸磨きをかけたからの事で、つまり鬼に金棒を握らせたも同然、天下の男共はドシ〱と之によりて張り倒されることになッたのである。

名古屋女の肉に就ける最大の缺點ともいふべき音聲の幅廣く濁るところなども、東京で二上り新内のやう

なものを充分に仕込むと、之を矯正して行く事が出來る。カナリヤや目白のやうな小鳥の鳴きの惡るいのは、暫く上等の鳴きの鳥籠の側に置くと、自然にそれに感化せられて鳴きの美しいものになる。況んや、萬物の靈長で、而も呑み込みの早い名古屋女に於てをやだ。

言葉遣ひや、擧動の傲慢な不遜點などに至りては、素より之を矯正することと易々たり矣で、東京のやうな生存競爭の激烈な諸國から入り込んで來る人傑を寄せ集めたところでは、如何な名古屋女でも、名古屋で行くやうな行き方では、兎ても通用が出來無くなる。忽ちにして頭から叩き潰される事になるのだ。隨て、是等の缺點は雜作も無く矯正されて、禮儀もあり、意氣なところもある立派な女に仕上る。

此くして磨き上げられたる名古屋女は、女として殆んど完全無缺なものである。磨かれたる名古屋女は、肉の靈の洗禮を受け、有形の美と無形の美とを兼ね備えたものになる。

然し雀子踊百までといふ諺もあれば如何に江戸の上水で磨きあげても、腹の底までの改良は餘程六ケしいものと見えて、持つて、生れた慾の深い根性だけは、容易に矯正され難いものらしい。これとても、金これ權の當世柄、餘り攻擊すべきでは無いが、實は、女の女として最も貴いところは無慾な點にある。これも磨き序でに磨き取りて、常に樂て身の態度を取るやうになりさへすれば、名古屋女も見上げたものになるがさて、これは恐らく出來無い相談だらうて！ (終結)

「名古屋女論」の全編に亘りて何等卑猥の箇所なきを確信すと雖も、當局の見る所往々吾人の見解と異る所あり、不測の損害を蒙ることなきにしもあらざるを恐れ、止むなく處々二行又は三行を削りて……を附したり。此段深く筆者及び讀者に謝す(編者しるす)

人物評論（三）

秋元興朝論



△秋元子爵

三宅雄二郎

秋元子が小西園寺侯だといふこと、殆んど通り語となつて居るが、先づ其邊の處てあらう。二人共に硬くいへば聰明、軟く言へば悧巧の人、能く物が分り相應に學問も有つて趣味も廣い。學問といふ程の學問が無い爲かも知らぬが學問に捉へられる跡が無い、さればといつて文盲連の目の前ばかりとは固より異なつて居る。何でも分つて面白味を感ずるといふ方て、野暮嫌ひてある、強ち野暮を憎むても無い、之を憎むのは未だ野暮なのてあつて、野暮にも面白味を感ずるといふ程野暮を拔けて居る。生れも生れだが、世の中を渡るに何の困難を感ぜない、思ふ樣にならぬことが色々あるにしても、餘り苦にせぬ、世間は左樣いふものと認めて居る。先づ彼の邊の地位て分りのよい事は珍しい程てある、上情にも下情にも通じて居る。身體の壯健ならぬ處まて二人が相似て居る、壯健ならぬとて唯遊びもせぬ、惡い時は惡い時として保養もすれば、仕事が出來れば仕事をする、場合によつてはなか／＼勉强もする。相ひ異なるところを擧ければ種々あらうが、門地の違ふのが重てある、現に秋元子は西園寺侯に劣つて居る、侯は政友會の總裁て前に總理大臣となり、今後も總理大臣にならぬと限らぬ、秋元子に之は望まれぬ、侯に代つて總裁となるとも思はれぬ。けれども

それが能力の優劣によるかと問へば決して然りと言はれぬ、若し秋元子をして侯爵たらしめたら西園寺侯の爲し來つた事を爲すに何の困難を覺えないてあらう。能力さへあればよいて無いかといふが、子は子爵にして總裁となり總理大臣となる迄の能力を備へて居らぬ、西園寺侯とても能力はあるものの、侯爵として初めて總裁となり總理大臣となるのてある、子爵の位置に居つては頗る覺束ない次第てある。好し能力はあるにしても是迄認められてある程に認められぬてあらう、先づ公卿中の悧巧ものとしか見られまい。それ故今日の位置に差のあるのは門地の爲だとして妨ない。

二人共に聰明てある、時勢に通じ利害に明かだが、時として過ぎたるは猶ほ及ばざるが如してある、徒らに己れの利を計るのてなく、團體若くは國家の爲に最も得策なりとする所に出やうとするが、常に勢を推し移るが如くに見える、勢に抵抗するは最も禁物てある、勢が變じて來たと見れば何か行掛りがあるにしても、それに拘泥して彼れ是れ頓着するのは野暮てある、其儘にあつさり從ふがよいといふ方に見える、人より見たる悧巧過ぐるかに疑はるゝのも其故てある。

そして奇妙なことには兩家共に此傾向を先祖の代に示して居る、藤原公經は所謂西園寺太政大臣てある、別莊に佛堂を設けて西園寺と稱したから西園寺家が出たのだ、所が公經は廷臣て有りながら鎌倉に緣故が深い、賴朝の親戚にも當る、そして承久の亂に北條氏に便利を與へて居る、從つて大に朝廷から忌まれたが、勢からいへば朝廷は鎌倉に負けるに定まつて居る、遂に公經の考へ通りになつた、斯くて亂定つて後太政大臣となり、それから退隱して愉快に世を過ごしたが、それも强ち朝廷の不利を計つたても無いてあらう、亂が起るとなつては致し方ない、鎌倉の兵を蒙るの外ない、外は無いとして其間に朝廷の安全を計つた處もあつたてあらう、さう一概に責むべきてはないが、悧巧過ぎた仕方と見えぬてもない。秋元子の家は元と上杉氏に屬し、北條氏が強くなつてから又之に屬した、そして小田原が落城してから更に德川氏に屬した、其間格別

卑怯な振舞があつたとも傳へられて居らぬが、先づ色々と移り變つたものである、德川氏に屬してから、元祿年間即ち赤穗事變の起つた頃は老中の随一として幅の利いたものである、そして聰明を以て聞こえて居つた。時勢に通ずることは兩家の特長と見做して宜い。二人は別段先祖の感化を受けたといふても無からうが、生れ付き悧發な上に先祖の事を聞いて知らず〲解し得たところも有るであらうか。

何にせよ勢を見るに巧である、政友會は唯勢に從ふ方である、それ故二人の心を得て居るであらう。が時勢に連れて通ずるものは無難であるが、際立つて面白い事がない、歴史の中に有つても無くても宜い樣になる、西園寺内閣は桂内閣と比べて之ぞと云ふべきことが無い、桂内閣の方が多く事を爲して居る、聰明のみでも事は足らぬ樣である。星の樣な野暮な分子が藥にしたくも無いといふのは善し惡しである。けれども全きを望むことも出來ぬ、先づ聰明といふを認めて置けば宜からう。

二人共に聰明で先祖も能く勢と推し移る方だが、公卿と大名の差はある、子は家は祿高からいへば大名ではないが、大名に列して居た、實は公卿と大名といふよりも、公卿風と武士風といふが當たらう、公卿に共に語る可からざるものなく、大名に共に語る可きもの無しといふが、秋元子の如きは普通の武士と見做して宜い、子は武士といふことを餘り好みもせぬらしい、例の野暮を好まぬ所からしての事でも有らうが、西園寺侯に比べれば少しこつ〲して居る、二本差したといふ跡がある、二人共に武士道といふ類に重きを置かぬにしても、此邊に相違がある。秋元子は其弊をいふが其利をも認めて居る、西園寺侯の全く冷淡なのと同じくない。

二人共に政治家としてよりも紳士として立つ方が適當である、政治は本職とせず道樂として居る、政治で運命を決しやうといふ樣な事は敢てせぬ、勝てばよし負けたとて何でも無いとして居る。國家を念頭に置かぬでも無いが、先づ其政事に關係するのは碁を圍み謠

曲を歌ふといふ樣な處てある、そして何が熱心かといふに之ぞと指し難い、先づ紳士として別段不足を感ぜずに世を送り行くといふ方てある、危急存亡の場合に奮發もしやう、が左樣な危急存亡の有るべくもない、此に於て優々寛々悧好もの として立ちて行くのてある。が紳士として西園寺侯は風流の浮名を流すけれど、秋元子は左程に聞こえて居らぬ、孰れが眞に優つて居るか、侯は自らだといふてあらうし、子も亦自らだといふてあらう。(談話筆記校閲濟)

△秋元興朝子

竹越與三郎

秋元興朝子は大名華族中最も珍らしき人物てあつて、それ自身已に批評の値があるが、今や談話會の首領として、其言行世間の耳目に聳ゆることゝなつて、其性格は更らに批評の値があると思ふ。自分は同子とは殆と十八九年知合てあるが、交はることと久しきに隨つて益同子の識見、人格に就て尊敬を增し、他日は必ず政界の一要素になるてあらうと思つて居つた。果せる哉、今回伯爵及び子爵の友人に援けられて談話會なるものを作り、藩閥政府が二十年間養成し來つた研究會と相對立して、一大勢力を此に現はして來た。藩閥政府の談話會を見るや、恰も伊藤公が藩閥より脫して政友會の首領となつたる時の如き、驚きと恐れとを以て之を見て居る。從つて談話會に對する讒誣中傷少なからず、又同子の人物に就ても、種々誤解を懷かしめるが如き策を採つて居るやうてあるが、自分の信ずる所に依れば、談話會の領袖として最も其人を得たものてあらうと思うて居る。

同子は極めて識見に富み、且其進退は始終道理に依つて居るといふことは、自分の深く敬服して居る所てある。同子は曾て伊藤、陸奥、西園寺といふ進步主義の人と交つて、曾て其籍は外務省の無任所全權公使といふことてあつた時代もあつたが、是等の因緣より、藩閥の人々と交際なきにしもあらずてあるが、其中てや

はり陸奥、伊藤、西園寺といふ進歩にして寛大なる主義を有つて居る人々と始終相往來して、曾て其交際及政治上の來往が他に外れたことがない。此頃或官權新聞に、山縣公の所へ行つたけれども容れられないので、談話會に入つたといふやうのことを書いてあるものがあつたが、此事は全然中傷であつて、同子は山縣公に一二度位は二十年前に會つたかも知れぬが、今日は停車場などて會つても、殆と山縣公も其顏を知らず、同子も山縣公と挨拶を重ねるほどの親交が無い位てある。故に山縣公に趨いたけれども、容れられざるが爲に伊藤公に走つたなどゝいふことは、讒誣も亦極つた話てある。のみならず同子は研究會の出來た時、及其後に至つても、屢々研究會に入會を勸められ、且研究會に入れば必ず貴族院議員に選擧すべしといふ豫約を申込まれたけれども、同子は研究會の成立を快とせずして、曾て首を傾けたことは無かつたのてある。同子は其門地といひ、人物といひ、研究會に入れば必ず相當なる一席を得るといふことゝは、何人も疑はぬ所てあるが、同子の性格は之を快とせずして、今日まて研究に加はらずに來たものてある。所謂同子は人に倚つて事を爲すことを嫌ひな質てあるといふことは、之に依つて證明せらるゝのてあつて、吾より古を爲すといふ氣慨のあることは同子の性格てある。

華族は其交際及臣下などの種々なる關係に依つて、斷じて政黨に入るといふやうのことは極めて少い。然るに同子は、伊藤公が政友會を起すや、斷然として身を投じて其一員となつた。

當時彼の左右は、種々なる妨碍をしたに拘らず、毫も其志を動かさなかつた、是亦子の一見識有る性格を現はして居ると思ふ。又昨年の選擧の時、同子の舊領館林の舊藩士が、中立議員となつて打つて出てゝ、同子に就いて、何卒舊藩主及舊藩臣といふ關係に依つて援助を願いたいといふことを申し出たことがある。所が同子の返答が極めて面白かつた、同子答へて曰く、足下政治を爲すに二つの道がある、即ち封建的の遺り方と、立憲的のやり方てある。封建的のやり方て謂は

ど、藩主は藩臣を助け、藩臣は藩主を助けるといふ關係である、此時に當つてや、舊藩臣は善惡に拘らず藩主の馬前に討死せねばならぬのである。此筆法を以て謂へば、予は現に政友會員であつて立憲主義を標榜して居るものである、然らば藩臣は藩主としての助けを得んとするならば、予が政友會の旗を揚げて居る時は、中立などゝ言はず、斷じて政友會員として議院に打つて出てねばならぬ、是が封建的の仕方である。若し又藩主は藩主たり、我は我たり、自由の行動を取る心があるといふならば、是亦一つのやり方である、藩主の命を奉ずるの必要はない。併ながら同時に藩主藩臣の關係に依つて助けてくれといふが如きことは、此際に言ふべきことでない。封建的のやり方ならば封建的のやり方、立憲的の遣り方ならば立憲的のやり方、各區別せねばならぬ、都合のよき時ばかりは封建的、都合の惡しき時は立憲的といふが如きは、予の承認する能はざる所である。且それ今日の如く政治が團體組織となつて、團體を以て相爭ふ時に當つて、僅に筆算の才がある位の者が、箇人の力を恃んで中立として打つて出づるなどは、先の見えぬ極度である、議院に在つて一箇人が何事をも爲し得るものでないから、左様な無謀のことは止めたら宜らうといふことであつたが、其言ふこと如何にも理義明白であつて、他人の籬に倚らずして自ら立つといふ氣象を示して充分であると思ふ。同子は又舊大名の華族の間に通有なる、感情に走るといふことの極少い人、否感情なきにしも非ずであるが、冷靜なる理論を以て此感情を抑へて、縱令反對黨の事と雖も一應は冷靜に考へ、縱令自黨の事と雖も一應は冷靜に考へるといふ、理義を尙ぶの性質がある。是れ即ち同子の議論が平凡に陷らざる所以であつて、華族中に珍らしきのみならず、亦當今の朝野の政治家中にも、斯の如く理義を尙ぶ人は多くあるまいと思ふて居る。て同子の家は、曾て老中として、所謂柳澤女太平記のあの柳澤と權力を爭つた位の家柄であつて、大に德川氏には用ゐられたものて、其門地といひ其財產といひ、晏如として居れば一箇人の望は足れりてあ

るが、此上に更に華族社會に新らしき政治空氣を注入せんとするといふ、其志は實に諒とすべきものてある。同子が談話會を率ゐて如何なることを爲すかといふことは、第二の問題てある、談話會が如何に成功するかといふことは、第三の問題てある、併ながら兎に角華族社會に新しきムーブメントを起したといふ此一事は、同子は已に成功したのてある。自分の見る所を以てすれば、是は獨り同子の功に非ず、時勢が之を促したものてあるから、談話會は必ずや成功するてあらうと思ふ、成功した後は必ずや理義の立つた運動が出來るてあらうと、深く望を囑して居るものてある。要するに同子に於て最も著しき事實は、見識に富んで居ること、理義の明白なること、吾自ら立つといふ氣慨のあることが其最も著しきことてある。併し同子の缺點を言へば、身體多病にして風采の揚らざることてある、同子は理義を重んずるの餘り、風采の如きは何れにても可なりといふつもりて居るかも知れぬが、併ながら凡そ大事を成すに當つてや、風采體格といふが如きものは、人の言はざる所てあつて、而して最も注意を怠つてはならぬ所てあるのに、同子健康甚だ勝れず、友人が運動をして身體を强壯にし、併せて風采を揚げるといふことを勸むるに拘らず、毫も之を顧みる所がないのは、是は餘り理義に重きを置いて、世に處するの活術を閑却して居るのてはあるまいかと思ふ。要するに短長あるに拘らず、同子は朝野の政治家を通じて、著しき性格を有つて居るといふ一事だけは掩ふべからざることてある。但し同子の著しき性格が如何に發動すべきかといふことは今後の問題てある、今日までは少數なる友人の間に知られたことてあるが、今後は天下の人の共に認むる時が來るのてあらうと思ふ。其時に此性格が如何なる働きをするかといふことは是は天下が如何に談話會を發達せしむるかといふことゝ相關聯した問題てあつて、要するに明言は出來ぬが、必ずや著しき結果を留めるてあらうといふことだけは、自分は信じて疑はぬ。

△秋元興朝子

田川大吉郎

秋元朝興子は華族社會の俊才として其名を聞くこと久しいけれども、未だ其人に接したることは無い。夫れ故、人傳に聞く所を以て私の胸中に描く秋元子を評するの外はない。

秋元子は書畫骨董の鑑定に妙を得て居る。殆んど黒人の域に達して居る。眞贋新舊の疑ある時には秋元子の鑑定如何を問うて見よと黒人連にまでも重んぜられて居る。のみならず日本風の庭園術に關しては一隻眼を有して居る。書畫骨董の鑑定に於ても已に達人であるが、庭園術に於ては更らに深いと稱せられて居る。又語學に於ても數ヶ國の語に略ぼ通じて居る。日常の應酬などには差支ないとの事である。要するに子は趣味の廣い多能多才の人であらう。

政治上の立場に於て西園寺侯と密接の關係がある。子と侯と離るべからざる關係がある如く子と相良子とも亦離るべからざる關係がある。西園寺侯の貴族院に於ける位置が子によつて重きをなすが如く、子の政界に於ける殊に貴族院に於ける位置は相良子によつて重きをなして居る。相良子と西園寺侯の將來の離合如何は知ることが出來ぬけれども、秋元子と相良子との關係を通じて西園寺侯との三人の關係は將來に至るまで不可分であらうと思ふ。

秋元子は政治上の議論は英國風の憲政を欣慕するといふよりも寧ろ西園寺侯の理想に近く佛國風の政治思想にかぶれて居るだらう。で、其英國風の思想は華を去り實に就いて現在の改良を重んずる。佛國風の思想は依然として華に就いて實に遠かる趣がある。西園寺侯は政友會に擁せられて現在の思想は實に傾いて居るけれども本來の性情性格からいへば矢張り華に傾く方である。秋元子にも其傾向があると信ずる、西園寺侯は政友會に對して總裁といふに拘らず不即不離の態度を保て居る。秋元子は自ら貴族院に於ける政友會の代表者として其位置は西園寺侯の政友會に於けるよりも寧

ろ政友會に近い態度を示して居る。西園寺侯は戰の將てないといはれて居るが秋元子は猶戰の將たる面目もあるといはれて居る。然しながら貴族院を擧げて政黨の戰場たらしむるには一應や二應の働てはいけない。て秋元子の性格態度を以てするも貴族院を擧げて政黨の分野たらしむることは今日の業てない。此意味に於て秋元子は西園寺侯よりも稍々活動的の人と稱せらるるに拘らず、其活動の目的を達する能はざるとは西園寺侯の政友會に於けると多く選ぶ所がない。詰り今日の議會は上下兩院をを通じて惰氣に滿ちて居る。憲政の思想は日に〳〵低落しつゝある。之を振ひ起す爲には所謂撥亂反正の大活動を要する。それには西園寺侯も其人てない。秋元子も其人てない。獨り二人が其人てないのみならず原敬も其人てない、犬養毅も其人てない。私の思ふ所ては憲政の思想日々に低落するのを挽回すべきものは今の貴衆兩院に一人もない。從て秋元子の活動は之を欣迎するに拘らず、到底五十歩百歩の差て、日本の憲政の發達に大いに寄與する所はないと思ふ。秋元子も今の中てこそ、貴族院に政黨思想が多少萌芽を發せんとする望みある光景に促されて勢込んて活動せらるゝ傾があるが、遠からずして此希望の成り難きに困じ果て、折角の活動を拋たるゝに至るかも知れぬと思うて居る。且つ政友會の政府に對する位置は未だ定らぬ。政友會は所謂民黨なるか所謂官僚黨たるか其歸路に迷うて居る。其最後の決定次第ては秋元子と西園寺侯との間は不可分てあるに拘らず、秋元子の政友會に對する態度は今日の如き同情を維持すべからざる境遇に陷るかも知れぬ。さうすれば秋元子の貴族院に於ける憲政革新の運動はいよ〳〵齟齬不振に畢らなければならぬ。旁々私は秋元子の貴族院に於ける活動の將來に疑の心持を抱いて居る。尙、人に聞けば、西園寺内閣再び成るの日に、若し秋元子を大臣の列に加へんとすれば、司法か文部てあらうといふ風に唱へられて居る。以て氏の性格の一面を窺ふに足るのてある。身體の弱い爲てもあらうが、大局を擔當して百難の衝に當るといふ意氣雄風は子に於て乏しい。即ち所

謂百藝に通じた才人であつて狂瀾を既倒に回すといふ志士の面影が乏しい。大變に相撲を愛せらるゝといふ事だが相撲は淡泊なる競技である。之を愛する人の性格は稍々淡泊に近からう。秋元子の淡泊なる氣質氣象は永く〳〵今日の政治戰爭を續くるに適しない。其點は西園寺侯とも同様で、才人の性格、遠からずして政治戰爭の舞臺から離るゝであらうと豫測せざるを得ない。

△秋元子

伯爵 大隈重信

秋元さんは仲々趣味の多方面な人でそしてどれにも相應に深い知識を持つて居られる、碁も圍まれるが其理論の方にも頗る能く精通して居られて話がそれに及ぶと諄々として説明される、餘程頭のよい人と見える、人から聞かれたか自分で工夫されたのかは知らぬが、「碁はタクチック（戰術）でなくてエコノミー（經濟）だ」と説かれた事も記臆して居る。併し説明ばかりではなく實際の技倆も亦之に伴つて居るから感心だ、仲々理論と實行といふものは左様雜作なく伴ふものでない、早い話が茲に美術の鑑賞家があるとする、彼あ見斯う見して色々に批評をする、随分該博な知識を有つて居るので言ふ所には甚だ感心するが、さて一枚の素繪に一技の繪筆を添えて一つと所望されると大抵は逡巡する連中である、理論の人と實行の人とは兎角に離れるものだ、所か秋元さんは左様ではない、説明もするが説明に伴ふ技倆も亦有る、即ち碁に於ては優に田舍初段で、我輩の氏に對する手合はせはいつも先づ二目だが、苦しめられてキユツ々々といふ目に逢はされる、美術品の鑑賞眼も仲々ある、秋元さんの家は閣老を勤めた家でもあり、三代將軍の日光造營にも關係された次第もあるからか、何しろ澤山な古書畫古陶器様々な什器が持ち傳へられて居る、その爲か、或は天性其方の智識に富まれるのか、兎に角大分能く知つて居られる、身體はヨボ々々した全身の發育の不良な人、

所謂蒲柳の質といふ方であろうが、それで可怪しい事には角觝が大の好きである、故の近衛公(忠熙)の様な體力强健見るから逞し相な人であつたら角觝を好まれるも無理はなく、又相應はしくも見えるが、秋元さんでは一寸不似合である、が大の好きでそうしてこれも甚だ見巧者である、我輩が見た所ろでは只簡單な許しか出來ぬけれど、氏は表裏四十八手虚々實々の變化の細をば明らめて居るので、仲々複雜な込み入つた批評をされる。一通り何にでも深く入る人である、政治の方面でも昨今は活動されて大分名聲を揚げられた様だが、氏は今より二十年前に英國に留學された事がある、その時分に彼方の彼のリベラルな思想感化を受けて戻り、大に我國の憲政の爲に働かうといふ氣になられたものだ、氏は現在の華族の間に珍しくリベラルな思想を持つて居られる。貴族の家庭といふものは下層社會の家庭と等しく最も腐敗を極めて居るものだが、氏は身を持することと嚴肅で西園寺侯の如き風流も無い様だから從つて家庭は純潔に能く和合し能く治まつて居る、人格としては美はしい人である。

△秋元興朝子

伯爵 林 博太郎

秋元さんと親交が有るといつても僅かに昨年五六月頃からの事であるから能くは分りません、が自分の認めた丈の所で話せば秋元さんは談話會中の第一人である、第一人といつても標準を道德とか德望とかいふ點に置いたなら又違つて來ましやう、談話會中には相良さんの如き人も居られる、が政治家としての人物を論ずる時には標準は自ら異らざるを得ぬ、政治家として論ずる時には其素養の如何、其識見の如何、其活動力の如何を見なければならぬ、此標準からすると秋元さんは如何しても談話會中第一の人と推さゞるを得ません、相良さんの如きは德望餘りある人である。今茲に德望は主なる問題でない。苟くも政治家と云ふ立場から見て其素養、其識見に於ては私は第一と秋元さんを

推すのである、否秋元さんは只談話會中に得難き人物てあるのみならず、之を研究會に於てしても固より得難きの人てある、研究會て敏腕家たる三島子の如き人は談話會中に見出すことは出來ぬてせうが、談話會の領袖たる秋元さんの如き人は亦到底研究會中に見出すことは出來ませぬ。

秋元さんは政治的素養が十分ある上にそれに伴ふ識見がある、英佛獨等各國の政黨の現狀に絶えず注意し、人にも調べさせれば自分にも調べられる、そして我現在に對照して考へられる、其上に又甚だ活動力に富んて居られる、政見と政略とは自ら相異なるもので之を分けて考へるのが正しいのだが、秋元さんは政見の優れたるものがあると同時に又政略にも富んて居られる、見たところ左様にも無さゝうな人てあるが、あれて仲々惡い意味てない種々な對策をすることに於て巧妙な人てある、それに溫和し相てはあるが勇氣もあり決斷もあります。

政略がある活動力が有るといつても、併し矢張り華族てす、衆議院の人等のやる樣な思ひ切つた平民的の運動は如何しても出來ますまい、其點に於て猶ほ多少遺憾の點無しとせずといつたら或は言へるてせう、秋元さんは頗る趣味の人て書畵骨董圍碁などいふものも好まれる、此點に於て西園寺侯と類似の處もあるが、併し西園寺侯は餘りに文學趣味が勝つて居る、政治を愛されるが自ら超俗的な處がある、其點からすると秋元さんの方はまだ聊か俗氣がある、俗氣のある丈活動方面に於て前途の生命がある、此處に俗氣といふのはアムピシヨンを言ふので、秋元さんには此アムピシヨンが皆無てはない、といつても世間ていふそれとは自ら又性質の異なるものがある、自己の權勢熱の爲に他を一時排斥して迄もといふ樣な左樣なものてはない、秋元さんは何處までも所信に熱誠な人てある、眞面目に我國家民人の爲に立憲政治の有終の美を成さんといふのが希望て、其熱誠あるが爲に昨今政界に活動されて居るもの、さればこそ談話會が嶄然として勢力を作りつゝある譯、左もなくて只空なる野心の爲にのみて

は彼れ程に人が動かされるものでありません。（談話筆記）

△秋元興朝子

尾崎行雄

多年藩閥系統に固められた貴族院の現狀を打破して談話會といふ一種の黨派を立てやうとする、其擧動の壯快にして其企圖の雄邁なる感服の外はない。其中心たる秋元子は定めて人を慴伏するに足る狀貌を備へ、眼光炯々として威風堂々たる偉丈夫の如く想像せらるゝであらう。然るに實際は蒲柳の弱質、殆んど衣にも堪えざる程の貴公子である。精神と身體と必ずしも伴ふものにあらざることを秋元子について深く感ずる。

凡そ現代の貴公子中其腦髓の聰明にして思慮の周密なる、又政治上の意見方針の確固たるもの秋元子に比すべきものがなからう、若しあつても一二を屈するに過ぎなからう。其聰明なる腦髓は獨り政治上に於て發揮せらるゝのみならず、圍碁に於て書畫に於て刀劍に於て庭園術に於て殆んど行くとして可ならざるなして、貴族社會に於てどうしてあの聰明なる人物が出てたるかと只々感服の外はない。其依て來る所を尋ぬれば隨分淵源があるやうにも聞いて居る。只惜むらくは身體の健康が之に伴はざることである。若し秋元子にして健康が之に伴うたならばどれ丈けの飛躍活動をするであらうか、病中にあつてもあの通りであるから、實に素晴らしいものであつたらうと思ふ。

人或は秋元子の貴族院に對する活動の成功を疑ふものがあるけれどもそれは大いなる誤である。貴族院と雖も次第に藩閥の頑迷なるに呆れ、今や將さに形勢一變せんとするの徴候があらはれて居る。秋元子が子爵議員を中心として上は公侯伯の議員、下は男爵議員を統合して藩閥に當つたならば、一擧にして之を倒すこと或は難しとするも、之を再三再四すれば成功することは明白である。何となれば機運は已に熟して居る。維新以來の勳功によつて貴族になつた家から出た少壯

議員は今や急進軍の急先鋒となつた。大木伯の如き河村伯の如き柳原伯の如き皆其錚々たるものである。時勢は時々刻々に變りつゝある。而して秋元子は此變化しつゝある時勢、新空氣を代表する人であるから必らず成功することを疑はない。

又貴族院に政黨を入るゝことの可否を疑ふものがあるけれども、玆に議院あれば必らず政黨あるは止むを得ざるの勢である。天下何れの處に議院あつて政黨なき所ありや。況んや今の我國の貴族院に於ても黨派がある。何々會〳〵といふものは皆黨派である。嚴密なる規約を以て會員を拘束して居る。政黨でないかも知れぬが一種の黨與である。私黨の公黨より惡しきは言を待たざることとて、若し貴族院の黨派は政黨にあらずとすれば私黨である、政黨よりも惡しき私黨であるといふ事になる。秋元子は又時勢の外に、向上進歩の空氣を代表して居る。是れ亦他日の成功をなすこと疑を容れない。

要するに秋元子は其占むる所の位置に於て天爵に於て人爵に於て、其代表する所の時代の風潮及び向上進歩の方針に於て、總ての方面に於て先づ形勝無敵の地に立つて居る。只缺くる所のものは身體の不健康及びそれより生ずる多少の缺點のみであれば、我々は只其健康に注意せられんことの一點を望む丈けである。

△秋元子爵

靜觀居主人

○談話會といふものは如何なるものであるか私はよく知らぬが、研究會の壘壁に向て下から穴を堀つて爆裂彈を投げつけるやうな事をして居るのだらう。いはゞ旅順攻擊のやうなもので今や地下線の最中であらう。それに柳田、柳原、廣澤などいふ扶桑會の一派が之と氣脉を通じてなか〳〵働いて居る。

○秋元さんは多分談話會の兵站部を承はつて居るんだらう。西園寺さんと談話會との關係をいろ〳〵にいふ人もあるが、西園寺さんが兵站部の加勢でもしたら

問題になるだらうが、桂さんなどが默つて見て居る所から察すればそんな事もないだらう。

○來年の總選擧てはどうならうか。連名投票だから負けると根こそぎやられるから猛烈なものだ。いろ〱調和策をやるものが出るだらうが、兎に角よい見物でせう。

○秋元さんのエライかエラクないかは露骨にいへば金を持てゐるかゐないかて決するかも知れない。今の政治は主義方針なんどに動くんてはない。研究會だつてもさうだ。秋元さんが成功するかしないかは大部分は金の問題だ。秋元家はもと御老中を勤めてゐた。御老中には人の知らぬ金持がある。駿河台の邸宅を見ても、又あの人の交際ぶり――隨分派手な交際をする人て交際社會の一つの中心となつてゐるだらう――を見てもなか〱金がありさうにも見ゆる。一體華族の家などては、金があつても、主人が之を使ふなどいふことは六つかしいものだが、あの人は少くとも三太夫などに牽制さるゝ人てはなからう。

○碁は段てあるし、庭の研究などは唯一のオーソリチーてあらう。茶の事は知らぬが、美術の鑑定にはなか〱眼識があるし、刀劍の事も委しい。角力取を集め、又藝人も少しは集めるやうだ。政治上の識見も持てる人てあらう。然し今日に於ては政治上の識見などは無用だ。只兵站部が旨く勤まるか勤まらぬかの問題てある。

△烟の如き政治家

黑頭巾

其一

●「談話會」といふ由々敷大火を忽如として惹起すに至りたるは、彼の政敵が、「烟の如き政治家」を見落したるが爲ならずんばあらず。

●「烟の如き政治家」は、巨大なる「關東一の古毘沙門像」と共に、駿河臺の一角に割據して、足滅多に門を出てず。

●「毘沙門像」が動かずして其下自ら蹊と爲す、彼は籠城しつゝも、つねに談敵を吸收しつゝあり。

●『烟の如き政治家』は子秋元也。彼を見れば弱柳の姿あり、而して其の氣は烟の如く、漂渺として高く擧るを見る。

●子の風采、子の『本體』は、未だ多く八百八街に知られず。然れども談話會首領としての子は、意氣名聲ともに、烟の如く擴がりつゝあり。

其二

●子が蔚堂先生と號するは、趣味の人としての半面を表章す。

●子は、趣味の人として知られたるが故に、子の政敵は、彼を忘れたる也。

●子は、帝大に哲學を學び英國に修養を重ねて、學問該博、趣味豊富にして、其の觀察の多方面に渉りて、評論の鑿々として味あるは、斯界の珍とすべきものならずんばあらず。

●子の趣味は、哲學文學より書畫、庭園、刀劍、圍碁に亘り、角力にまで及ぶ。藝界、蔚堂先生の名を知らざるもの無し。

●就中子の書論は、子が趣味の最も傳ふべきものならずんばあらず。

●子の先、秋元但馬守（喬朝）元祿時代に老中たりしより、往々、後繼者に老中を出す。

●但馬守文藝を好み、元祿藝術の秀逸を集む。子の今日、書論ある、但馬守に負ふ處少しとせざるべし。

●子の藏する處、光琳の「菊の屏風」、師宣の風俗繪卷物の兩者は、實に元祿の代表的傑作たるを失はず。

●光琳のは、八重菊の花を描くに、胡粉を盛り上げて高さ二寸に近し。其の亂れて絢爛たる花枝の金屏風に浮べる、豪華莊麗の氣象を發揮す。

●其の餘歴世、續いて逸品を蒐集す。子は幼少の時より、是の如き名作を玩賞し、以て批評眼を養ひたる也。

其三

●子の趣味は、「趣味を科學化」するの趣味ならずんば

あらず。

●畢竟、子は趣味の人に非ずして理窟の人也。思想の人也。

●趣味ばかりの人は恐るゝに足らず。思想の人は恐る可し。

其四

●東照公の病篤かりしとき、秀忠の問ふ、後世恐る可き人物は誰ぞや。東照公答ふ。……

●秀忠又問ふ。加藤嘉明の如きは、客將といふと雖も、溫良著實、また慮るに足らざるや。東照公答ふ否、否。以ての外の事にこそ。月夜の踊りに、子供ばかりでも節面白く歌ひ舞ふときは、大人も、また共に浮かれて踊り出すものぞ。況して、加藤は溫良といふとも人格力量自から侮る可らず。努て油斷なすこと莫れと。

●子秋元は沈靜著實なりと雖も、門閥あり、學問才識あり。彼の政敵は、東照公の遺訓を忘れしと見ゆるよ。

其五

●子の政敵は、中々、子を見落す如き迂濶者に非ず。然らば、子が多年政敵より見落されたるは果して、何故ぞや。

●吾輩は謂ふ。子の政敵は考へ過ぎたる也。勿論、子に著眼したるも、考慮の後、『憂ふるに足ること無し』と決したる也。

●此決定は誤也き。然らば則ち、子の政敵が、如此、見解を下すに至りたる實情如何

其六

●古來、富貴者に、眞の藝術家出現すること莫し。抱一、柳里恭の如きは異數に屬す。

●蔚堂先生も、百年前に生れしめば、彼れ位の書は描きしならん。

●子は、抱一、柳里恭等に比すれば、眼識高く、且つ頗る多くの材料を見たり。子が、彼二人者の如き書の出來ざる原因は此に在り。

●子には、系圖あり、位置あり、金あり、學問あり。而して理想は高し。悠々、達觀して惟へらく、是程のものありと雖も、いづれも、以て吾が理想を滿足する

●「毘沙門像」が動かずして其下自ら蹊と爲す、彼は龍城しつゝも、つねに談敵を吸收しつゝあり。

●「烟の如き政治家」は子秋元也。彼を見れば弱柳の姿あり、而して其の氣は烟の如く、漂渺として高く擧るを見る。

●子の風采、子の「本體」は、未だ多く八百八街に知られず。然れども談話會首領としての子は、意氣名聲ともに、烟の如く擴がりつゝあり。

其二

●子が蔚堂先生と號するは、趣味の人としての半面を表章す。

●子は、趣味の人として知られたるが故に、子の政敵は、彼を忘れたる也。

●子は、帝大に哲學を學び英國に修養を重ねて、學問該博、趣味豐富にして、其の觀察の多方面に渉りて、評論の鑿々として味あるは、斯界の珍とすべきものならずんばあらず。

●子の趣味は、哲學文學より書畫、庭園、刀劍、圍碁に亘り、角力にまで及ぶ。藝界、蔚堂先生の名を知らざるもの無し。

●就中子の書論は、子が趣味の最も傳ふべきものならずんばあらず。

●子の先、秋元但馬守（喬朝）元祿時代に老中たりしより、往々、後繼者に老中を出す。

●但馬守文藝を好み、元祿藝術の秀逸を集む。子の今日、書論ある、但馬守に負ふ處少しとせざるべし。

●子の藏する處、光琳の「菊の屏風」、師宣の風俗繪卷物の兩者は、實に元祿の代表的傑作たるを失はず。

●光琳のは、八重菊の花を描くに、胡粉を盛り上げて高さ二寸に近し。其の亂れて絢爛たる花枝の金屏風に浮べる、豪華莊麗の氣象を發揮す。

●其の餘歷世、續いて逸品を蒐集す。子は幼少の時より、是の如き名作を玩賞し、以て批評眼を養ひたる也。

其三

●子の趣味は、「趣味を科學化」するの趣味ならずんば

あらず。

●畢竟、子は趣味の人に非ずして理窟の人也。思想の人也。

●趣味ばかりの人は恐るゝに足らず。思想の人は恐る可し。

其四

●東照公の病篤かりしとき、秀忠の問ふ、後世恐る可き人物は誰ぞや。東照公答ふ。……

●秀忠又問ふ。加藤嘉明の如きは、客將といふと雖も、温良著實、また慮るに足らざるや。東照公答ふ否、否。以ての外の事にこそ。月夜の踊りに、子供ばかりでも節面白く歌ひ舞ふときは、大人も、また共に浮かれて踊り出すものぞ。况して、加藤は温良といふとも人格力量自から侮る可らず。努て油斷なすこと莫れと。

●子秋元は沈靜著實なりと雖も、門閥あり、學問才識あり。彼の政敵は、東照公の遺訓を忘れしと見ゆるよ。

其五

●子の政敵は、中々、子を見落す如き迂濶者に非ず。

然らば、子が多年政敵より見落されたるは果して、何故ぞや。

●吾輩は謂ふ。子の政敵は考へ過ぎたる也。勿論、子に著眼したるも、考慮の後、『憂ふるに足ること無し』と決したる也。

●此決定は誤也き。然らば則ち、子の政敵が、如此、見解を下すに至りたる實情如何

其六

●古來、富貴者に、眞の藝術家出現すること莫し。抱一、柳里恭の如きは異數に屬す。

●蔚堂先生も、百年前に生れしめば、彼れ位の畫は描きしならん。

●子は、抱一、柳里恭等に比すれば、眼識高く、且つ頗る多くの材料を見たり。子が、彼二人者の如き畫の出來ざる原因は此に在り。

●子には、系圖あり、位置あり、金あり、學問あり。而して理想は高し。悠々、達觀して惟へらく、是程のものありと雖も、いづれも、以て吾が理想を滿足する

には足らずと。

●すべて富貴者の天才は、此の如き逕路に由りて、實行者の域を離れて批評家となる。

●貧賤者は、兎も角も、努力せざるを得ず。

●富貴者の天才は、金に任かせて多くを見、眼は益肥えたり。

●貧賤者の天才は、古大家及び易からずと爲さゞるに非れども、境遇は彼を驅りて厚顏ならしむ。

●厚顏に努力する中には、或は恐るべき大家となることあり。達觀の批評家は、眼空しく高くして、手腕無し。

●此の如くにして、子秋元は、角力を好み角力を取らず、碁を昧ひて、力は初段に過ぎず。書を解して精妙の論を爲すも、甞て筆を執らず。

●畢竟、彼は、すべての方面に向つて『見巧者』たり、一力士たらず。

●而して子が、最も深く好み、最も深く解するものは則ち政治ならずんばあらず。

●子が政敵は、子を以て政治上の見巧者として、之を看過したり。是の如きは政治家としての一大疎忽たるを失はず。

其七

●伯勝海舟、伯大隈、及び子秋元は、明治政治史に於ける、注目すべき政論家也。

●海舟の談は、政治を言はず、政治家を言ふ。伯の政談は、奇警なる人物評のみ。

●伯大隈は、政治を言ひ、政治家を言ふ。縱横の辯、議論あり。海舟の一口評に勝さる。

●海舟には觀察あれども議論無し。大隈には議論あれども、不眞面目也。

●此の兩伯は、隱居後の政論家にして、既に大勢に後れ、且つ將來、實行の責任あるにもあらず。

●此兩伯は、無責任にして、不眞面目也。國務に關して、忠實なる評論を試みず。

●此の兩伯は、元氣にして沙婆氣强き樂隱居の如し。放言高論して、以て若輩を威嚇する者也。

●子秋元は、未知數にして、而して眞面目に政治を論ずる者也。

●彼の辨は、兩伯の奔放奇拔なるに比す可くもあらず。然れども、彼は新思想を懷抱し、忠實に、其の思想を鼓吹す。

●彼は、其の議論に對しては、責任を負ふ。若し彼をして內閣を組織せしめなば、彼は平生の議論を實行せんとするなるべし。

●彼の兩伯の政談は、大に聽くべし。然れども、恐るゝに足らず。

●子の政談は、必ずしも聽くを須ゐず。然れども、彼の政敵は、彼を注視す可かりし也。

其八

●吾輩を以て見れば、子は、或は遂に「見巧者」なる生涯に終るならん。

●然れども、子は、其の鼓吹する思想議論は、到頭、其の政敵に打勝たんことを期する者也。

●子は、自から權力を以て政敵に對せんことを期せざるべし。然れども、「思想の力」を以て克たんことを期する者也。

其九

●子が統率する談話會の將來は如何。果して大に有力なるべきや。

●吾輩を以て見れば、談話會は、二箇の目的を有するなるべし。其一は、桂侯の政策を矯制するを以て自任する事

●其二は政治家の養成是也。而して、是却て、統率者の力を用ふるところならん。

●吾輩、談話會員の一人をも相知らず。然れども、壯年元氣の新人物多きことを聞く。

●是等の會員をして修養錬磨せしめて、以て他日の地歩を占めんこと、則ち談話會の會是ならずんばあらざるべし。

其十

●子秋元は侯西園寺と親善するのみならず。子を言へば侯を聯想す。

●一侯一子は、共に「思想の人」たり、「見巧者」なるを失はず。

◎侯西園寺は政治家として德操あり、議論あり。而して功名に冷やかに、自ら大任に膺るを嫌ふ。

●子は、侯に比すれば功名の志あり。然れども、努力、到底理想的の功業に値せざるを知つて、自から起つを欲せず。

◎侯は正面に立つを好まず。然れども、信義に篤く、公伊藤の依託を受けて、辭せず、公薨後、今日、自から活動せずと雖も、總裁を捨て去らざるべし。

●子は、正面に立つを辭せず。而して力量健康の實戰に適せざるを自覺して、「思想の人」として陣頭に立つ。

其十一

●一侯一子は、全然、公伊藤の思想精神を遵奉するものと謂ふべし。

●侯は正面より公の思想を繼承し、子は側面より、公の思想を鼓吹す。

◎此の一侯一子は、公の勳業位置を繼承しつゝある侯桂と、政敵として爭ひつゝある也。豈奇緣ならずや。

其十二

●人は恐るゝに足らず。「思想の力」則ち恐るべし。人「思想の力」に乘ずるときは、則ち大に恐るべし。

●子秋元は、桂系に反對なる「思想の力」を代表する政治家也。

●子が代表する政治思想が、侯が代表する政治思想に迫りて、勢力を得ることありとせん乎。則ち、子は侯に取りて、恐るべき人たるを失はず。

其十三

●桂は、力量才幹、現代の第一人たるのみならず。侯が千百年の後には、古來稀に見る、『働ある政治家』として謳はるゝならん。

●侯は、餘りに聰明なるが故に、人を見て思想を見ず。

●侯の眼中には、或は、子は小さく映ずるならん。

●然れども、侯は、子を透して、子が代表する新思想を熟視せざる可らず。

其十四

●子秋元は、壯健なりしとき、京都にゆき古美術を研究す。山城國中の古社寺、其の大半を調査し畢る。

●京洛の古美術品を多く實見したるもの子の如きは、斯界稀也。

●聞説、當時、子は頑强にして、古寺にも木賃宿にも宿して研究旅行を續け、人をして當年の舘林侯たるを知らざらしむ。

●後ち、病を得て、頓に旅行を廢し、書齋の人となる。

●是以後、子は蒼顔蒲柳の人たりと雖も、自家の主義思想を、眞面目に發揮するの氣風は尙ほ愉らず。ⓢ

其十五

●大なる炭塊あり。火とならんとして、僅かに寸紅を呈するのとき、糸の如き細き烟、プスく\として遠く上がる。

●遠望する者謂へらく、草の烟也。其儘に放置して可也。

●炭塊、全紅を呈して、火氣の烟、近隣を赫灼するとき、驚いていふ「大なる烟也」

●子が政敵の子を視ること、或は此の如くならざる乎

其十六

●大なる烟は、大なる火に由つて生ず。

●火の小さき時、小なりし烟は、火の大なるに隨つて則ち大なる烟となる可し。

●子秋元が烟の優勢なるは、則ち其の由て燃え出る火塊の「思想の力」ならずんばあらず。

●子が、多年、政敵に看過されし細烟は、安んぞ知らん、大炭塊の寸火より立ち登りし初烟なりしことを。

其十七

●火は自ら飛ばず。烟に由て廣がる。烟の上がるは、火の熾んなる也。

●若し、火活きずば、烟も亦た滅すべし。

其十八

●子秋元が、侯柱の政治、政黨に對して主張する、立憲、文治、眞面目、非策略、非官僚等の政治思想の氣燄は、此後、如何に發展すべきや將た發展せざる可きや。

●『烟の如き政治家』の將來を見よ。

獄裏の水仙花を愛看しつゝ、廿日夜脫稿

鼠頭巾再記

次號豫告

本誌は四月一日を以て春期大附錄號を發行すべく、附錄小說寄稿の約ある人は卷頭の豫告に掲載したる通りなるが論文に於ても第一流の名士の筆に成るもの數篇を掲ぐべく、尙人物評論には濱尾新と菊地大麓と題して東西兩京大學總長に對する諸名家の評論を載すべし、

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

今古堂新刊

田山花袋先生著

妻

大好評 第四版既に盡んとす

定價金壹圓五十錢
郵税金拾貳錢
菊判箱入美本

眞山青果氏作
（鏑木清方畫）

長編小説

憂

▲菊判四百頁。箱入美本
▲定價金九拾錢
▲郵税金十錢

清新の想警拔の文最近文壇に於て一躍重鎭と成りし青果先生が長篇の試作なり一家の不幸を一身に負ひ健忍奮鬪したる青年の新生涯を先生獨特の描寫法を以て深刻に描き出されたる一大長篇なり

眞山青果先生著

南小泉村

著者三ヶ年の精力を傾倒して始めて完成せる大作なり

定價金八十五錢
郵税金拾錢
四六判箱入美本

東京市日本橋區馬喰町三丁目
今古堂書店
（電話浪花四六九五）（振替東京四九〇七）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新學期開始

早稻田 中學講義

修了貳年

本講義錄は新時代の青年に中等教育の素養を與ふるを以て目的とす、則ち文部省令中學校教授細目に準據して各學科を編成し多年の實驗を經て最も進歩せる通信教授法により極めて低廉なる學費と、短期の年月とを以て完全に中學全科を修了せしむ、それと同時に時勢に切要なる諸種の學問藝術を修得せしめ以て社會に立て活動するに間然する所なからしむ、講義の文章は極めて平易なるが上に振假名釋義等を添へて讀易く難解の憂なからしめ、且毎號現代和洋畫伯の手に成る口繪及『新大地』と稱する敏活多趣味なる附錄を添ふ、要之、學問經驗共に備はれる第一流の大家が自ら講義を草し之に署名して責任を明にせる本講義錄の如きは決して他に求む可らざるなり

●各第壹號四月初旬發行

見本つき規則書

はがきにて申込次第送呈●

早稻田 商業講義

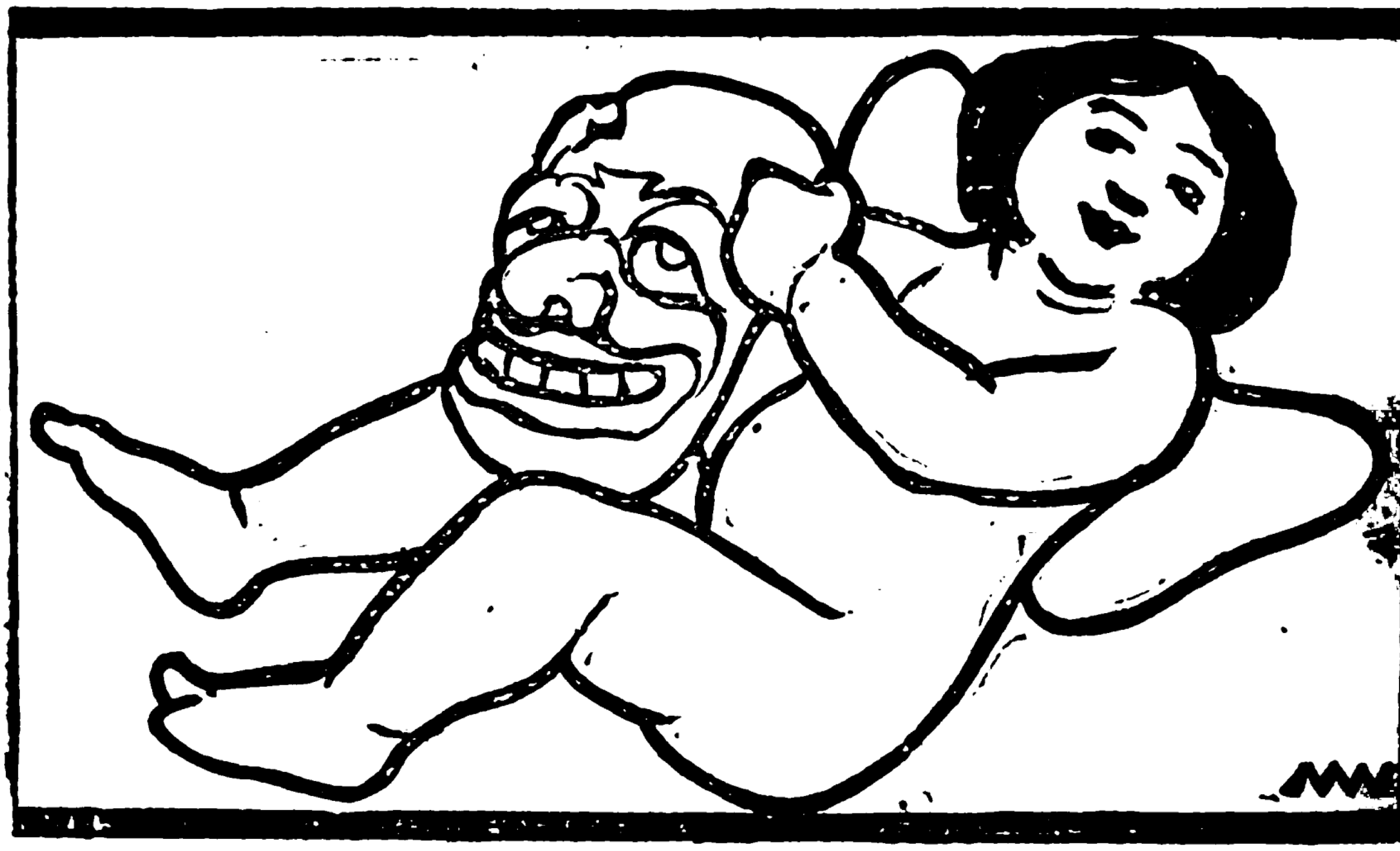
修了壹年半

教育無き實業家が社會に成功せる時代は既に過去に屬せり、現時の社會に於ては實業界も亦所詮智識の競爭に外ならず、本講義錄は實に本邦唯一の商業獨習機關にして苟くも今日の商業經營に必要なる事項は一として洩す所なし、則ち學校敎育を受くるの暇無き者は本講義錄によりて輓近の實業に關する知識を修得すべく、又既に學校敎育を了したる者と雖も最新の商業に關する學術を了解するが爲めに本講義錄に就て學ぶの要あり、加之、實用、速成、趣味、平易は本講義錄の四大眼目とする所にして文章は簡易なるが上に尙傍訓傍釋を施し且難語には註解をさへ添へたれば、如何に繁忙なる實業界の人々も、又假令學力の至らざる子弟と雖も、更に難解の憂なかるべし

東京牛込 早稻田

早稻田大學出版部

振替東京 一一二三



十日すぎ

徳田秋聲

家人の隙を窺つて家を出たとき、庄三の心の激動はまだ止まなかつた。彼は一刻も早く家から遁れて、何處か人離れのした、靜なところへ落着いて、そこで廣い室屋に暢々と手足を伸し、高い天井を眺めて、思ふさま何かを思窮めて見たいやうな氣がしてゐた。

家を一町ばかり離れてから、私と手を突込んで上着のポケットを探つて見ると、二日三日は東京を離れてゐられるほどの金が、揉くしやの手帕の下になつてゐた。バラ錢も少しは窄袴の衣兜の底に入つてゐた。

まだ宵の口であつたが、杉垣や建仁寺垣の續いた町は閑寂

してゐた。靴て濕つた暗い道を彼はボク／＼歩いて行つたが、とある塀のうちから洩れるカルタの聲が、ふと陽氣な團欒の樂しさうな男女の若い顏を想浮ばせなどした。
廣い道は人通が稀てあつた。遊場所から疲れて歸つて來たやうな人や、着飾つた婦人や子供を載せたゴム輪の腕車が、をり／＼目に着いた。水分を含んだ冷かな空氣が、熱つたやうな彼の頰に心持よく當つて、ぼツとしてゐた頭腦が、少しづゝ分明するやうてあつた。
電車へ來るまてに、體に緩い外套のポケツトが、色々の物て一杯に脹らんだ。インキや紙や封筒や雜誌や……月の旅行案内も一冊、外へ喰みだしてゐた。
込合ふ電車の隅の方に座を占めると、彼はその旅行案内を取出して、所々まくつて見た。友人の居る函嶺の方へ行きたいやうな氣もするし、知つた人に逢はないやうな、懸離れた寂しい海邊へ行つて見たいやうにも思へた。旅費が少くて遠く離れてゐられるやうな處をとも思つた。それには靈岸島から十時に立つと云ふ夜航船が、一番都合が好さゝうてあつた。本所から出る汽車に乘るのも、惡くはないと思つた。
とにかく雨國て窮窟な電車を脫出して、そこから暗い川端をぶら／＼歩いて見た、そのうちに心臟が苦しくなつて來た。茶の間に額を鳩めてゐる家の人達の樣子も目に浮んて來た。
出帆所の待合や船室の自由な空氣が、この場合彼の心を惹起けた。庄三は旋て汚ない腕車に乘つて、色々の町を通つて行つた。彼の目前には、明い店頭に羽子を突いてゐる町娘の美しい姿が見えたり、春

の座敷着を着飾つた藝者が幾箇となく忙しさうに通り過ぎたりした。大川に近いしつとりした新年の町の空氣は、疲れた彼の頭腦に夢のやうに映つた。

腕車はそれから、こま〳〵した狭い幾箇もの巷を通過ぎるかと思ふと、船てギッシリ塞つた暗い川縁や、濛霧の立罩めた昔めいた小橋を、のろ〳〵と渡つた。

「こんなに遠くだつたかね。」

庄三は腕車のうへて、夢から覺めたやうな聲て訊いた。

待合には六時のに乘後れたのかとも思はれる人が四五人しか居なかつた。重に濱の者らしいその人達は、眞中に据えた大きな火鉢の側に打寄つて、話をしてゐた。蒼白い電氣が、そこらを陰氣に照して、隅の方に蜜柑や菓の店を出してゐる爺さんの、石膏細工のやうな大顔が、影が薄かつた。

庄三は、凸凹した土間をあちこち動いてゐたが、そのうち一方の火鉢の方へ寄つて行つて、硬い腰掛に腰を卸した。二列に並んだ腰掛の一方には、濱方らしい四十ばかりの内儀さんが、絡はる二人の男の子を相手に、汚い毛織のショオルを敷いて腰かけてゐた。

「如何いふもんてござんすかね、今夜の凪ぎは……。」

内儀さんは、背後の火鉢に集つた組の方へ話かけた。

捕鯨の話をしてゐた其人達のなかの一人は、熱い火氣に背向けた、皮膚の乾き切つたやうな顔を顰め

て、溫順な目て、内儀さんや子供の樣子を瞶めてゐたが、「大したともあるめえ。」と呟いた。

「然てござんせうかね。どうか大して暴れないでくれゝば可ござんすがね、先刻船長が少し首を傾げてゐましたからね……」と、内儀さんは袂から餡パンを出して、むづかる子供をすかしなどした。

そこへ不恰好な中折を冠つて、ゴツ〳〵した手織縞の綿入や羽織に着脹れ、青い木綿の股引を穿いた詰つた足の先に、眞新しい兩刳を突かけた山の人らしい男が横から喙を容れた。

「私の在のものは、つい此間浦賀へ持つて行かれて、あすこで五日も蕎麥粉を食つてゐたと云ふこんだ。」

「おつさんは何處でござんすね。」

「私かね。私ア八王子在だがね。」

「…………。」

「房州の景氣は如何だかね。何ても餘り好くねえてこんだが……。」

阿爺は節くれ立つた黝い手の指を擴げて、火に翳した。

やがてショオルに紐を通したのを着込んで、皮の鞄をさげた、日和下駄の老人も繰込んで來た。長い褞袍をはおつて、突かけ草履を穿いた親父、白毛布を持つた學生、半コートを着て、犬をつれた若い男の連中、洋服と吾妻コートの夫婦連、鉛筆を耳に挾んて、板草履を穿いた紬の紋付の藥局生、軟かものゝお負ひ絆天の上から、絞の兵兒帶をかけた赤い手絡の若い細君……建物のなかゞごや〳〵して來た

時分には、庄三の顔や膝頭が、火氣で焦げるほど、赤い火が火鉢一面に擴がつてゐた。後の方の火鉢の團欒では、危險の多い松魚捕の話が初まつてゐたが、聽者の目は、紅い火氣の前に一様に輝いた。

内儀さんの子供が、狹い腰かけのうへに、丸く芋蟲のやうに眠りこけて了つた頃、場内には、伸びあがつて見るほど人が集つた。

「どこへ此のお客を容れる心算だ。」

「入るだけ積むだね。」

「保田まで行けアぐッと透くさ。」

暗い海の方で、汽笛の聲が聞えだした。

「三番が入つて來たてすよ。」内儀さんが、待あぐねたやうに、欠をしながら言つた。

やがて水の上から喚く船頭の聲が聞えて間もなく、船からあがつて來た人が、ぞろ〳〵と場内を横切つて行つた。

後から〳〵乘客はひた〳〵入込んで來た。低い話聲や笑聲が莨の煙と一緒に建物中に籠つてゐた。

この大勢の人のなかに混つて、三時間ばかり、口も利かずにゐた庄三は、この時咽喉がひッ着くやうに覺えた。頭も鉛のやうに重かつた。やがて彼は火鉢の傍を離れて、棧橋の方へコッ〳〵出て行つた。

「お名前をつけますよ。」後の方から、ぼやけたやうな聲が聞えた。

夜明方に庄三は暗い△△の濱へあげられた。

「西が出ましたから××へは着けませんよ。此處からあがつて下さい。」

さびたやうな聲が、うと〳〵して居た耳にふと入ると、彼は急いで端艇に乘移つた。船室はざわ〳〵してゐた。風や浪の音が凄じく聞えた。端艇は深い闇のなかを、次第に親船から遠かつて行つたが、庄三は寒さにわな〳〵慄えてゐた。するうちに、白い浪に洗はれてゐる砂濱が見え出した。鼻の先に嚴重な碧黒い山の姿も見定められた。

彼は船頭に鞄を持して、凸凹の砂濱を歩いてゆく、東京ものらしい三人連の組を少し離れて、松原の小徑を村方の方向へ出て行つた。

矮い茅屋のなかには、もう人の起きてゐる氣勢のする家もあつた。薄暗い樫の垣根ごしに緩い桔槹の音も聞えてゐた。その間を深く進んで行くと、やがて廣々した田圃中の路へ出て來た。灰色に乾いた路はうねり續つて綺麗な丘の松林の邊まで續いてゐた。庄三は久振で恁云ふ道を獨て歩いて見た。放浪の旅をしてゐた頃の心持が味はれるやうで、こつ〳〵と行く小い跫音が寂しく耳元に響いた。時々暗い木立や微白い茅屋の見える村を振顧つた。そこからはあちこちに鷄の聲が聞えてゐた。ぼッと淡い煙の立つてゐるのも見えた。

次の村まで來る頃には、暗い幕が剝れて行くやうに夜が明けた。東の空に爛れたやうな赤い雲が、さま

く〱に少しづゝ色を添えてゐたが、それが旋て淡い紫や紅に熔合つて、流れるやうに搖曳た。外套の黒い縞目が分明わかるほどに、そこらが明くなつて來た。

ばた〱と草履の音がして、暗い家のなかゝら出て來て、竹で拵へた門を開けてゐる十ばかりの男の子があつた。髪が耳まで蔽さつて、顔が煤色をしてゐた。板戸の隙からちろ〱と火の影が洩れて、ほそ〱したやうな屋根が傾いてゐた。その後の方から、唸るやうな潮の音が聞えた。

家數が二軒三軒と續いて、此處は人氣も多かつた。井戸側で顔を洗つてゐる老爺、無智な目色をした老婆、水を汲んでゐる若い女、駄菓子の店を擴げてゐる目の惡い女房、脊戸の外厠から出て來る阿爺‥‥‥小い行燈を出した飲食店、天狗の看板を出した質屋、切出した石の中に立てられた掘立小屋、外で石を積上げた竈に火を焚きつけてゐる處もあつた。町を離れて、美しい松並木の中を一筋道へ來ると一緒に△△から上つた連中の姿が見え出した。

背負籠を背負つた少い女に出逢つた時、庄三は初めて少しばかり言を交すとが出來た。

「××まで何のくらゐあるかね。」

「十町もありますかね」と、其女は人馴れた調子で、「△△からお出でなさつたかね。」

「お前達は何を取りに行くね。」

「畑へ大根ひきに行きますわね。こんな暖かい日に引いておかないと、霜が降るて……。」

別れるとき此女は、詳しく道を敎へてくれた。

「廐車もあるにはありますけど、附込むてね」と、曲り角に立つたまゝ「さよなら……」とお辭儀をした。

船形まで來ると、疲れた庄三は、と有る荒物店の前に車を一臺見つけた。店には萎びた蜜柑や、鯣、昆布、マッチ、輕石、懷爐灰、藁草履のやうな物が、一切駢べてあつた。そこからは碧い海に續く濱や松や船が明く見えた。

嚴重作の、目蓋に引釣のある阿爺が、急いで奥から出て來て支度をした。

「××は何方へ……。」阿爺は梶棒を持あげるとき訊いた。

車は朝風を切つて、軒ごとに門松を立てた濱の町を走つた。主に凋れた棲に枯笹を配つたのを見受けた。

十分ばかりすると、庄三は、××町の山蔭にある古い旅館の土間に降立つてゐた。─屋内はまだシンとしてゐる。廣い茶の間の爐の側には、油煙にホヤの黝ずんだランプが、薄い朝の色に疲れたやうな光を放つてゐた。

人氣に餒えたやうな長い廊下を通つて、亭主が急しく板戸を繰開けると、庄三はやがて、垠の部屋へ案内された。彼は大きな方形の机の上へ、ポケットから色々なものを取出して、そこへ痛い足を伸した。

床着の悪い部屋に親んで來た頃、庄三は時々外へ出て見た。

山蔭の建物は、風のある日も靜かで、大きな障子に冬の薄日が懶さうに差してゐた。蒼い煙の蒸上つた空氣に、鳶色の翅の影などが見えて、じつと居坐つてゐると、心が倦んだやうになつた。そんな時彼はタオルを懐へ捻込んで、田圃中の礦泉へ入りに行つた。荒寺の境内を脱けて、大根畠の黒いぼや〳〵した土を踏んで、低い破垣を越えると、そこが町の裏手の野原になつてゐる。左手に山が長く續いてゐて、其嶮しい岩に枝の捻くれた松や栂が密生してゐた。淡い雲の影の浸つた水田の畦道を、歩いてゐると、山の裾に立つた二階建の一軒家に、細い黒煙の立つてゐるのが直ぐ目前に見えた。湯は横手の松林にある下宿屋で持つてゐるので、町の人は、夜にでもならなければ滅多に入りに來るやうなことがなかつた。

庄三は人氣のない其家へ上ると、白い乾いた湯槽の蓋を取つて、自分獨りのもの〻やうに、まだ沸切らぬ湯に浸つて、ゆつたりした心持で色々の思に耽つた。後の暗い崖下にポタ〳〵と水が絶えず滴つてゐて、石炭の燃える音が、そり〳〵森の嵐のやうに聞える。然うして浸つてゐるうちに、冷い底の方の微溫湯が少しづ〻熱い湯と入交つて、弱い心臟が次第に鼓動を高めて、顔もぼつと逆上せたやうになつて、乾いた體中の肉が柔ぐやうであつた。

旋て體を拭いて上つて來ると、彼は火の氣のない火鉢の側に坐つて、莨を吸ひながら、東京らしい新聞を取上げた。新聞は昨日のであつた。日附を見ると、今日はもう七草過ぎの八日だと云ふことが解る。直に色々な人のごや〳〵してゐる大な都會の狀も想出された。彼は不安な目容で、一つ二つ見出を捜すと、碌に目も通さず、其ま〻傍へ投出した。方々から來た年始狀を新聞紙に包んで、衣兜の底に押込ん

て來たとを、此時ふと想出した。それが埃だらけの旅館の床の隅に投出されたまゝて、旅先から出す心算の自分の葉書が、まだ一枚も書かれてなかつた。色々のこま〴〵した用事も頭腦のなかに滯つてゐた。一つ考出すと、それから其へと蔓を引張るやうに氣に引懸つて來た。この十日過に少し纒めて拂はなければならぬ負債の事や、ふとした不注意から起つた職業上の條例違反て檢事から告發された裁判事件の結果なども案じられた。湯錢を入口に据えた錢箱の上に置くと、彼はやがて其處を出た。

少時すると、彼はあちこち見廻しながら此町の大通を歩いてゐた。怪しげな天麩羅屋、暗い蕎麥屋、御神燈を垂下げた藝者屋などが目についた。浪花節の立看板を出した寄席や、倶樂部などもあつた。貧しい時計屋や、自轉車を修繕する家もあつた。手足が利かない、頭髮の禿げた三十ばかりの女が、蜜柑や駄菓子を賣る店頭に膝行出て、日向ぼつこをしてゐるのが無氣味に見えた。

そこを曲つて、大きな呉服屋の横町へ入つて行くと、荒れたやうな床屋の前に、宿の主が褞袍姿て四十ばかりの女と立話をしてゐた。女は花賣から水仙の花を買つてゐた。白粉焦のしたやうな顏色の惡い、額の拔上つた女て、銘選の羽織を着て、太い首に何やら穢苦しいものを捲つけてゐた。

「どこへお出てなさるね」と、主が聲かける。「ちッと寄つて茶ても飮んてお出なさい。此の人はそこの藝者屋のお神で、土地のお師匠さんてさ」と、神燈の出た隣の家を頤てしやくつた。

「去年の夏、M－さんが不斷入込んてゐたものてさ。」

「あの方如何なさいました。本當に面白い方てさね」と、内儀さんは白い歯を剝出して笑つた。

綺麗に掃除された狹い土間からあがると、そこが直ぐ茶の室で、戸棚の前に長火鉢が据えてあつた。町の若い衆が半紙に書いた無意味な發句や都々逸が、づらりと高い處に貼られて、其の側に神棚が飾つてあつた。奥の室は二つに仕切られて、一方につる〳〵した踊の床が敷いてあつた。そこに煤けた簞笥も並んでゐる。寶珠の軸のかゝつた床もあつた。緣の障子に、二時頃の日が一杯に差して、疊の赭いのが目についてゐた。

師匠はそわ〳〵したやうな調子で、茶を煎れたり、菓子を出したり、火を直したりした。

「景氣は如何だね。」

「景氣が可いんだか惡いんだか、……でもお蔭さまで、一日だつてお茶を挽くやうなとはありませんのさ、はア……今日はまた船形の方へね、船形から歸ると、北條の△△屋さんへ行かなけあならないんて、先刻から待つてゐるんですがね、矢張宴會てせうよ」

「今日は如何云ふ連中だ。」

「藥屋さんだとか言ひましたつけがね……」

恁云ふやうな話が續いた。

「旦那、東京に一人藝者があつたら世話して下さいな。一人限ぢや眞實心細ござんすからね。」

「でも感心に稼ぐわ。たしかに二人前だ」

そこへ「勇さんは未かね。」と格子の外から聲かけて、北條からの迎が來た。

師匠は氣忙しさうに外へ出たり入つたりした。するうち腕車が前で停つて、濱に結つた赭顔の太々しい女が、小紋の出の着物で、鬱香木綿の袋に入つた三味線を抱へながら、狹い入口をどさ〳〵と上つて來た。

茶の間で些と、挨拶をすると、急立てるやうに師匠が手傳つて、直に遠出の支度に取かゝつた。話をする女の聲は、ひどく潰れてゐた。

外へ出た時、亭主はペッと唾を吐いて、「あれも東京から流れて來た女でね、あの通り面は惡いが腕は確なものさ。東京ぢや義太夫のお師匠さんをしてゐたさうだが、飲んだくれの親父に棄てられた母親はあるし、藝人仲間の交際は張る。遣切れなくなつて、三年ほど後に駒田屋から、たゝき分の約束で出たものさ。」

二人は日影の薄い裏通をぶら〳〵濱の方へ歩いた。

「如何ですね、一ト晩あの女を呼んで義太夫でもやらしちや。義太夫に限らず、何でもやりますよ。」

「…………」

「尤も酒が飲めんぢや、はづみもしないさな。」と亭主は呟いた。

庄三の心は、何となし輕い饑を感じた。

「女の好いのは、外に幾多もありますさ。」亭主は少時經つてから話しかけた。「女買ふなら、料理屋へあがると、それ專門の女中が幾多もある。どうして、藝者そつち退けの素敵らしいのがある。皆な濱や東

京から讃つた玉さ。」
二人は何時か、或る氣取つた門構の家の前まで來てゐた。高い常盤木の枝葉の下に、可也古びのついた軒が傾がつて、土間の入口に水色の暖簾がかゝつてゐた。
「こゝて鰻でも食つて行きませうや」と亭主は愛相らしく言つた。
「亡つた親父が、木更津て、料理屋の板前をしてゐたんて、それが女を拵へて此處へ流れて來て鰻屋を初めたのは、もう餘程古いこつた。つい近年まで前の圍ひに二百圓や三百圓の鰻は始終持つてゐたものだ。東京へも出したさ。今ぢや此の家も二重抵當に入つてるくらゐて、娘が二人とも藝者をしてゐる。蒲燒は些ッと食へるさ。」
夏向に出來た二階の座敷へあがると、色の黒い痩ぎすな年増が、銘仙の着物に黒繻子の帶を締めて、羊羹や茶を運んで來た。酒が始まる頃には、不斷着のうへに糸織の羽織を引かけた二十ばかりの女も出て來て酌をした。
「少しお遊びにお出てなすつて下さい。」年増は細そりした綺麗な指頭に客の莨を一本摘んて火を點けた。妹の方も、紅をつけた口を窄めて、大きな猪口て熱い酒を幾杯も引受けた。而して額の廣い、目の飛出た顔に時々ふッと笑つて見せた。
鰻が運ばれるまでには大分手間が取れた。年増はちよい〳〵階下へ降つて行つた。
「こゝは譯はないさ。姉の方は土地の客色があつて、今は腹が大きいから引いてゐるけれど、妹はつい

其處の松葉屋から出てゐる。家も品の惡い方ぢやないさ。」亭主は妹が銚子を替へに起つたとき、尖つたやうな口容をして、低聲に說明した。而して獨りでぐい〳〵酒を飲んだ。

庄三も、傾かつた柱に凭れて、折々興んだやうな調子で機械的に猪口を明けた。部屋が押開いてゐるので醉が端から覺めて行くやうであつた。

そこを出た時、二人は可也醉つてゐた。前の田圃面には、寒い夕風が渡つて、浪の遠音が丘や森を越えて、寂しく聞えてゐた。

庄三は其晩薄暗いランプの下で、家へ手紙を書かうとしたが、厭なやうな氣がして、筆を執る手が落着かなかつた。そこへ鰻屋からのツケを持つて、女中が入つて來た。

「御都合がわるければ帳場でお立替しておきますつて……」と、女は薄い唇を歪めて、ヒイ〳〵言はして糸切歯の齦を吸つてゐた。

彼は背後に懸けてあつた上着から、札と銀貨を取出して、女の手に渡した。女はバタ〳〵と出て行つた。庄三は殘つた金を、明へ持出して、些と數へてみると、其まゝ舊のポケットへ突込んだ。

向ふの離房では、客が四五人あがつて、陽氣に騷いでゐた。色氣のない婆さん藝者の燥ぐ聲や、調子はづれの三味線の音が、耳に騷々しく響いた。騷は何時までも續いた。

翌日は山の別の側へ廻つたやうに、陽氣が寒かつた。

廊下へ出てみると、空が一面灰色雲に封されてゐる。ちらりと雪も降つてゐるやうで、重苦しい空氣が、シンとした大地の人家や木共を壓つけてゐるやうに見える。

家の横手の方で、パチ〳〵火の燃える音がした。出てみると、納屋の建續いた北側の庭に、焚火を圍んで、亭主と何時も來る小鳥擊の爺さんとが、其處へ持出した腰かけに胡座をかいてゐる。蓆を敷いて子供も火に當つてゐた。

顔を洗つて飯を食つてから、庄三も庭へ出て焚火の側へ寄つて行つた。亭主は書生時分に拔粹した漢詩の集を見ながら、をり〳〵ぴこつく鼻頭で阿爺に應答をしてゐる。

町や村の人の生活の事が、それから其へと話された。米屋の後家、呉服屋の身代、二百圓出して引張込んだ妾に逃げられて、裁判所まで騒した色好みの村の老豪農、日本の女と一緒になつて、此處から五里ばかり山手の村に引込んでゐる氣樂な金持のアメリカ人、博奕で揚げられた有名な贓品買の惡婆……新刑法の議論なども出た。阿爺は時々愚かな問を發した。亭主は「何を莫迦〳〵」と云ふやうな顔をして、「人間もさま〴〵よ」と、詩集に讀耽つてゐた。此の亭主の一面には、周圍の人生を遠退いて見てゐると云ふやうな處があつた。

靜かな濱方を、眠いやうな鷄の聲が時をり擴かつて行つた。

そこへ山から通ふ、鷄屋の爺か、高い足駄を穿いて、籠を肩にして入つて來た。籠には鷄が一羽入れられてあつた。

亭主は、ちよいと其方を見た限て、相變らず詩を讀んでゐる。

掛碁の話が興んで來た頃、庄三は女中にタオルを持つて來さして、野中の鑛泉へ入りに行つた。

寂しい山陰の一軒家は、其日々々の隱れ場所のやうに、可懷しいものと爲つた。彼は薄暗い湯槽のなかて、風の音を聞きながら、何時までも肆な思に耽つた。乾いた板敷に、茹つたやうな體を横へてゐるのも、心持よかつた。

下宿の方から、目盲縞の鯉口を着た内儀さんがやつて來て、默つて釜の方へ石炭をくべて出て行つた。

歸りに觀音へあがつて見た。今日は風が寒いので、門の處に鈴を振つて詠歌を歌つてゐる慘な盲の婆さんも見えなかつた。茶屋の店も荒れてゐた。

堂のなかには堂守が一人、火鉢に縮まつて、段を登る跫音に氣疎い耳を立てゝゐた。一枚四錢で寄附する瓦が十五六枚、其前に並べてあつた。

降りて眺めると、堂は可也荒廢してゐた。老人の骨のやうな柱や勾欄には、筋張つた木に肉と云ふものがなかつた。土臺も目に立つて傾いてゐた。

國々にある此種の建物が、一つ〳〵跡を絶つて行くのも、目に見え透くやうであつた。

庄三は暫らく崖際のロハ臺に腰かけて、廣々した灣を眺めてゐた。雲の垂下つたやうな海面には、船の影も見えなかつた。下まで荷車を曳いて來たらしい、甲掛草鞋の若い男と女とが、一方のロハ臺に行儀よく腰かけてゐた。婚禮してまだ間もない夫婦は、眞中に擴げた竹の皮から握飯を取出して、臆病ら

しく默つてむくしやく食つてゐた。睦じさうな二人の涼しい目のうちには、まだ淸い幸福の影が宿つてゐた。

嶮しい裏坂から降りて、直ぐ下の宿へ歸ると、九月の腹を抱えて、爐側に新聞を見てゐた內儀さんが、

「今貴方を知つてるとか云ふお客樣が見えましたよ。お二人づれですがね……。」

庄三は爐の側へ寄つて行つた。

「どんな人です」と、鼻や口の大きい內儀さんの顏を瞶めて、不安さうに訊いた。

「お二人とも洋服を召して、何でも繪をかいて步く人ださうですよ。」

「はア、幾歲ばかりの……。」

「まだお若いやうですよ。內で貴方のことを言ひましたらば、それぢや今夜一緒に飮むなんてね」と、太い白齒を見せて笑つた。

「何處へ行きました。」

「晝御飯までに、少し其處いらを見て來るとかいつてね、多分濱の方でせうよ」

そこへ亭主も上つて來た。

飯が濟んでから、爐傍で莨を喫してゐると、二人連の客が函やカンバスを提げて二階から降りて來た。黑い外套を着た大い方は、二三度何處かで逢つたことのあるH―氏であつた。

二人は土間を隔てて辭を交した。H―氏は其連と一緒に、二日に東京を立つて、布良や千倉に二三日

づゝ足を停めてゐた。

「此方はカラ駄目のやうです。餘りに綺麗すぎる。布良あたりへ行くと岩や海が荒くて、感じが悉皆違ふやうです。」

H—氏は恁う言つて旋て靴を穿いて土間へ降立つた。而して、「これから船形の方へ行つて見やうと思ふです」と、些と會釋して出て行つた。

庄三は此の美術家の地位などを、亭主に話して聞した。

「ぢや一つ描いて貰ふべいかな。」亭主は唇を噛へて、肩を搖つた。而して二三度其名を繰返して、雜誌や新聞で見た記憶を喚起さうとしてゐた。

この二人連の美術家が、パステルと水彩畫と、一枚宛の新らしい製作を繪挾に加へて、引揚げて來たのは日の暮方であつた。

H氏が湯からあがつて來ると、七枚の水彩畫が庄三の前に擴げられた。庄三は目を瞬つて、一づゝそれを眺めた。而して意味ある若い人達の旅行を、可羨しく感じた。

七枚のなかでは、千倉で寫つたと云ふ山の姿が、最も彼の目を惹いた。畫には一面に暗い影が漲ふて、中腹に枯枝を集めてゐる山男の樣も寂しかつた。

「一日で描き切れないやうな畫は、矢張可けませんね。取りかゝた日が、丁度今日のやうな曇つた日なんです。其感じを失はないやうにしてゐるんですけれど、天氣が好くなると、全然色が違ひますから……

……。」

H―氏は前の方へ畵を持出して、左視右眄してゐた。

K―氏と云ふ連が湯から出て來ると、庄三は此人にも紹介された。

K氏は畵挾のなかから、同じく七枚のパステルを取出して、そこへ並べた。

「君のぢやメランコリーな處があつて其が一番好い。こゝいらが莫迦に可い。」

H―氏は一枚の畵を引寄せて、首を傾げた。此畵は泥色の山の蔭から、幽かに暗い海の色が見透されるやうな畵取てあつた。

感情の動いてゐるやうなH―氏のに比べると、鈍色の此人の畵は、一體に重苦しかつた。

旋て畵の講評がすむと、膳が三つそこへ運ばれた。

酒を飲んでゐる間、三人の間に色々の話が交された。外海岸の自然、食物、女に就ての二人の見方は、取次に興味があつた。そこへ亭主も入つて來て、「こりや大したもんだ」と畵の側へ逼寄つた。

亭主は揉手をしながら、「何でもよろしうございんすから、萬型お後で些いと一つ……」

H―氏は素直に、「然うですね。」

「まあ御ゆつくり……藝者でもお上げなすつて……。」と言つて、亭主は部屋を出て行つた。

「眞實に一人お呼びなさいよ。」女中が側から言出した。

鰻屋で見た若い方の女が、老人じみた身裝で入つて來た頃には、酒が大分廻つてゐた。

女は手の甲を探りながら、床に並べた水彩畫の方を眺めて、「へえ、皆さんは繪をお描きなさるの。私にも一枚下さいな。」

「こんな畫お前何にする」

「でもね、私のやうなものでも、世帯を持つともあるでせうから。」

「世帯を持つたら遣らう。」

「え、是非……。」

女はお座附をつけはじめたが、撥音が冴えず、聲に艶がなかつた。節回も粗かつた。歌が過むと、部屋が白けたやうになつた。女は二三杯酒を飮んだり、酌をしたりした。然してから又三味線を取上げた。

「何ひませうぢやありませんか。何かお遣んなさいよ。」

苦しさうな女の都々逸が二つ三つ續いてから、H―氏の端唄が初つた。寂のあるやうな咽喉に、大津繪が調子よく唄出された。

「よう〳〵、叔爺」などゝ、女は聲かけた。

「ぢや一つ大島節をやらうか。布良て仕入立のホヤ〳〵を……」とH―氏は高い調子て笑つた。

「お遣なさい。」

H―氏は些と調子が出なかつた。女は微音て口切をした、

「それぢや揃へずきてローカルカラがない。もつと恁う自然に……。」H―氏は首を振つて、自分に聲て唄出した。

大分過つてから、H―氏は松前節を二つばかり遣つて、苦しさうに其處へ倒れた。

「巧いわね。」

「本場だ」

やがて女は三味線を推遣つて、冷たい酒を飲んだ。H―氏はじろ〳〵其顔を眺めてゐたが、するうちノートを取出して寫生に取かゝつた。

「厭よ私‥」と、女は顔を伏せた、抜上つた出額が、白羽二重のやうに光つた。

續いて、女中の顔も寫られた。藝者はノートを覗込むと「お前さんよりか餘程好い」と、見下すやうに女中の顔を見た。

「お前幾歳だ。」

「私‥。幾歳に見えます」と、女は上目づかひをした。

「二十三……。」

女は厭な顔をした。「いゝえ十九。」

「それぢや屆が間違つてゐるんだらう。十九と云ふ顔ぢやないね。」

女は默つて俛いた。

飯が初つた時、女は給仕をしながら、「いつお歸んなさるの」とH―氏の方へ、甘えるやうな首を傾げた。

「明朝……。」

「へえ、もう……もつとお出なさいよ。」

席が靜まつてから、亭主は女中に畫仙紙と箱と毛氈とを運ばせて、二階へ上つて來た。

H―氏は二枚ばかり醉墨を揮つた。別に女にも一枚くれた。

庄三が自分の部屋へ引取つたのが、十一時頃であつた。女中は床を延べながら、今夜の藝者の噂を初めた。年が二十三だと云ふ事や、東海道を旅から旅へ渡つて行いた事など話して聞した。

「そんな女か。」庄三は干からびた女の聲が、耳につくやうであつた。

「どうして擦れてゐてよ。去年の夏なんかも小い書生さんと隨分巫山戯た眞似をして行いたわ。一緒に寄席へ入つたり、料理屋へ上つてお酒を飲んだりさ。この頃その書生さんが來てゐるんですとさ。だけど、此方ぢや極が惡いものですから、北條の下宿へ來てゐてね、お座敷がかゝる度に、あの人さッと寄つて來るんですッて。……その書生さんが、些と可愛い顏をしてゐるの。私幾度手紙の使をさせられたか知れやしない。」

女が出て行つてから、彼は寢床へ雜誌を持込んで、長く懸離れてるやうな人達の作物に初めて目を觸れた。

貸家が立つてから五日ばかり過ぎた。

十四日の午後の四時頃、庄三の姿が、例の待合所を出る人々の中に見られた。出て來る人達は、皆な麻へつたやうな顔をして、そつち此方の巷へ忙しさうに散つて行つた。

庄三は、珍らしさうに町のさまを眺めながら、濘(ぬか)つた道の片側を歩いてゐた。町は不斷の姿に復つてゐた。汚れた雪塊(ゆきころ)が所々に轉されてあるのも目(め)に着いた。

やがて岡崎町の方へ出ると、電車がのろ〳〵と通つてゐた。庄三は宿へ拂つた殘りの金を少しばかり、ポケットの底へ推込んでゐた。K—氏に言傳を頼んで、雜誌社から取寄せた金を受取つてから、間もなく彼は△△の地を離れた。外濱の方へ廻つて見る心組もあつたが、もう氣乘がしなかつた。

電車に乘らうと思ひ〳〵、彼は幾度も乘そびれた。夕暮の色が目前(めさき)にかゝつて來た頃、漸く明い電車のクシヨンに落着くと、遣散された家のさまが、次第に頭腦に浮んで來た。



盲魚（めくらうを）

眞山青果

一

六月の強い日の下を葬式が續いた。施主親子は種々考案の上、寺方（てらかた）で云ふ鈍色（どんじき）木綿の袷に羽織、同じ袴を新規に仕立てゝ棺の後に立つた。

永昌寺の廣い客殿はギッシリ人で埋（うま）つた。餘つた人は廣庭の日和に立つて式の終るを待つて居た。區裁判所の中田判事、郡立病院長、警察署長、水産組合長、郡視學、議員、その他町で重立つた顔の人たちは殘りなく集つて居た。

人々の視線は、施主席にガッシリ坐つて居る豪氣な郡長の

顔より、その子息の銀行員より、誰よりも先づ女席の上に居る四十恰好の肥つた人にそゝがれ勝ちであつた。分けて氣の弱い女教師達などはヒソヒソ囁き合ひながら痙攣するやうな同情の目を送つて居た。

海から來る微風は庫裏前にならぶ合歡木の甘さうな若葉を撫てゝ、棟の高い窓々から古い匂ひの本堂に流れ込んだ。

括れた手頸に珠子をからんで、白い衣裳を着けたおいそは、板のやうに固い疊にシャンと坐つて、一つ所を見詰めたなり、七僧の長らしい讀經の間も、足の親指一つ内所では顧さなかつた。

廣い本堂はたゞ一基の白木の位牌てあつた。――新歸元、香雲院良貞高操大姉之位、享年七十四歳。傍の一本蠟燭の灯先は搖れ動きもせず晝間の空氣に細々と點つて居た。貴き香煙は一縷白く靜かに立つた。

「おいそ様御燒香。」

田舍から出て來た紋付袴の舊家來が、緣側の隅から嚴かな聲て次第帳を讀み上げた。少し背筋の丸くなつた良人は合誦の讀僧の中を小腰かゞめながら、亡き母の骸に恭しく久離の香を焚いて居た。息子の猛が立つた。次が自分。後から自分を押退けるやうにしてガサツな良人の妹どもが急いた。猛の妻。娘お總の名代、孫、甥、従兄弟ども……………。

抹香の煙は次から次の人足に搖り亂れた。會葬の人だちまて浮き腰になつて混雜する中に、おいそはもとの席へ戻つて、大勢の立騷ぐ背中を見て獨り前の如く坐つた。身内の者まで何を急ぐとも無く急き

立つて、場所も思はぬ亂雜な振舞に佛を穢されるやうに思つた。

棺の天蓋も金襴の蓋袱も日の下に取除けられた。白木綿を巻付けた細長い檜棺の上に前と書いた墨が鮮かに讀まれた。空臑に火型を寄せた人足どもの手が、荒繩でそれを縛り上げ、棒を通した差荷負にした。寺裏の濕つた杉林を拔けて町外の火葬場へ搬ぶのであつた。

おいそは加賀の大聖寺に居る時分、御連枝樣から頂戴した大切な珠子を爪繰りながら、會葬の女連れと坂上の松まで棺を見送つた。日に乾いた赤土道は草山の裾をつゞいて、小皺の光る夏らしい海が松の間から見えた。一團の近親にまもられて行く裸な棺は息杖で輕るい拍子を取り〳〵、漁士町の靜かな晝を通つて、紺青色の靄の中へ遠かつて行つた。

寺に居る中から唇をピリ〳〵ひきつらせて居た若い嫁は、眞蒼になつてそこの草原に蹲んで了つた。横腹を抑えながら人に扶けられて坂を下りて行つた。おいそは繪を見る時のやうな甘い悲味を感じながら、姑の棺の全く見えなくなるまで立つて居た。

そして、郡視學の細君等と話し〳〵重い身體を家の方へ搬び初めた頃には、もう冷却した陸の風が路傍の篠竹藪をザワ付かせて居た。細君だちは上役の奥樣の身體を氣遣ひながら、重病て居る娘の病狀をいろ〳〵心配してくれた。

「母よりはあれの方を先に出すとばかり思つて居ました。」

然し、おいそは落付いて微笑しながら斯う答へて居た。細君だちは悲しさうな目をして居た。

二

親類どもはそれ〳〵歸つて行つた。妹どもは餓えたやうな目付して、分けられた形見を不足さうに見て居た。中には止まつて居て娘の看病をしたいと云ふ者もあつたが、お前達も長い間他の家を掻き廻したのだ。今度は私どもの身體にしてくれと、良人は磊落にその親切を斷つてやつた。伜夫婦だけは催しのある嫁の身體を氣遣つて態々通し人車で仙野へ歸した。

兎に角、自分の家になつた。殆んど何十日振りかで娘の病室へ入ることが出來たやうな氣がした。

「お總ちやんや。」無駄と知りながらもおいそは日の射す枕元へ寄つて母らしい聲を掛けて見た。魂の無い娘の顏が底から透通つて來た。無感情、無意識、無感覺になつてからもう二十日近くなる。痩せも衰ひもせず、欲の無い美しい顏して、晝も夜も目をハッキリ開いて居た。

「一言ぐらゐ話してくれたら何うなの、お總ちやんや。」母は傍へ寄つて、硝子のやうな黒い瞬きもしない瞳孔に自分の顏を映した。二重腮の年寄つた女の顏が小さく映つた。何も彼も知り拔いて居て、態と斯う默つて居るとしか思はれなかつた。

聲の太い父親は秘藏の短刀を錦の袋から拔いて娘の眉間に鋒など突き付けたりして見る。「見ろ。」と威嚇の聲を腹の底から押搾つても人形のやうに動かなかつた。父親は溜息して二階へ上つた。

借家して居る今の家はニコライ信者の先の郡長の家である。他には些いと知れ憎くいやうに出來て居る二階廊下の潜り戸をくゞると、二三段高くして暗い部屋がある。先の老郡長の隱れた禮拜堂であつた。

立つて、場所も思はぬ亂雜な振舞に佛を穢されるやうに思つた。

棺の天蓋も金襴の蓋袱も日の下に取除けられた。白木綿を巻付けた細長い檜棺の上に前と書いた墨が鮮かに讀まれた。空臑に火型を寄せた人足どもの手が、荒繩でそれを縛り上げ、棒を通した差荷負にした。寺裏の濕つた杉林を拔けて町外の火葬場へ搬ぶのであつた。

おいそは加賀の大聖寺に居る時分、御連枝樣から頂戴した大切な珠子を爪繰りながら、會葬の女連れと坂上の松まで棺を見送つた。日に乾いた赤土道は草山の裾をつゞいて、小皺の光る夏らしい海が松の間から見えた。一團の近親にまもられて行く裸な棺は息杖で輕るい拍子を取り〱、漁士町の靜かな晝を通つて、紺青色の靄の中へ遠かつて行つた。

寺に居る中から脣をビリ〱ひきつらせて居た若い嫁は、眞蒼になつてそこの草原に蹲んで了つた。横腹を抑えながら人に扶けられて坂を下りて行つた。おいそは繪を見る時のやうな甘い悲味を感じながら、姑の棺の全く見えなくなるまで立つて居た。

そして、郡視學の細君等と話し〱重い身體を家の方へ搬び初めた頃には、もう冷却した陸の風が路傍の篠竹藪をザワ付かせて居た。細君だちは上役の奥樣の身體を氣遣ひながら、重病で居る娘の病狀をいろ〱心配してくれた。

「母よりはあれの方を先に出すとばかり思つて居ました。」

然し、おいそは落付いて微笑しながら斯う答へて居た。細君だちは悲しさうな目をして居た。

二

親類どもはそれ〴〵歸つて行つた。妹どもは饑えたやうな目付して、分けられた形見を不足さうに見て居た。中には止まつて居て娘の看病をしたいと云ふ者もあつたが、お前達も長い間他の家を掻き廻したのだ。今度は私どもの身體にしてくれと、良人は磊落にその親切を斷つてやつた。悴夫婦だけは催しのある嫁の身體を氣遣つて態々通し人車で仙野へ歸した。

兎に角、自分の家になつた。殆んど何十日振りかで娘の病室へ入ることが出來たやうな氣がした。

「お總ちやんや。」無駄と知りながらもおいそは日の射す枕元へ寄つて母らしい聲を掛けて見た。魂の無い娘の顏が底から透通つて來た。無感情、無意識、無感覺になつてからもう二十日近くなる。痩せも衰ひもせず、欲の無い美しい顏して、晝も夜も目をハッキリ開いて居た。

「一言ぐらゐ話してくれたら何うなの、お總ちやんや。」母は傍へ寄つて、硝子のやうな黒い瞬きもしない瞳孔に自分の顏を映した。二重腮の年寄つた女の顏が小さく映つた。何も彼も知り拔いて居て、態と斯う默つて居るとしか思はれなかつた。

聲の太い父親は秘藏の短刀を錦の袋から拔いて娘の眉間に鋩など突き付けたりして見る。「見ろ。」と威嚇の聲を腹の底から押搾つても人形のやうに動かなかつた。父親は溜息して二階へ上つた。

借家して居る今の家はニコライ信者の先の郡長の家である。他には些いと知れ憎くいやうに出來て居る二階廊下の潜り戸をくゞると、二三段高くして暗い部屋がある。先の老郡長の隱れた禮拜堂であつた。

おいそはこの構造が氣に入つた。喰べたり笑つたり人の息のかゝる座敷に神棚を飾る恐しさを思つて、日頃信心するお伊勢樣、淺間樣、杵築樣のお假身をこゝの祭壇に鎭め參らせた。七條の注連繩、幣束、眞榊、總て日和山の神宮を招いて大祓ひをした。

高い小窓が一つあるだけて常に濕氣臭くはあるが、おいそは日に三度づゝは必らず上つて座淨手を切つた。お總にも禮拜を缺かしたことが無い。頭の亂れさうな時はこの薄暗い清淨な部屋に籠つて居て心持を整へた。又樣々の事も思つた。

夕暮、闇が庭の植込の青葉から湧いて、靜かに家の中へ流れて來る時、おいそは祭壇の圓座にうづくまつて、御燈の灯の暈して來るのを凝つと見詰めて居る。黃色く顫える暈が顫えて〲遠く小さくなつて行く。然うすると、もうシン〲と音のするほど心が冴え上がる。何時も蜂の唸り聲が聞える耳が、秋の水のやうに澄んて遠い物音までハツキリ傳はつて來る、そして、日の光りが朝の潮をひたすやうに何んとも云はれぬ強い感情が身體中に鳴り溢れる。

「私はこれまて一度も、筋の立たないことは爲ませぬ。」

下顎をガク〲鳴らせて、顫えながら斯う云つてぬかづくのてあつた。と、又直ぐ後に續けて、

「でも若し私に惡るい所が御在いましたら、御先祖樣、杵築樣、何うか〲枕神にてもお立ち下さい。屹度その場の緣目から私は改めます。」と周圍を見廻はしながら恐る〲付添すのてあつた。

氣の強い妹どもは、子供のことゝなると家のことゝなると、鳥のやうに氣負ひ騷いて爭つた。おいそ

は沈着いて默つて通した。姑は又善い惡るい共に感情を外に見せぬおいその心持を疑つて、死ぬその日まで油斷を見せなかつた。然しおいそは姑につくす嫁の務は立派に濟したと思ふ。ヤクザな姪を二人も引取つて世話した。親類の墓も掃除した。二人とも逃出して今は親々まで仇のやうになつて居るが、それは自分の罪ではない。

寧そ、あのまゝ旅で暮らせば好かつたとも思ふ。高が七八人の營養の惡るい郡書記どもの上に立つ郡長ぐらゐの位置、それを振り當てられた時に自分の年を勘定して、故郷と云ふものに引かされて斷りかねた良人の衰ひが今から思ふと悲しくなる。大酒して、豪語して、誰の前でも太い頸筋を自慢にして來た人であつた。この人の掌で覆はれると、風も雨も身に來ないと思つて旅の二十五年を暮した。

お總は小菅監獄の官舍に生れた。子の無い若い細君だちの慰みになつて、方々の家から奪ひ合つ愛がられた。岡崎では好く割籠や毛氈を持つて、海の見える茸山に大勢に圍まれて一日を暮した。岐阜に行つた時はもう典獄、上に立つ人は時々巡回する縣知事の外にはなかつた。何十人と云ふ看守長の細君だちや町の豪家の女どもが始終出入して、風雅な茶の湯の會や琴の合奏に廣い家を始終借りられた。お總はこゝで生田流の秘傳まで受けた。舊城の天主閣が直ぐ前の小山の松森に聳えて、瀬の早い木曾川が切崖の下を流れた。夏は眞白な朝霧の中をホウ／＼と懸聲を取り代しながら官材の筏を流して行つた。

旅に居る心持は自分でも美しかつたと思ふ。芝居を見ても泣いたり笑つたりした。官舍に居る細君連が代る／＼泣いて訴いて來るのを聞いても、多くは他愛も無い感情の衝突であつた。一人の細君が笑ふ

ことは他の細君にも可笑しい事てなければならなかつた。今のやうに底の心持て活きると云ふことは無かつた。

おいそは二十一になるお總を連れて故郷に歸つて來て、今まて考ひもしない生活に出會つた。丁度、狹苦しい土に植えられた植木が、葉を伸べ枝を伸ばして、この廣大な空の光を爭ひ、雨の一濕りを爭ふやうに、人と人、家と家とが爭ひ活きるさま〳〵の穢ない姿を見た。善い惡るいを決められないやうなセッパ詰つた爭ひばかり見せられた。稚い心持を考へてお總に着せた派手な着物まて周圍とは釣合はなかつた。年々模樣が地味になつて行くのが悲しかつた。

蒼い顏しておいそが二階から降りて來ると、良人はもう好い氣分に醉つて、田舍臭い若い郡書記どもを集めて、蓋物の嘗め味噌を嘗めながら、頸切り話の例のおはこを初めて居る。監獄に務めて居る間に自分が立會つて十幾人を斬罪又は絞殺した經驗談は、十七歲の時白川口の官軍と戰つた手柄話とお對の自慢なのてある。

「又てすか。」とおいそはいやな顏をして座つた。

「又てすかッてお前、今のお若い連中は餘り度胸が無さ過ぎるよ。俺が後から拔き打ちにそのお朝の背骨を切り付けた話ても聞いて、些つとは膽に鹽をすると好いんだ。何うだ貴公だち。刀を斯う――。」もう酒にくど〳〵なつて、同じ話を何度も繰返して居る。

おいそは默つて火を見詰めながら聞いて居る。

おいそは娘お總の耳だけを便りに暮して來たと云つても好い。父親の氣質を受けた長男の猛はそんな込入つた話を煩るさがつた。又早くから東京へ修業に出て家に居なかつた。

三

母は低能な娘を傍に引寄せて、千石の大身からこの貧しい女家内の多い士族に嫁入つて來た以來の苦勞を話して聞かせた。皆あさはかな口の多い妹どもであつた。初孫の猛を見に田舍から上つて來た姑は、もう次ぎのお總がもう腹に居るのに氣付いて、「又ですか。」と蔑むやうな大きな目に沈つとおいそを見詰めて居た。そしてその晩良人にヒソヒソ云ひ聞かせるのを聞いた。おいそは良人にかくれて黑砂糖の煮じ汁を飲んだ。兒は産むまいと産神へ願請をかけた。良人が古器物に凝つて、無勘定な負債するのを妹どもや親類は皆自分一人の所爲にして蔭口を云つた。そして、姑を騙して少しづゝ物を搬んだ。自分等の旅から歸つたのを見て、折角辛苦して溜めた母の身上をねらうものゝやうに恨んだ。

同じ年頃の從姉妹どもは二三人の母となつて世帶に喘えて居る中に、稚いお總はまた全然の嬰兒であつた。聞いたことを固く守るより外に分別する心がなかつた。二十三になつてものゝ數を讀むのに、一萬から上はドッサリと手眞似して居た。母の目が命じない中は坐つた所も動かなかつた。祖母、伯母ども、從姉妹どもを正直昔ばなしの惡魔のやうに怖れて居た。財産、親屬、家、など云ふ恐ろしい觀念が脆弱な腦皮質のなかを旋風のやうに狂ひ狂つた。そして、母と一緒に二階の祭壇にひれふした。母の泣く時には同じやうに聲に節つけて泣いた。

ことは他の細君にも可笑しい事でなければならなかつた。今のやうに底の心持で活きると云ふことは無かつた。

　おいそは二十一になるお總を連れて故郷に歸つて來て、今まで考ひもしない生活に出會つた。丁度、狹苦しい土に植えられた植木が、葉を伸べ枝を伸ばして、この廣大な空の光を爭ひ、雨の一濕りを爭ふやうに、人と人、家と家とが爭ひ活きるさま／＼の穢ない姿を見た。善い惡るいを決められないやうなセッパ詰つた爭ひばかり見せられた。稚い心持を考へてお總に着せた派手な着物まで周圍とは釣合はなかつた。年々模樣が地味になつて行くのが悲しかつた。

　蒼い顏しておいそが二階から降りて來ると、良人はもう好い氣分に醉つて、田舍臭い若い郡書記どもを集めて、蓋物の嘗め味噌を嘗めながら、頸切り話の例のおはこを初めて居る。監獄に務めて居る間に自分が立會つて十幾人を斬罪又は絞殺した經驗談は、十七歳の時白川口の官軍と戰つた手柄話とお對の自慢なのである。

「又ですか。」とおいそはいやな顏をして座つた。

「又ですかッてお前、今のお若い連中は餘り度胸が無さ過ぎるよ。俺が後から拔き打ちにそのお朝の背骨を切り付けた話でも聞いて、些つとは膽に鹽をすると好いんだ。何うだ貴公だち。刀を斯う――。」もう酒にくどくなつて、同じ話を何度も繰返して居る。

　おいそは默つて火を見詰めながら聞いて居る。

三

おいそは娘お總の耳だけを便りに暮して來たと云つても好い。父親の氣質を受けた長男の猛はそんな込入つた話を煩るさがつたり、又早くから東京へ修業に出て家に居なかつた。

母は低能な娘を傍に引寄せて、千石の大身から此の貧しい女家内の多い士族に嫁入つて來た以來の苦勞を話して聞かせた。皆あさはかな口の多い妹どもであつた。初孫の猛を見に田舍から上つて來た姑は、もう次ぎのお總がもう腹に居るのに氣付いて、「又ですか。」と蔑むやうな大きな目に沈つとおいそを見詰めて居た。そしてその晩良人にヒソ／＼云ひ聞かせるのを聞いた。おいそは良人にかくれて黒砂糖の煮じ汁を飲んだ。兒は産むまいと産神へ願請をかけた。良人が古器物に凝つて、無勘定な負債するのを妹どもや親類は皆自分一人の所爲にして蔭口を云つた。そして、姑を騙して少しづゝ物を搬んだ。自分等の旅から歸つたのを見て、折角辛苦して溜めた母の身上をねらふものゝやうに恨んだ。

同じ年頃の從姉妹どもは二三人の母となつて世帶に喘えて居る中に、稚いお總はまた全然の嬰兒であつた。聞いたことを固く守るより外に分別する心がなかつた。二十三にもなつてものゝ數を讀むのに、一萬から上はドッサリと手眞似して居た。母の目が命じない中は坐つた所も動かなかつた。祖母、伯母ども、從姉妹どもを正直昔ばなしの惡魔のやうに怖れて居た。財産、親屬、家、など云ふ恐ろしい觀念が脆弱な腦皮質のなかを旋風のやうに狂ひ狂つた。そして、母と一緒に二階の祭壇にひれふした。母の泣く時には同じやうに聲に節つけて泣いた。

良人と伜とが幾日も協議の上、整理の爲めに山根新田の田地を手放すと決めた時、姑は婿の病氣を口實に末娘の家へ行つて半年も仙野から歸らなかつた。おいそは辛らい思ひして度々迎えに行つた。妹どもは笑つた。

散り後れた桃の花に四月の雨が鬮を投げ付けるやうに降りそゝいて居た。おいそは鋭い目付を小さな物音にも狂はせながら二階に閉籠つた。ワナ〳〵顫える手で奉書紙が人の形に刻まれた。筆をお總に付き付けて、戌歳の女、午歳の女と書けと小さな然し壓迫するやうな聲でせまつた。お總は眞蒼になつて云はれるまゝに書いた。筆を置くと周圍が暗くなつた。

「伯母さんが來る、お母さん、早く〳〵。」お總は夜中にムックリ起きて、寢床に顫えて居ることが多かつた。母親も蒼くなつた。

お總は里歸りに來て三日目白晝二階の窓から飛び下りた。お總の良人は幸ひに舅と一所に海釣りに行つて家に居なかつた。庇に大石の落つる音を聞いて出て見ると、お總は燃えるやうな芍藥の若芽の傍に寢てるやうに倒れて居た。何所にも怪我は無かつた。

「まあ、お總。」と母親は覆さるやうに娘にしがみ付いた。水汲みに行つた下女が飛んで來た時、おいそは只、

「何んても無いんだよ、何んても無い。」と手を振つて自分一人て離屋へ擔ぎ込んだ。

「私ぢやない……線香だ……蠟燭だ。」お總は水を顔に吹掛けられて早口に斯うつぶやいた。

「何を云ふんだ。默つて、默つて。」母親は袖で口を覆ふた。

「ぢや、ぢや、私なぞ、何んにも云はなくても好い。」と云つて目をパッチリ開いたまゝウト〳〵と眠つて了つた。

婿にも娘の姿は見せなかつた。氣の弱い婿は不審に思ひながらも、二十里も離れた家に一人で歸つて行つた。

お總はその日から魂が無かつた。足の裏に針を刺しても感覺は無かつた。初め置かれたまゝに夜も晝も睡つて居る。顏色が日増に冴えて美しくなつた。

おいそは唯だ自分にも相談なく自儘に縁談を決めて來た良人の所置を恨むより外なかつた。婿の家は良人の支配する郡内の際に歸農した家柄の百姓であつた。例令酒の上にもしろ、貰ひませう遣りますと男の口で約束して來たのを、今更ら變換は出來ないとて、嫌がるお總を激しく叱り付けた。侍の娘らしく死骸になつて歸つて來いと出してやつた。

「もう何も云ふな。俺が惡るいんだ。死んだら俺も高野山へでも上る。」と良人は皺の深かい顏をそむけて小さな聲で云つた。

奧座敷には胃癌の母親が寢て居た。姑の手前は婿と一緒に縁家へ歸つて了つたやうに云い繕つた。

「あれは本當の神樣だ。穢れの無い心だ。」

母親は瘦せた手を苦しさうに蒲團の外へ出して、遇はずに歸したことを殘念がつて居る。そして、日

に〳〵衰ひて行つた。

おいそは母の病室を出なかつた。娘は舊家來の女房と看護婦とに委かせた限りで、同じ家に居ながら病狀を却つてその人だちから聞いて居た。

良人も又役所に出入りに竊つと襖の陰から娘の顏を窺いて見るだけであつた。溫和しく二階の書齋に閉籠つてこの頃讀み初めた佛典に耽讀して居た。

六月一日の朝、母親は大勢の身內に取圍まれて死んだ。

四

夜は靜かに深けた。海の鳴音が遠く濱に荒れ狂ふた。看護の者どもは次の室に着のまゝで睡つた。剛情な良人は醫師どもの治療を齒痒がつて、最う賴まぬ、自分で癒して見せるといらだつた。床に周園の魚監觀音像を掛けて、その前に經机を置いて端坐した。娘の口を利くまで離れぬとて、身を淨めて法華經の第二十五品を高らかに誦し初めた。

鏽のある太い聲は夜陰の空氣を搖つて、廊下の隅まで響いた。一回誦し終ると良人は立つて來て娘の額にお經を頂かせた。そして、妻の顏を見るも恐るゝやうにして、靜かに又もとの席へ坐つた。

飽まで拔け上つた骨太い良人の顏が蠟燭の瞬きに動いた。

好く見て居ると、娘の動かない顏の底に何かしら動く表情がある。春の風が地の底を流れるやうに、色々感情が去來するとしか見えなかつた。笑ふやうにもある、泣くやうにもある。時とすると、ものに

怖れるやうな不安な感情も汲み取られた。

「貴方、貴方。」

午前二時の時鐘の唸りが、、、うつろに遠く日和山の方に消えて行くのを聞きすまして居たおいそは良人を慌しく呼んだ。

「何んだ。」年寄らしく眼鏡を掛けた良人は經文から目をうつした。

「こんなまア耻かしさうな顔して。ホンノリ赤くなつて。」

良人も蠟燭を持つて立つて來たが、娘は人形のやうに睡て居る。良人は却つて心配さうな目を妻にくれた。

「キットあの時ですよ。富永の家へ初めて連れて行つた時、あの時の顔ですよ。お總は十八でした。」

帆船の走る蒼い湖水の縁を、春の日、華美に着飾らせた娘を連れて、通りすがりの人に見返られながら、許婚の家に見參に行く時の繪のやうな透明な近江の景色をおいそは現に見て居る。

「少し外の風にてもあたつて來なさい。」と良人は又力なく經文に向つた。

「屹度あの時だ。」おいそは何うしても然う思つた。そして悲しくなつた。

その時袴を穿いて父親の傍に坐つて居た、蒼白い病身さうな、然し目付の蒼く若々しい青年の顔が著々と目に見えた。小藩ながら家老職の古風な家造りも目に見えた。今日までたゞ一筋に生長して來た娘の稚ない心の中に斯う云ふ感情が潜んで居やうとは思はなかつた。恐ろしくなつておいそは目を避け

た。

不可議思な娘の一生。二つの時縁側から轉び落ちて以來、七つまで口を利かなかつた。啞を産んだと世間や郷里の妹どもに嘲られる辛らさに、雪の中裸足參りを蹈んだこともあつた。やつと可愛氣盛りになつた頃は、長男の猛が腐骨瘡にかゝつて出入三年も岐阜の病院へ入院して、娘を染々顧る暇がなかつた。後ち氣が變になつて死んだ下女と看護守長の細君にまかせた限りであつた。下女の乳を飲んだお總は當分母に馴染まなかつた。額の隅から意地惡く母を見て居た。それを自分の影のやうな心持に育て上げるまでには、まあどれだけの苦勞と折檻をしたらう。父親でさへ見かねて口を出すのを、女の子は女に委して下さいと云ひ張つて思ふまゝに育て上げた。

富永との許婚を破つたのは自分であつた。先の息子が工夫のする測量を志したのも氣に入らなかつたが、丁度犬山を退して郷里に引込まうと云ふ際であつた。この智慧疎い娘を一人手離して遠國に殘すのは自分にも便りなかつた。良人は大荷物七箱の書畫や刀劒を土産に郷里へ歸る如く、おいそは親類中にない娘の容色を自慢に郷里へ歸るのであつた。

富永の息子もお總も何んとも思はず、當り前に別れるやうに別れた。たゞ昔氣質な富永の老人が怒り立つて、白髯を振はしながら人外のやうにおいそを罵つた。

それから九年になる、お總は二十六、七となつた。當人も富永のトの字も口へ出したことがない。そちこちから緣談もあつた。然し、おいそは何うしても手離す氣になれなかつた。不便なこの町で辛

つと師匠を探し出して、茶の湯、生花、古式な三味線、と風雅な上品な藝事を仕込んだ。長い日も一日二階へ上つて秘傳までうけた琴を心靜かに奏てゝ居た。法華經を誦する良人の顏に夜深けの脂が浮いて、聲は沈んで行く。洞のやうに空虚になつたおいその頭の中を撫でるやうに響かして行つた。

外に耳を立てると、もう拂曉の氣が動いて居る。暗い中から鋭い蒼味が破れて來るやうに思はれた。小山一つ彼方の牧場では搾乳場へ引擦り出される牛の唸聲が聞えた。

五

お總は寢てから二十三日目に初めて口を利いた。

「あゝ、煩さかつた。」或る朝、突然寢返りして然う云つた。そして、目が覺めてから身體が段々瘦せ初めた。云ふことが本當ではなかつた。

「私ぢやありません。……蠟燭だ。……線香だ。」と身を窘めて顫えながら見えない人に云ひ譯して居る。

線家の親戚が道具を返しに來ての話では、向ふに居る中、佛壇に線香を供へる時誤つて重代の蓋袱を燒いた。その時喪心のやうにボンヤリして錦の燃えるのを眺めて居たから、大抵それが源因でせうと氣の毒さうに云つて居た。

然しおいそは單純なその譯ばかりを信じられなかつた。未だ〳〵深い譯があるに相違ないと思つた。

ひたぶるに縁談を嫌つた當時のことも思ひ出される。又愈々嫁くと決まつた時、二階へ連れ上げて母としては云ひにくい世の常の話を嚙んでくゝめるやうに聞かせた時、蒼くなつて聞いて居た與さめた顏も思ひ出される。人の世の快樂を待つ心なければ、新婚當時のとても忍びがたき獸の如き穢なき征服も思はれる。夢のやうに暮して來た人が初めて現實に觸れる時の恐怖すべき戰慄も思ひ出される。見せべきて無い幕を明けて見せた。

庭に白い芙蓉の花が咲いた。裏の崖で遮られて居た西日は、日に〳〵南へ廻つて掠れた日が離屋の障子に映るやうになつた。人氣が少なくなつた家の中は、急に間隙が出來たやうて、どの座敷へ行つても氣が寂しかつた。白く冷たい花のつゝましやかに咲いて居るのを見ると、自然と頰を傳つて涙が流れた。

お總は力なく、急に大きくなつた目てあてもない宙を何時までも眺めて居る。母の顏でも凝つと眺める。おいそはその黑い瞳に刺されるやうに思つた。耐らなくなつて、直ぐ二階の神棚へ遁れる。唇を顫はしながら、

「私は一度も筋の立たない事はしたことが御在ません。」と我もなく突伏して了ふ。

巫女を招いて姑の死口も降して見た。肺病で死んだ弟の魂も祭つた。富永の息子やお總に乳をくれた氣違ひの乳母や妹どもの生き口に從つて、井戶も祭り又立ち樹の靈も祭つた。當り日〳〵には良人の傍をも傍れて居た。こッちから頭を下げるやうにして姪どもの機嫌も取つた。

「お總ちやんや。後生だから何うか勘忍しておくれ。ね、お母さんだよ。」と斯う云つて、優しく娘の額に觸つて見るのであつた。
「お前は誰だ。身體が穢れてる。私の身體に匂があるまい。」
早口に喋り立てる娘の顏は赤く血走つて居る。そして、硝子のやうに色澤が透明つて居る。
「お總ちやんや、私だよ、私だよ。好く見ておくれ!!」
お總も時々は母の顏を見分ける時があつた。そして、そんな時には妙に恐ろしさうな素振りを見せて、胸元のはだかつたのなぞを窃つと搔き合はせて、いぢらしく小さくなる。
「氣が付いたね。シツカリお爲よ。さアお母さんと面白く遊びませう。」
「はい。」
「お芝居へ行きませう、赤い着物を着て、島田に結つて。」
「はい。」と云つてるけれど、それは長い事ではない。海の日が雲を追ふやうに直ぐ暗くかくれて了ふ。
朝々霜が裏山に白く置いて、渡り鳥が落葉の上をカサつかせる頃、仙野の猛から二番目の女子を產んだことを知らせて來た。おいそは冬の日の赤い離屋の枕元て、掠める目て針を通しながら赤や青や紫やの友染の襲ね着物を仕立て上げた。
落ち殘つた栗の枯枯毬がカサリ〳〵と地に落ちた。光の失せた雲は忙しく空を西へ〳〵と走つて行つ

た。

帽子を持つて良人は掛聲もせず玄關から入つて來た。默つて病人を見て居る。

「好く、睡つてるな。」と目皺の多い目を向けて小さく聞いた。

「今日は好く睡るやうですよ。好い鹽梅です。」

「ソッとして置くんだよ。睡るほど好からう。」と足音を忍ばせて二階へ上つて行くのであつた。後姿が年寄つて見える。この頃は女中の手も籍りないで獨りて着物など着換えて居るのであつた。

「關ふもんか、これからはこの小さな嬰兒さんと相撲でも取つて、氣樂に日を送らうよ。」と何時かお總が荒れ出した時に云つた良人の言葉を思ひ出しながら、おいそは孫の晴着を縫つて居た。

日がさびしく落ちて、障子がパッと明るくなつた。

（完）

和歌

尾上柴舟選

○　三浦曉村

聲のみて泣く幼な顔ふとうつる山の木蔭の青きみづうみ

枯葉散るかろきかなしみ冬近き林の中にひとりたゝずむ

山越えて林をわけてひたぶるにはせゆく夜半の風のあはれよ

やるせなき胸をいだきて走りゆく夕べの海のうきなやみかな

しみ〳〵と胸に觸れゆく木の間より眺むる朝のはてしなき青

茫然と空を眺めぬ春暮るゝ夕べの森の闇に溺れて

水の上けむれるあはきさびしみにしみ〳〵春の夜を感じ居り

煤煙の中に一むら煙突の冬の日をあび立つが悲しき

海の鳥近く來て鳴くふる郷のものやはらかき夜を忘れず

○　小島ます子

物いへばあやまち多きおろかなる女なれども歌はうたへり

晝足らず夜足らずとして諸共に笑みし月日も程は經にける

朝日さす比叡を間近き水汲場小笹の霜に鶯の鳴く

春立てば水は音して三條の橋より霞む清水の塔

山城や山美しき春の日の加茂の川原に布洒したる

朝美し春雨晴れて衣すます盥のもとの藪こうじ草

○　本間五丈原

ものの本よみおぼえにし其日より涙ぐまるゝ性なりしかな

てら〳〵と淋しう陽はも口づくる窓のがらす

眞ひるのうれひ

波がたにひかりは動きしらじらと粉雪などして日はくれにけり

もの心おぼえそめにし悲しみにうちひそまりし我にざりける

冬の日のしづかに照れば額垂れて今日ゆく君がおもかげに見ゆ

○　小澤紫紘

ほのじろく山ざくらさく香取なる宮居の前に物思ふ子よ

楢の木立まばらに芽ぐむ間をば口笛吹きてゆるう歩みぬ

はてしなき地平のあなたひと群れの白鷺わたる總のたそがれ

朝明けの總の廣野の靜けさの中をしら／＼刀根の光れる

きさらぎの淡き光のたゞよへる梢あふぎて口笛をふく

乳色の春の夜霧にまろらかにまかれたるまゝ若草に臥す

○　下村青葩

濁りたる空にたゞよふ悲しみを夕べの窓に一人眺めぬ

春のごと暖き日は家を出て當なく町をさまよひてあり

冬の日のにぶき光をまともよりあびて靜かに野に一人立つ

野を通り華やぐ町に入りしときしばらく胸はとゞろきて居ぬ

うら若き女と高く興じ合ふ友の面をばしげしげと見る

うす甘きみかんを食ひて事もなき日を茫としててーぶるによる

灰色の大建物の中に居て生きむがための努力つゞくる

椅子により燃ゆる暖爐のかたはらにうと／＼とする安けき日かな

たゞ一人湯槽の中に思ふまゝひたりてありぬ冬の日の午後

年暮るゝかく思ひつゝたゞ一つ殘る暦をしみじみと見る

○　天野謙二郎

わが胸のそこのひめごともろびとにしられしごとく安からずあり

何となう意味あるごとくわれをみる人の瞳ののろはるゝかな

わがさがと人のさがとのあひだなるいと大いなるへだゝりの道

いさゝかの事なり胸は夕潮のごとくをどりてたへがたき日よ

花の木に夕日は映えぬ初春の夕べの杜のなまめかしさよ

わが胸はあまりにいたくおとろへぬ月明き夜をなんだのしげき

さまざまの女に似たるさまざまの聲たてゝふく春の朝風

○　皆川やすの

ふる里のわが上總までほとゝぎす啼けよ旦を君やきくらん

まてる時君は來まさず道の木にそゞろ言など書きて歸りぬ

しづくする皐月は君とゆくもよし柳並木の川ぞひの道

わが髪は海をへだてゝみ心をつなぐに足らずあゝいかにせん

○　小川眞淸

小きよりこの美しき涙もてもとめて得ざるものはなかりき

灯あかきつくゑのうへに摘みて來し野菊の花を露ながらおく

樋の下の小草のごとくわが生は君あるゆゑにうるほひをもつ

新しき年の表紙をうちかへし先づかなしみの一頁讀む

○　藤三千結

よろこびにはたかなしみに酒をのむよわきわれとはなりにけるかな

わがちゝのたまひしことおなじこと醫師のいふをきくがかなしき

胸の上にもろ手をおけばおのづから睡眠いたるおとろへしかな

落葉する銀杏の大樹うちあふぐあたまの上のニコライの鐘

○　飛川晶甜

眞ひるのうれひ

波がたにひかりは動きしらじらと粉雪などして日はくれにけり

もの心おぼえそめにし悲しみにうちひそまりし我にざりける

冬の日のしづかに照れば額垂れて今日ゆく君がおもかげに見ゆ

○　　　小澤紫紘

ほのじろく山ざくらさく香取なる宮居の前に物思ふ子よ

楢の木立まばらに芽ぐむ間をば口笛吹きてゆるう歩みぬ

はてしなき地平のあなたひと群れの白鷺わたる總のたそがれ

朝明けの總の廣野の靜けさの中をしらしら刀根の光れる

きさらぎの淡き光のたゞよへる梢あふぎて口笛をふく

乳色の春の夜霧にまろらかにまかれたるまゝ若草に臥す

○　　　下村青葩

濁りたる空にたゞよふ悲しみを夕べの窓に一人眺めぬ

春のごと暖き日は家を出て當なく町をさまよひてあり

冬の日のにぶき光をまともよりあびて靜かに野に一人立つ

野を通り華やぐ町に入りしときしばらく胸はとゞろきて居ぬ

うら若き女と高く興じ合ふ友の面をばしげしげと見る

うす甘きみかんを食ひて事もなき日を茫としててーぶるによる

灰色の大建物の中に居て生きむがための努力つゞくる

椅子により燃ゆる暖爐のかたはらにうとうとする安けき日かな

たゞ一人湯槽の中に思ふまゝひたりてありぬ冬の日の午後

年暮るゝかく思ひつゝたゞ一つ殘る暦をしみじみと見る

○　　　天野藏二郎

わが胸のそこのひめごともろびとにしられしごとく安からずあり

何となう意味あるごとくわれをみる人の瞳ののろはるゝかな

わがさがと人のさがとのあひだなるいと大いなるへだゝりの道

いさゝかの事なり胸は夕潮のごとくをどりてたへがたき日よ

花の木に夕日は映えぬ初春の夕べの杜のなまめかしさよ

わが胸はあまりにいたくおとろへぬ月明き夜をなんだのしげき

さまざまの女に似たるさまざまの聲たてゝふく春の朝風

○ 皆川やすの

ふる里のわが上總までほとゝぎす啼けよ旦を君やきくらん

まてる時君は來まさず道の木にそゞろ言など書きて歸りぬ

しづくする皐月は君とゆくもよし柳並木の川ぞひの道

わが髪は海をへだてゝみ心をつなぐに足らずあゝいかにせん

○ 小川眞清

小きよりこの美しき涙もてもとめて得ざるものはなかりき

灯あかきつくゑのうへに摘みて來し野菊の花を露ながらおく

樋の下の小草のごとくわが生は君あるゆゑにうるほひをもつ

新しき年の表紙をうちかへし先づかなしみの一頁讀む

○ 藤三千結

よろこびにはたかなしみに酒をのむよわきわれとはなりにけるかな

わがちゝのたまひしことおなじこと醫師のいふをきくがかなしき

胸の上にもろ手をおけばおのづから睡眠いたるおとろへしかな

落葉する銀杏の大樹うちあふぐあたまの上のニコライの鐘

○ 飛川晶樹

春さればいとふくよかに生ふる草その青き芽の如き悲しみ

蒼々となごめる海にうち向ひ君おもひつつ獨りうたへる

悲しみに泣き濡れし瞼を細く開けふと仰ぎ見る空の青さよ

われもまた歌てふものを捨て得ずて日より日を趁ひひたぶるに生く（栄舟先生へ）

○　芝野花

朝露は白光日をば貫くと權あるさまにかゞやきにける

われはなほ君を思へり君は今われを思ふや思はずもよし

來し方はみな空しかり行方も幻なれば今をたのまむ

大聲に泣くは何ごと雀の子遁したるよりたわけたること

○　菊池野菊

ふるさとにかへりくれどもわれに泣く一人もあらぬさびしき日かな

かつてわれ見しことあらぬもの一つ日に一つづつちらづきて見ゆ

蟲鳴く夜喃々としてものを說くはかなき性となり給ひしよ

捨てゝ來しすべての生は夢に似ぬ水無月頃を海にうたはむ

○　永田すうび

いつの日に望みたすかそれすらも生きんがためにおもふひまなし

いつまでも池にしづみし木のごとくうかむときなく泣きぬれて生く

若き日の哀しみわきくわが胸の底のにごりのまたうかみきて

○　小出秀月

黒髮の長きをほこる時なるを物の理を知り涙流れぬ

鶯のなく聲などをよろこばずいねて涙す初春の晝

言葉にも路行く人の妻にも趣を知る大人となりぬ

○　牧晩村

シラ〳〵と佐久の平の空澄み月おちのこる冬の

あけ方

木枯の落ちし夕の藁屋根に雀等默しかへり見て居ぬ

今日の日もわれを照らせりおなじ人また相見つゝ驚かず居ぬ

○　鈴木鳴象

今日もまた事なく暮るを山の端に沈む日を見て心安んず

人馬行き電車走れる紅塵の中に都會のなげかひをきく

なまめける髮の匂ひと酒の香のほのにくゆりて夕となりぬ

○　正木哲夫

額にせしわが手のぬくみしらぬまで病みし一人に心せかるる

さながらに花ちるほどのかるみにと音もなく降る春のゆきかな

二寸ほどつもりし雪をはかりぬる指の白さのまぎれぬる君

○　夏野湖二

鵜飼ひらは鵜の籠負ひて頭布して二月はじめの寒空に來し

入日する西の大空あふぎみて生のつかれにあくびしてけり

○　尾崎渡水

昨日來し原の眞中今日も亦枯草しきて口笛をふく

軟らかき草にはらばひ犬の子と共に眞晝の日光を浴む

○　金子白明

涙出づ軟かき手をそとあてて拭ひ居れども涙溢るる

夜の一時軒燈のかげ散らばへる泥濘の上をわれは歩めり

草に臥し眠れる人の夢の間を空に明るく白雲は浮く

○　傍島芳草

別れしは砂利道に沿ふ停車場のやなぎに雨の注ぐ日なりき

何といふ力か知らず夜となれば明るき街へいざなうて行く

○　中川杏果

冬のきてくもりがちなる日となれば靜かにつもる雪のこひしさ
うすぐもる空の奥なる冬の日に向ひて森の風鳴をきく

○　河邊紅衣

夜とぎする死を外にせし人々の意味なき言も胸に針する（父を失ひて）
悲しみといふ悲しみのすべて皆吾れに寄り來て涙はてなし

○　大谷冷果

夕されば籐椅子に凭りて目をとぢて思ひ耽けるを習とはする
思はざる悲しみごとにこの若きわれの自由のしばられし哉

○　足立笑也

ほりしつる物のかず〱そのうちに君がゑまひを三たびかぞへぬ
燈火のゆるゝがさびしちら〱と窓の硝子に雪ふるゆふべ

○　月森神來

二十四時いきどほる子と笑ふ子の中にわれ居て淋しさに泣く

歌稿は總て東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛の事

俳句

寒食　高田蝶衣選

科擧に出てゝ長安に在り寒食す　咄々
寒食の一家や不和の二竈　同
一村は秦氏にして寒食す　同
清朝を罵る村や寒食す　同
寒食に漁禁ずなど村掟　蛙念子
寒食や衣の焦げ穴つぐ女　同
寒食や隣より飯を借るをかし　同
寒食の空腹いふや灸戻り　同
寒食や煮豆そくはこたくばへし　麥門冬
寒食やつぶやき來る猪入戒　同
寒食や酒肆出てゝ高くうたう客　同
鼓聽いて寒食の夕死すべけん　林避王

寒食の邪人僞善を競ひけり　同
寒食やこぼれ日させば尚冷えて　同
寒食や大路柳影人稀に　朱字樓
寒食に鼠賊潛みし空家かな　同
寒食や灰捨てに出て畑廣き　同
寒食や民醇朴に法簡なり　倨人
鶴て來し居士も坐しけり青飢飯　同
泰僧の毀りたてけり楊花粥　同
鍬捨てゝ一日堂に寒食す　幽堂
木像の如き師が眼や寒食す　同
寒食の窓下の俚謠耳聾ゆる　同
寒食や桃花の徑人もなし　春溪
寒食や棊局に對す諸葛亮　同
寒食や御布施記入も殖えぬ帳　李童
寒食の耳に拙き世評かな　同
喧々たる長屋女房も寒食す　唐辛子
寒食や粢餻圍む五六僧　同
寒食の江亭秀才を會しけり　三念

竹林に入りて寒食過しけり　同
寒食の村に入りたる旅愁かな　琴星
寒食や遊びに來たる鍛冶が弟子　同
寒食や五山の鐘は腹底に　凉眉
寒食や戸口の鼠骸朝日さす　同
寒食や釘のばす石に火出てぬ　瘦脚
寒食に粉餻ふや臼の根に雉　同
寒食や珊瑚の箸を祖にうけて　狠子
寒食の味なきも癒えぬ燒きし舌　同
寒食や筆造る戸の隙明り　水馬
忌の家の厨淋しく寒食す　同
寒食や廣野をやきし火の後に　子膚
寒食や曲眉豐頬の人と居て　同
寒食や小家勝なる杏花村　耳山
米に換ゆる綸をかき終へて寒食す　同
寒食や洗はぬ五器の散亂す　叱竹
寒食や煤け眼おぞき矢大臣　同
寒食や大釜に秘せし菜のもの　江洲

寒食の家皆護符の新なり　同
寒食や殘酒灸ぶるに咎あり　其蜩
寒食や瓦全恥づ身の頑健に　同
寒食や鼎の文字も餘抜の刀　夢吊
寒食や逢魔の夜に似て雨す　同
寒食や易に火風の災ありて　茨花
積善の餘慶乏しく寒食す　同
寒食や木德の王の壽をおもふ　夕影
寒食や冷酒の禁の父に有り　同
寒食や詩懐亦火の消えたよに　不寐庵
寒食や大厦の下の團子店　嵐舟
尸位素餐寒食に酒廢しけり　素水
寒食や佛の棚の油さし　痩骨
小蔀も明けぬ一日や寒食す　青鬼面
寒食の海遠鳴るや東風ならし　蝗郎
出御して祭天壇に寒食す　静流
寒食や人遠く來て遠く去る　人生
寒食や紙燭にさぐる醢　碧潭

藪嵐寒食の庵暮れにけり　弓里
空論もなく寒食の靜けさよ　不知老
寒食の大蒜味噌や老が宿　蚊家
寒食の僧の眠れる机かな　鶴人
寒食の軒にかくるや小鳥籠　保赤
寒食の梅干殘る小皿かな　瑚仙

募集課題

朧（本題に限り五十句以下）　三月十日〆切
木瓜の花　四月十日〆切

規定

一、應募句は淡路國假屋在釜口高田蝶衣宛郵送の事
一、一人三十句以内の事

注意。次回より毎月十日〆切とす

評論

移民集中主義

我が政府が米國及び濠洲等へ移民することを好まず、寧ろ滿韓方面に之を集中して、以て民族の發展を圖らんとする主義なること、外務大臣の公言に由て分明したり

小村外相は謂へらく、日露戰役以後、我が國狀は一變したり、即ち我が國民を滿韓兩國に移住し繁殖せしめて、以て國務の基礎を鞏固ならしむること、國家百年の大計に於て已む可らずと

吾人は我が移民の米國諸方面及び濠洲より排斥せらるゝを觀て、我が政府が國際上の難局を避くるを智とせざるに非ず、然れども韓國は格別、滿洲に於て果して日本人を移住せしめて能く成功し得べきや否や、頗ぶる惑なき能はざる也

鐵道開通以來山東省方面の清人が南滿洲及び北滿洲に流入するの盛んなる、實に驚ろくべきものあり、出稼時期に至る毎に、彼等は數百、數千、甚だしきは數萬、群を爲して麕到す、或は老幼を提げて土着し、以て耕耘に從ふもあり、滿洲の天地尙ほ多くの人口を容るゝ餘裕ある言を俟たざるも、我が國民は果して此等の清人と競爭して能く生存し繁榮し得るや否や、滿洲に移住するものは、農に從事するか然らずんば多く土工に從ふ勞働者なるべし、然るに低度の生活に耐え、低廉なる賃銀に安んずること、我が國民は到底清人に及ぶ能はざるを奈何せん、豚犬と伍を爲して極めて低度の生活に忍耐し、能く清國勞働者と同化し得るものは寧ろスラヴ民族なるべし、我が國民は幾んど之に耐え

ざる也

看よ、大連に於て戶々の臺所口より伺候する御用聽き、街頭に店を開く商估も、我が國民は漸く清人に其の職を奪はれつゝあるに非ずや、安東縣に於ける日本人は、日露戰役の終了期と今と異ならざるも、淸人は現に二倍し三倍したるに非ずや

吾人は外交當局の旨意を諒とす、然かも其の實行如何を疑はざるを得ざる也、吾人が北守南進を唱へ、帝國の滿洲に執着するを非とする、實に深く思ふ所あればば也

對韓政策の說明

衆議院の委員會に於て、我が對韓政策を質問するものあるや、桂首相は答て曰く「帝國は韓國を保護國とする現在關係を容易に變更する意圖を有せず、但し統監政治には今後更に嚴明なる方針を執らんと欲す、行政改革は之を急にす可らず」と

韓國を保護國とするとは、帝國が列國に聲明し、且つ協約したりし處、對外關係に於て獨り急に之を變更す可らざるや勿論也、少くも伊藤公の把持せる公明平正なる主義は、帝國民として之を遵行せざる可らず、但だ日韓合邦論及び非合邦論の起るや、統監政治稍々解弛の形迹なきに非ず、之を緊張するの必要なる素より多言を要せざるべし

行政改革を急にす可らずといふは、恐らくば曾禰統監の提議せる地方行政改革、即ち十三道觀察使改革を實施せざる意向を暗示せしなるべし、十三道觀察使及び之に伴ふ幾多の官吏は、韓國一部の人の由て以て衣食する處、之を廢止せば、彼等は其の食祿を失ふの不平より、猛然起て排日運動に着手すべく、十三道の混亂必らず之より胚胎すべし。桂首相が行政改革を急施せざる、豈之に考ふる所ありて乎、吾人は之を智慮ある措置として稱せざるを得ざる也

木曜會の分裂

貴族院に於ける非山縣系の中堅と稱せられし木曜會

は二月十三日若干の脫會者を生じ、午後多少の動搖あるが如し、恰かも研究會より走りて談話會(政友系)に投ずるものありしと同じ、思ふに此の類の事、明年の有爵議員改選期まで間斷なく繼續せらるべき乎

木曜會の分裂を目して、閥族中の大浦男、或は後藤男の辣腕に出づと做すものあり、然れども毛利系統の諸男爵及び島津系統の其れの多く動搖せるに徴するに、手は更に其の奧より出でしとを想像し得

但だ其の首領千家男の其の器にあらざると、幹部の西五辻男の不人望なりしとは、破綻の主なる原由ならずや

(二) 進歩又新の計畫

進歩黨と又新會との合同、二月上旬より計畫せられ進歩黨は又新會の決定次第、解黨して合同するの內議を定めたりしに、又新會は十五日四箇條の綱領を定め十六日河野、島の兩氏をして進歩黨の大石犬養兩氏と會談せしめたるが、交渉不調となり、十八日又新會の所謂十一人組は連袂脫會して、新たに無名會なるものを組織するに至れり、不日進歩黨に加はる目的なると勿論なるべし

去秋以來新政黨組織の計畫あるや、主として之に反對し妨害したりしは、進歩黨中の犬養派(所謂非改革派中の一部分)と、又新會中の十一人組なりとす、彼等は口に純民黨組織を唱へ、大同戊申の兩派と合同するを好まず、頗ぶる偏狹の見を持せり、進歩黨の多數が新政黨大合同を希望するや勿論なるも、犬養處分の失當より意氣沮喪して未だ鋒鋩を露はさず、又新會中には全然黨人に伍するを好まざるものあるも、之と十一人組とを除けば大抵大合同を可とするが如し、然るに十一人組の事毎に之を妨ぐるあり、今や其の脫會を視るに至て、殘れる多數は、寧ろ厄介拂ひの感を爲すも知れず

犬養氏は其の持論を變ぜざる限り、少數の部下と、此の十一人組とを提げて政界に孤立すべし、然らずんば或は政友會に投じて西園寺黨と爲るも亦測る可ら

ず

進歩黨中の大石氏雌伏の間は、當分新政黨誕再生せざるべし、但だ西園寺内閣再生し而して大石派蹶起するに至て、所謂非政友派の大合同初めて成るべき乎、吾人は斯く豫言し置て以て事の成行を注視せんと欲す

現内閣の財政方針

桂藏相は二月十六日の貴族院に於て、左の如く演述したり、吾人は今春以來内閣の四十三年度財政計畫を掲載せざりしを以て、此の機會を幸ひ茲に抄出す、殊に既に衆議院の決定を經て、多分貴族院を通過し成立すべきものたるに於て、讀者參考の資たる價値少なからざるべしと信ず

本大臣は茲に明治四十三年度歳計豫算を諸君に紹介するの光榮を有す

當初政府の揭出に係る明治四十三年度總豫算に計上せる所の歳入は經常部に屬するもの四億八千八百九十二萬九千五百六十四圓臨時部に屬するもの四千五百二十四萬三千百四十二圓合計五億三千四百十七萬二千七百六圓にして其の歳出は經常部に屬するもの四億二千九十八萬四百五圓臨時部に屬するもの一億一千三百十九萬二千三百一圓合計五億三千四百十七萬二千七百六圓なり故に經常歳入を以て之を經常歳出に比較すれば六千七百九十四萬九千百五十九圓の超過にして之を前年度に於ける經常部歳入歳出の關係に對照すれば一層良好なる狀態を示せり

右總豫算に計上せる歳出の外明治四十三年度に於ては明治四十一年度より繰延べたる經費の内六百八十九萬九百四十三圓及臨時軍事費特別會計より繰越したる經費の内七百五十萬四千百八十八圓合計千四百三十九萬五千百卅一圓を使用する豫定なるを以て前年度剩餘金を以て之が財源に充つ

明治四十三年度歳入を以て之を前年度豫算に比較するに經常部に在りては稅制の整理に依り歳入に多少の減額を行ふに拘らず一般經濟の發展に伴ひ租稅、印紙收入、郵便電信電話收入及專賣局益金等に於て收入の增加すると新に南滿洲鐵道株式會社よりの配當金收入を豫算したるとに依りて千八百五十七萬餘圓を增加するも臨時部に於て三百三十三萬餘圓を減少する爲め差引歳入總額に於て千五百二十四萬餘圓を增加す

明治四十三年度歳出を以て之を前年度豫算に比較するに經常部に在りては一方に於て行政整理に依り各般の政費に節約を加へ其他既定經費に減額を見るものあるも他方に於て皇室費の增加、官吏の增俸及下士卒の增給、日韓協約に基く統監府司法廳裁判所及監獄の新設、日淸協約に基く間島總領事館の新設、既定の經畫に基く事業の進捗及軍備の充實、教育資金配當の設備等あるが爲に差引十六百四十五萬餘圓を增加し臨時部に在りては一方に於て既定繼續費年割額の增加するものあるの外道路改良費の補助、北海道の拓殖、幹線鐵道の建設改良、關門海峽の改良、神戸稅關防波堤の築造、臺灣兵營廳舍の營繕、軍用氣球の研究、鎭海軍港の設備及發電水力の調査等經濟上將來最も緊急缺く可からざるの施設を實し并に繼續費追加額を增加するが爲臨時部に國債收入及剩餘金の繰入を增加したる

も他方に於て事業の完了し又は既定年割額の減少するものある等の爲に差引百十九萬餘圓を減少し結局歳出總額に於て千五百廿五萬餘圓の増加を見るものとす

右政府の提案に對しては提出後政府に於て之に多少の修正を加へ衆議院に於ても亦審議の結果之に修正を加ふる所あり今其主要なるものを擧ぐれば歳入に在りては一方に地租に於て田畑に對する定率を輕減するが爲に七百八十餘萬圓を減少し他方に政府に於て再調査の爲所得税法中改正法律案を撤回し及衆議院に於て通行税法案を修正したる結果五百四十餘萬圓を増加し歳出に在りては官吏増俸及び下士卒増給額の一部を削減し及び大藏省所管に於て議員歳費陸軍省所管に於て糧秣費、海軍省所管に於て衣糧費、造船費并に造兵費、司法省所管に於て在監人費、遞信省所管に於て發電水力調査費に削減修正を加へたる等の爲結局總額に於て歳入歳出各三百七十餘萬圓を減少せり

以上明治四十三年度豫算に關し其の計數の大體を說明したり本大臣は更に進て同年度豫算に關する財政經畫の綱領に付て一言せむと欲す

抑々戰後財政の調査は歳計の基礎を確實にし急劇に増加したる公債を整理するを以て第一の急務とすべきは本大臣の前議會に於て既に述べたる所にして明治四十二年度豫算を編成するに方りては主として將來に亘り歳入歳出を整頓して其均衡を保ち新規公債の發行を避け其の償還額を増加し以て財政の基礎を鞏固にし公債に對する信用を厚うし併せて一般經濟界の調和を計るの方針を取れり此方針は幸に諸君の協贊を得戰後財政の整理漸く其緒に就くを得たるは本大臣の深く喜ぶ所なり今明治四十三年度豫算を編成するに方りても右の方針は之を動かさず更に進で愈々適實に之を實行し以て漸次雜多なる戰後財政整理の事業を完了せんことを期し

一、國民負擔の衡平を計る爲税制の整理を實行し
二、行政の整理を行ひ政費の節約を計ると同時に多年の宿題たりし官吏増俸下士卒増給を行ひ併せて國運の發展上必要已むべからざる行政の施設を爲し
三、償還期限の差迫りたる國庫債券の償還を便にし併せて國債の信用を増加する

の計畫を立てたり

大戰役の後我國勢は一變せり隨て國民の負擔が戰役前と同じきを得ざる可きは復た言說を須ひず然れども戰時匆忙の際成るべく簡便の方法に依り租税の増徵を爲さんとして制定せられたる各種税法の下に於て負擔に衡平を失するものあるは之を否認することを得ず故に財源の許す限り各般の税制を整理し民の負擔に厚薄なからしむるは極めて必要の事とす而かも税制整理の事たる相當の財源を要するが故に明治四十三年度に於て一時に其の全部を完了すること能はざるは理の最も睹易き所なるを以て政府は之が實行の順序として先づ主として同一租税の賦斂に於て負擔に輕重の別なからしめんことを圖り以て漸次整理の完了を期するの趣旨を以て之に必要なる法案を諸君に提出したり然るに所得税法につきては再調査の上適當なる立案を爲し更に諸君の協贊を求むるの必要を認めて之を撤回し地租につきては衆議院に於て明治四十三年度分より直ちに之を輕減するを急務とし田畑の租率千分の八を減ずるの修正を加へたり抑々地租の輕減は政府に於ても固より其の必要を認めたる所にして唯其順序に於て先後其の所見を異にしたるに過ぎず從て右の修正は税制整理の大方針と牴觸する所なきを以て政府は之に同意を表したり國防の大計は之を動かすことを得ず故に既定の軍備縮少せざる範圍内に於て行政各般の整理を行ひ事務の執行を簡捷にし官吏の定員を減少し之に依りて

を節約すると同時に物價の騰貴貨幣法の改正等に依りて久しく增額の必要を促進せられたる文武官吏の俸給幷下士卒の給與に對し約三割の增給を行ひ以て適材を適所に任じ政務の振興を計らんことを期せり右の經費に依れば增俸增給の爲に歳出を增加すること一般會計及特別會計を通じて約千五百萬圓行政整理に依りて政費の減ずること約六百萬圓なるを以て差引新に財源を要するもの約九百萬圓なりとす然るに官吏幷下士卒の增俸增給に關しては衆議院に於て約二百萬圓を減額修正し政府は之に同意を與へたり

其他各般の經費につきては歳計全體を通じて力めて緊縮を圖り新規要求は成るべく之を見合せ既定の計畫に屬するものに在りては出來得る限り之に節減を加ふるの方針に依れりと雖戰後の經營は徒に消極に偏するを許さず國力の發展幷經濟社會の進運に伴ひ若は國民經濟力の發展は必要缺く可からざる各種の施設に關しては確實なる財源の許す範圍内に於て其の遂行を期することゝせり

明治四十三年度國債整理金繰入額は一億九千三百九十三萬餘圓にして之を前年度に比較するに實に一千八十萬圓の增加なり而して右繰入金の内元金の償還に充つべき金額は六千八十萬圓にして前年度に比し一千萬圓を增加するものとす右の如く國債償還額の增加したるは既定計畫に基き前年度に於て償還したる元金の利子に相當する金額即約二百五十萬圓を增加するの外明治四十一年度に於て生じたる歳計剰餘中必要已む得ざる經費に充當すべきものを除きたる殘額七百五十萬圓を臨時に國債整理基金に繰入するに依る歳計剰餘金を國債の償還に使用するは國庫の負擔を輕減するに最も適實なる方法なるのみならず最近に償還期限の到來すべき國庫債劵の償還に對しては大なる便宜を與ふるものとす

顧て我經濟界の趨勢を案ずるに金融緩慢を告げ内外市場の不振は未だ遽に多大なる商工業資金の需要を喚起するに至らずと雖明治四十二年中銀行會社の新設增資に係はるもの約一億二千萬圓に上り大體に於て我經濟界は順次秩序的の發達を示しつゝある者と謂はざるべからず又同年中に於ける我外國貿易の狀況を見るに輸出四億一千三百餘萬圓輸入三億九千四百餘萬圓合計八億七百萬餘圓にして之を前年の貿易額に比較すれば總額に於て七百餘萬圓を減少せり蓋し内外商工業不振の結果に外ならずと雖も其内容に就て之を見る時は前年に比して輸出は三千四百餘萬圓を增加し輸入は四千二百餘萬圓を減じたる者にして前年に於ける輸入超過五千八百餘萬圓に對し約千九百萬圓の輸出超過を示せるは去明治二十五年以來曾て見ざる所の現象にして我内地產業が漸次其潜勢力を發揮するの時期に到達しつゝある者と認めざるを得ず之を要するに戰後の財政は一たび必ず整理を要するものありと雖も整理の目的は財政の鞏固を期するに在るを以て之を成すには先づ緩急の序を誤らざるを要す明治四十三年度豫算に於て前年度豫算計畫に次ぎて其の最も急なりと認むる所を實行せむとするものにして本大臣は更に進で充分の調査を遂げ内外の形勢に鑑み事情の緩急に應じ漸次必要なる施設を怠らざらんとす前議會に於て諸君の協賛を經たる財政經畫は我財政の基礎をして愈々鞏固を加へしめ我國諸般の平和的施設經營と相俟て著しく我國の信用を高め公債の市價從て頗る騰貴を致せり而して内外の經濟狀態は漸次順調に向ひ特に内地に於ては近來著しく金融の緩慢を來したるが故に政府に於ては財政整理の本旨に據り第二期財政經畫の實行に移り公債の低利借換を爲し以て國庫の支出を減少し併せて國民の負擔を輕減するに最も好時機なりと認め五分利公債借換の爲内國に於て四分利公債一億圓を發行するの手續を定め本月五日之に必要なる規程を發表したり政府に於ては今回の借換を第一步として今後時機を見漸次内外に於ける公債全部を低利に借換へん

ことを期す幸に圓滿に之が事業の成功を告げ以て一には國庫及國民の負擔を輕減し又一には民間金利の標準を一變し財政經濟兩方面に於て一新時期を劃するに至らんこと本大臣の切に希望する所也本大臣は諸君が慎重審議以て速に豫算案に協贊を與へられんことを望む

四分利公債借換

政府は四分利内債一億圓を發行して、五分利と借換するとを發表し、二月十九日より之を實施したり、其の重要銀行をしてシンヂゲートを作りて以て之を引受けしめたるが如き、用意頗ぶる看るべきものあり、成功疑ひなかるべし

斯くして内國債は漸次悉く四分利と爲るべく、外國債も亦外國市場の形勢に應じて、漸次低歩の利率に借換らるべし、桂内閣が成立以來、著るしく事業の繰延を斷行して財政上の危機より脫し、且つ主として國債の元利償還額を增加し、非募債主義を標榜して、鋭意國債の聲價を昂むるに努めたりしは、豈此の豫期ありしが故ならずや、吾人は之を以て、桂内閣の一成功と爲すに躊躇せざる也

鐵道債募集の建議

政友會は我田引鐵に由て地方に黨勢を張ると共に、内閣の非募債主義を破らんと欲し、衆議院に鐵道の速成を建議したり、蓋し特別に巨額の鐵道公債を募集し之に由て多く鐵道を地方に敷設せしめんとする也

政府は其の旨意に異言なきも、鐵道に公債を募集するを好まず、單に機會を俟つと稱して其の早晩如何を明言せず、識慮あるものは鐵道公債の此の際漫に募集す可らざるを信ずべし、鐵道の幹線略々成る、地方枝線の如き何ぞ必らずしも之を急にするの要あらんや

工場法案

衆議院は十年前より政府に促すに工場法案の提出を以てしたりき、今や工場法案の農商務省より提出せらるゝに及び、彼等は却つて之を可決する能はず、理義素より否決する能ざるため、徒らに之を握り潰さんと

す、其の無責任實に驚ろくべき也

彼等が可決する能はざるは、主として紡績業者の反對あるがため也、然れども思へ、彼等の反對なきを望むは、猶ほ百年河淸を俟つが如きのみ、先づ職工保護、國民の健康保持のため此の法を成立せしめ、時代の必要に應じて漸次之を大成せしむるに如かざる也

營業稅と所得稅

政府の提出したる營業稅案と所得稅案とは、減稅の名ありて寧ろ增稅の實あるものとし、一部實業家の反對運動を招くに至れり、所得稅案は地租輕減案の犧牲となりて撤回せられたれば、反對者は以て悅ぶべしとする乎、營業稅案は今正さに衆議院委員の手にあり、素より稅率を變更するに至らざらんも、一部實業家の希望は幾分透徹するを得ん乎、政友會の智なる、既に恩を農民に沽る、次に實業家に及ぶと蓋し必然なれば也

阿里山官營案

阿里山官營案は、藤田組に賠償すべき分より六十萬圓を減じて竟に衆議院を通過したり、政友會は一旦之を否決するの黨議を定めしも、二月八日政府との妥協に於て之を修正し復活せしめし也、是れ政友會の降伏に外ならず、吾人は臺灣官吏の得色あるに反して、政友會果して何の顏あるかを問はんと欲す

郵便貯金利下

市中大銀行の預金利下に次て、政府も竟に郵便貯金を五分四毛より四分二厘に引下げたり、以て金利下落の傾向を察すべし

（以上ＸＹ生）

クリート問題と希臘

一月二十八日希臘內閣辭職す、是同國將校團の要求に出づ、顧みれば最近軍隊の跋扈は非常なるものあり、昨年七月テオトキ內閣を顚覆し、ライ內閣を立て、八

月復之を顚覆してマウロミハリス內閣を立て爾後僅かに五月今亦之を辭職せしむ、彼等以爲らく今日希臘國勢振張せず國威發耀せざるは一に政治を因循主義の王室と內閣と議會とに委したるの結果也、軍隊は思ひ切つて政治組織と手續とを無視し壓迫を加へて彼等を指導し命令し以て根本的改革の實を擧げざる可からずと

吾人は之を見て深く彼等の愛國心と敢爲的氣象とを感嘆せざらんと欲するも得ず、然りと雖も彼等は智無き也、明察無き也、籌略無き也、何ぞや彼等が憤懣の原因は一小國希臘の力量以外に在るクリート島合併問題に存するを以て也、彼等現下の行動は又正に希臘の信用を破壞し其利益と背馳するものなるを以て也、

試みに見よ、

クリート島は十年來英露佛伊四國の保護下に在りして四國は幸か不幸か昨年墺勃土交渉落着に際し未だ土耳其憲政派を壓迫し其勢力を失墜せしめ同國憲政の前途を危險にしてまで之が名義的主權を剝奪するの必要を見ざりし也、是必らずしもジョルジ皇帝と內閣員との罪にあらざる也、然るに現下陸軍將校團の行動は如何、憲法最負の列强の前に却て憲法無視の喜劇若くば悲劇を演じつゝあるに非ざる乎、斯くの如くにしてクリート合併期を早むるを得ば、ダニユブの水は正に西に流る可き也

墺露間の協商

墺露協商進行す、外報に曰く兩國は近東現勢維持、土耳其憲政援助、巴爾幹諸邦に對する無干涉主義の三點を宣明す可しと、

然かも是れ殆んど無意味也、平凡也、否寧ろ眼目を入れ忘れたる彫刻品也、何ぞや將來に於ける（現今に於ても已に或程度迄）双方間衝突、競爭の題目たる鐵道問題を閑却したるを以て也、

遮莫、眞成の意義に於ける兩國の妥協はそれ或は遂に難ならむ。エーレンタル伯は事實上猶進取の心あり然かもイスウオルスキー氏は今日以上に讓歩する能は

す、其の無責任實に驚ろくべき也

彼等が可決する能はざるは、主として紡績業者の反對あるがため也、然れども思へ、彼等の反對なきを望むは、猶ほ百年河清を俟つが如きのみ、先づ職工保護、國民の健康保持のため此の法を成立せしめ、時代の必要に應じて漸次之を大成せしむるに如かざる也

營業税と所得税

政府の提出したる營業税案と所得税案とは、減税の名ありて寧ろ增税の實あるものとし、一部實業家の反對運動を招くに至れり、所得税案は地租輕減案の犧牲となりて撤回せられたれば、反對者は以て悅ぶべしとする乎、營業税案は今正さに衆議院委員の手にあり、素より税率を變更するに至らざらんも、一部實業家の希望は幾分透徹するを得ん乎、政友會の智なる、既に恩を農民に沽る、次に實業家に及ぶと蓋し必然なれば也

阿里山官營案

阿里山官營案は、藤田組に賠償すべき分より六十萬圓を減じて竟に衆議院を通過したり、政友會は一旦之を否決するの黨議を定めしも、二月八日政府との妥協に於て之を修正し復活せしめし也、是れ政友會の降伏に外ならず、吾人は臺灣官吏の得色あるに反して、政友會果して何の顏あるかを問はんと欲す

郵便貯金利下

市中大銀行の預金利下に次て、政府も竟に郵便貯金を五分四毛より四分二厘に引下げたり、以て金利下落の傾向を察すべし

（以上ＸＹ生）

クリート問題と希臘

一月二十八日希臘內閣辭職す、是同國將校團の要求に出づ、顧みれば最近軍隊の跋扈は非常なるものあり、昨年七月テオトキ內閣を顚覆し、ライ內閣を立て、八

月復之を顚覆してマウロミハリス內閣を立て爾後僅かに五月今亦之を辭職せしむ、彼等以爲らく今日希臘國勢振張せず國威發耀せざるは一に政治を因循主義の王室と內閣と議會とに委したるの結果也、軍隊は思ひ切つて政治組織と手續とを無視し壓迫を加へて彼等を指導し命令し以て根本的改革の實を擧げざる可からずと、

吾人は之を見て深く彼等の愛國心と敢爲的氣象とを感嘆せざらんと欲するも得ず、然りと雖も彼等は智無き也、明察無き也、籌略無き也、何ぞや彼等が憤懣の原因は一小國希臘の力量以外に在るクリート島合併問題に存するを以て也、彼等現下の行動は又正に希臘の信用を破壞し其利益と背馳するものなるを以て也、

試みに見よ、

クリート島は十年來英露佛伊四國の保護下に在り而して四國は幸か不幸か昨年墺勃土交涉落着に際し未だ土耳其憲政派を壓迫し其勢力を失墜せしめ同國憲政の前途を危險にしてまで之が名義的主權を剝奪するの必要を見ざりし也、是必らずしもジョルジ皇帝と內閣員との罪にあらざる也、然るに現下陸軍將校團の行動は如何、憲法擔負の列強の前に却て憲法無視の喜劇若くば悲劇を演じつゝあるに非ざる乎、斯くの如くにしてクリート合併期を早むるを得ば、ダニユブの水は正に西に流る可き也

墺露間の協商

墺露協商進行す、外報に曰く兩國は近東現勢維持、土耳其憲政援助、巴爾幹諸邦に對する無干涉主義の三點を宣明す可しと、

然かも是れ殆んど無意味也、平凡也、否寧ろ眼目を入れ忘れたる彫刻品也、何ぞや將來に於ける（現今に於ても已に或程度迄）双方間衝突、競爭の題目たる鐵道問題を閑却したるを以て也、

遮莫、眞成の意義に於ける兩國の妥協はそれ或は遂に難ならむ。エーレンタル伯は事實上猶進取の心あり然かもイスウォルスキー氏は今日以上に讓歩する能は

ざるの境遇に在り、從つて協商成るもそは一時的協商のみ、何ものゝ愚論ぞ之を以て英佛露アンタントの動搖を來す可しと謂ふや、

佛國の洪水

佛國セイヌ河氾濫は近來の慘事也、誰か巴里市民に向つて一點の涙を吝まん哉、

唯大に恐る可きことあり、他なし救濟は往々民を懶惰にす行ふに其方法を誤らば弊害徒らに多くして益利却つて少からむ、彼の佛國中央銀行及諸資本家が計畫せる「事業費を補助して民を働かしめん」とする策に到つては是蓋し卓拔の明案たり一九〇六年桑港震災前後策委員の如き宜しく之を見て慚死す可き也、

英國政界大勢

英國總選擧の結果二月十五日を以て愈判明す、曰く自由黨二百七十四、統一黨二百七十三、勞働黨四十一國民黨八十二、顧つて之を一九〇六年の總選擧に比較すれば在朝黨たる自由黨は一百名を減少し、勞働黨は十三名を減少し、國民黨は二名を減少し、之に反し在野黨たる統一黨は百十五名を增加せり、

之を見るもの誰か統一黨の勢力回復激甚なるを驚かざらむ、然かも讀者更に下記の歷年黨勢表を撿せよ

年期	內閣	下院內政府黨の多數
一八七四	保守黨	四十六
一八八〇	自由黨	六十二
一八八五	自由黨	百六十六
一八八六	保守黨	百二十二
一八九二	自由黨	三十九
一八九五	統一黨	百五十二
一九〇〇	統一黨	百三十四
一九〇六	自由黨	三百五十四

即ち知る過去三十五年間に於ける政府黨の多數は普通少きは三十九に下り多きも百六十六を超えず、前回選擧の自由黨多數三百こそ却て一事的事情より發生せる未曾有の異例と見る可きものなるを、

是に於て乎吾人は叫ばんとす、彼の之を以て直ちに英人が漸く自由黨に飽き來れる徴證と斷定する徒輩の如きは是統一黨萬能の倫敦新聞界に誤られて輕忽の結論に走りたるに過ぎざる也と

內閣對愛蘭問題

然らば則ち英國アスキス內閣は安全なる乎、曰く必らずしも然らず、

民心未だ自由黨に飽かずとするも、其遣り方次第に依りては今後之をして飽かしむ可き機會と問題とは極めて多々なるを奈何、愛蘭自治問題是、養老年金擴張案是、海軍計畫是

就中憂ふ可きは愛蘭自治問題也、況んや最近國民黨中オブライエン一派の分離は却てレッドモンドを領袖とする同黨を驅りて自衞上勢ひ一層苛酷なる要求を政府に提出せしむ可き狀情を生ぜるに於てをや、

西班牙養老年金案

西班牙首相カナレヤス氏は英國の崇拜家たり、今やロイドジョルジ氏の例に傚ひ補給的養老年金制を設けんとすと、是必らずや同國政界に一波瀾を捲起せずんば止まざる可し、

何を以てか之を言ふ、同國保守黨の優勢は英國以上也、モオラ氏以下同黨諸領袖斯くの如き計畫に同意せんには餘りに貴族的也、況んや首相自身は自由黨中平民派と稱せらるゝ約下院議員二十名の團結に首領たり、一般自由黨員に對して殆んど無勢力なるに於てをや、

獨逸海軍擴張

甚しいかな獨逸海軍擴張の勢や、讀者試みに下記の數字を一瞥せよ、

年度	經常費(豫算)	臨時費(同上)
一九〇七—八	一〇八、三七八、九九〇	二八、〇八一、三八〇
一九〇八—九	一三三、八二九、二七〇	四三、一六一、一一〇
一九〇九—一〇	一四一、九七八、二八〇	五三、七三七、九〇〇

一九一〇—一一　一六一、四四〇、〇〇〇　五五、一八〇、〇〇〇

是以觀之、獨逸海軍費は毎年約二千万圓以上增加しつゝあり、其英人を狼狽せしめたる亦偶然にあらずと謂つ可き也、然りと雖も此光彩ある活動の裏には潜在する苦痛あり、二月五日發行四分利附帝國公債一億七千万圓は是則ち所謂潜在苦痛を暴露したるものに非ざる乎、

加奈陀海軍熱

獨逸海軍擴張に關聯して思ひ出てらるゝは加奈陀に於ける海軍熱是也、首相ロリエル氏、議院に臨み第一回海軍費二千三百萬圓可決を求め建艦計畫を發表するや、在野黨領袖ボルデン氏奮然起立、說て曰く是未だ足らざる也、吾人は獨逸の膨脹政策に鑑み、之以外に宜しく本國に向つてもドレッドノオト型戰艦を寄附せざる可からずと、

斯くの如き忠實の人物が海外領土に存ずる以上は、英帝國のソリダリテーも亦深く憂ふ可きにあらざる也、

日本大使の罪

排日法案又々米國下院に現はる、其要に曰く教師、學生商人、旅行家以外米國に歸化するを得ざる移民の入國を制禁すと、

是則ち表面上日本人と明言せずして事實上巧みに排斥を實行せんとする米國第三流政治家の小刀細工而已、彼等以爲らく、日本人は支那風に浸潤せられ偏へに「名分」を重んず、名分に於て侮辱する所無く、缺如たる所なくんば實際的結果は必らずしも問はざゝ也と

米人の日本人觀悪む可しと曰はんよりは寧ろ憐れむ可きを覺ゆ、然かも米人をして此謬想を抱懷するに到らしめたる罪は則ち我高平前大使に在るを奈何、其對米政府談判滑稽なる程名分論にのみ傾き實際論を無視せる爲なるを奈何、思ふに該排斥案は通過すること無かる可し、然かも吾人は玆に將來の爲め内田新大使に

向つて前任者の過失を再びせざる樣勸告せざるを得ざるを悲む、

米國外交攻擊

近來米國々務卿ノックス氏攻擊の聲喧々擾々たり、曰く一部資本家の事業を保護せんとし却て國辱を求めたり(滿洲提案のこと)曰く其ニカラグア政策は中米諸邦の排米感情を挑發し西部米人の商業的發達を阻害したりと、而して今や更らに延びてタフト氏攻擊と化せんとす、是時に當りロオスエルト氏大統領再選運動の發生を見る、成否は少焉らく措き、何ぞ意味深長の感なしとせむ

南極探檢とペアリー

二月九日紐育公民、北極發見者ペアリー氏を招待し米國民を代表して金一萬弗を贈るや、彼謝して曰く予は之を以て米人南極探檢費となし、星旗を携へて南の方光榮ある敵手英人と競走せんとすと、是蓋し大丈夫の言也、思ふに彼や氷雪の間に起臥し辛酸嘗め盡すこと二十年、漸く其志を遂行するも、猶之に甘んぜずして再び一轉南征の長途に上らんとす、活動を生命とし醉生夢死を喜ばざる米人の常とは言へ、洵に推賞の念禁じ難き所也、知らずスコット大佐サーシャックルトン、及びペアリー三君の所謂競走を見るはそれ孰れの日ぞや、

片々錄

△一月二十九日那威內閣辭職す是最近選擧の結果たり△同月二十八日ヘデルブリーの匈牙利內閣議會に於て不信任投票を受く首相宣言して曰く議會を解散せずんば辭職す可しと△露國海軍省十億圓の製艦計畫を建つと露紙傳ふ然かも國民議會は大反對なりと△摩洛哥借款問題今以て落着せず獨紙笑ふて曰く佛國の威信何くにか在ると△北京シンヂケート改造せらる今後淸國に於ける英人の活動恐らくは新生氣を帶びん然かも利權回復運動には不相變手古摺るならんか△印度新聞法案立法參議院を通過す其內容に曰く地方政廳は起訴なくして謀叛的態度ある新聞紙を禁止するを得、曰く新聞紙は保證金を納め非行あらば直ちに之を沒收すと以て印度言論界の現狀を察知す可き也(以上快沙隱客)

新刊批評

▲**西洋大歴史**　坂本健一著　寶文館藏版

屹然九百五十頁の大册、記述の詳密精到は固より許す所だが、更に著者の史觀を以て一々批評し判斷し茲に幾千年の國家の興亡民族勢力消長の跡を一糸亂れず說き明かして明確なる觀念を腦裡に形らしむる處は特に稱すべきである、其卷末最近歐米の活動及び社會的世界運動の篇の如き特に一讀の値がある（定價二圓參拾錢）

▲**禪學一夕話**　森大狂著　服部書店發行

茶人あれば俳人あり、商工あれば武士もあり、禪僧もあれば娼婦もあり、而して又貴紳もあり、人樣々從つて機根と境遇と色々に變りはすれど何れは同じ修禪悟道の人々である、其人々の一言一行を何とはなしに輕く書き留めたもの、學禪の徒の手にして益あるべきは固より言はず、然らざるものにも明窓淨几に心胸を爽らしむる力は十分にあると信ずる（定價金七十錢）

▲**繪本西遊記**　小杉未醒著　左久良書房發行

作中の主人公孫悟空の名は殆んど誰でも知らぬもの無い程に、我國に知れ亘つて居る西遊記は、其落想の奇拔にして豪宕なる點では最も著者の筆に適した畫題と思ふ、蓋し漫畫は凡ての感情を最も極端に現はす點に於て獨特の妙味あるものだから、此種の作物でなくては十分に腕を振ふ事は出來まい、二三頁おきに必ず一枚の挿畫で、全頁二百二十八頁の中にはざつと百枚足らず入つて居るが、實に畫筆と作想と相得たるものであるだけ著者の技術は十二分に發揮され興味津々たるものだ、地の文も現代の口語に引き直したものだから女子供にも誰にも了解される（定價金壹圓拾錢）

▲**史學研究會講演集**　富山房發行

西村時彥、小川琢治、大谷光瑞、上村觀光、伊藤尾四郎、幸田成友六氏の史學講演會に於ける講演筆記を集めたもの、史學に志あるもの一讀すべきものだ、（定價金六十錢）

▲**和聲學初步**　上卷　神津仙三郎譯演　日本音樂協會發行

米國の樂家の巨擘エメーリー氏の原著を譯したもの和聲學の原理を詳密に初學者に敎うるべく手引したものだ（定價金七拾錢）

○壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘
（郵稅八錢　但清、韓兩國を除く）

冊數／區別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵稅共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵劵代用は必ず壹割增に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず總まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十三年二月廿六日印刷
明治四十三年三月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野錫一

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

●本號紙數增加ニ付特價金廿二錢　郵稅金二錢

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可

赤誠天地を動かし壯烈鬼神を泣かしむ

維新志士遺墨帖

活きたる精神教育の資料に家庭并に學校必備の寶典

國民新聞社主催の維新志士遺墨展覽會は滿天下の耳目を聳動し一世の人心に深甚なる印象を與へたるのみならず事畏くも天聽に達して侍從御差遣の光榮をさへ賜はれり本帖は同展覽會陳列品の内特に門外不出の珍金匱石室の秘たる万金不換の重寶三百五十点を擇び寫眞金屬版を以て秋毫差はず之を縮寫し一々之に小傳及び解說を付し最も富麗高雅の裝釘を施したるもの之を展ぶれば懦夫も志を立つべく眞に是れ活きたる精神教育資料なり＝部數に限あり申込は要急

上製實價金七圓
特製實價金拾圓
外に郵稅を要す

發行所 國民新聞社 東京京橋日吉町

發賣元 同文館 東京神田表神保町